長野市の埋蔵文化財第114集

MATSUSHIRO CASTLE-TOWN RUINS

松代城下町跡(3)

～殿町～

長野松代総合病院診療棟・病棟増築工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

長野市教育委員会

調査地（Ａ区）全景［南より］

石組池（Ａ２区①－２）

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。土地に残された歴史の痕跡は、私たちの先祖の知恵と文化の集積であります。埋蔵文化財は、先人たちの文化を伝えるとともに、現在を生きる私たちの文化を見つめ直すきっかけを与えてくれます。

松代藩真田家の城下町であった松代は、武家屋敷や町屋、神社仏閣などの町並みや、各家の庭園に残る泉水、城下を流れる水路網など、往時の景観を今に残す情緒あふれる城下町として知られています。このたび、松代藩の上級武士の屋敷地であった松代町殿町において、長野松代総合病院診療棟・病棟の増改築工事にともなう発掘調査を実施しました。調査では、江戸時代後期から現代にいたる武家屋敷地の土地利用の変化や、水路・池などの様子が明らかになりました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財第114集」として報告するものです。報告書の内容は、連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野松代総合病院の各位、そして発掘作業に携わっていただきました地元の皆様、また、報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成18年３月

長野市教育委員会

教育長　立 岩 睦 秀

例　　言

1　本書は、長野県長野市松代町松代における開発事業「長野厚生農業協同組合連合会　長野松代総合病院　診療棟・病棟増築工事」に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査事業は、委託者　長野厚生農業協同組合連合会　長野松代総合病院　院長　野口　修　と受託者　長野市長　鷲澤正一　との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、平成16年度に長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。

3　発掘調査地籍は、長野県長野市松代町字松代180番地ほかであり、開発事業の総面積約12,100㎡のうち、新たに増築する範囲約3,600㎡を埋蔵文化財保護対象面積とし、うち建物建築部分約2,200㎡を発掘調査の実施対象範囲とした。現地における発掘調査は平成16年度に実施し、整理調査は平成17年度に実施した。

4　現場における発掘調査は矢口の指導の下飯島が担当し、山野井・宮沢が補助した。整理調査および本書の編集は宿野・宮沢が担当し、各調査員・作業員が作業を分担した。執筆分担は第Ⅰ章第1節を宿野が、　第Ⅰ章第2節以降（第Ⅳ章を除く）を宮沢が分担して執筆した。

5　本書の第Ⅳ章では関連調査成果として各氏・各機関より玉稿を賜った。それぞれの執筆者名および所属名は目次および各論の冒頭に明記させていただいた。

6　調査によって得られた全ての資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　調査地点の略号は「ＭＪＨＰ（ＭＪ＝Matsushiro Joukamachi、ＨＰ＝病院地点）」とし、出土遺物の注記や遺構図の整理など、調査全般においてこれを用いた。

2　各遺構に対しては、調査区ごとに番付けしている。 本報告書中では、下記例のとおり略記号を用いている。

	調査区	遺構検出面	遺構番号	
(例)	Ｂ１区	②	－５	「Ｂ１区　第Ⅱ遺構検出面　第５号遺構」

3　本調査では、３時期に相当する遺構検出面を確認した。調査時においては、調査区ごとに検出次面を設定していたが、整理作業の終了した本報告書においては遺構検出面として統一した。なお、出土遺物の注記には調査時の検出面が記されている。

［報告書記載　遺構検出面］		［調査時　検出面］
「Ａ区①・②・③（変更なし）」	←	「Ａ区①・②・③」
「Ｂ１区③」	←	「Ｂ１区①」
「Ｂ２区②・③」	←	「Ｂ２区①・②」

4　地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、すべて座標北を表している。調査地における座標北からの真北方向角は約0°9'56″であり、また磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。

5　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00″、北緯36°00'00″）の座標値（旧日本測値系）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ＡＴＳ」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。

6　遺構図の縮尺は各図中に明示した。遺物に関しては全て原寸で実測図を作成した。本書では基本的に土器・陶磁器実測図１／４に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。

7　挿入した遺構・遺物写真の縮尺は任意である。

8　遺物観察表に記載した法量中、＊印が併記された値は復元推定値を示している。計測部位はそれぞれの表欄外の注を参照されたい。

本 文 目 次

序
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査経過 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査日誌抄 …… 3
　第3節　調査体制 …… 4
　第4節　調査方法 …… 6
　　1　発掘調査の方法　　2　整理調査の方法

第Ⅱ章　松代城下町跡の立地と環境 …… 8
　第1節　地理的環境 …… 8
　第2節　歴史的環境 …… 9

第Ⅲ章　発掘調査成果 …… 14
　第1節　発掘調査の概要 …… 14
　　1　基本層序　　2　検出遺構の概要　　3　出土遺物の概要
　第2節　遺構と遺物 …… 16
　　1　検出遺構　　2　出土遺物

第Ⅳ章　関連調査成果 …… 109
　第1節　出土陶磁器の様相 ……（西本）…… 109
　第2節　木製品樹種同定調査 ……（吉田生物研究所）…… 120
　第3節　出土漆器の漆膜構造調査 ……（吉田生物研究所）…… 125

第Ⅴ章　調査の成果と課題 …… 128

報告書抄録
奥　付

図版目次

頁

図1　調査地位置図 ……(1)
図2　調査地周辺位置図・調査区位置図 ……(6)
図3　松代町字図 ……(8)
図4　松代城下町跡周辺遺跡分布図 ……(11)
図5　松代城下町の土地利用図 ……(12)
図6　周辺調査地位置図 ……(13)
図7　基本土層様式図 ……(14)
図8　遺構面相関図 ……(14)
図9　第Ⅲ遺構検出面　(B1区) ……(17)
図10　第Ⅲ遺構検出面　(A区) ……(18)
図11　方形土坑　(A1区③－1) ……(20)
図12　溝状遺構　(A2区③－1) ……(21)
図13　礎石列　(A3区③－1) ……(23)
図14　石組池状遺構　(B1区③－1) ……(24)
図15　石列　(B1区③－3) ……(25)
図16　第Ⅱ遺構検出面　(A区) ……(27)
図17　第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面　(B2区) ……(28)
図18　方形土坑　(A1区②－2) ……(31)
図19　礎石列　(A3区②－6) ……(32)
図20　木組土坑　(A3区②－15) ……(33)
図21　溝状遺構　(B2区②－1) ……(34)
図22　第Ⅰ遺構検出面　(A区) ……(36)
図23　方形石組遺構　(A1区①－1) ……(38)
図24　第Ⅰ遺構検出面　泉水路全体図および石組溝拡大図 ……(40)
図25　石組池(大)　(A2区①－2) ……(42)
図26　石組池(小)　(A2区①－5) ……(43)
図27　石組溝(B1区③－2) ……(45)
図28　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③－2・3・4号遺構) ……(47)
図29　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③－1・4号遺構) ……(48)
図30　第Ⅲ遺構検出面出土土器(A2区③－1号遺構) ……(49)
図31　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A3区③－1号遺構・検出面) …(50)
図32　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区③－1号遺構・検出面) …(51)
図33　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区③－1号遺構・検出面) …(52)
図34　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器
(A1区③－1・2号遺構・検出面) ……(53)
図35　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③－検出面) ……(54)
図36　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③－検出面) ……(55)
図37　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③－検出面) ……(56)
図38　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区検出面) ……(57)
図39　第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区) ……(58)
図40　第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器(A1・2区②) ……(59)
図41　第Ⅱ遺構検出面出土土器(A2・3区②) ……(60)
図42　第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器(A3区②) ……(61)
図43　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B2区③) ……(63)
図44　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区・B2区) ……(64)
図45　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区③－2下層検出面) ……(65)
図46　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区) ……(66)
図47　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区) ……(67)
図48　金属製品(1) ……(85)
図49　金属製品(2) ……(86)
図50　金属製品(3) ……(87)
図51　木製品(1) ……(94)
図52　木製品(2) ……(95)
図53　木製品(3) ……(96)
図54　木製品(4) ……(97)
図55　木製品(5) ……(98)
図56　石製品(1) ……(104)
図57　石製品(2) ……(105)

写真目次

頁

写真1　調査地遠景 ……(2)
写真2　表土除去 ……(3)
写真3　作業風景 ……(3)
写真4　遺構測量風景 ……(3)
写真5　発掘調査参加者 ……(3)
写真6　第Ⅲ遺構検出面　(A区) ……(16)
写真7　第Ⅲ遺構検出面　(B1区) ……(16)
写真8　第Ⅲ遺構検出面　(B2区) ……(16)
写真9　方形土坑　(A1区③－1) ……(20)
写真10　溝状遺構　(A2区③－1) ……(22)
写真11　溝状遺構　(A2区③－1)　拡大 ……(22)

写真12　礎石列　（Ａ３区③－１）……(22)
写真13　石組池状遺構　（Ｂ１区③－１）……(25)
写真14　石列　（Ｂ１区③－３）……(25)
写真15　第Ⅱ遺構検出面　（Ａ区）……(26)
写真16　第Ⅱ遺構検出面　（Ｂ２区）……(26)
写真17　性格不明落ち込み　（Ａ２区②－16）……(30)
写真18　土坑群　（Ａ３区）……(30)
写真19　埋桶　（Ｂ２区②－10）……(30)
写真20　方形土坑　（Ａ１区②－２）……(31)
写真21　土留め板柵　（Ａ１区②－２）……(31)
写真22　礎石列　（Ａ３区②－６）……(32)
写真23　木組土坑　（Ａ３区②－15）……(32)
写真24　木組土坑（Ａ３区②－15）　壁面……(33)
写真25　溝状遺構　（Ｂ２区②－１）……(34)
写真26　第Ⅰ遺構検出面　（Ａ区）……(35)
写真27　Ａ１区撹乱状況……(35)
写真28　建築基礎　（Ａ２区①－８）……(35)
写真29　埋桶　（Ａ２区）……(37)
写真30　方形石組遺構　（Ａ１区①－１）……(38)
写真31　石組溝……(39)
写真32　石組溝導水部　（Ａ３区）……(39)
写真33　Ａ２区　石組池……(41)
写真34　石組池（大）（Ａ２区①－２）……(41)
写真35　石組池（大）　石積み状況……(41)
写真36　石組池（小）　胴木検出状況……(41)
写真37　石組池（小）（Ａ２区①－５）……(44)
写真38　石組池（小）　胴木検出状況……(44)
写真39　石組溝　（Ｂ１区③－２）……(44)
写真40　Ａ３区①－１出土陶磁器……(61)
写真41　Ａ２区①－２出土陶磁器……(61)
写真42　Ａ２区①－４出土陶磁器……(61)
写真43　Ａ２区①－５出土陶磁器……(61)
写真44　Ａ２区①－７出土陶磁器（１）……(61)
写真45　Ａ２区①－７出土陶磁器（２）……(61)
写真46　Ａ２区①検出面出土陶磁器……(62)
写真47　Ａ１区①－１出土陶磁器……(62)
写真48　Ａ３区①－３出土陶磁器……(62)
写真49　Ａ３区①－１出土陶磁器（１）……(62)
写真50　Ａ３区①－１出土陶磁器（２）……(62)
写真51　Ａ区・Ｂ１区第Ⅱ・Ⅲ遺構面出土陶磁器……(67)
写真52　金属製品（１）……(89)
写真53　金属製品（２）……(90)
写真54　銭貨……(92)
写真55　木製品（１）……(100)
写真56　木製品（２）……(101)
写真57　木製品（３）……(102)
写真58　石・その他遺物……(107)
写真59　石・その他遺物……(108)

表　目　次

頁

表１　江戸後期遺構面　遺構観察表……(19)
表２　幕末～明治中期遺構検出面　遺構観察表（１）……(29)
表３　幕末～明治中期遺構検出面　遺構観察表（２）……(30)
表４　明治中期～昭和前期遺構面　遺構観察表……(37)
表５　土器・陶磁器観察表　（１）……(68)
表６　土器・陶磁器観察表　（２）……(69)
表７　土器・陶磁器観察表　（３）……(70)
表８　土器・陶磁器観察表　（４）……(71)
表９　土器・陶磁器観察表　（５）……(72)
表10　土器・陶磁器観察表　（６）……(73)
表11　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（１）……(74)
表12　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（２）……(75)
表13　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（３）……(76)
表14　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（４）……(77)
表15　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（５）……(78)
表16　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（６）……(79)
表17　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（７）……(80)
表18　土器・陶磁器観察表（実測対象外）（８）……(81)
表19　金属製品観察表……(88)
表20　銭貨観察表……(91)
表21　木製品観察表……(99)
表22　石・その他遺物観察表……(106)

第Ⅰ章　調査経過

第１節　保護協議の経過

長野県厚生農業協同組合連合会長野松代総合病院（以下「松代病院」）の診療棟・病棟増築甲工事予定地は、銀行や民家、松代病院の駐車場が存在する松代町の中心部にあたる。当該地区は、松代町殿町とよばれ、江戸時代松代藩の上級武家屋敷地であったといわれている。

平成15年７月に依頼に基づき開発予定地において試掘調査を行い、松代城下町跡の遺構を確認する。翌16年の６月に松代病院と「埋蔵文化財発掘調査協定書」及び「平成16年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。６月10日より現地にて埋蔵文化財の発掘調査を開始し、９月８日に完了する。発掘調査は総面積2,200㎡、調査期間は91日におよぶ。調査は、当初、試掘調査の所見から２面の調査面を予定していたが、発掘調査実施中に破壊を免れた上層遺構が部分的に残存していることが判明し、結果として３面の調査面を設定した。

平成17年度は、埋蔵文化財センター屋内における整理調査を実施した。協定書に基づく当該年度分の契約を平成17年５月27日付で締結し、平成18年３月に完了した。整理業務としては、出土遺物の洗浄・接合・図化・写真撮影、検出遺構の製図・整理などを主に実施した。以下、日を追って事務経過を記述する。

［平成15年度］

７月２日　開発設計を請負う株式会社エーシーエ設計（以下「設計」）と協議：埋蔵文化財の保護・試掘の実施について

７月22日　埋蔵文化財試掘調査の依頼を受ける（土地所有者の承諾書添付）

７月28日　試掘調査を実施、２面にわたる遺構の存在を確認

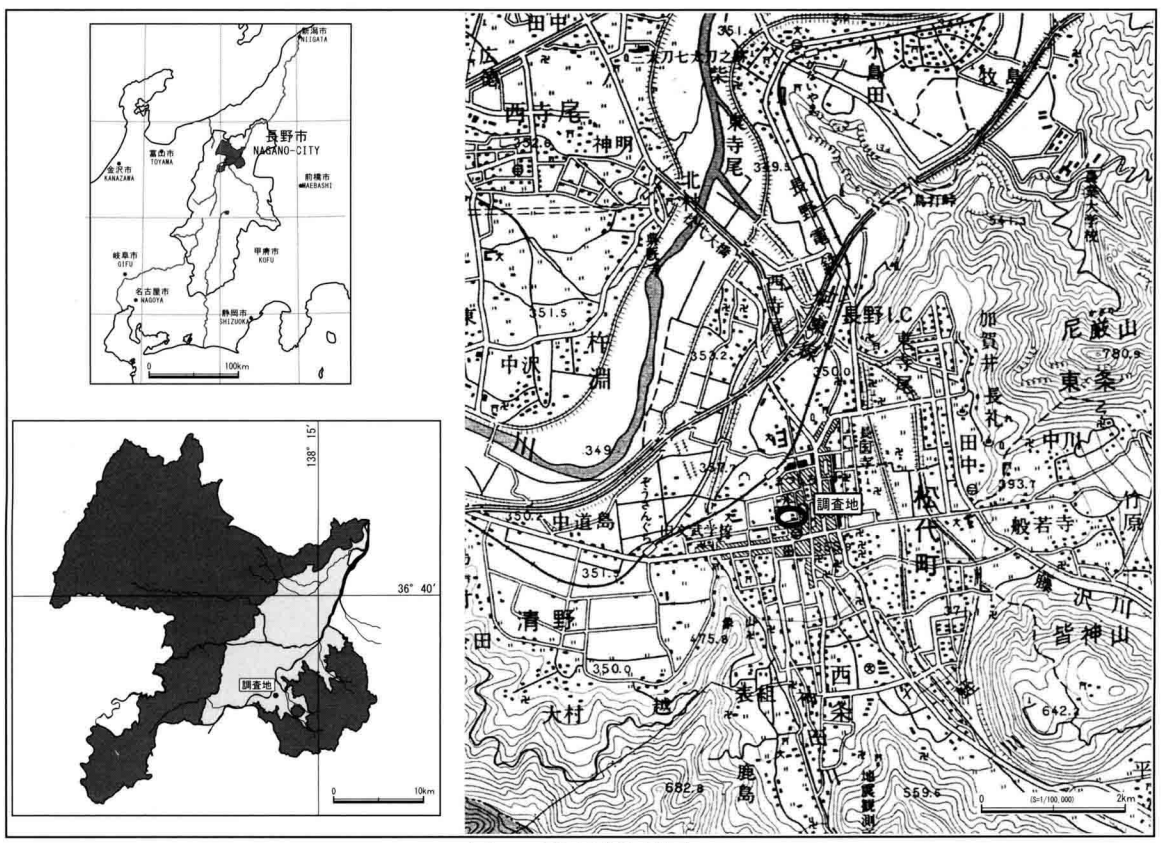


図１　調査地位置図

8月5日　開発事業主体者（松代病院）と協議：埋蔵文化財発掘調査の期間・費用について

12月12日　開発設計と発掘調査の実施時期について協議

1月6日　設計と協議：既存銀行の建物と倉庫の基礎として、コンクリート基礎と、松の丸太杭が相当数埋め込まれており、埋蔵文化財がすでに破壊されている可能性が高いことが判明

1月19日付　「土地収用法第18条2項第5号に基づく意見書交付に関する進達依頼について」長野県厚生農業協同組合連合会代表理事理事長井出秀人より市教委教育長あてに提出

1月28日付　15教文第653号県教委回答「当該地を起業地に該当する土地へ編入して差し支えない」

［平成16年度］

4月23日付　松代病院院長野口修より文化財保護法57条の2第1項の規定による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」及び「埋蔵文化財発掘調査依頼書」、「土地所有者の承諾書」が提出される

5月11日付　16教文第5－42号県教委教育長から発掘調査実施の通知を受理

6月1日　「埋蔵文化財発掘調査協定書」・「平成16年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結

6月10日　発掘調査を開始

9月8日　発掘調査終了。調査面積2,200㎡、調査日数は91日間（土日等含む）。

3月29日　協定書と委託契約書の変更契約を締結した。

3月30日付　16埋第409号「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を松代病院に提出

［平成17年度］

5月27日　「平成17年度埋蔵文化財発掘調査委託契約（整理業務）」を締結

3月30日　『長野市の埋蔵文化財第114集　松代城下町跡（3）～殿町～』を刊行

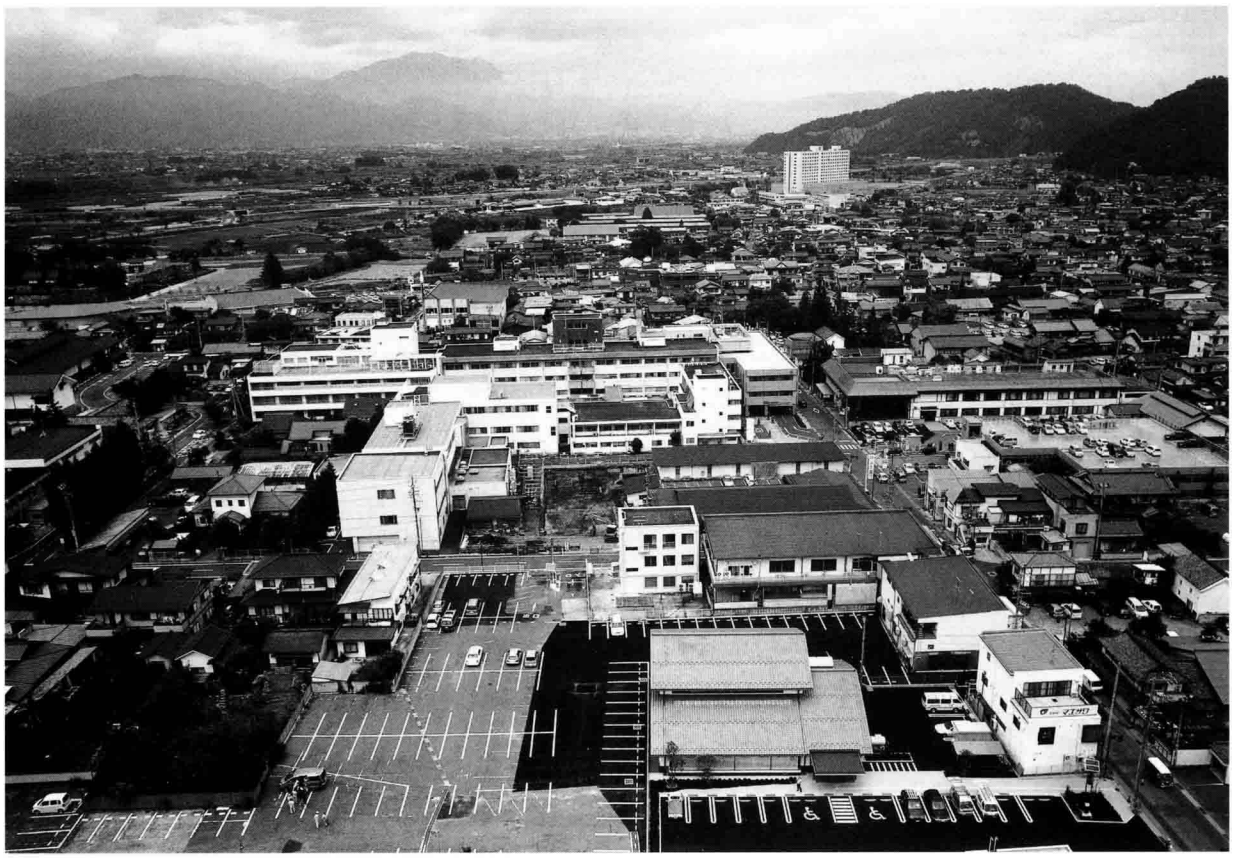


写真1　調査地遠景

第２節　調査日誌抄

2004（平成16）年

6月10日　Ａ区表土除去開始。

6月15日　作業員参加、Ａ区１次面遺構検出。

6月21日　遺構確認状況写真撮影、各遺構掘り下げ。

6月25日　雨のため終日作業休止。

7月5日　Ａ区１次面完掘。写真撮影。

7月6日　Ａ区１次面遺構測量。

7月9日　Ａ区２次面調査開始、重機掘削開始。

7月14日　Ａ区２次面遺構検出。

7月16日　雨により午後作業休止。

7月21日　Ａ区２次面遺構測量（一部）。

7月27日　Ａ区２次面写真撮影、遺構測量。

8月4日　Ａ区３次面調査開始、重機掘削開始。

8月8日　Ａ区３次面遺構検出。

8月9日　Ａ区３次面と併行してＢ－１区調査開始、重機掘削開始。

8月10日　Ａ区３次面各遺構掘り下げ

8月12日　Ａ区３次面写真撮影、遺構測量。

8月13～16日　作業休止。

8月17日　Ｂ１区遺構検出。

8月19日　Ｂ２区１次面調査開始、重機掘削開始。

8月23日　Ｂ２区１次面遺構検出。

8月25日　Ｂ１・２区写真撮影。

8月26日　Ｂ１区１次面・Ｂ２区１次面遺構測量。

8月30日　Ｂ２区２次面調査開始、重機掘削開始、遺構検出。

8月31日　雨により午前作業休止。

9月1日　Ｃ区調査開始、後世の撹乱が著しく遺構が存在しないことを確認。写真撮影、測量。

9月2日　雨のため終日作業休止。

9月6日　Ｂ２区２次面写真撮影。

9月7日　Ｂ２区２次面遺構測量。

9月8日　機材撤収、現場における作業を終了する。

写真２　表土除去

写真３　作業風景

写真４　遺構測量風景

写真５　発掘調査参加者

第３節　調査体制

本調査は、長野市長　鷲澤正一が受託し、長野市教育委員会の直轄事業として長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

【平成16年度】

調査主体者	長野市教育委員会		教　育　長	立　岩　睦　秀
調 査 機 関	長野市教育委員文化財課		課　　長	塩　澤　一　郎
	文化財課埋蔵文化財センター		局主幹兼所長	矢　口　忠　良
庶 務 担 当	係　長	山岸　恒雄		事務員　吉村　久江
調 査 担 当	係　長	青木　和明		専門員　長瀬　　出
	主　査	飯島　哲也（調査主任）		専門員　山野井智子（調査員）
	主　査	風間　栄一		専門員　石丸　敦史
	主　事	小林　和子		専門員　小出　泰弘
	専門員	堀内　健次		専門員　森田　利枝
	専門員	清水　竜太		専門員　宮沢　浩司（調査員）
	専門員	遠藤恵実子		専門員　山岸　千晃

整理調査員　青木善子、池田寛子、小野由美子、多羅沢美恵子、鳥羽徳子、中殿章子、武藤信子、矢口栄子

発掘作業員　青木つや子、青木正次、荒井貞幸、内山健至、内山弘子、内山善徳、海沼けい子、風間貞男、窪田節子、小宮山盛雄、坂口一誠、坂口美知子、高橋和哉、多城恵子、多門睦夫、新田早智子、半田芳子、保坂豊子、増田益利、丸山武雄、宮尾秀男、宮林重成

整理作業員　倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、塚田容子、富田景子、西尾千枝、三好明子、村松正子

金属・木製品保存処理業務委託　株式会社吉田生物研究所

【平成17年度】

調査主体者	長野市教育委員会		教　育　長	立　岩　睦　秀
調査機関	長野市教育委員文化財課		課　　長	北　村　真一郎
	文化財課埋蔵文化財センター		局主幹兼所長	矢　口　忠　良
庶務担当	係　長	宮沢　和雄		事務員　吉村　久江
調査担当	係　長	青木　和明		専門員　山野井智子（調査員）
	主　査	風間　栄一		専門員　石丸　敦史
	主　査	小林　和子		専門員　小出　泰弘
	主　事	宿野　隆史（調査主任）		専門員　森田　利枝
	専門員	清水　竜太		専門員　宮沢　浩司（調査員）
	専門員	遠藤恵実子		専門員　山岸　千晃
	専門員	長瀬　　出		専門員　加藤　拓也

整理調査員　青木善子、池田寛子、小野由美子、多羅沢美恵子、鳥羽徳子、中殿章子、武藤信子、
矢口栄子

整理作業員　倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、塚田容子、富田景子、西尾千枝、
三好明子、村松正子

土器・陶磁器整理業務委託　株式会社　アルカ

発掘調査および整理調査を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。

調査協力者　長野市教育委員会文化財課　専門員　小林育英、海野　修
長野市立博物館　学芸員　降幡浩樹
松代文化施設等管理事務所　学芸員　原田和彦、専門員　北村典子、利根川淳子

第４節　調査方法

１　発掘調査の方法

今回の発掘調査はこれまでの松代城下町跡における発掘調査のなかでも比較的広範囲が調査対象となっており、文献から調査対象地は武家屋敷地の範囲であったとされることから、松代城下町における武家屋敷の様相を明らかにできるのではないかと考えられた。このことから、発掘調査においては以下の視点に基づき調査を実施するよう努力した。

ａ　確認された遺構について、その性格と遺構相互の関連性から土地利用の様相を把握すること。

ｂ　これまでの調査で確認された大火にともなう焼土層及び水害にともなう洪水堆積層の確認と災害時期の比定。

ｃ　松代城下町に特徴的な遺構である泉水路の確認と流路の検討。

発掘調査対象範囲は当該事業総面積約12,100㎡のうち建物建築部分約2,200㎡とした。発掘調査の実施にあたっては既存の建物の移転・解体と併行して調査を実施する必要があったことなどから調査地を３区に区分した（図２）。調査区西側の病院駐車場と民家部分をＡ区（816㎡）、北東側の銀行倉庫と駐車場部分をＢ区（880㎡）、南東側の銀行建物部分をＣ区（504㎡）とした。なおＡ・Ｂ区は調査の都合上それぞれ細分している。Ａ区は病院駐車場部分、民家敷地部分、銀行駐車場部分を含んでいる。調査成果からも、それぞれ遺構の関連性が希薄であり、区画・境界を意識していることが予想された。したがって、病院駐車場北側部分をＡ１区、銀行駐車場部分をＡ２区、病院駐車場南側と民家敷地部分をＡ３区と設定した。Ｂ区では銀行建物の解体工事の進捗状況から全面にわたって調査することができなかったことから銀行倉庫部分をＢ１区、銀行駐車場部分をＢ２区と設定してそれぞれ調査を実施した。調査の工程は既存建物の解体工事の進捗状況に合わせ、Ａ区から調査を開始し、Ａ区の調査が全て終了した後、Ｂ１区の調査に着手、その後Ｂ１区の調査途上でＢ２区の調査を併行して開始する変則的なスケジュールとなった。なお、Ｃ区については調査以前から既存建物による撹乱が遺構面までおよんでいることが予想されていたことから全面調査ではなく、撹乱の影響が少ないとみられる部分を選択し、トレンチ調査を実施した。

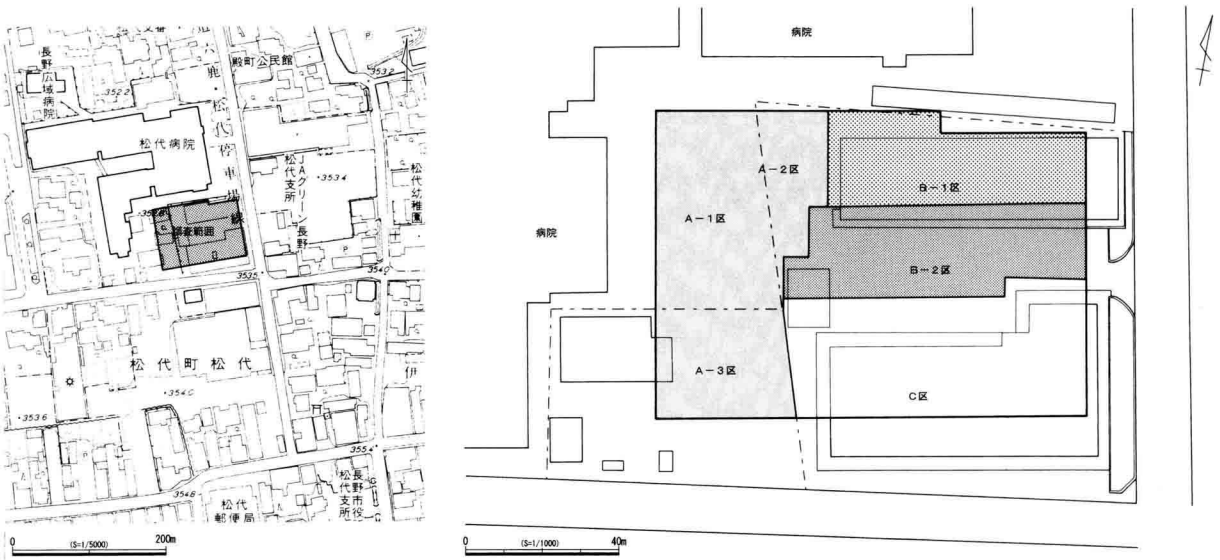


図２　調査地周辺位置図・調査区位置図

実際の発掘調査にあたっては試掘調査において把握された遺構確認面直上まで重機を援用して表土及び現代整地層を除去した後、人力によって遺構面まで掘り下げ・遺構検出を行い、調査を実施した。そして調査後、トレンチによって下層の状況を確認し、重機を用いて次の遺構確認面直上まで掘削し、調査するという手順をとった。遺構面の調査にあたっては地下水位が高く、湧水地も点在する松代町の特性に留意し、調査区の周囲に側溝を掘削して常時湧水の排水に努めた。しかしながら梅雨時や豪雨の際には度々水没し、調査に支障をきたした。

測量についてはその業務を株式会社写真測図研究所に委託し、同社開発の遺跡調査支援システム「ＡＴＳ」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」により、１/20ないし１/10縮尺の測量原図を作成した。また調査中は随時写真撮影を実施した。調査区全体については遺構面検出時と遺構面完掘時に行い、その他の遺構・遺物出土状況などは適宜行った。撮影機材は35㎜一眼レフカメラ及び補助機材としてデジタルカメラ（300万画素相当）を使用し、モノクロネガとカラーポジの各フィルムに同一カットで３枚ずつ露光を変えて撮影した。

２　整理調査の方法

整理調査は平成17年度に長野市埋蔵文化財センターにおいて実施した。出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・浄書および、遺構図・写真などの整理・図版化などであり、これをもとに発掘調査報告書を作成した。また、平成16年度には出土遺物の一部の保存処理業務を株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。具体的には脆弱性が高く、劣化の恐れのある出土木製品の一部と金属製遺物の一部であり、木製品については樹種同定も行い、加えて漆塗木製品については漆膜構造調査も実施した。処理方法については高級アルコール法によった。さらに、平成17年度には出土陶磁器の産地同定・所属時期の調査・観察表の作成などの整理業務を株式会社アルカに委託して実施した。

第Ⅱ章　松代城下町跡の立地と環境

第１節　地理的環境

長野県の県庁所在地である長野市は長野県北部に位置する。その地勢は中央部の長野盆地と西側の西部山地、東側の東部山地に大別される。

長野市中心市街の広がる長野盆地は南西から北西に長軸をとる狭長な盆地であり、その幅は最大で10kmほどである。盆地の中央を千曲川が北流し、西武山地を抜けて盆地に流入する犀川がこれに合流している。西部山地の北部には標高1,917mの飯縄山が位置するが、総じて600～1000m級の丘陵性の山地が多く、緩やかな山々が連なる。西部山地からは犀川によって形成された川中島扇状地や浅川により形成された浅川扇状地が広がっている。東部山地は西部山地に比して急峻であり、その山麓は複雑に屈曲し、あたかもリアス式海岸のような入り組んだ姿を見せる。こうした東部山地にあって皆神山は異様な存在である。皆神山は35万年前の溶岩ドームであり、周囲の山地からは独立している。この山から産出する普通輝石紫蘇輝石安山岩は赤色を呈し、脆弱である。この石材は皆神石と呼ばれ、松代城や城下町の石垣や建物の礎石として広く用いられている。

松代城下町はこの東部山地の山裾に広がる扇状地の扇端から千曲川後背湿地にかけての地域に形成された近世城下町である（図１）。この扇状地形は東部山地から長野盆地に流入する蛭川、神田川、藤沢川などによる堆積作用が合わさって形成されたもので、緩やかな傾斜で扇端は千曲川氾濫原に接し、一部は自然堤防に達し、これと一体化している。

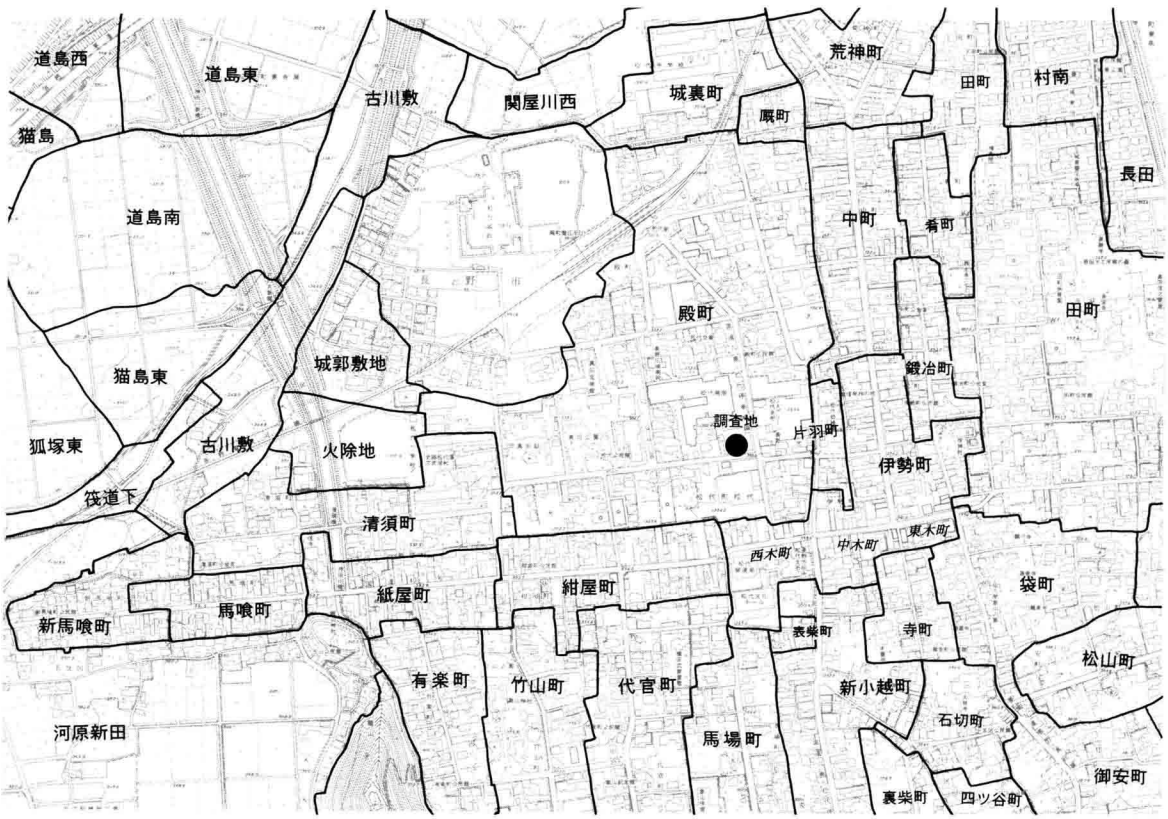


図３　松代町字図

松代城下町の北面を流れる千曲川は松代周辺では盆地の東縁を蛇行して流れている。これは西部山地から長野盆地へ流入する犀川によって形成された川中島扇状地に押されたことによるものであり、このため千曲川後背湿地は扇状地と千曲川に挟まれ、狭い範囲にとどまっている。松代城の前身である海津城はこの千曲川自然堤防上に築城された。築城当時の海津城は城の北側を千曲川が流れる天然の要害であった。しかし太平の世となった江戸時代以降はこの立地が災いし、城下町および城は度重なる水害に悩まされた。そして1742（寛保２）年のいわゆる「戌の満水」と呼ばれる大洪水によって城のほとんどが浸水し、さらに城下にも多大な被害が出たことを機に千曲川の流路を変える瀬替えが行われ、現在の流路に変更された。このとき変更された千曲川の旧河道は松代城北側の百間堀や神田川沿いの微低地として現在も姿をとどめている。

引用・参考文献

長野市誌編さん委員会　編　『長野市誌』第１巻　自然編　長野市

第２節　歴史的環境

原始・古代の松代城下町跡周辺

原始・古代において松代城とその城下町近辺は人々の生活の場として積極的に利用されることは少なかったようである。このことは原始・古代の遺跡分布からも窺える。長野盆地において千曲川自然堤防の利用は縄文時代にその萌芽が認められるものの、自然堤防上への集落の進出が本格化するのは弥生時代以降のことであり、千曲川河東地域には松原遺跡や四ツ屋遺跡の大規模集落が営まれるようになる。しかし、いずれの遺跡も松代城下町に隣接した別の後背湿地に立地している。また、同一扇状地上に展開する屋地遺跡などの集落遺跡は松代城下町の位置する扇端ではなく、全て扇央部に位置している。このように原始・古代における松代城下町中心部とその周辺は居住域とされることはなかった。

その最大の要因にはやはり地形的要因があると考えられる。とりわけ千曲川のもたらす水害はその最大の要因であった。水害について詳細な記録が残されるようになる江戸時代においても千曲川は度々氾濫し、城下町は水害に悩まされた。治水技術が発達した江戸時代でさえ水害に苦しんだのであるから、それ以前において人々がより水害の少ない地域に居住したことは当然であろう。こうした状況は松代城の前身である海津城築城まで続いたと考えられる。

松代城下町の成立

松代城下町付近に人々が本格的に集住し始めるのは武田信玄による海津城築城を待たなくてはならない。海津城築城は1558（永禄元）年から1561（永禄３）年の間と言われているが正確な時期ははっきりしていない。その後、真田信之入封までの60年余りの間、頻繁に城主が変わっている。これにともなって中世城郭であった海津城も近世城郭へと姿を変え、城の名前も海津城から待城、松城と変わる。現在の松代城に改められたのは1711年（正徳元）、松代藩３代藩主真田幸道の頃であった。

城下町の形成に関しては一説には戦国期の山城である尼巌城の城下町が海津城築城や往来の移動によって移ってきたと言われている。これ以後次々と城主が移り代わる過程において、それぞれの城主の家臣団や直属の商工業者が松代城下に集住したと考えられる。彼らの中には城主が代わっても松代に残った者もおり、城下町は次第

に発達していった。そして、1622（元和8）年の真田信之の松代入封時には、後に「町八町」と呼ばれる荒町、肴町、中町、鍛冶町、伊勢町、紺屋町、紙屋町、馬喰町の町人町と、武家町（侍町）などの松代城下町の基本的な町割は既に形成されていたと考えられている。その後も城下町は拡大しつづけ、江戸中期までには寺町や町人町の間や町八町の外側に居住する住民が増えた。これらは町外町と呼ばれた。

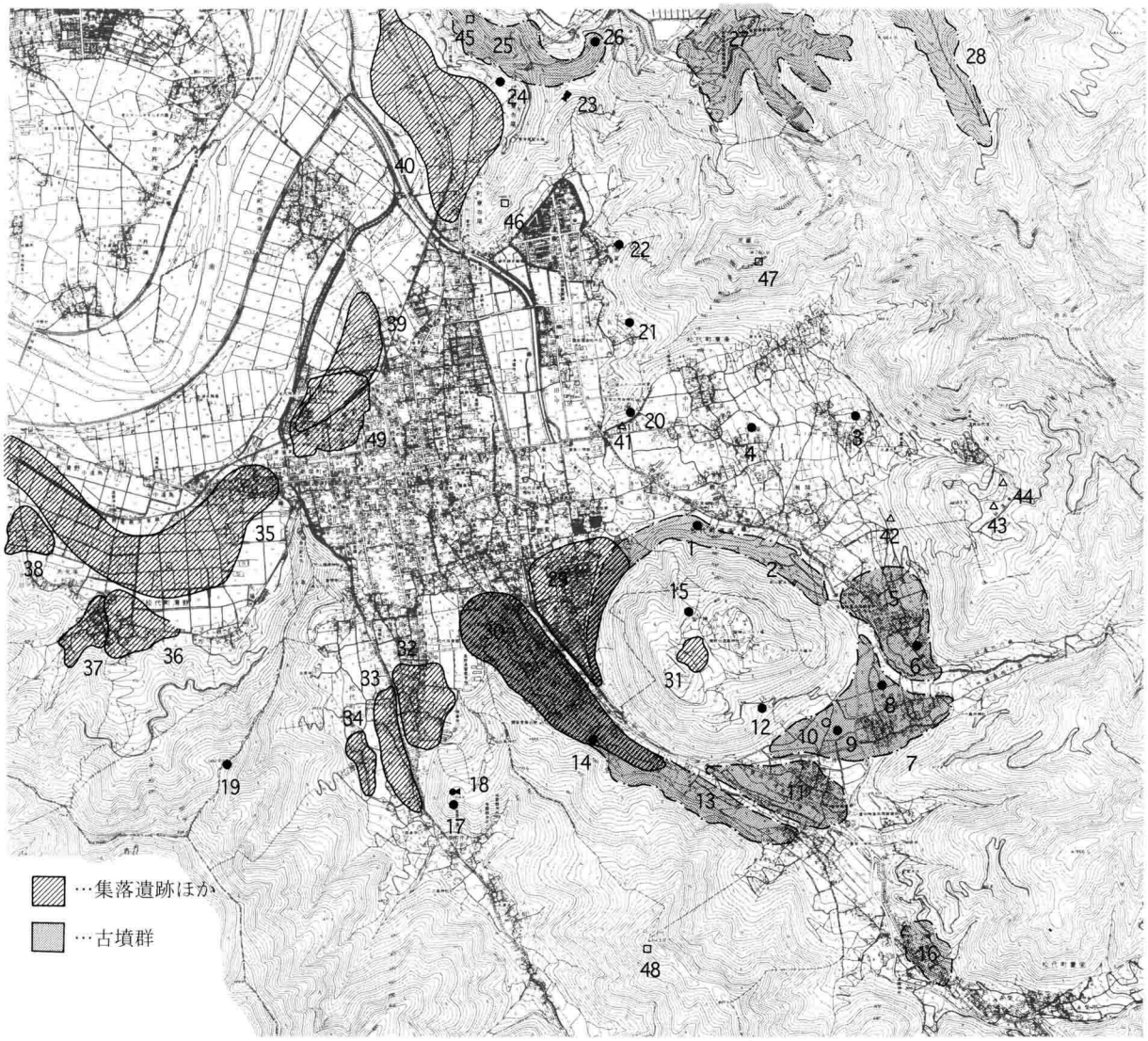
調査地周辺の土地利用

松代城下町において多くの面積を占める武家町は大きく2つの区域に分けられる。まず、松代城の周りは重臣や上級武士の屋敷地が存在し、さらに城下町の周縁部は中・下級武士の屋敷地とされていた。今回の調査地である殿町は前者の松代城周辺部にあたり、家老級の上級武士の屋敷地であった。調査区は現存する絵図を基にした文献調査で真田家と鎌原家の屋敷地であったことが推定されている。

国文学資料館が所蔵する真田家文書に含まれる1826（文政9）年の記載がある絵図によると調査区にあたる区画には「鎌原司馬」ならびに「真田図書」と屋敷の所有者とみられる人物の名が記されている。第Ⅴ章で詳述するが、両家は幕末期に家老を輩出するなど、松代藩内では上級武士の家系にあったようである。この両家の屋敷地境は発掘調査前に確認できた、銀行と病院駐車場との境界とほぼ同じ位置であったと想定される。

引用・参考文献

長野市史編さん委員会　編　『長野市誌』第2巻　歴史編　原始・古代・中世　長野市
長野市史編さん委員会　編　『長野市誌』第3巻　歴史編　近世一　長野市
長野市史編さん委員会　編　『長野市誌』第4巻　歴史編　近世二　長野市



1　西前山古墳
2　皆神山北麓古墳群
3　菅間王塚古墳
4　竹原笹塚古墳
5　牧内古墳群
6　牧内１号古墳
7　桑根井鎧塚古墳群
8　桑根井空塚古墳
9　桑根井鎧塚１・４号古墳
10　観音塚古墳（消滅）
11　平林古墳群
12　南大平古墳群
13　虫歌宮崎古墳群
14　宮崎古墳
15　小丸山古墳
16　関屋古墳群
17　舞鶴山１号古墳
18　舞鶴山２号古墳
19　母袋山古墳
20　天王山古墳群
21　長礼山古墳群
22　加賀井古墳
23　北平１号墳
24　北原１号古墳
25　大室古墳群金井山支群
26　大室古墳群第466号古墳
27　大室古墳群北谷支群
28　大室古墳群大室谷支群
29　屋地遺跡（弥生～中世）
30　中条遺跡（弥生～平安）
31　皆神山遺跡（縄文）
32　市場遺跡（弥生～平安）
33　中村遺跡（縄文～平安）
34　鹿島遺跡（縄文）
35　四ツ屋遺跡（弥生～平安）
36　大村遺跡（弥生～平安）
37　林正寺遺跡（平安～中世）
38　宮村遺跡（平安）
39　松代城北遺跡（古墳～平安）
40　松原遺跡（縄文～中世）
41　天王山窯跡（平安）
42　牧内窯跡（平安）
43　池の平窯跡（平安）
44　滝本窯跡（平安）
45　金井山城跡（中世）
46　寺尾城跡（中世）
47　尼飾城跡（中世）
48　ノロシ山（中世）
49　松代城跡（近世）

図４　松代城下町跡周辺遺跡分布図

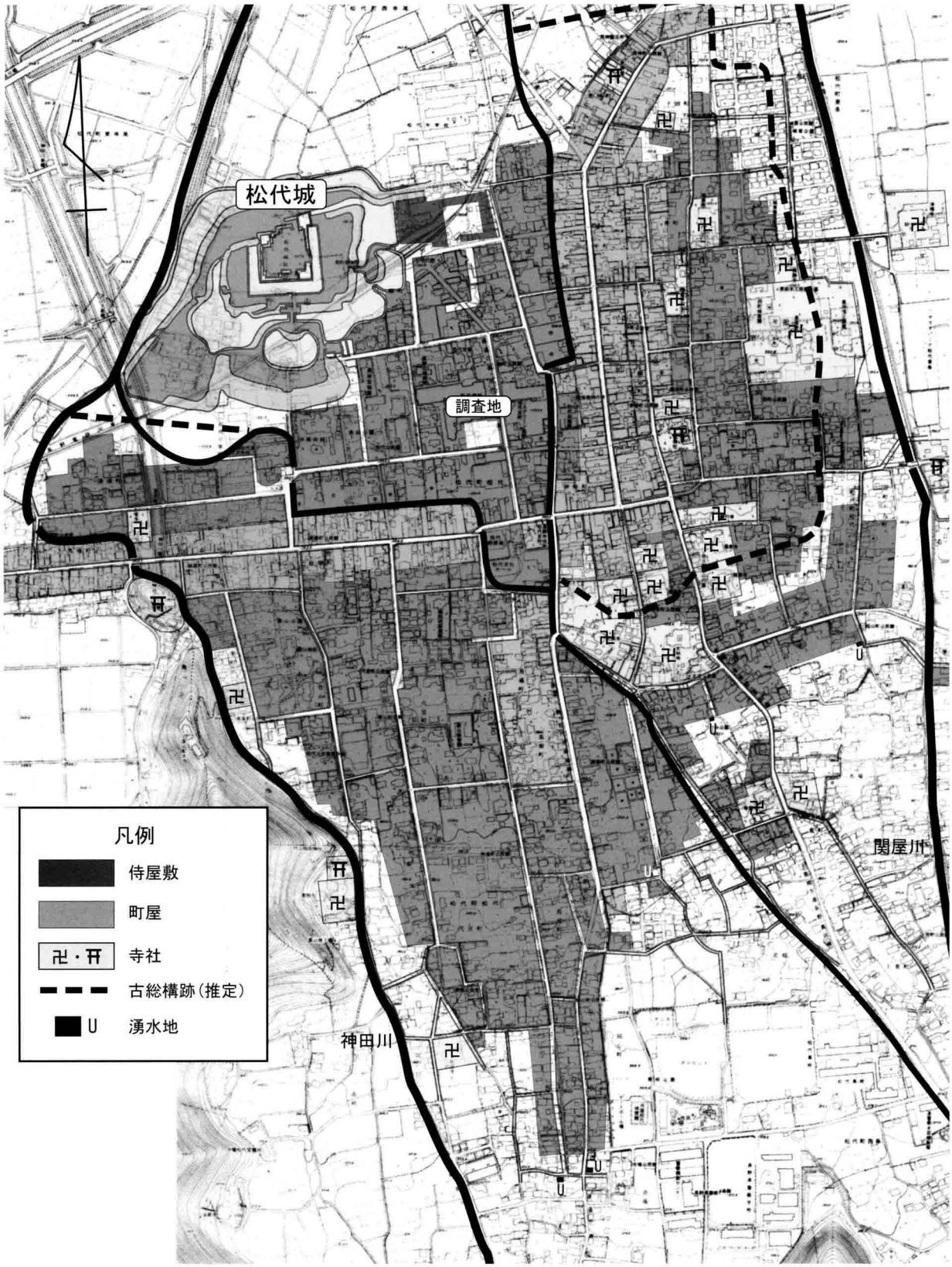


図5　松代城下町の土地利用図
（文政年間（1823年頃）、北村1988を加筆・修正）

松代城下町跡におけるこれまでの発掘調査

松代城下町跡については近年、発掘調査が実施されるようになったところであり、まだまだその全体像を明らかにするには至っていない。しかしながらこれまでの発掘調査によって、文献からは検討が困難であった松代城下町の形成過程や具体的な生活の様相を知ることができた。以下はそのうち代表的な調査とその成果である。

松代城下町跡　木町通り地点　（平成13・14年度）（図６－１）

街路整備に伴ない発掘調査が実施された。調査地点は北国往還にあたり、町屋の店先および武家屋敷の門前と考えられる礎石建物跡や溝などの建物跡を確認した。また火災痕跡とみられる焼土層を確認し、焼土層に伴なう出土陶磁器などから災害記録との時期比定が試みられている。さらに、桃山時代末（16世紀末）にさかのぼる遺物包含層を確認した。松代城下町形成期の様相を示す資料として注目される。

長野市教育委員会　『松代城下町跡～中木町・西木町・紺屋町』　長野市の埋蔵文化財第109集　平成17年

松代城下町跡　八十二銀行地点　（平成15年度）（図６－３）

銀行移転に伴ない発掘調査が実施された。今回の調査地点と同じく殿町にあたり、上級武家の屋敷地であったと考えられる。調査では火災に伴なう焼土整地層、建物基礎、泉水路の可能性のある溝などが検出された。

こうした松代城下町跡に関する調査以外にも史跡整備にともなう発掘調査が松代城ならびに新御殿について進められており、今後は松代城を含めた松代城下町全体としての様相が明らかにされるものと思われる。

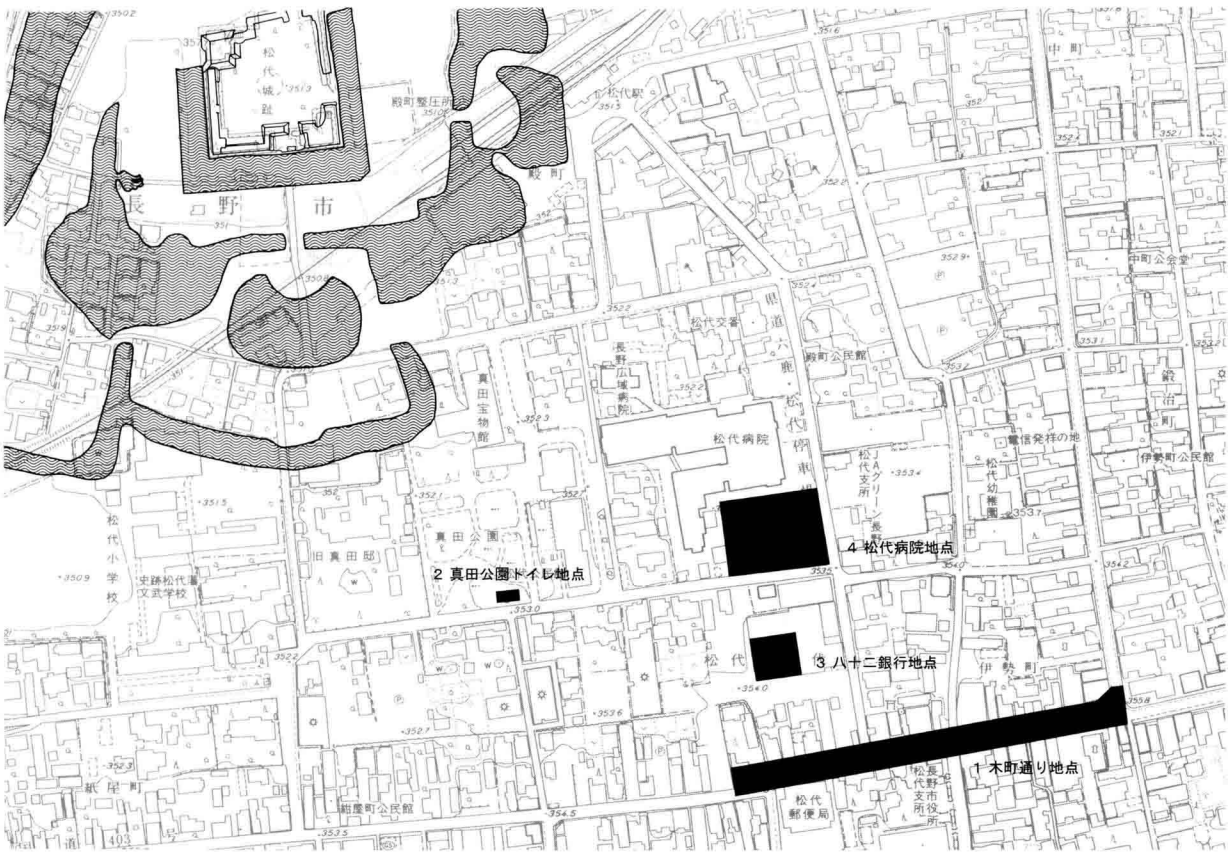


図６　周辺調査地位置図（S=1/5,000）

第Ⅲ章　発掘調査成果

第１節　発掘調査の概要

１　基本層序

本遺跡の基本層序を図７に示す。

調査地点の地表は標高352.3m前後である。調査区北側に向かって僅かに傾斜し、調査区北端の地表高は352.5m、南端の地表高は352.2mであった。表土としては現代の整地層（砕石）が30cmにわたってみられ、整地層下には前代の整地層が確認された。第Ⅰ遺構検出面はその整地層下標高351.7m付近に確認された遺物包含層を基準として設定した。第Ⅰ遺構検出面下層はややグライ化の進んだ暗茶色土層であり、第Ⅱ遺構検出面は暗青灰色土層とこれより下層の土層との間層として把握された。第Ⅲ遺構検出面は第Ⅱ遺構検出面より30cm下層で確認された厚さ10cm程の炭化物を含んだ黒灰色土層に設定した。これより下層はグライ化がさらに進んだ粘土層が堆積し、第Ⅲ遺構検出面下１ｍ（標高350.0m）付近まで下層確認を実施したが、明確な遺物包含層は確認されなかった。

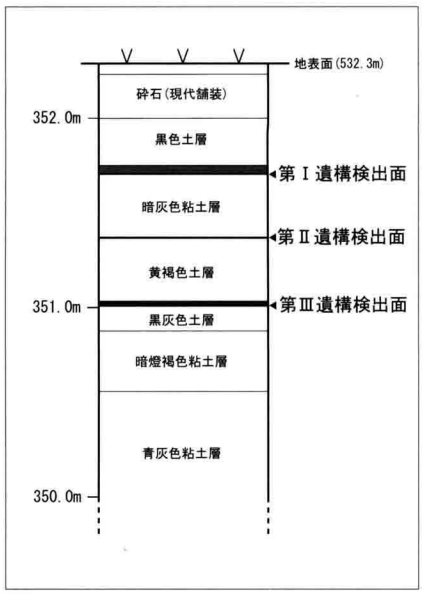


図７　基本土層様式図

本調査地点では近世から近現代まで、３期にわたる土地利用の様子が３面の遺構面として確認された。本報告書では上層から順に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺構検出面としている。各遺構面からの出土陶磁器などから、第Ⅰ遺構検出面は明治時代中期から昭和時代前期、第Ⅱ遺構検出面は江戸時代末（幕末）から明治時代前期、第Ⅲ遺構検出面は江戸時代後期と想定される。

なお、発掘調査の時点では、調査区ごとに検出次面を設定して、遺物の取り上げ、遺構番号の整理等実施している。[1]このため、出土遺物には調査時の検出次面が注記されている。

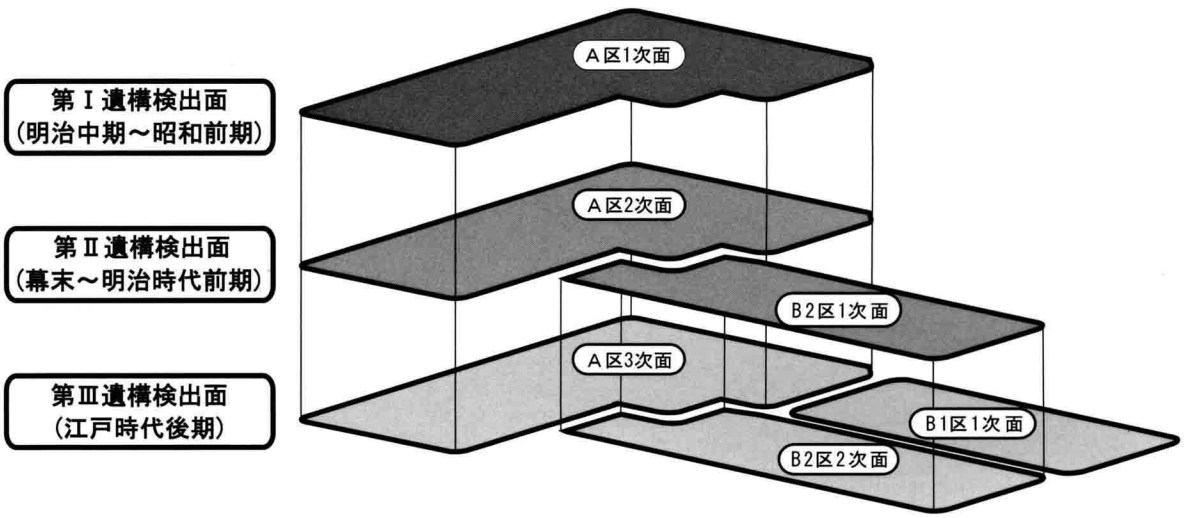


図８　遺構面相関図

2　検出遺構の概要

先述したとおり、今回の調査ではＡ・Ｂ区において３つの遺構面を確認することができた。出土遺物から第Ⅰ遺構検出面は明治時代中期から昭和時代、第Ⅱ遺構検出面は江戸時代末期（幕末）から明治時代初期、第Ⅲ遺構検出面は江戸時代後期までに比定される。第Ⅲ遺構検出面（江戸後期）では溝状遺構２、石組池１、土坑９、石列３、埋桶２などを検出した。遺構数は少ないものの、礎石建物跡とみられる石列や敷地境の溝とみられる遺構など、江戸時代後期の土地利用の一端を捉えることができた。第Ⅱ遺構検出面（幕末～明治初期）では溝状遺構７、方形土坑（性格不明）２、土坑29、埋桶６、石列１などを検出した。性格の不明な遺構が多く、土坑についてはそのほとんどが性格不明である。第Ⅱ遺構検出面では方形板組遺構と石列が注目される。方形板組遺構は横板と杭によって壁面の土留めをはかった土坑であり、その覆土から多くの遺物が出土した。石列は礎石列と考えられ、調査区南西側に礎石建物の存在が想定される。

第Ⅰ遺構検出面では溝状遺構７、石組池２、埋桶５などを検出した。調査区の広範囲にわたって現代の所産と見られる撹乱（石炭殻廃棄土坑）を被っていたこともあり、建物跡は確認されなかった。特筆すべきは泉水路と見られる石組溝及び石組池が検出されたことである。調査区のほぼ全域にわたって確認することができた。ただしその構築時期は江戸時代ではなく、明治以降と考えられる。また、トレンチ調査を実施したＣ区では地表下1.8ｍまで掘り下げ、遺構検出を試みたものの、後世の撹乱が著しく、遺構・遺物は確認されなかった。

3　出土遺物の概要

出土した遺物の内容は土器（土器・陶器・磁器など）、土製品、金属製品、木製品、石製品、ガラス製品、骨角製品などであり、その大部分は陶磁器が占める。また、出土遺物の遺構面ごとの出土量を見てみると明治中期～昭和初期の遺構面（第Ⅰ遺構検出面）からの遺物出土量が卓越している。下層に行くにしたがって量を減じ、江戸後期の遺構面（第Ⅲ遺構検出面）を含め、江戸時代の遺構にともなう遺物はそれ程多くない。

今回の調査では地下水位の高い松代城下町の環境を反映して木質遺物も多数出土した。木製品には漆器椀、漆器椀蓋、漆器膳、漆器蓋、下駄、匙、柄杓、箸、桶、曲物などがある。また、金属製品には鉄、銅（銅合金含む）、金製品が出土し、その内容は銭貨、煙管、鉄釘、匙、簪、銅椀、槍先など多岐にわたる。

1　図8にみえる１次面、２次面、３次面という表記が調査時の検出次面にあたる。

第２節　遺構と遺物

１　検出遺構

（１）第Ⅲ遺構検出面（江戸時代後期）（図9，10・写真6，7，8）

第Ⅲ遺構検出面はＡ・Ｂ区において確認された。標高351.0m前後に広がる遺構面である。検出面を含めた各遺構の出土陶磁器から推定される遺構面の所属時期は、江戸後期から幕末にかけての時期（18世紀末から19世紀中葉）にあたる。江戸時代の土地利用の一端を示すとみられる溝状遺構、石列、石組池状遺構などの遺構が確認された。

Ａ１区とＡ２区との境界上からは溝状遺構が検出された。南北方向にＡ１区とＡ２区を分かつ形で延びており、水路として使用された痕跡も認められる。後述するが敷地境の溝と考えられる。また、Ａ１区では方形土坑が検出された。性格は不明であるが、陶磁器をはじめ多くの遺物が出土した。Ａ３区では建物跡の可能性のある石列が検出された。また、Ａ３区からは底面が平坦で遺構面からの深さも浅い複数の土坑が確認された。ここからの出土遺物は比較的古相を示す。今回の調査では江戸時代後期にあたる本遺構面より下層からは明確な遺構・遺物は確認されなかったが、前代から継続的に利用されてきた可能性が考えられる。

Ｂ１区では、現代の建物基礎の掘り込みや基礎杭によって遺構面が広範囲にわたって撹乱を受けており、確認することのできた遺構はわずかであった。中でも石組池状遺構は石組の残存状態こそ悪かったものの、泉水や庭園に関わる遺構と見られる。泉水路が長期にわたって継続的に利用されてきた松代城下町の状況を鑑みると、時代は異なる遺構ではあるが、第Ｉ遺構検出面の泉

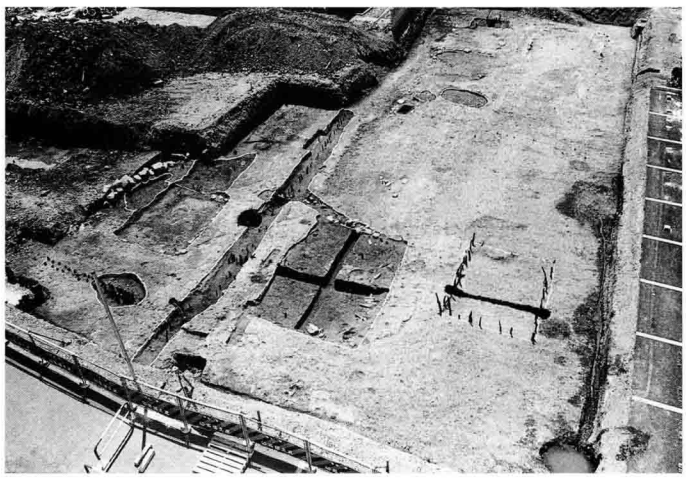


写真６　第Ⅲ遺構検出面（Ａ区）

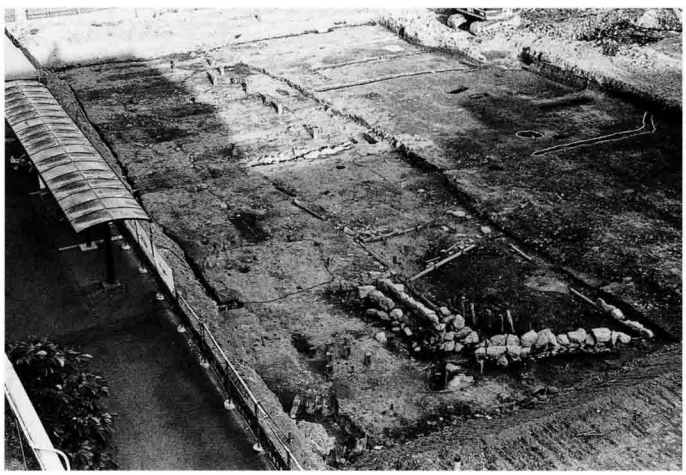


写真７　第Ⅲ遺構検出面（Ｂ１区）

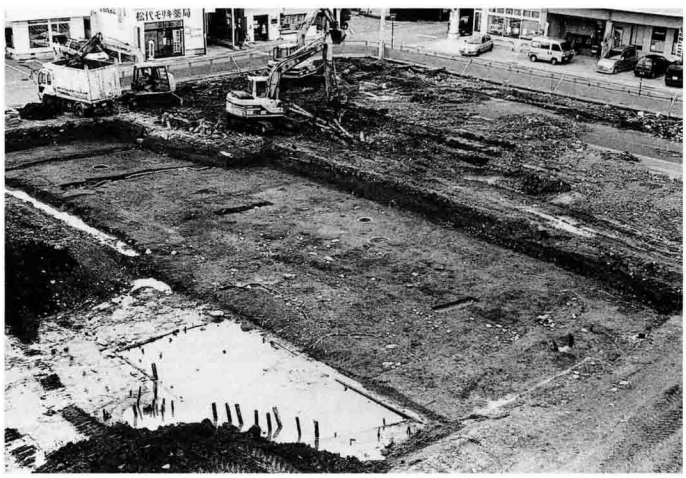


写真８　第Ⅲ遺構検出面（Ｂ２区）

水関連遺構との関連性も検討する必要があろう。

Ｂ２区では、溝状遺構や土坑など比較的小規模な遺構が検出された。しかしながら、Ｂ１区同様に現代建築による撹乱が一部におよんでいたこともあり、隣接調査区と遺構の関連性を検討することが困難であった。他方、Ｂ２区西半の広い範囲で検出された焼土面は注目される。平成13年から14年にかけて調査された松代城下町跡木町通り地点では江戸時代から明治時代にかけての大火にともなうと見られる被熱面および火災後の整地層が確認されており、それぞれの被熱面の年代比定も文献の成果から検討されている。

本調査地では確認できた焼土面が部分的で、出土遺物も少ないことからこのような検討は困難であるが、大火に関連する災害痕跡の可能性も含め、注目される遺構といえる。

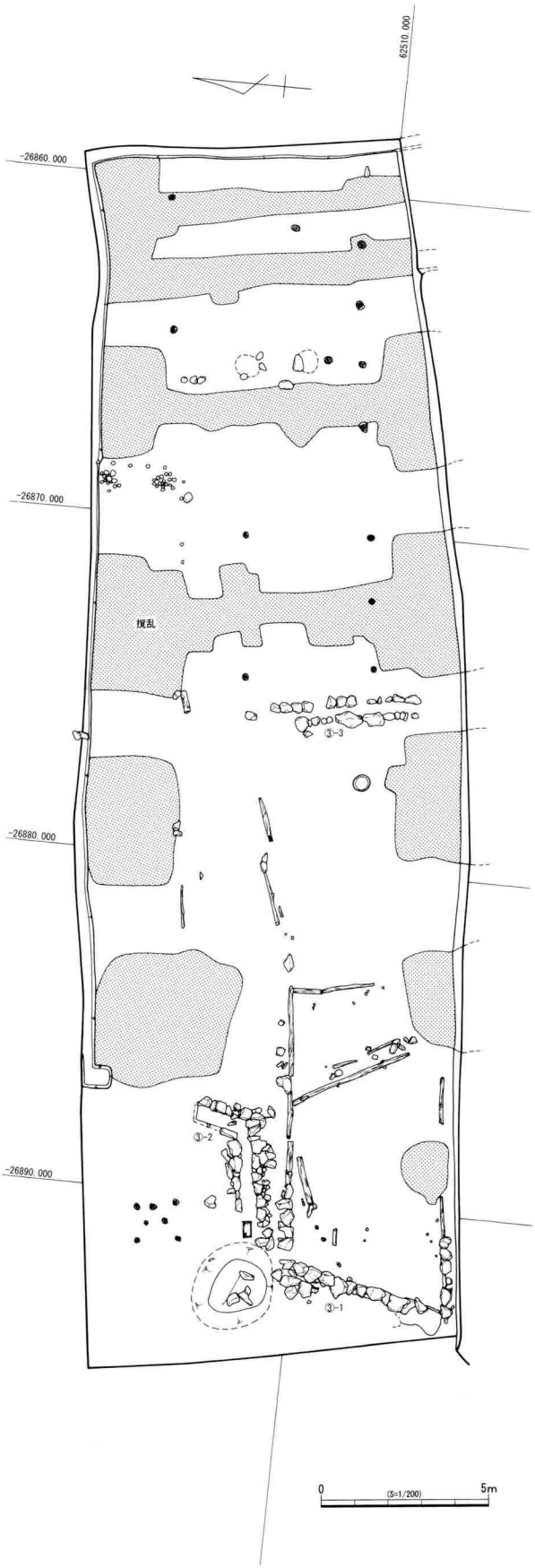


図９　第Ⅲ遺構検出面（Ｂ１区）

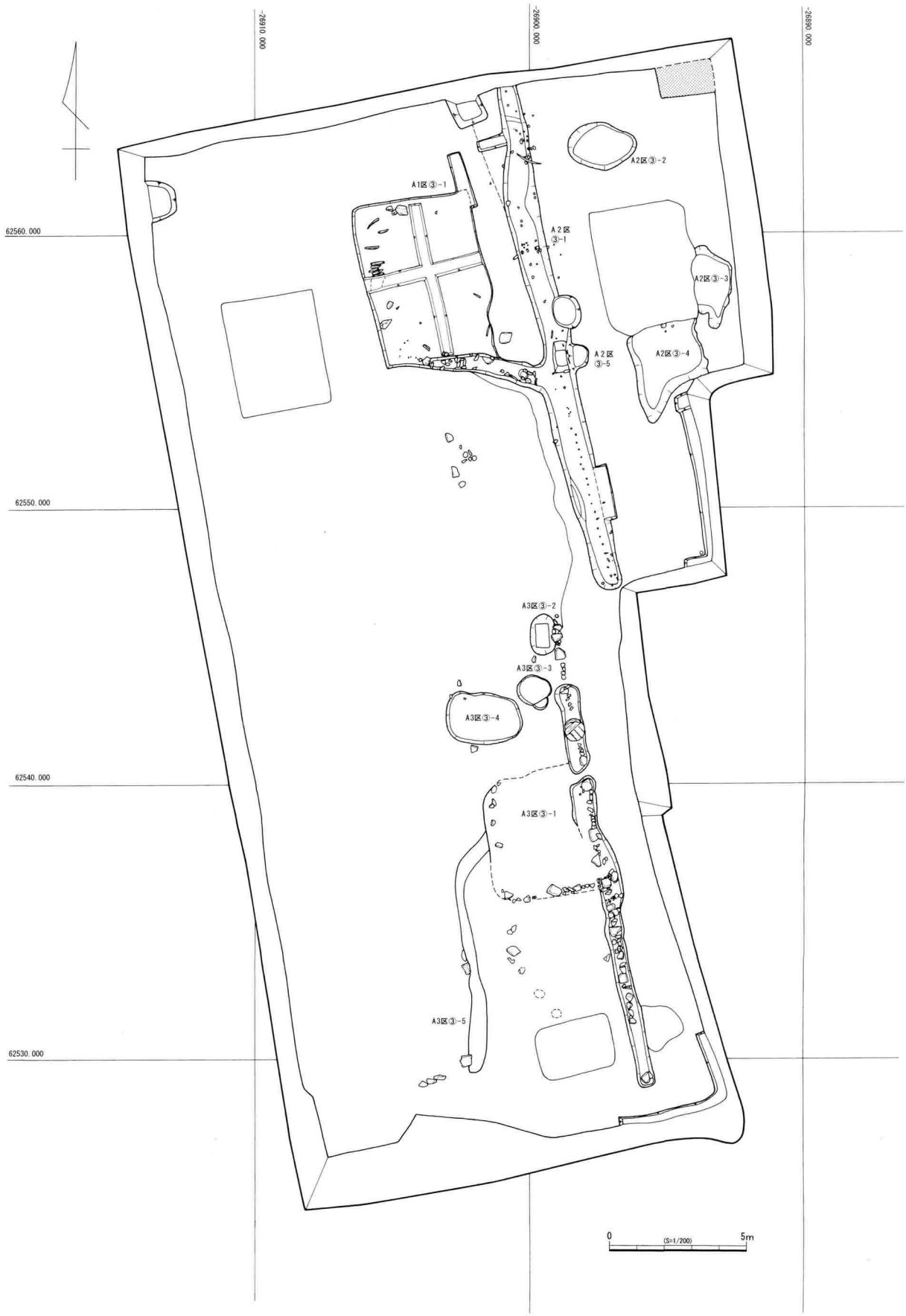


図10　第Ⅲ遺構検出面（A区）

表1　江戸後期遺構面　遺構観察表

調査区	遺構番号	性　格	形状・断面	規　　模	方向等	備　　考	時　期
第Ⅲ遺構面（江戸時代後期）							
A-1	③-1	性格不明遺構	長方形	6.3×5.9m, 深さ0.2m	長辺南北方向	性格不明。ゴミ廃棄土坑か	江戸後期
A-1	③-2	性格不明遺構	溝状・舟底形	幅0.5m,長さ3m, 深さ0.15m	東西方向	溝状遺構の可能性あり	江戸後期
A-2	③-1	溝状遺構	台形	幅1m,長さ17.5m以上, 深さ0.2m	南→北方向	溝内杭多数、堰状の板組あり	江戸後期～ 幕末
A-2	③-2	土坑	不整形	2.5×1.8m, 深さ0.2m	－	底面平坦、A-2②-7に切られる	幕末
A-2	③-3	土坑	不整形	3×1.3m,深さ0.15m	－	A-2①-2、B-1①-1により切られる。 焼土面	幕末
A-2	③-4	土坑	不整形	2.5×3.6m, 深さ0.25m	－	A-2①-2により切られる。焼土面	江戸後期～ 幕末
A-2	③-5	撹乱	円形	1×1.2m,深さ0.6m	－	A-2③-1を切る	
A-3	③-1	石列	方形区画	4×17m	長辺南北方向	礎石状の石列。建築基礎か	江戸中期～ 幕末
A-3	③-2	木組枠	長方形	0.75×0.45m(木枠) ,1.4×0.85m(堀方)	長辺南北方向	木枠内木質遺物多数	
A-3	③-3	土坑	円形	1.25×1.3m, 深さ0.03m	－	2つの土坑が切り合う。底面平坦	江戸後期
A-3	③-4	土坑	楕円形	1.9×2.7m, 深さ0.12m	－	底面平坦	江戸後期
A-3	③-5	石列	L字形	幅0.2m,長さ8.2m	－	直角に交わる。礎石列の角部分か	
A-3	③-6	埋桶	円形	φ0.7m	－	側板1/2残存。A-3③-1堀方より検出	
B-1	③-1	石組池状遺構	方形	4.5×8m, 深さ0.6m以上	長辺東西方向	石組み部分的に残存(2段)、 東側改修の可能性あり	明治以降
B-1	③-2	石組溝状遺構	底面平坦	幅0.45m,長さ5.5m	東西方向	上層遺構。 A-2区1次面2号遺構(石組池)と接続	幕末
B-1	③-3	石列		幅0.8m,長さ5.2m	南北方向	石組水路状に2列の石列が並ぶ。 性格不明	
B-1	③-4	土坑	円形	φ4.5m,深さ0.15m	－	内面炭化物。炭溜まりか	
B-2	③-1	溝状遺構	U字形	幅0.5m,長さ8.1m以上 ,深さ0.1m	南北方向	埋土は礫、暗渠状の遺構。 北側は撹乱で切られる	明治～ 昭和初期
B-2	③-2	土坑	円形	φ0.8m,深さ0.18m	－	底面に川原石が敷かれる。断面台形	
B-2	③-3	撹乱	円形	φ0.65m,深さ0.09m	－	断面台形	
B-2	③-4	土坑	円形	0.55×0.7m, 深さ0.18m	－		江戸後期?
B-2	③-5	土坑	楕円形	0.6×0.95m, 深さ0.14m	－		
B-2	③-6	埋桶	円形	φ0.2m(桶), φ0.45m(堀方)	－	杉などの樹皮製。底板なし。 桶でない可能性あり	
B-2	③-7	撹乱	溝状	幅0.85m,長さ8.6m	南北方向	現代建物基礎	昭和以降
B-2	③-8	撹乱	不整形	1.35×1.05m, 深さ0.1m	－	底面礫多数	
B-2	③-9	撹乱	隅丸方形	1.4×1m,深さ0.15m	－	底面平坦	
B-2	③-10	撹乱	不整形	1.1×0.45m, 深さ0.1m	－		
B-2	③-11	撹乱	円形	φ0.45m,深さ0.02m	－	底面平坦	
B-2	③-12	撹乱	楕円形	0.65×0.45m, 深さ0.1m	－	底面平坦	
B-2	③-13	欠番				上面①-3の掘り込み	

方形土坑〔Ａ１区③－１〕（図11・写真９）

Ａ１区東側にて検出された。幅約2.2m、長さ約３ｍの長方形を呈する土坑である。遺構面からの深さ約10cm程を測り、緩やかに中央部に向かって傾斜している。南側には溝状遺構の可能性があるＡ１区２号遺構が、本遺構を切る形で接している。また、遺構底面を中心として覆土中から多くの木製品が出土した。その大半が建築部材に関連するものであるが、漆器椀などの木製品も出土している。

出土遺物は上述した漆器椀以外にも陶磁器が比較的多数出土している。中でも京・信楽系の陶器が碗類を中心に多く含まれる点は特徴的である。

遺構の性格については判然としない。南側に接するＡ１区２号遺構を水路であると考えるならば、溝状遺構（Ａ２区１号遺構）に接続する池状遺構とも考えることができるが、ここではその可能性を指摘するに止めたい。

本遺構の廃絶時期に関しては、出土陶磁器中に19世紀以降生産が本格化する瀬戸美濃系磁器が含まれないことから18世紀後半から18世紀末と考えられる。

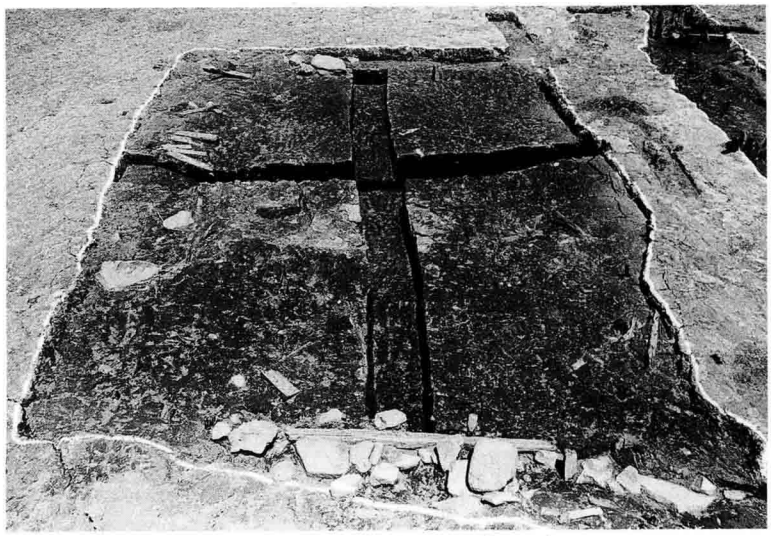


写真９　方形土坑（Ａ１区③－１）

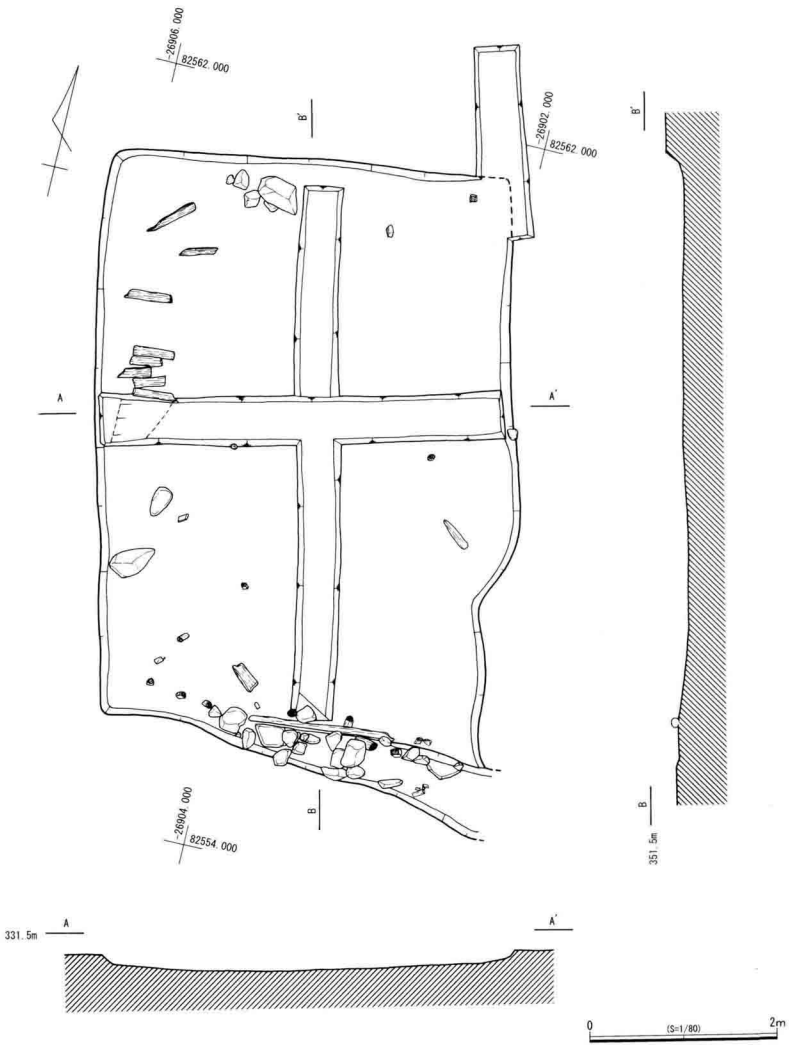


図11　方形土坑（Ａ１区③－１）

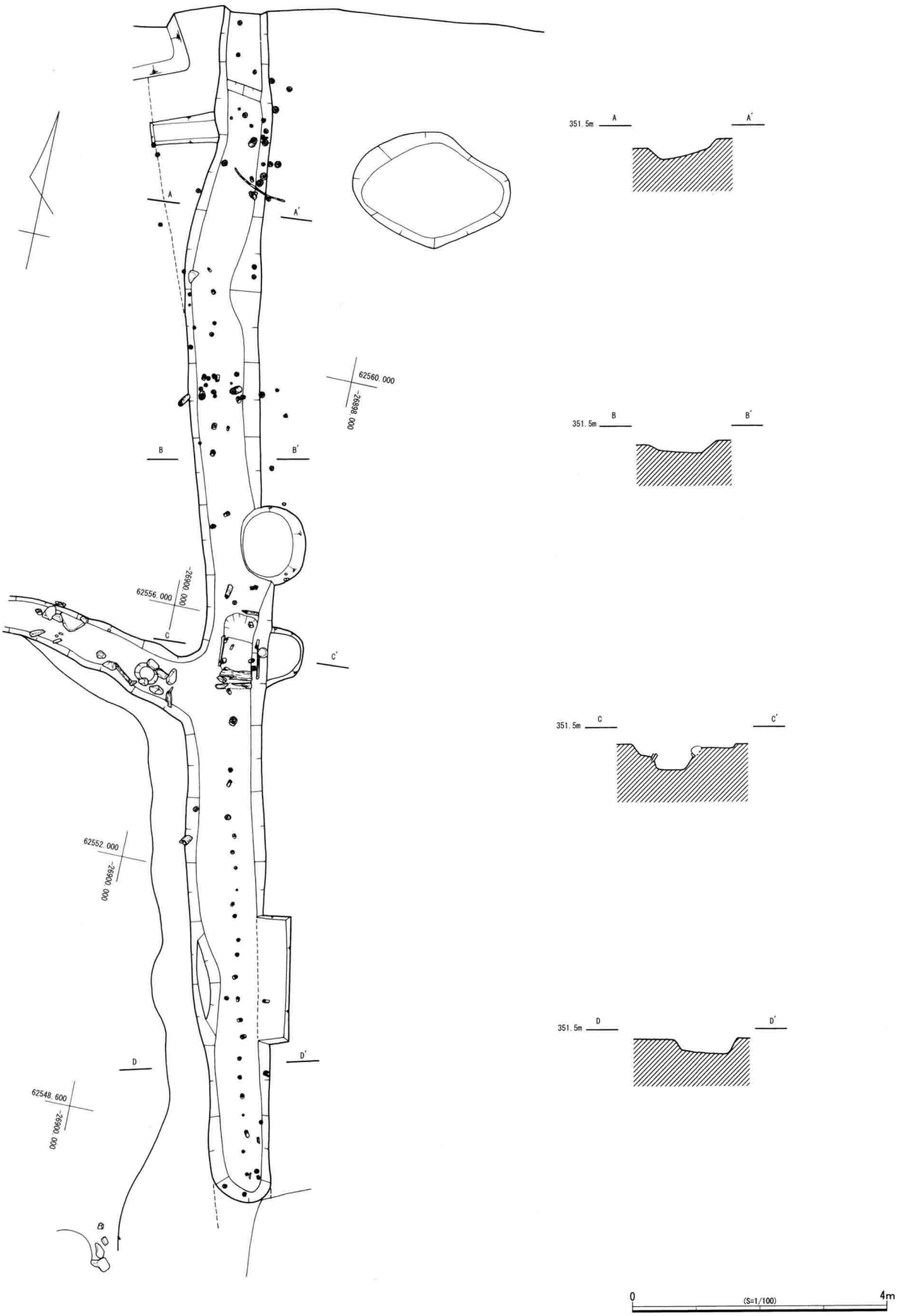


図12　溝状遺構（Ａ２区③－１）

溝状遺構〔Ａ２区③－１〕（図12・写真10，11）

Ａ２区西側、Ａ１区との境界上に沿う形で南北方向に検出された幅約１ｍ、長さ19ｍ以上の溝状遺構である。断面形状は台形を呈し、遺構面からの深さ最大50cmを測るが、深さは一定ではなく浅い部分では深さ20cmほどである。また、遺構南端は底面が緩やかに浅くなり、やや不自然な形で途切れていることから上部が削平されている可能性があり、さらに南に延びるものと推測される。北端についても調査区外へ延びているものとみられる。

南側ではφ５cm程の杭が南北方向に列をなして検出された。この他北側でも多くの杭が検出された。また、以降中央部付近からは板材と杭で構築された堰状の遺構が検出された。これはコの字形に板材を組んで竪杭で固定したもので、その内側は周囲よりも深く掘り込んであるという構造を有する。その用途としては水をせき止めるというよりもむしろコの字の内側に水を貯留させることにあったと推測される。本遺構についてはその位置から屋敷地境の溝と考えられることは先述した通りであるが、上記のような杭列や堰状遺構の存在から水が流れていたものと考えられる。

溝内からは陶磁器を始め多くの遺物の出土を見た。中でも特筆すべきは木製品が数多く出土したことであり、漆器椀や下駄など、今回の調査で出土した木製品全体の出土量のうちおよそ10%が本遺構からの出土品で占められる。出土陶磁器から推定される本遺構の存続期間は17世紀末から19世紀前半までと推定される。

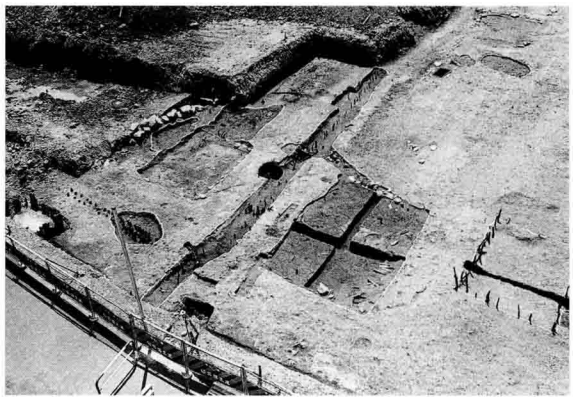


写真10　溝状遺構（Ａ２区③－１）

写真11　溝状遺構(Ａ２区③－１)拡大

礎石列〔Ａ３区③－１〕（図13・写真12）

Ａ３区東側において検出された。方形の石列を中心とする石列である。φ20cm～30cmの石材が１ｍの間隔で配置されている。石列の中心部分とみられる方形区画部分では多くの石材が失われているものの、3.5ｍ×3.5ｍの方形区画が復元された。また、この方形区画に接する形で南北方向に延びる石列も検出された。長さ15ｍを測る。この石列については建物に付随する雨落溝に関連する石列とも、礎石列とも考えられるが、判然としない。

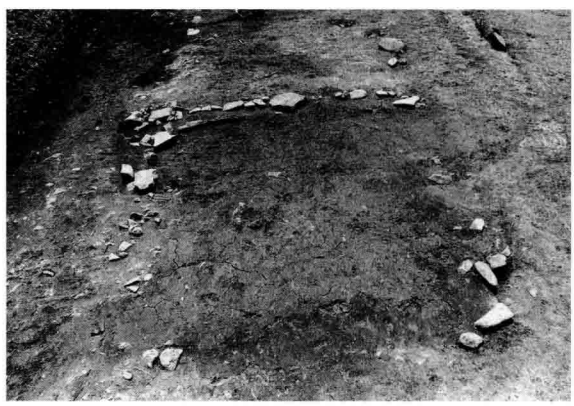


写真12　礎石列（Ａ３区③－１）

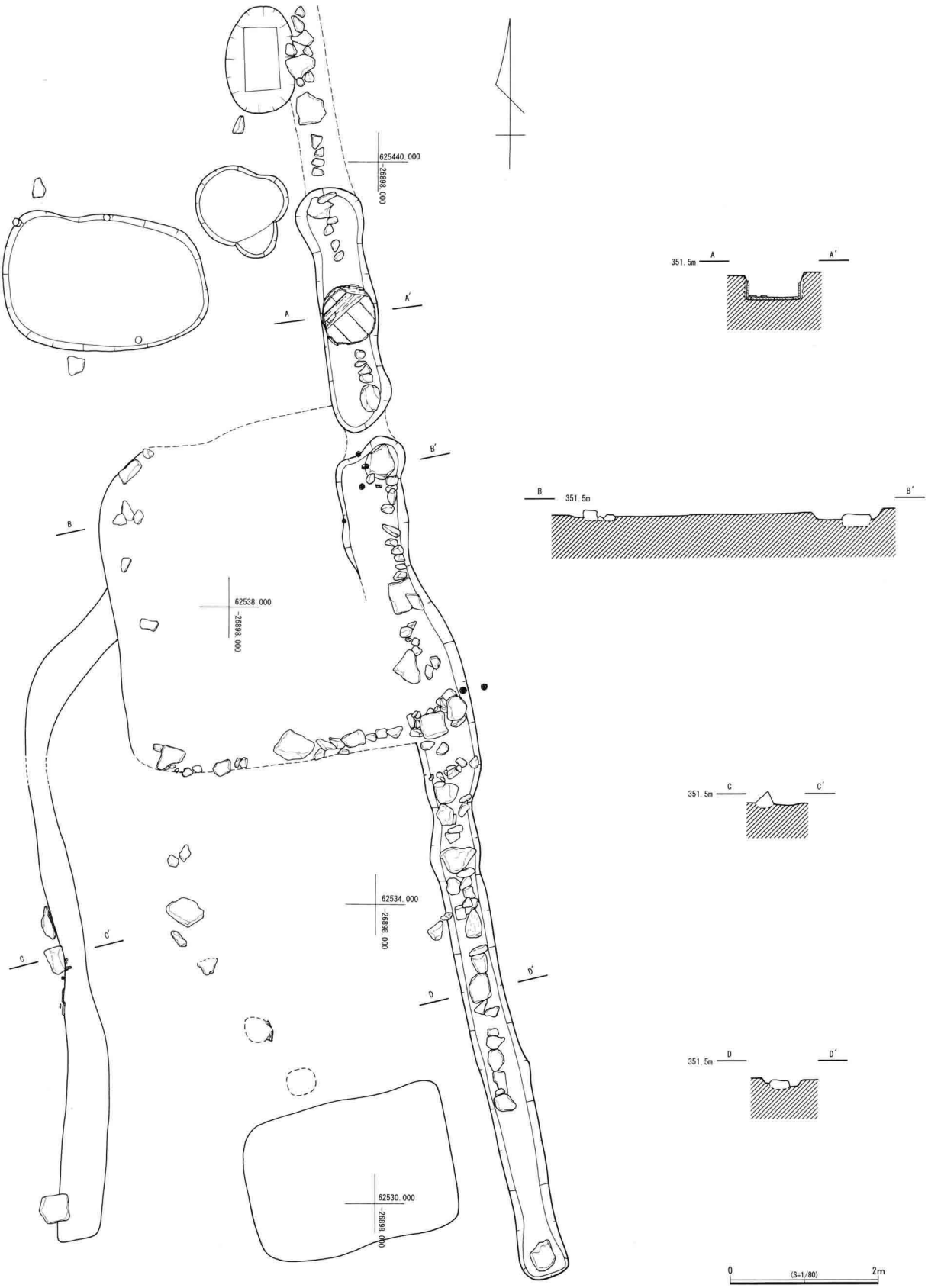


図13　礎石列（Ａ３区③－１）

石組池状遺構〔Ｂ１区③－１〕（図14・写真13）

Ｂ１区西側で検出された。後世の撹乱によって石組みが失われているため正確な規模は不明であるが、残存する胴木から復元される規模は8ｍ×4.5mであり、台形状を呈する。石組みは西側部分のみが破壊を免れており、最下段から2段目まで残存している。これ以外の部分は一部に最下段の石組みが残存しているものの、ほとんどは胴木のみが残存している状態であった。また、南東角と南壁の一部は後世の建築基礎による撹乱を受けており、胴木も含めて残存していない。その石積みは基礎にφ10cm程の丸太材を敷いて胴木とし、最下段にやや扁平な石材を用いて根石とし、その上段に小口を揃えて順次石材を積んでいくものであり、小口は平らな面となるように加工を施しているが、全体的には石材に大きな加工を施していない。控えにはφ5～10cm程の角礫を用いている。また、北西角の池内側ではφ10～15cmの丸太杭6本が遺構底面から50cm程突き出た形で検出された。当初は後世の建物の基礎杭とも思われたが、調査区内で数多く確認されたこうした基礎杭との径、材質の違いや遺構北西角を区画するように列をなす点から池状遺構に関連する杭列と判断した。

本遺構東側からは池の大掛かりな改変の痕跡が確認された。石組みの基礎と推定される胴木が2ヵ所で検出され、池状遺構はその規模を大きく変更していたことが明らかとなった。胴木の違いや周囲の石材の残存状況などから当初構築された石組池は8×4.5mの規模であったが、ある時点で規模を縮小するよう改築され、約5ｍ×4.5mの台形状となったと推定される。

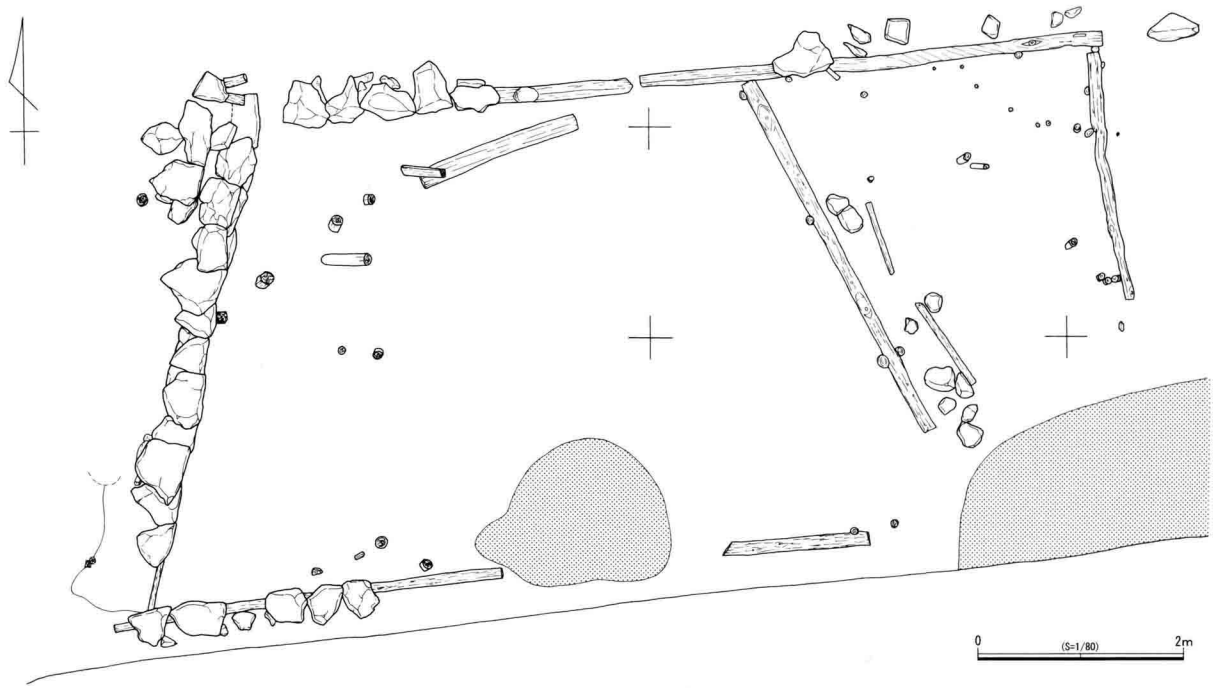


図14　石組池状遺構（Ｂ１区③－１）

この石組池が松代城下町を流れる泉水路にどのように組み込まれていたのかは接続する水路が確認されなかったことから不明である。しかしながら北西角には石組みが途切れている部分がある。この部分に関しては溝や暗渠などと接続していた可能性がある。この視点に基づけば北西角の杭列は水路に関連した堰状遺構と評価することもできよう。

本遺構からは池内覆土および裏込土中から陶磁器が出土した。出土量並びにその器種は多岐に渡り、これら出土遺物の年代も17世紀末から20世紀初めと、相当な時期幅がある。ただし、石組裏込土から明治時代に下る陶磁器が出土していることから石組池の構築年代は明治時代に下る可能性が高い。ただし、大規模な改修の痕跡も認

められることから、残存している石組みについても全面的に積みなおされている可能性があり、遺構の最初の構築時期をそのまま示すとは言い切れない。幕末期の遺物も一定量認められることから幕末から明治時代にかけて存続した遺構であると推測される。

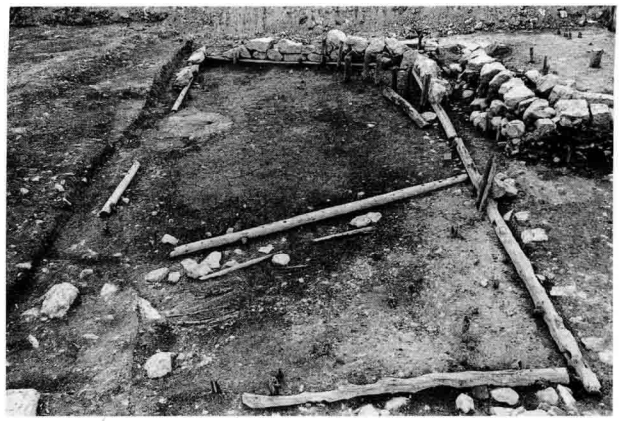


写真13　石組池状遺構（Ｂ１区③－１）

石列　〔Ｂ１区③－３〕（図15・写真14）

Ｂ１区中央部で検出された。長さ5.2m、幅0.8mの石列である。南北方向に軸を持つが残存状態が悪く、本来の長さは不明である。２つの石列が並行しており、一見すると溝状を呈しているが、上面が平坦になるように石材を配置しており、さらに上段に石積みを行った形跡も認められないことから、水路として使用された遺構ではないと考えられる。石材は一辺30cm～50cmのやや扁平な石を用いている。また西側の石列では面を揃えて並べている。

本遺構の性格としては建物に関係する遺構である可能性が高い。礎石列、雨落溝などの可能性が考えられるが、後世の撹乱が著しく、部分的に石列を検出するにとどまったため、特定は困難である。なお、本遺構からは遺物の出土を見なかった。

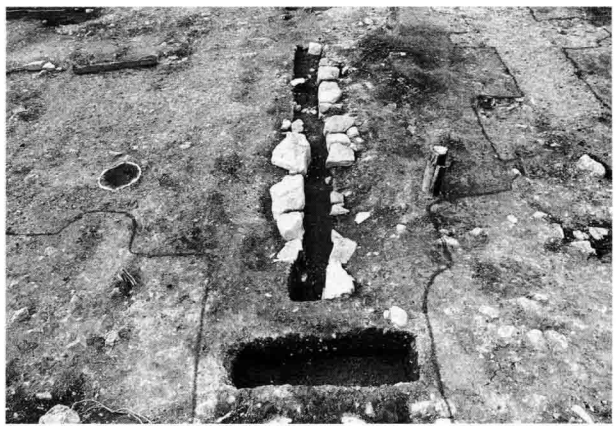


写真14　石列（Ｂ１区③－３）

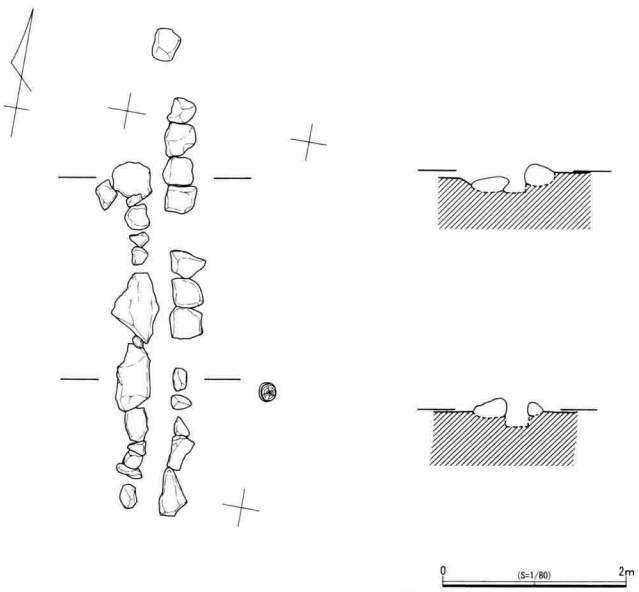


図15　石列（Ｂ１区③－３）

（２） 第Ⅱ遺構検出面（幕末～明治時代中期）（図16，17・写真15，16・表2，3）

第Ⅱ遺構検出面はＡ区及びＢ２区において確認された。標高351.3m前後に広がる遺構面である。本遺構面の所属時期は検出面及び各遺構出土陶磁器の年代などから概ね江戸時代末（幕末）から明治時代中期とみられる。

Ａ１区では上層の石炭殻廃棄にともなう撹乱がおよぶものの、多くの土坑が検出された。また壁面を杭と葦状の植物で土留めを図った方形遺構も検出された。さらにＡ１区南東側では比較的広範囲にわたる方形の落ち込みがみられた。建物に関連する遺構の可能性もある（写真17）。

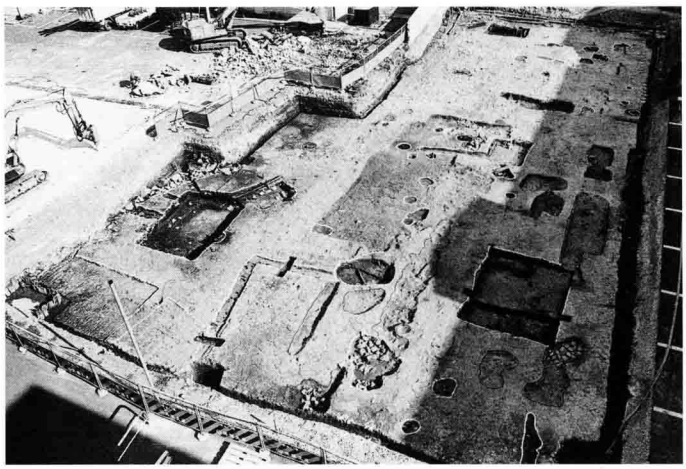


写真15　第Ⅱ遺構検出面（Ａ区）

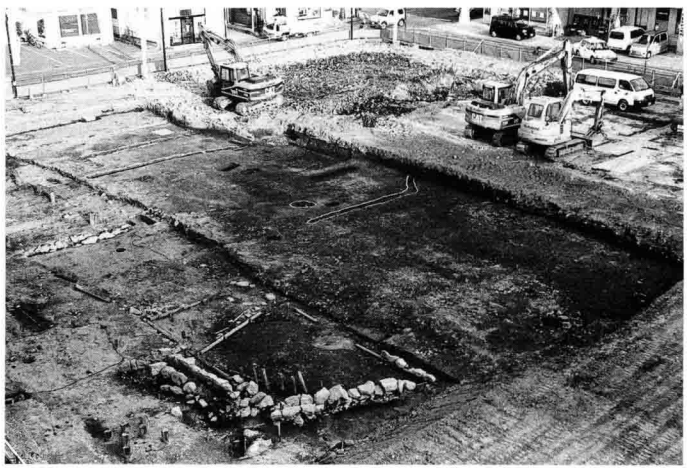


写真16　第Ⅱ遺構検出面（Ｂ２区）

Ａ２区では３条の溝状遺構（Ａ２区②－２・４・５）を検出した。しかしいずれの溝もその用途、性格は判然としない。Ｂ１区との境界上からは石組遺構が確認された。この遺構はＢ１区での調査で石組池状遺構の一部であることが判明している。

Ａ３区においては調査区の西側と東側で遺構の様相が全く異なる。西側においては土坑が数多く検出された（写真18）。これら土坑の多くは円または不整円形で深さは浅く、10～15cm程度である。また、規則性を有して直線上に配置された石列が検出された。礎石列の一部とみられ、その周囲には多くの杭が確認された。さらにこのＡ３区西側では遺構面が硬化しており、これを生活痕跡として認識した。こうした西側の状況に対し、Ａ３区東側では遺構面はφ３～５cmの角礫からなる礫面であり、確認された遺構も少ない。後世の影響も考えられるものの、Ａ３区東西で土地利用のあり方が異なっていたことを暗示させる。また、Ａ３区東側で検出された遺構の一つに方形板組遺構がある。壁面を横板と縦杭で土留めを施した遺構であり、埋土からは金銅製鋺と鉄製槍先が出土した。

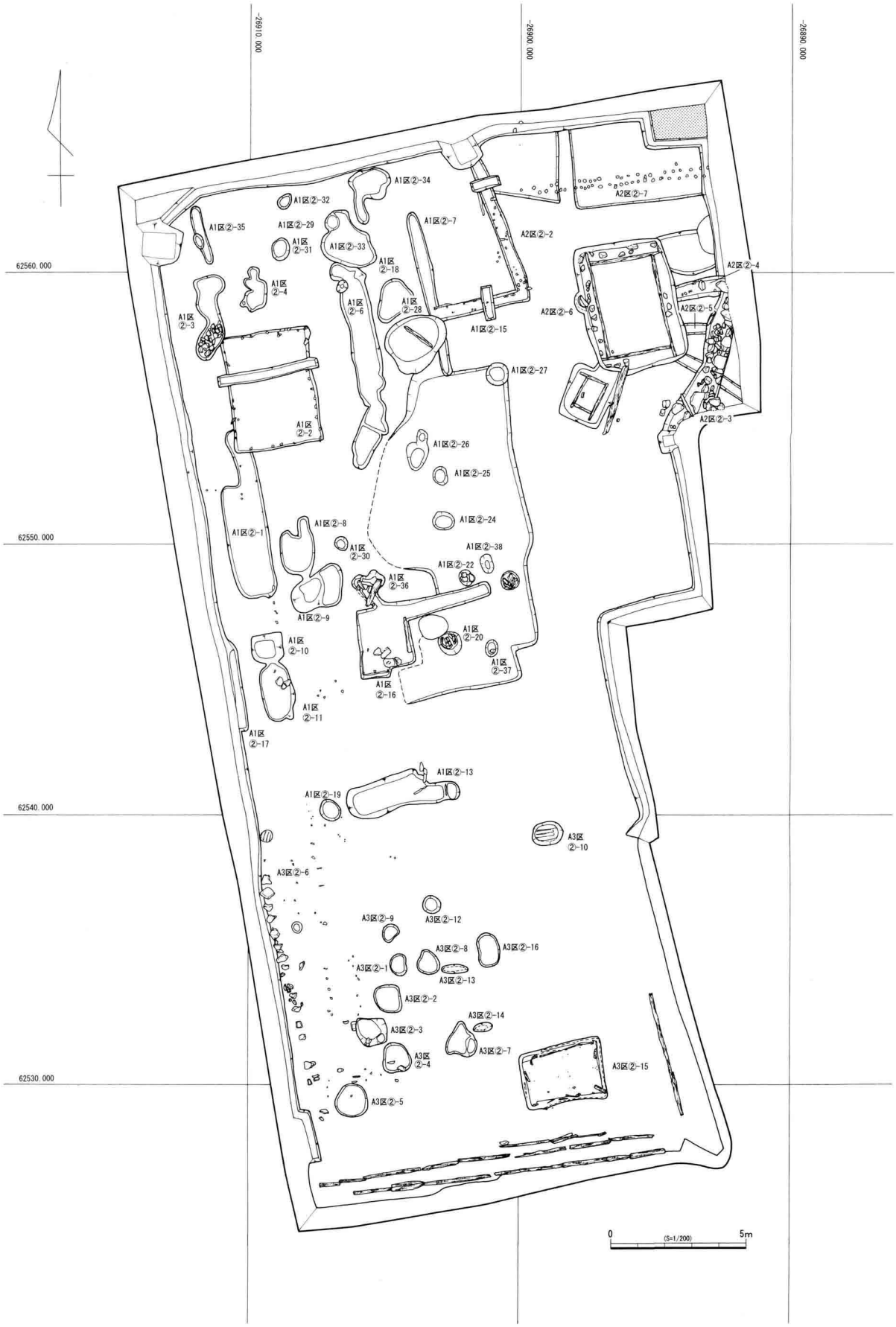


図16　第Ⅱ遺構検出面（A区）

図17　第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面（Ｂ２区）

表2　幕末～明治中期遺構検出面　遺構観察表（1）

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規　模	方向等	備　考	時　期
第Ⅱ遺構面　（幕末～明治時代中期）							
A-1	②-1	撹乱	長方形	1.5×6.3m,深さ0.04m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-2	方形土坑	長方形	4.2×3.3m,深さ0.5m	長辺・南北方向	杭列と葦状植物で編み込み壁面の土留めを図る。底面緩やかに窪む。性格不明	幕末
A-1	②-3	撹乱	不整形	3.1×1.1m,深さ0.15m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-4	撹乱	不整形		－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-5	欠番					
A-1	②-6	撹乱	溝状	1×7.7m,深さ0.06m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-7	欠番					
A-1	②-8	撹乱	不整形	1.25×2m,深さ0.2m	－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-9	撹乱	隅丸長方形	2×1.4m,深さ0.25m	－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-10	撹乱	隅丸長方形	1.15m×1.1m,深さ0.4m	－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-11	撹乱	楕円形	2.1×1.1m,深さ0.1m	－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-12	欠番					
A-1	②-13	撹乱	長方形	4.15×1.2m,深さ0.5m	東西方向	①-14と同一	明治以降
A-1	②-14	欠番				①-13と同一	
A-1	②-15	溝状遺構	U字形	幅0.5m,長さ3.5m,深さ0.03m	東西方向	溝内に杭列(2列)。A-1②-28,7に切られる	幕末～明治初期
A-1	②-16	性格不明遺構	不整形(方形指向)	2×2.5m,0.7×3.3m	－	板材・杭など多数検出	幕末～明治初期
A-1	②-17	撹乱	方形	3.3×0.5m以上,深さ0.03m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和期以降(1945～)
A-1	②-18	撹乱	不整円形	1.2×1.65m,深さ0.08m	－		
A-1	②-19	土坑	楕円形	0.6×0.7m,深さ0.15m	－	断面台形、性格不明	
A-1	②-20	土坑	楕円形	1×0.85m	－	底面に幼児頭大の石多数	
A-1	②-21	埋桶－2	円形		－		
A-1	②-22	柱穴	楕円形	0.5×0.6m(堀方),15cm角(柱材)	－	柱材一部残存。杭の可能性あり	
A-1	②-23	埋桶－3	円形	φ0.6m(桶),φ0.7m(堀方)	－	底板のみ原位置を保つ。側板は崩壊	時期不明
A-1	②-24	土坑	楕円形	0.8×0.65m,深さ0.04m	－	性格不明	
A-1	②-25	土坑	円形	φ0.8m,深さ0.03m	－	性格不明	
A-1	②-26	土坑	不整形	0.8×1.55m,深さ0.08m	－	性格不明	
A-1	②-27	土坑	円形	φ0.85m,深さ0.06m	－		江戸後期?
A-1	②-28	土坑	楕円形	2.3×1.9m	－	底面に木材、A-1①-7に切られ、A-1①-6に切られる	幕末
A-1	②-29	土坑	不整形	2.8×1.9m	－	A-1①-33と同一遺構。底面に石。A-1①-6に切られる	幕末
A-1	②-30	土坑	円形	φ0.45m,深さ0.01m	－	性格不明	
A-1	②-31	土坑	楕円形	0.7×0.8m	－		幕末
A-1	②-32	土坑	円形	0.6×0.5m,深さ0.14m	－		江戸後期?～幕末
A-1	②-33	欠番				A-1①-29と同一遺構	
A-1	②-34	撹乱	不整形	1.5×1.9m	－	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込みか	
A-1	②-35	土坑	U字形	0.4×2.2m	南北方向	性格不明	幕末～明治前期
A-1	②-36	土坑	不整円形	1.2×2m	－	土坑内木質遺物多数、性格不明。ゴミ廃棄土坑か	幕末?～昭和初期
A-1	②-37	土坑	楕円形	0.6×0.45m	－	底面より下駄出土	
A-1	②-38	土坑	隅丸方形	0.6×0.45m,深さ0.1m	－		
A-1	②-39	埋桶－5			－		時期不明
A-2	②-1	欠番				A-2区1次面8号遺構の掘り込み	
A-2	②-2	溝状遺構	U字形	幅0.5m,長さ5.5m,深さ0.03m	南北方向	A-1区15号遺構と接続	幕末～明治
A-2	②-3	石組池状遺構			－	B-1区①-1の一部	幕末～昭和初期
A-2	②-4	溝状遺構	台形	幅0.6m,長さ1.8m以上,深さ0.14m	東西方向	A-2①-2,A-2②-3に切られる	
A-2	②-5	溝状遺構	台形	幅0.4m,長さ0.6m以上,深さ0.15m	東西方向	A-2①-2,A-2②-3に切られる	
A-2	②-6	埋桶－4	円形	φ0.55m	－	1/2残存、A-2①-2に切られる	時期不明
A-2	②-7	杭列		幅0.3m,長さ7m以上	東西方向	２列の杭列。20～30cm間隔。性格不明	
A-3	②-1	土坑	楕円形	0.6×0.8m,深さ0.18m	－	中央に杭あり。底面平坦	
A-3	②-2	土坑	方形	0.09×0.9m,深さ0.2m	－	底面平坦	
A-3	②-3	土坑	方形	0.9×1m,深さ0.15m	－	断面浅い台形	幕末
A-3	②-4	土坑	楕円形	1×1.1m,深さ0.07m	－	底面平坦	明治以降
A-3	②-5	土坑	円形	φ1.2m,深さ0.2m	－	底面平坦、杭あり	明治以降

表3　幕末～明治中期遺構検出面　遺構観察表（2）

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規　模	方向等	備　考	時　期
第Ⅱ遺構面　（幕末～明治時代中期）							
A-3	②-6	石列		幅0.3m, 長さ8.1m	南北方向		幕末～明治
A-3	②-7	土坑	不整形	1.1×1.25m, 深さ0.07m	－	底面平坦	
A-3	②-8	土坑	不整円形	0.9×0.8m	－	底面平坦	
A-3	②-9	土坑	不整円形	0.6×0.65m, 深さ0.04m	－	底面平坦	
A-3	②-10	埋桶－1	隅丸長方形	0.8×0.55m(桶), 1.15×0.9m(堀方)	長辺東西方向	鉄製タガ。現代遺構	大正～昭和以降
A-3	②-11	土坑			－		
A-3	②-12	土坑	円形	φ0.65m, 深さ0.2m	－	断面台形	幕末～明治初期
A-3	②-13	撹乱	不整円形	1×0.3m, 深さ0.04m	－		
A-3	②-14	撹乱	不整円形	0.75×0.35m, 深さ0.05m	－		
A-3	②-15	木組土坑	長方形	0.8×1.9m(本体), 3.1×2.4m(堀方), 深さ0.6m	長辺東西方向	横板と杭で壁面土留め。性格不明	幕末～明治前期
A-3	②-16	土坑	楕円形	0.75×1.25m, 深さ0.06m	－		
A-3	②-17	埋桶－6		φ0.45m	－	側板1/2欠	時期不明
B-2	②-1	溝状遺構	台形	幅0.7m, 長さ6m以上, 深さ0.04m	南北方向	板組水路。東壁は残存せず	
B-2	②-2	溝状遺構	台形	幅0.65m, 長さ9.9m, 深さ0.17m	南北方向	途中で二分割し、接続しない。石炭殻廃棄土坑の掘り込みの可能性あり	昭和期以降?
B-2	②-3	土坑	不整円形	1×1m, 深さ0.3m	－	明黄褐色粘土を土坑内面に貼り付け	
B-2	②-4	溝状遺構	U字形	幅0.4m, 長さ7.9m, 深さ0.1m	南北方向	調査区南側で南東方向へ屈曲	昭和期以降?
B-2	②-5	欠番					
B-2	②-6	撹乱	隅丸長方形	1.5×1.3m, 深さ0.2m	－	現代の金属・ガラス製品がおびただしく出土。現代ゴミ廃棄土坑	昭和期以降(1945～)
B-2	②-7	撹乱	楕円形	8.5×1.2m, 深さ0.13m	－	現代の金属・ガラス製品がおびただしく出土。現代ゴミ廃棄土坑。	昭和期以降(1945～)
B-2	②-8	撹乱	溝状	幅0.65m, 長さ3.05m, 深さ0.2m	南北方向	石炭殻廃棄土坑にともなう掘り込み	昭和期以降(1945～)
B-2	②-9	撹乱	楕円形	0.5×0.75m, 深さ0.2m	－		時期不明
B-2	②-10	埋桶	円形	φ0.6m(桶), 0.9×0.85m(堀方)	－	側板残存	時期不明
B-2	②-11	撹乱	楕円形	0.45×0.6m, 深さ0.04m	－	底面平坦	時期不明
B-2	②-12	撹乱	円形	0.8×0.7m, 深さ0.2m	－		時期不明
B-2	②-13	撹乱	隅丸長方形	1×0.8m	－		時期不明

写真17　性格不明落ち込み　（A１区②－16）

写真18　土坑群　（A３区）

写真19　埋桶　（B２区②－10）

方形遺構 〔Ａ１区②－２〕（図18・写真20，21）

Ａ１区西側において検出された。規模1.7m×2.2m、遺構面からの深さ最大25cmを測る。壁面は垂直であるが、底面は中心に向かってゆるやかに傾斜する。一部南西角が撹乱を被っているものの残存状態は良好であった。壁面は約20cmの間隔でφ５cm程の丸杭を打ち込み、ここに葦状の植物を横方向に互い違いにあたかも杭に編みこむかのようにして垣根状にすることで土留めとしての役割を果たしている。この構造は規模とその構造材こそ違うものの、東京都汐留遺跡において確認されている土留め竹柵遺構[2]と共通するものであり、近世には土留め工法の一つとして広く用いられていたことがうかがえる。出土遺物は陶磁器がそのほとんどを占め、その推定年代は幕末期にあたる。本遺構の性格については不明である。調査当初は池状遺構として把握していたが、その後覆土土層断面の検討から池状遺構の可能性は低いと判断した。周囲から本遺構に接続する溝など、関連する遺構が検出されなかったこともこの所見に矛盾しない。想定される性格としては塵芥溜めなどが考えられる。

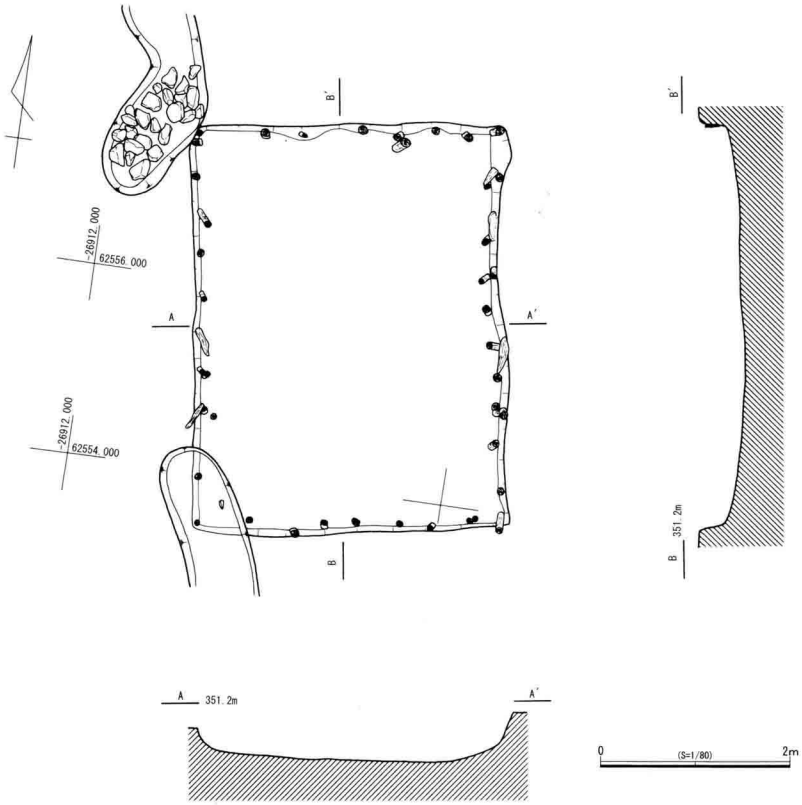


図18　方形土坑（Ａ１区②－２）

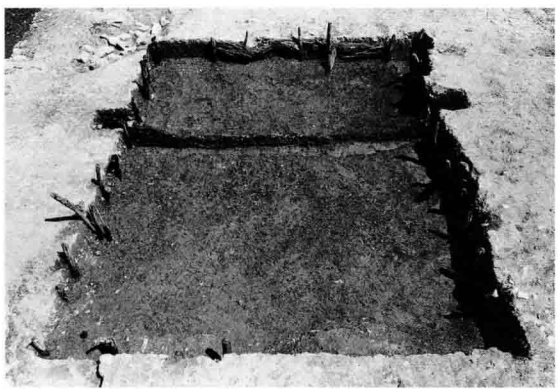


写真20　方形土坑（Ａ１区②－２）

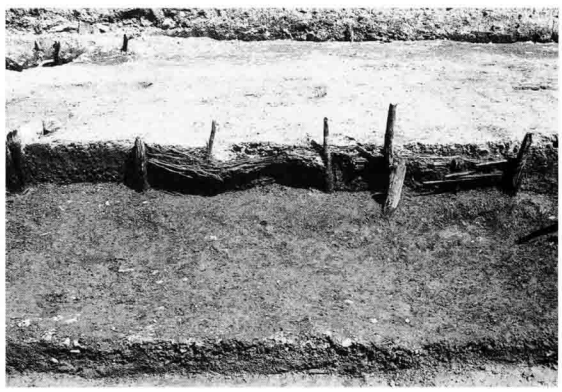


写真21　土留め板柵（Ａ１区②－２）

礎石列 〔Ａ３区②－６〕（図19・写真22）

Ａ３区西壁に沿うように直線に並ぶ形で検出された。幅30cm、長さ９ｍを測り、その北端は調査区外へと続いているとみられる。石材は15～20cm角であり、その上面が平坦面をなすように中心間約30cmの間隔で配置されている。このような規則性を有することから礎石列と判断した。調査区内には他に本遺構に関連する石列が確認できず、調査区外へ石列が続いていると想定されることから調査区外西側に礎石建物が存在するとみられ、本遺構はこの一部にあたると考えられる。なお、この礎石列と軸を同じくする杭列が２列認められる。この他にもＡ３区西側では多くの杭が検出されており、この建物跡と何らかの関連性を有するものと考えられる。また、Ａ３区西側は遺構面が硬く締まった硬化面を呈している。この硬化面の性格については生活によって踏み固められた生活痕跡の可能性が高く、礎石建物とその周辺の生活面という景観が復元できる。なお、本遺構からは遺物が出土しなかった。

写真22　礎石列（Ａ３区②－６）

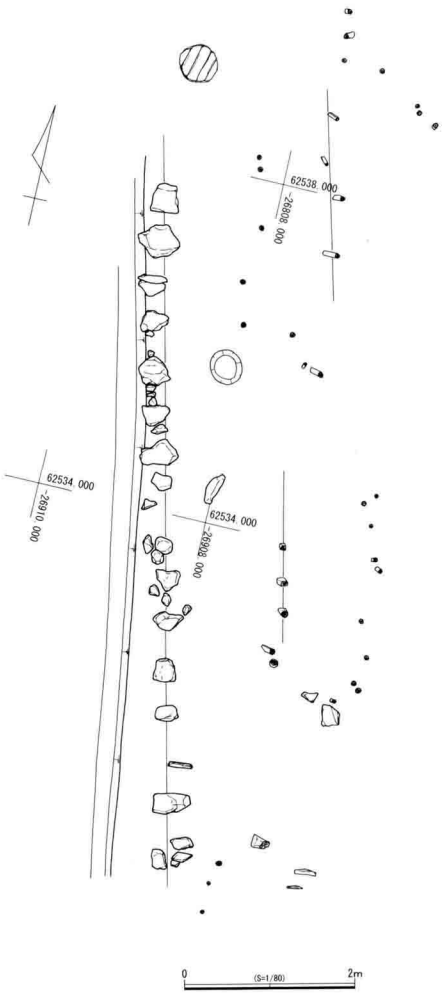


図19　礎石列（Ａ３区②－６）

木組土坑〔Ａ３区②－15〕（図20・写真23，24）

Ａ３区南東側において検出された。約３ｍ×2.3mの長方形を呈し、短辺を南北方向にとる。深さは最も深い中央部で遺構面からの深さ35cmを測り、中央に向かってゆるやかな擂鉢状の底面形状を有する。その壁面は横板と竪杭によって構築されており、Ａ１区②－１遺構同様に土留めを目的としていたことが看取できる。また、使用された木材は転用材がほとんどで、やや雑然とした印象を受ける。

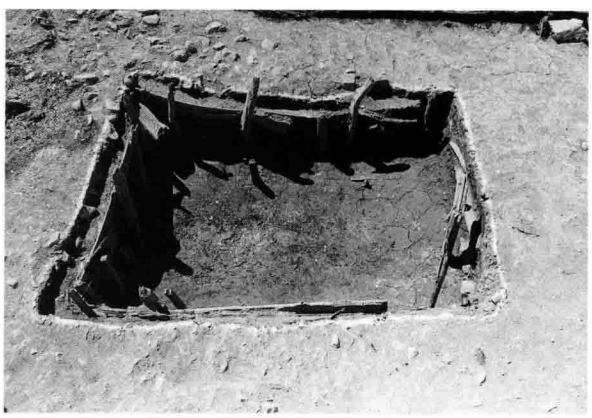


写真23　木組土坑（Ａ３区②－15）

本遺構の埋土からは比較的多数の遺物が出土した。その多くは陶磁器であり、18世紀末から19世紀初頭の年代を示す資料が大半を占める。煎茶碗が完形品を含め、多数出土している点が本遺構出土陶磁器の特徴である。また、特筆すべき遺物として金銅製鋺と鉄製槍先がある。どちらも床面直上より出土しており完形であった。埋土中の出土遺物より推定される本遺構の廃絶年代は明治時代前期である。構築年代については不確定な要素が多いものの、江戸時代後期（18世紀末）を上ることはないと推測される。また本遺構の性格についても不明な点が数多い。調査当初、池状遺構、地下室状遺構、塵芥溜（ゴミ穴）等の可能性が考えられたが、埋土の堆積状況からは本遺構が短期間の内に埋没していたことが窺え、池状遺構であった場合に存在するであろう自然堆積土が認められない。さらに擂鉢状の底面形状は地下室状遺構としてはやや不向きであろうと考えられることから、池状遺構および地下室状遺構の可能性は低いと考えられる。ここでは塵芥溜の可能性を挙げておきたい。

写真24　木組土坑（Ａ３区②－15）　壁面

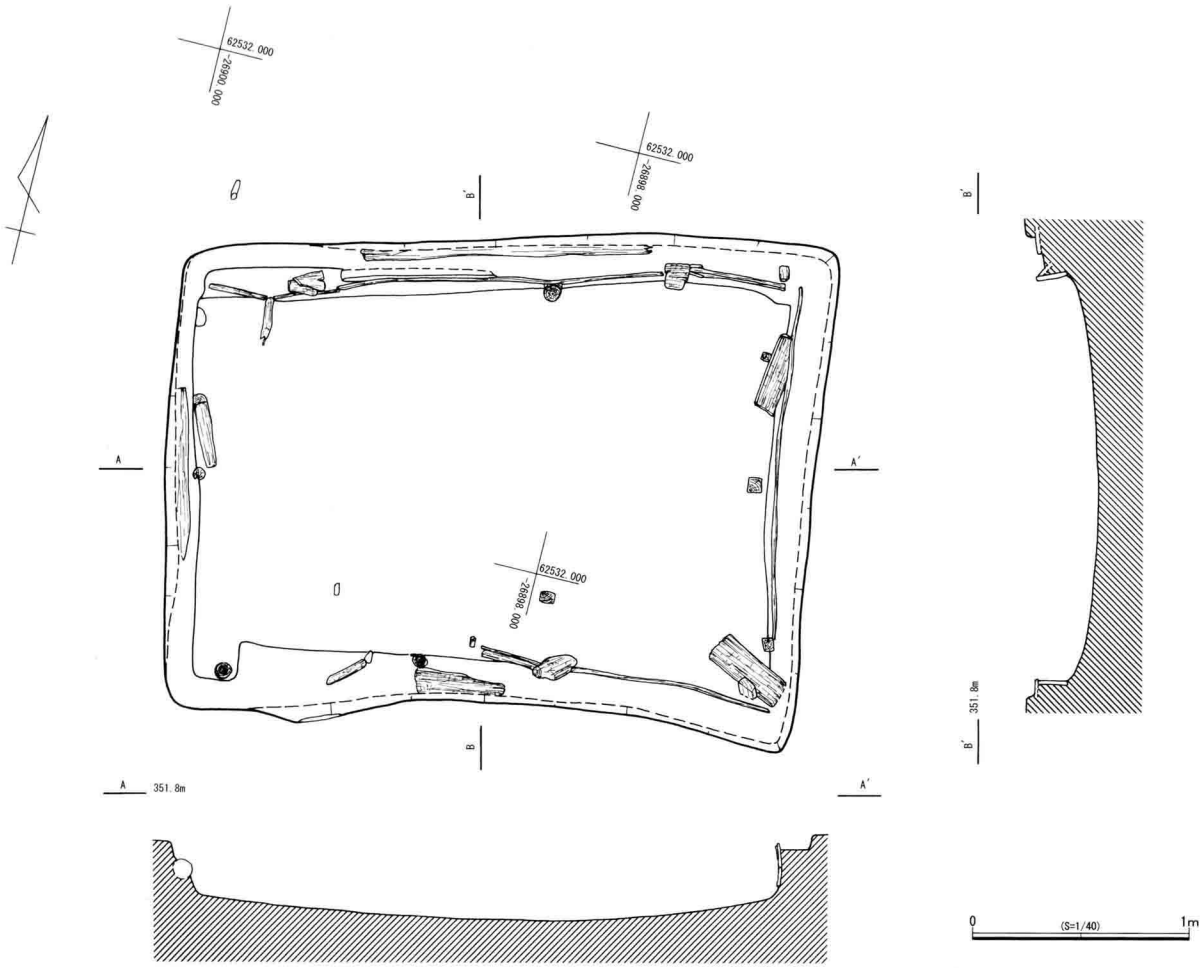


図20　木組土坑（Ａ３区②－15）

溝状遺構 〔Ｂ２区②－１〕（図21・写真25）

Ｂ２区東側において検出された。幅0.7m、長さ６ｍ以上で南北方向に延びる。遺構面からの深さ４㎝を測る溝状遺構である。上部は削平されており、溝の底面と立ち上がりの部分しか捉えることができなかったが、西壁では横板と竪杭を用いて壁面を構築していることが確認された。東壁では検出されなかったものの、東壁も同様の構造であったと推測され、側壁に板組を用いる板組溝であった可能性が高い。この板組溝は北側については調査区外、南側はＢ１区の範囲内に延びていると想定されるものの、Ｂ１区では撹乱のため確認できなかった。そのため本遺構の性格については不明な点が多い。一つの可能性として考えられるのは、本遺構の東方向に走る街路との関連性である。この街路は絵図などから江戸後期においても現在と同じく南北方向に延びていたことが確認されている[3]。本遺構はこの街路と並行する形で延びていることから街路を意識して構築された可能性がある。ただし本遺構は街路から約９ｍ程西側に位置することから、ここでは街路に面した建物などに付随する雨落溝や排水溝であったと推測しておく。

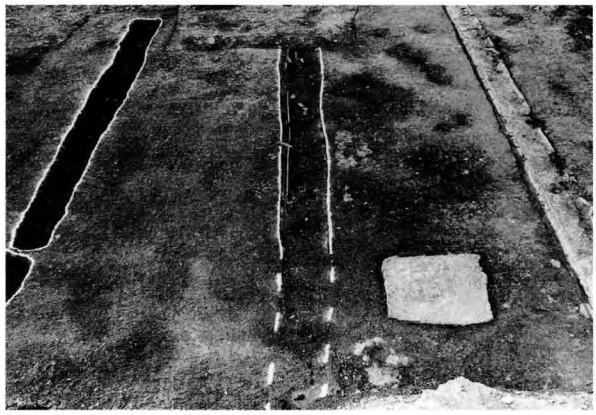


写真25　溝状遺構（Ｂ２区②－１）

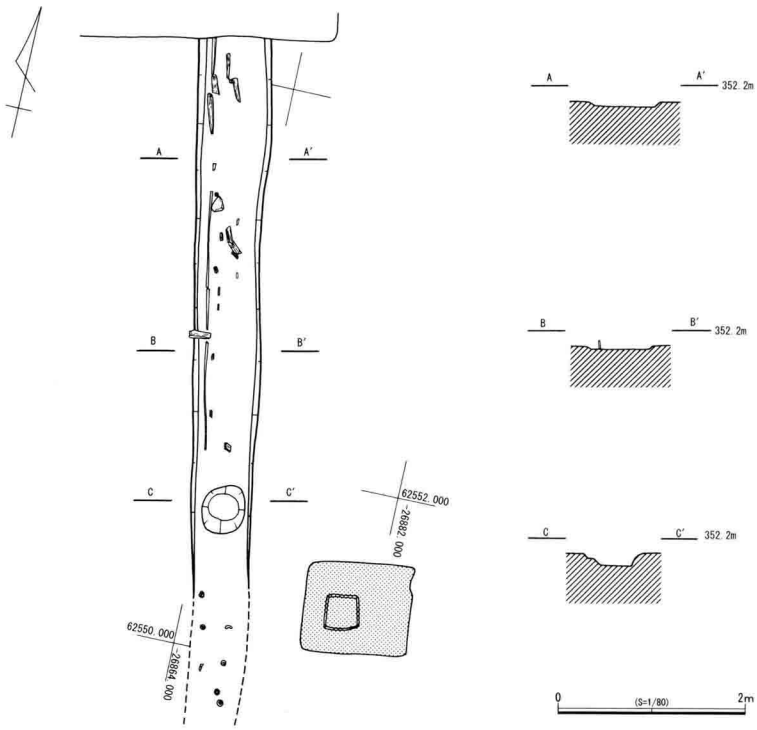


図21　溝状遺構（Ｂ２区②－１）

（3） 第Ⅰ遺構検出面（明治中期～昭和前期）（図22・写真26・27・28・表4）

第Ⅰ遺構検出面はＡ区において確認された。標高351.7m前後に広がる遺構面である。本遺構面の所属時期は各遺構出土遺物より、19世紀中頃～20世紀中頃（明治中期～昭和前期）と考えられる。

Ａ３区では調査区の壁面に沿って延びる形で東方向・北方向にそれぞれ石組溝状遺構が検出され、Ａ２区ではこれに接続するとみられる大小の石組池状遺構が検出された。後述するが、泉水路とこれに接続する池であると考えられる。Ａ１区では現代の撹乱が著しく遺構がほとんど残存していなかったものの、方形石組遺構が検出された。なお、Ａ１区において確認された撹乱は石炭が燃焼した後に残る石炭殻を廃棄した掘り込みによるものである。南北方向に長い布掘りを何本も掘削し、石炭殻を廃棄している状況が確認された(写真27)。このＡ１区とＡ２区の境界上からは、両区を分かつ形で溝状遺構が検出された。その性格は敷地の境界施設に関係するものとみられ、おそらく近現代の塀の基礎と考えられる。また、Ａ２区においては北側で礫敷面が検出された。当初は性格が不明であったが下層確認の結果、礫面下に多量の丸太が敷きつめられていたことから、本遺構は重量建物の基礎地業に関わる筏状基礎の一種と判明した（写真28)。この他Ａ３区では覆土中に比較的大形の木材を多く含む溝状遺構が検出された。ただし周辺に関係する遺構が見られず、性格は不明である。また、第Ⅰ遺構検出面からは5基の埋桶が検出された（写真29)。直径は30cm程のものと50cm程の２つの法量が存在するようである。側板が完存するものはみられず、桶内埋土からの出土遺物も数少ない。

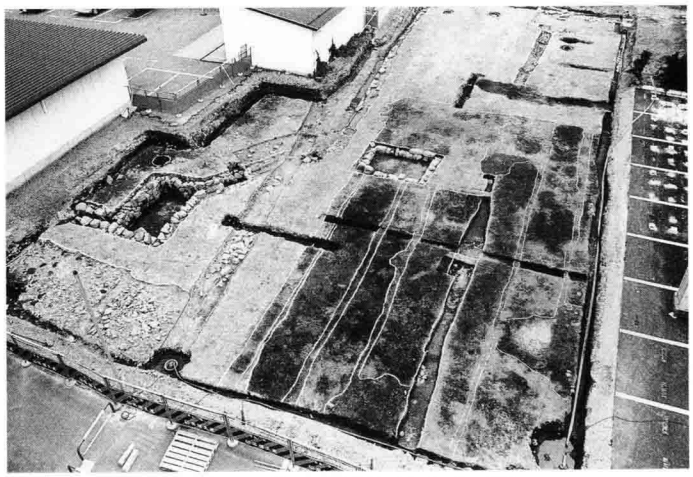


写真26　第Ⅰ遺構検出面（Ａ区）

写真27　Ａ１区撹乱状況

写真28　建築基礎（Ａ２区①－８）

図22　第Ⅰ遺構検出面（A区）

表4　明治中期～昭和前期遺構面　遺構観察表

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規模	方向等	備考	時期
第Ⅰ遺構面　(明治時代中期～昭和時代前期)							
A-1	①-1	方形石組遺構	長方形	1.8×2.5m	長辺・東西方向	石積み2段目まで残存。地下室状遺構か	明治中期～昭和初期
A-1	①-2	欠番					
A-1	①-3	撹乱	長方形・U字形	1.2×3m,深さ0.3m	東西方向	現代ゴミ廃棄土坑	昭和期以降(1945～)
A-1	①-4	埋桶－1		φ0.6m(桶),φ0.8m(堀方)	－		時期不明
A-2	①-1	溝状遺構	台形		南北方向	現代建築基礎・埋土角礫(φ10～15cm)	昭和期以降(1945～)
A-2	①-2	石組池(大)	長方形	2.3×3.3m,深さ0.85m	長辺・東西方向	小型の池状遺構と接続、南→北東水路によりB1区①-2と接続。	明治～昭和初期
A-2	①-3	石組溝状遺構	底面平坦	幅0.3m	南西→北東方向	石組は削平され、胴木のみ残存。A2①-9に切られる。	幕末～昭和初期
A-2	①-4	撹乱	長方形(推定)	(1.3)×2.3m,深さ0.3m	長辺・東西方向	矢板状の木枠、床面コンクリート。現代の用排水関連施設	昭和期以降
A-2	①-5	石組池(小)	長方形	0.8×1.2m,深さ0.45m	長辺・北東～南西	A2①-1,3,6と接続、南からの水を貯留し、①-5へ。皆神山系石材で構築される	明治～昭和初期
A-2	①-6	石組溝	底面平坦	幅0.5m,長さ0.8m	南西→北東方向	A2①-5と接続、西側壁には板材使用	明治～昭和初期
A-2	①-7	石組溝	底面平坦	幅0.4m,長さ13.6m,深さ0.3m	南→北方向	A2①-3,A3③-1と接続、A2①-1を切る	幕末～昭和初期
A-2	①-8	建築基礎		3.5×8.3m	丸太・南北方向,東西方向	丸太を並べ、礫で埋める。2区画に分かれる。重量建築基礎(筏状基礎？)か。A2①-1に切られる	昭和期以降
A-2	①-9	欠番					
A-2	①-10	埋桶－3		φ0.5m(桶),φ0.8m(堀方)	－		時期不明
A-3	①-1	石組溝	底面平坦	幅0.3m,長さ9.1m,深さ0.3m	南→北方向	南西端に導水路。A2①-7,A3①-3と接続	明治末～昭和初期
A-3	①-2	溝状遺構	台形	幅0.4m,長さ3.9m,深さ0.2m	南北方向	埋土に板材など多数含む。性格不明	時期不明
A-3	①-3	石組溝	底面平坦	幅0.5m,長さ13.4m,深さ0.2m	東→西方向	最下段のみ残存、A3①-1と接続、建築材を転用した胴木を使用	大正～昭和初期
A-3	①-4	撹乱	溝状・台形	幅0.5m,長さ3.2m以上,深さ0.2m	東西方向		時期不明(昭和?)
A-3	①-5	撹乱	柄鏡形	2m×1.2m,深さ0.45m	－		時期不明(昭和?)
A-3	①-6	埋桶－1		φ0.28m(桶),φ0.6m(堀方)	－		時期不明
A-3	①-7	埋桶－2		φ0.6m(桶),φ0.85m(堀方)	－		時期不明
A-3	①-8	埋桶－5		φ0.35m(桶),φ0.5m(堀方)	－		時期不明

方形石組遺構　〔Ａ１区①－１〕（図23・写真30）

方形石組遺構（Ａ１区①－１）は大きさ3.7m×2.8m、遺構面からの深さ40cmの方形石組で構成される。石積みは部分的ではあるが2段目まで残存しており、最下段下には胴木が検出された。ただし、この胴木は未加工の丸太を板材などに加工する際に生じる最外縁部の材を用いており、胴木というよりもむしろ板材とでも言えるもので、他の遺構で確認された胴木と比して強度も極端に弱く、石組の基礎地業としては脆弱である。このことから本遺構の石組みは3段程度の小規模なものであったと推測される。本遺構はＡ１区全域に広がる石炭殻の大規模な廃棄土坑による撹乱を切って構築されていることから、その構築時期はかな

写真29　埋桶（Ａ２区）

なり新しいと推測される。石炭殻の廃棄土坑は昭和30年代頃の製糸工場の操業にともなうものと考えられることから本遺構はこれ以後の所産の可能性が高い。出土した陶磁器についても、昭和中期を中心に現代の遺物が主体を占めることから、遺構からの所見と矛盾しない。その性格については不明な点が多く判然としないものの、構造が簡単であり、泉水路との関連性も認められないことから池状遺構以外の遺構であると推測される。

写真30　方形石組遺構（Ａ１区①－１）

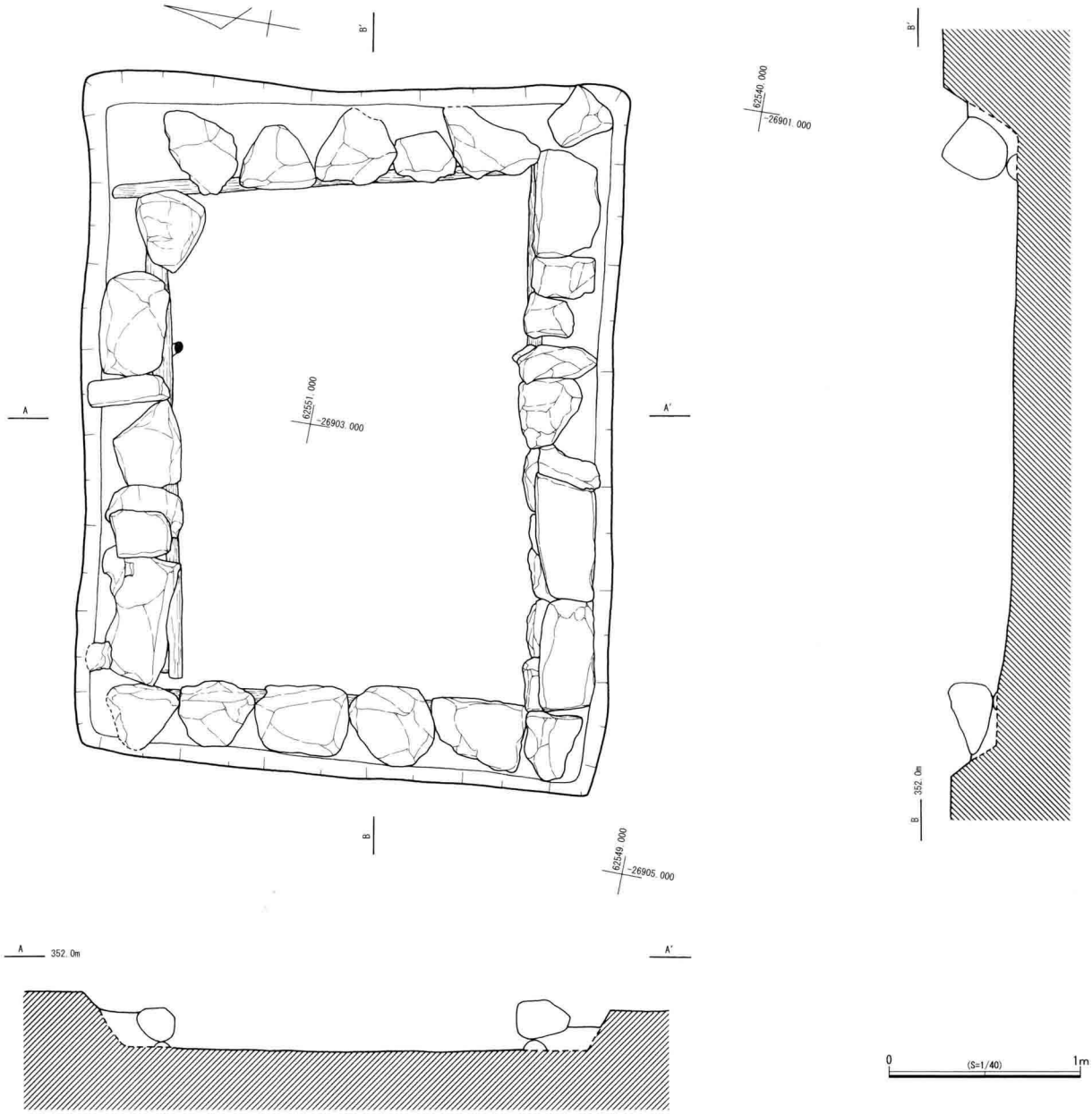


図23　方形石組遺構（Ａ１区①－１）

石組溝 〔Ａ２・３区〕（図24・写真31，32）

Ａ２・３区を横断し、Ｂ１区に至る形で検出された。Ａ３区南西端より東西方向に延びる溝（Ａ３区①－２）、南北方向に延びる溝（Ａ３区①－１、Ａ２区①－７）の２系統が検出され、後者は大小の石組池と接続する。本遺構はいわゆる泉水路と呼ばれる性格のものであると考えられ、松代城下町を特徴付ける遺構の一つである。遺構断面および地形の検討からＡ３区南西端から調査区内に導水し、東方向と北方向へと流れる２系統の流路をとっていたと推定される。Ａ３区南西端からは導水路と考えられる石組溝が検出された。幅約20cm、高さ約30cmを測り、石組みは２段まで残存している。最下段には胴木が確認できた。また、溝内への石積みのせり出しを抑えるためか、φ５cmの杭が打たれている。この導水路は１ｍほど続き、Ｙ字形に２系統に分かれる。東方向に延びる溝（Ａ３区①－３）は一部分を除くとほとんど石積みが残存しておらず、胴木のみが検出された。その規模は胴木間の幅20cm、導水路との分岐点からの長さ13.5mを測る。調査区外へと方向を変えることなく延びていることから実際の長さは不明である。

写真31　石組溝

写真32　石組溝導水部（Ａ３区）

このＡ３区①－３遺構の特徴として挙げられることは胴木が建築部材の転用品であることであり、角材を多く用いる点が主として丸太を用いる他の石組溝と異なる。南方向に延びる溝（Ａ３区①－１・Ａ２区①－７）は幅15～20cm、導水路との分岐点から石組池との接続点までの長さ約28mを測る。遺構面からの深さは15～30cmである。その特徴としては調査区の境界に沿うように構築されている点が挙げられる。Ａ３区とＣ区との境界線に沿うように北方向へ延びた後、方向を変じてＡ２区の石組池へと接続しており、敷地境に沿って流れる泉水路の様子が想起される。なお、石組池との接続部手前で現代の建築基礎に切られている。また接続部一帯は遺構の残存状態が悪く、一部で溝の範囲を確認することができなかった。そのため推定ラインを示している。

石組溝からは多くの遺物が出土した。そのほとんどが陶磁器であり、これら出土遺物の年代から本遺構の時期をある程度知ることができる。石組溝裏込土からの出土遺物は概ね明治末期の年代の陶磁器であり、これに対し、溝内出土の陶磁器には昭和中期まで年代の下るものが含まれる。このことから、本遺構は明治末期に構築され、昭和中期に廃絶されたものと考えられる。

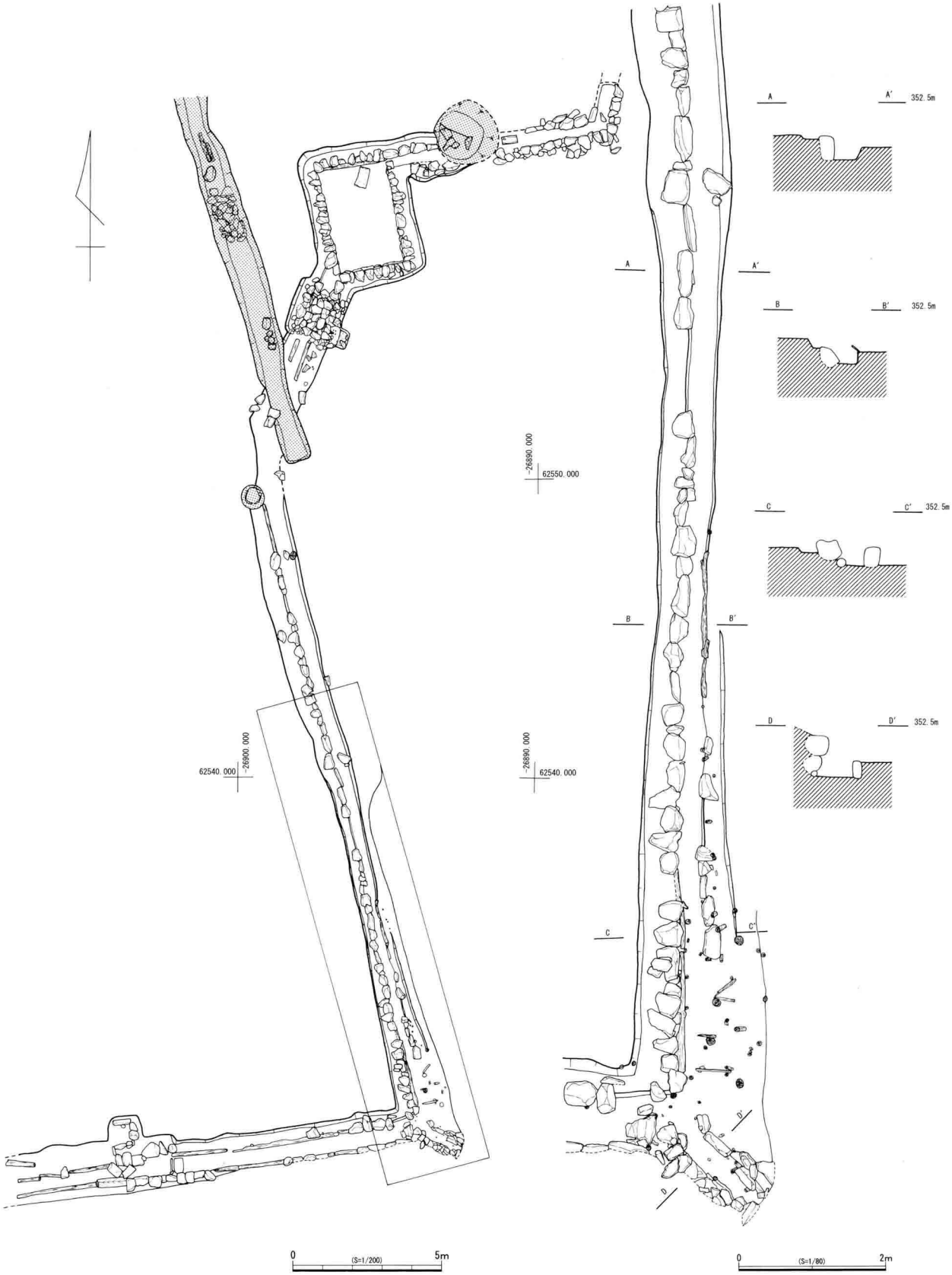


図24　第Ⅰ遺構検出面　泉水路全体図および石組溝拡大図

石組池(大)〔A2区①－2〕(図25・写真33, 34, 35, 36)

石組池(大)(A2区①－2)は石組み内側の大きさ3.5m×2.5m、構築土坑の大きさ5m×3.5m遺構面からの深さ1.1mを測る。最大4段の石積みで構築され、最下段には胴木が確認できる。石組池(小)(A2①－5)とは南東端において板組溝(A2区①－6)を介して接続している。また、北西角には石組溝が片側の壁を石組池の北壁と連続するように接続しており、撹乱の影響を受けた部分もあるものの、第Ⅲ遺構面に属するB1区1次面において検出された、上層遺構である石組溝(B1区①－2)と接続している。後述するが、B1区①－2の石積みは2段まで残存しており、3.5m程西方向に延びた後、北方向へとその向きを変えている。この遺構がこの後どのような流路をとるかは撹乱により不明である。

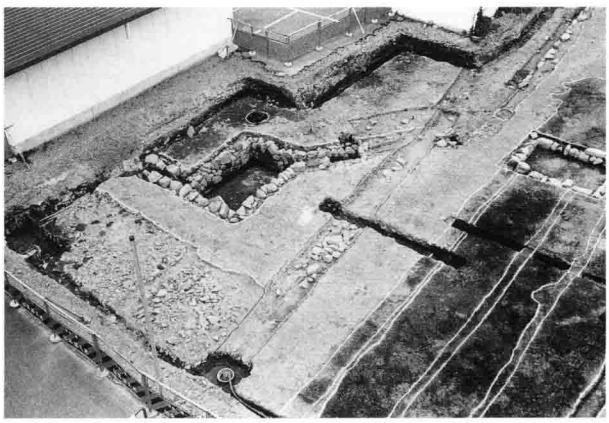


写真33　A2区　石組池

写真34　石組池(大)(A2区①－2)

本遺構の石積みは胴木上にやや大型の石材を積んだ後にやや小型の石材を各段毎順次積んでおり、その小口は整えられている。控えには拳大程の石材および煉瓦を裏込め石として用いている。

本遺構の所属時期に関しては、構築時期に直接関わる要素として石積みの裏込め石に煉瓦が少なからず用いられていたことが挙げられる。国内での煉瓦の本格的な生産開始と使用は明治以降のことであり、石積みの最下段においても裏込めに煉瓦が用いられていたことからも、本遺構の構築時期は明治以降であることは明らかである。

出土遺物は陶磁器がほとんどである。その年代は江戸後期から昭和初期までと幅広く、遺構の時期を知るにはやや難があるものの、上記の通り遺構構築時期は明治以降であることは確定的であり、また遺構の掘り込みが江戸後期の遺構面にまでおよんでおり、遺物の撹乱・混入の可能性は無視できないことからも、本遺構は明治以後に構築され、遅くとも昭和初期までには廃絶されたと考えるのが妥当であろう。

写真35　石組池(大)　石積み状況

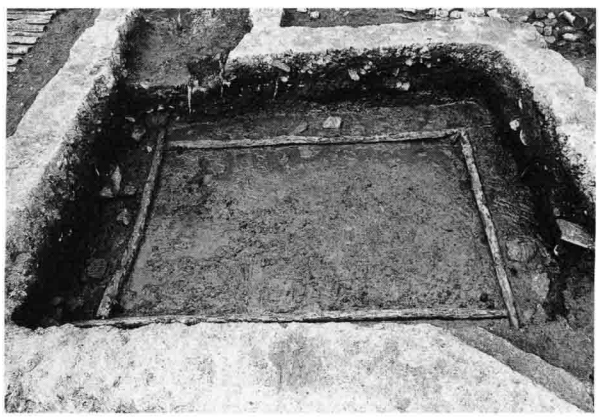


写真36　石組池(大)　胴木検出状況

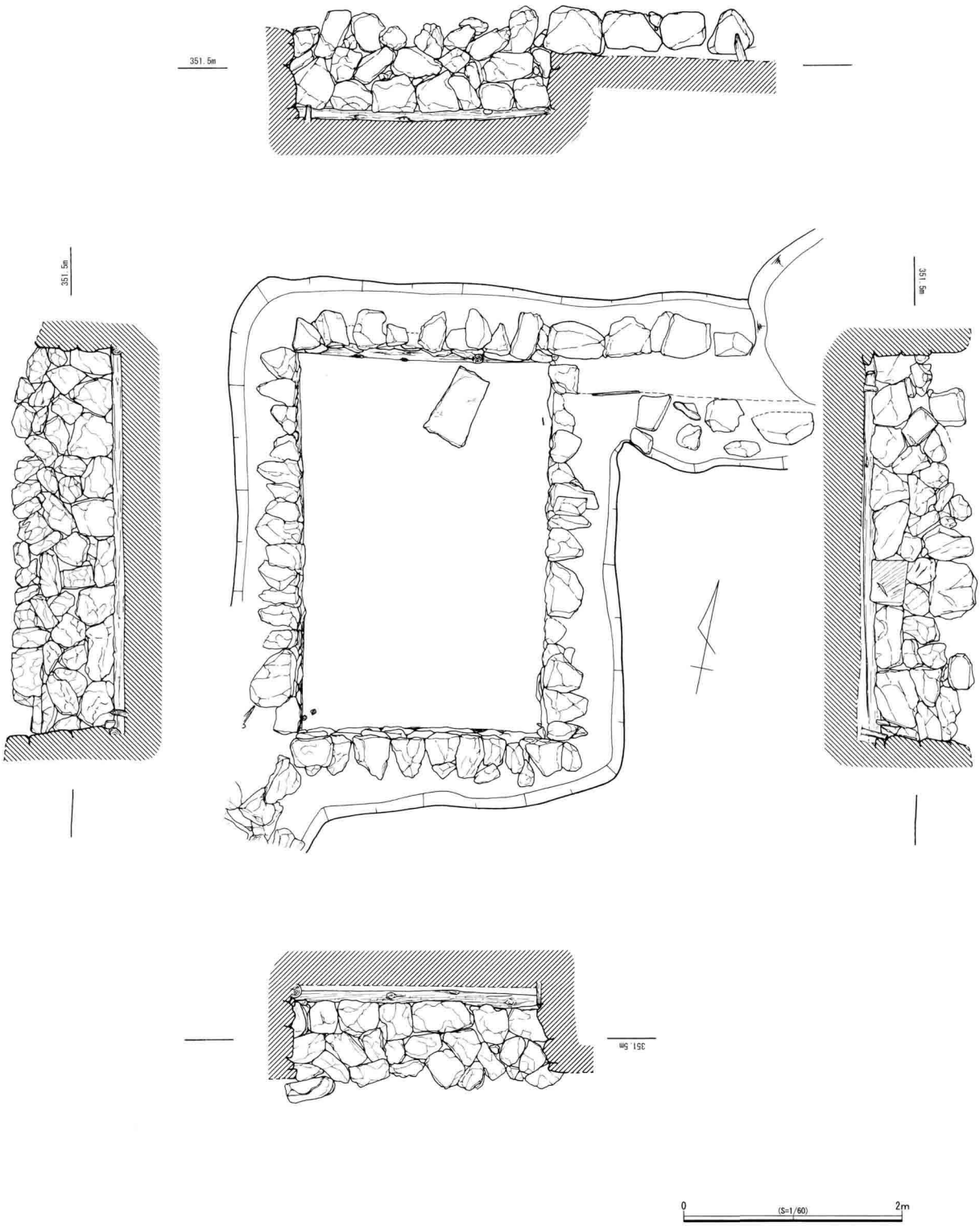


図25　石組池(大)　(A２区①－２)

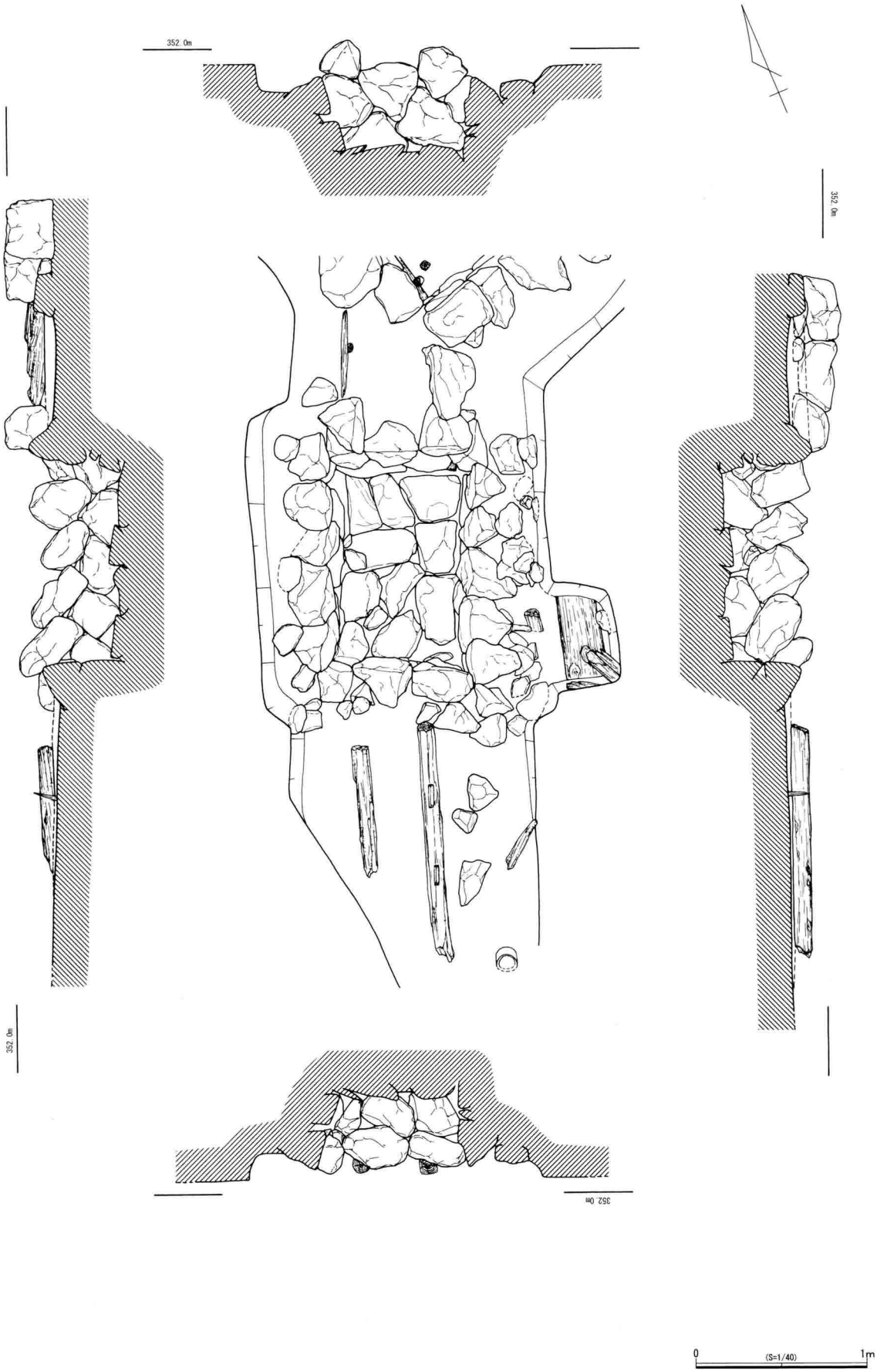


図26　石組池(小)　(A２区①－５)

石組池（小）〔Ａ２区①－５〕（図26・写真37，38）

石組池（小）は大きさ1.2×1.8m、深さ70cmを測る。底面も石組みで構築され、側面は2段の石積みが残存している。構築石材はその全てが赤色を呈する皆神山産安山岩とみられる点が特徴的である。石積みは石組池（大）とその技法を異にし、胴木を方形に配置した内側に底面となる板状の石材を敷き、両長辺から石積みを開始する。その積み方長方形に整えた石材を斜めにして、隣接する石材にもたれかけるようにして、各段毎積んでいくというものである。長辺が完成後、短辺の石積みを行うという一連の工程が復元される。

写真37　石組池(小)　（Ａ２区①－５）

写真38　石組池(小)　胴木検出状況

本遺構の時期については、遺構からはその構築・廃絶時期を示す有力な手がかりは得ることができなかった。しかし、陶磁器を中心とする出土遺物から推測することは可能である。これによると、本遺構の出土陶磁器は江戸後期・幕末から昭和初期までと広い時期幅のものが出土しているが、主体となるのは明治以降のものである。江戸時代の遺物に関しては石組池（大）同様に石組池構築にともなう撹乱・混入の可能性がある。だが、本遺構に関しては石組池（大）で見られたような、裏込めに煉瓦を用いるなど明らかに明治以降とされる要素が見られないことから江戸後期から幕末に構築時期が溯る可能性は排除しきれない。しかしながら、本遺構は石組池（大）の付帯施設としての性格が想定されることから、石組池（大）と同時期あるいはそれ程間をおかずして構築されたと考えるのが自然であろう。このことから本遺構は明治以降に構築され、昭和初期まで存続した可能性が高いと考えられる。

石組溝〔Ｂ１区③－２〕（図27・写真39）

Ｂ１区１次面において部分的に検出された。本来Ｂ１区１次面はＡ区３次面と対応する遺構確認面であり、第Ⅲ遺構検出面にあたる。当初、Ｂ１区では第Ⅰ・Ⅱ遺構検出面は後世の撹乱を受け、破壊されていることが判明したため、Ａ区３次面と対応する面を１次遺構確認面として調査を開始した。しかしながら上層の遺構である本遺構だけが部分的に撹乱を免れていたため、調査を実施したものである。このためＢ１区１次面上に土手状に遺構を検出する形での調査という異例の形となった。石組溝は長さ2.6m、幅20cm、深さ20cmを測

写真39　石組溝（Ｂ１区③－２）

る。この石組溝は先述したとおり、第Ⅰ遺構検出面で確認された泉水路の一部と考えられ、石組池（大）から続く石組溝と接続することが図面上からも確認できた。石積みは部分的に2段目まで残存しており、A区石組溝とは異なり胴木は確認されなかった。

水は石組池から流れてくるものと想定され、B1区内を通ってさらに調査区外へと流れていたものと考えられるが、B区では本遺構以外は撹乱のため残存していない。本遺構の年代については溝内および石組裏込土からの出土陶磁器の年代が参考になろう。溝内出土陶磁器は江戸時代に比定されるものが主であるが、明治時代に下るものも見られることからその下限年代は明治時代であると言える。また、石組裏込土からも明治時代に比定される陶磁器が出土している。このことから本遺構は明治時代に構築され、比較的短期間で廃絶された可能性が高いと言える

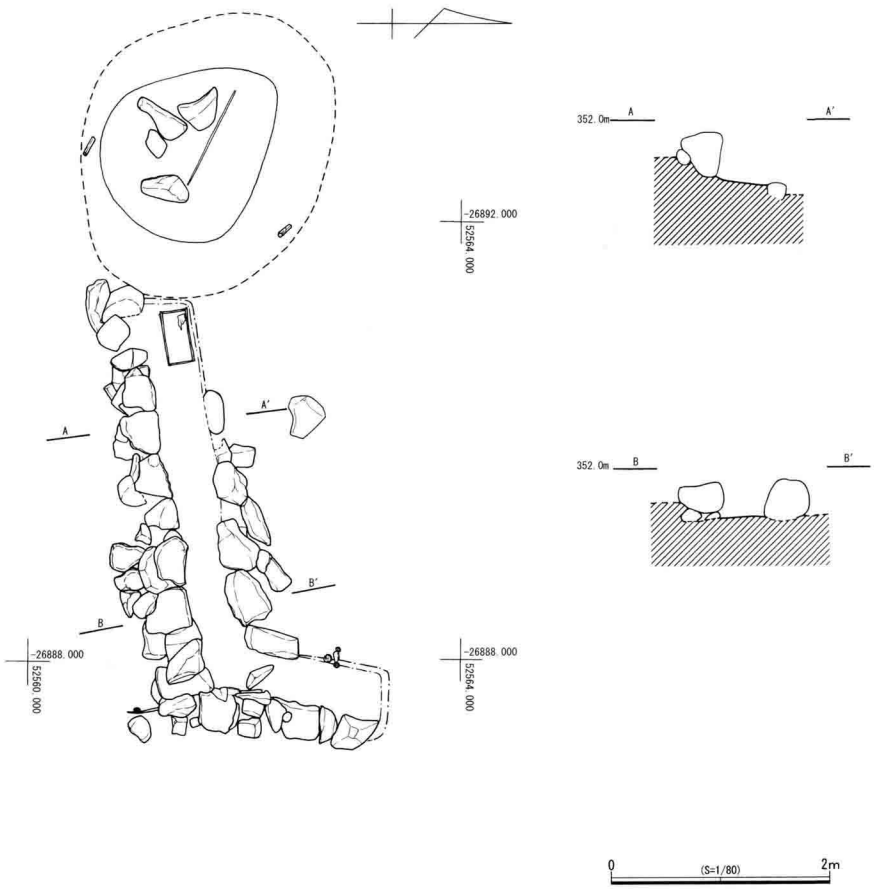


図27　石組溝（B1区③－2）

1　長野市教育委員会　2005『松代城下町跡～中木町・西木町・紺屋町』長野市の埋蔵文化財第109集

2　東京都埋蔵文化財センター　2000『汐留遺跡Ⅱ－旧汐留貨物駅跡地内の調査－』

2　出土遺物

（1）　土器・陶磁器　（図28～47、表5～18）

今回の調査では陶磁器を中心に多くの出土をみた。この中には明治中期～昭和初期の遺構面の遺物も含まれる。整理調査にあたっては全出土土器・陶磁器のうち、江戸時代に所属すると考えられる遺構を中心に、遺構単位および検出面単位で整理委託業務を行い、実測遺物の選定および実測対象遺物、実測対象外遺物ごとに遺物観察表を作成し、実測図化を実施した。したがって報告書掲載遺物は全出土土器・陶磁器の内のほんの一部に過ぎず、全遺構・全遺構面の様相を完全に示すものではないことを断っておく。しかしながら、遺物の選択に際しては江戸期の遺構および遺構面の様相が明示できるよう留意し、明治以降の遺構面についても限られた数量ではあるが遺構別の様相が提示できるよう努めた。掲載にあたって、陶磁器類は以下のように類別した。

土器　・　瓦質土器　・　陶器　・　軟陶[1]　・　焼締[2]　・　半磁器[3]　・　磁器

推定生産地については出土陶磁器の多くを占め、他地域の近世遺跡でも広く認められる肥前産や瀬戸美濃産、京焼などの分類に加え、関西系（三田焼など）や在地産のものについても可能な限り細かく生産地推定を行った。これに加え、松代城下町に特徴的な遺物に松代焼がある。これは材地産の陶器であり、18世紀末頃、松代藩の殖産興業政策の一環として開窯されたものであり、主に壺・甕・鉢などの実用品が焼成された。その特徴としては、胎土がかなり粗く、赤茶褐色から暗灰色で白色粒子を多く含み、器壁は総じて厚い傾向がある。また、施される釉は白釉、銅緑釉、鉄釉などであり、釉調は厚めでぽってりとした印象である。この松代焼は松代城下町およびその周辺の各窯で生産されていた。今回は細別できるものについては以下のとおりに細別した。

松代焼天王寺窯　・　松代焼寺尾名雲窯　・　松代焼荒神町窯　・　松代系[4]

これら出土土器・陶磁器の遺構毎の特徴や時期別の変遷については第Ⅳ章第1節に詳しい。

1　軟陶…軟質施釉陶器を指す。楽焼や三彩など鉛釉の低火度焼成陶器がこれにあたる。

2　焼締…無釉の陶器を指す。

3　半磁器…胎土が磁器質だが白色に至らないものを指し、18c～19cの瀬戸美濃系、波佐見系粗製品などが含まれる。

4　松代系…松代焼ではあるが生産窯の細別が困難な資料がこれにあたる。

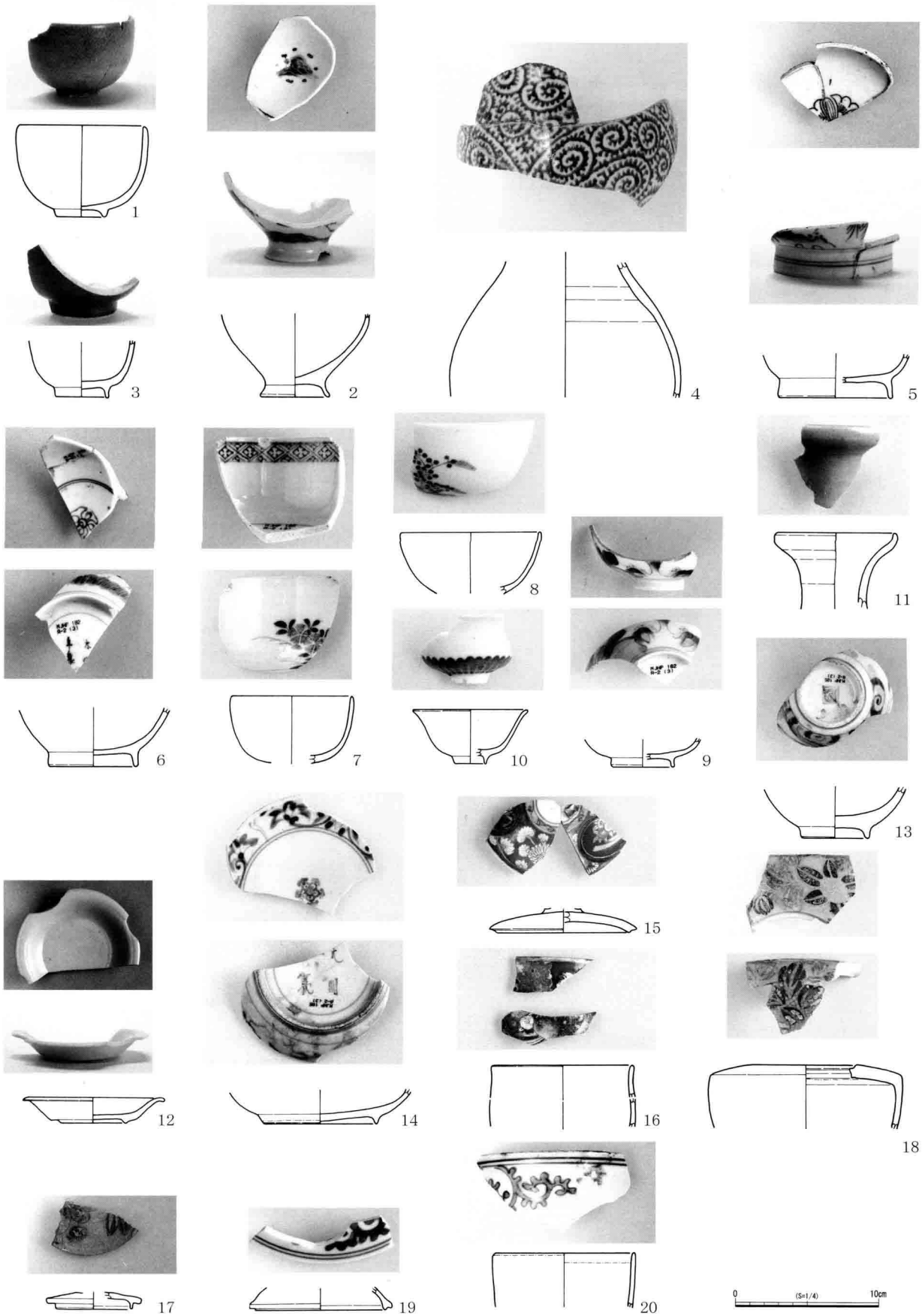


図28　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区③－２・３・４号遺構）

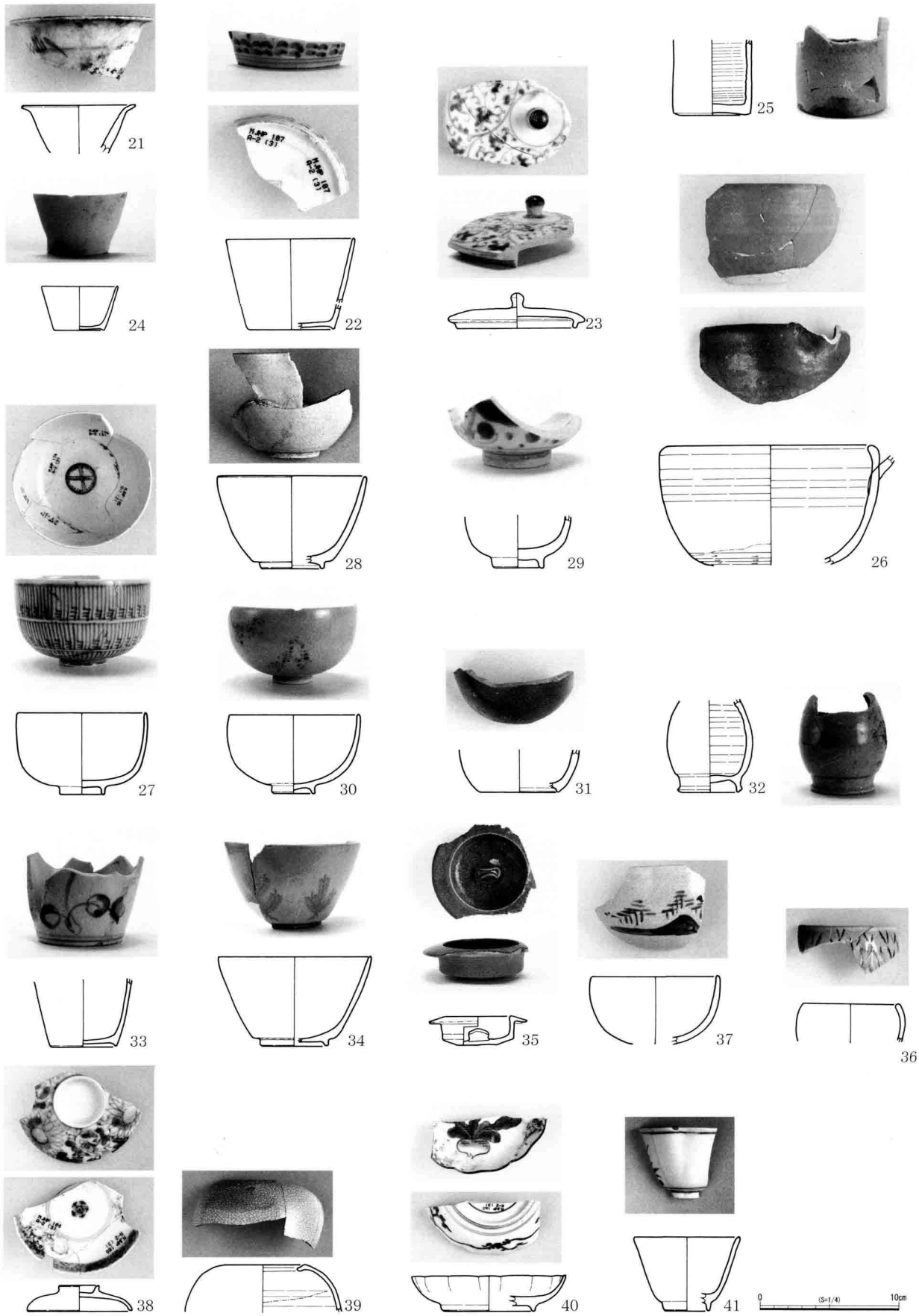


図29　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区③－１・４号遺構）

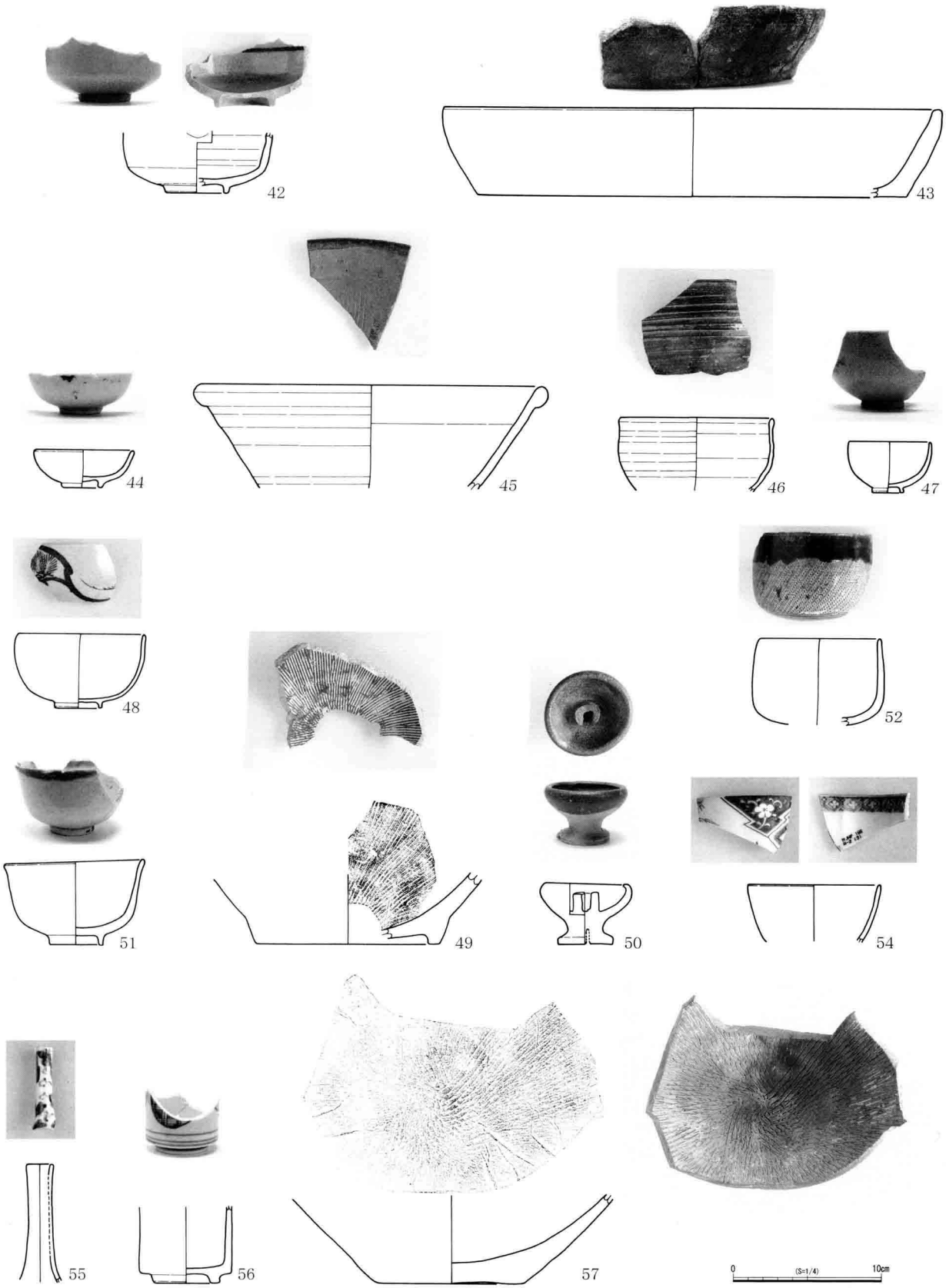


図30　第Ⅲ遺構検出面出土土器（Ａ２区③－１号遺構）

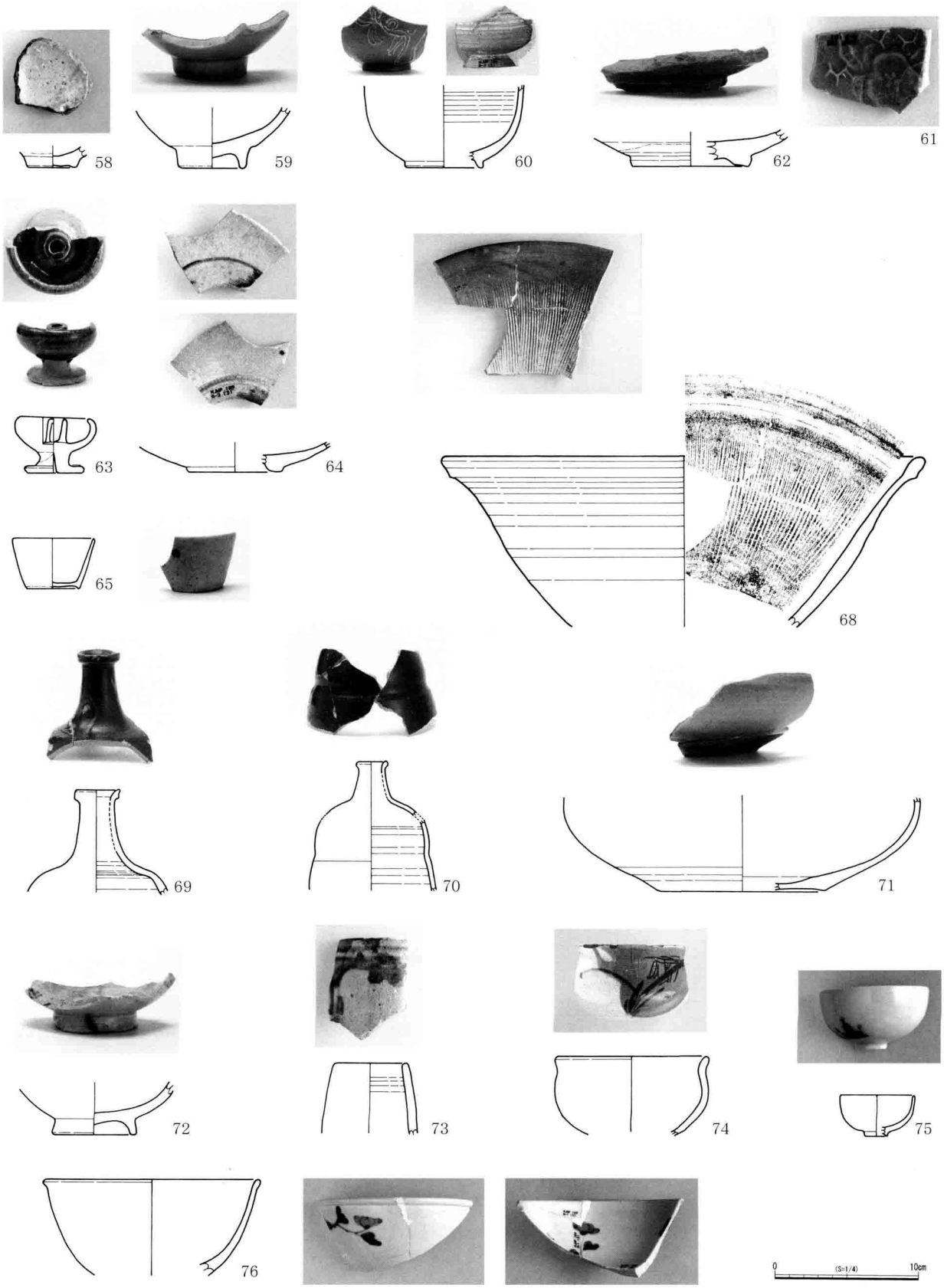


図31　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ３区③－１号遺構・検出面）

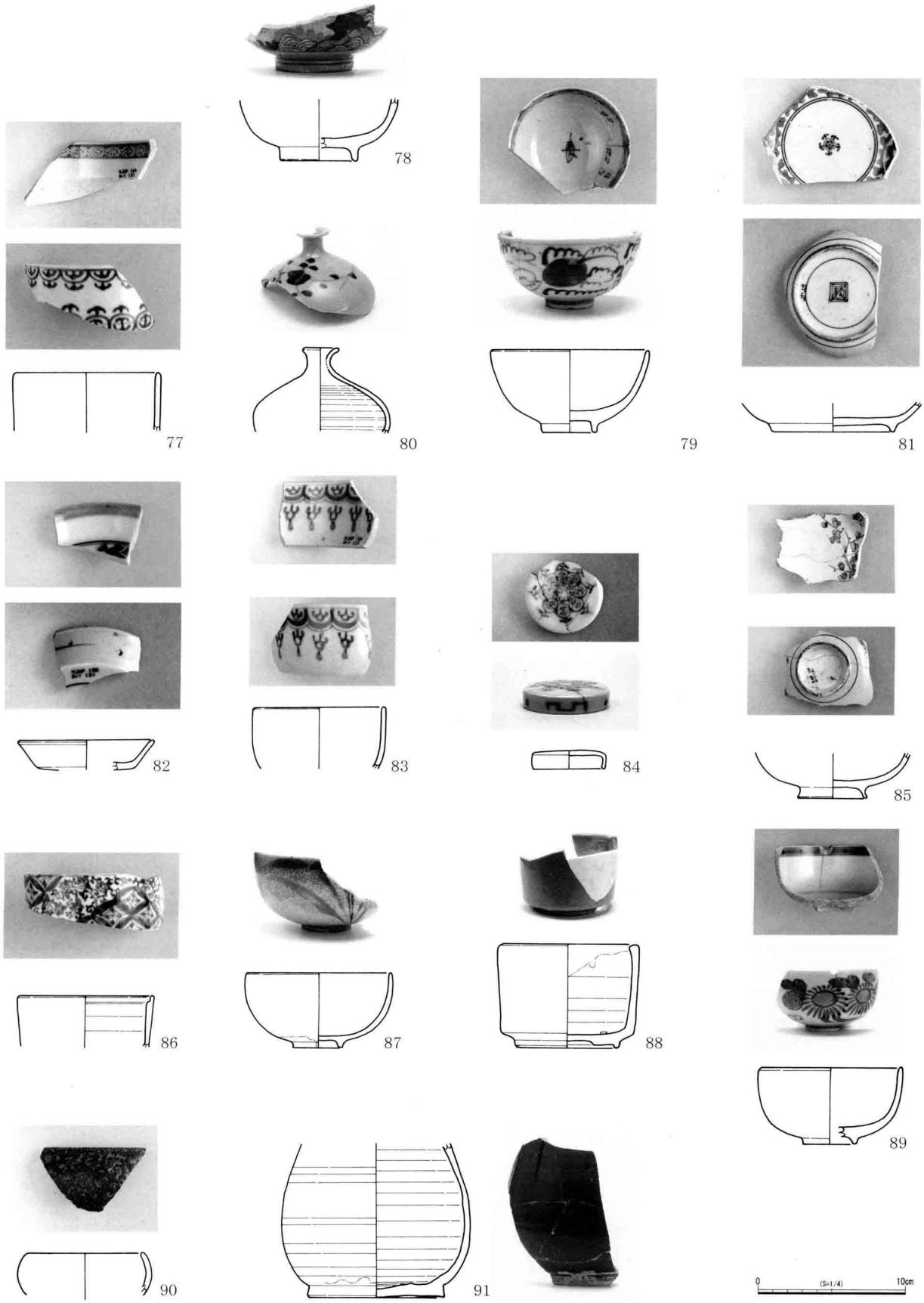


図32　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ１区③－１号遺構・検出面）

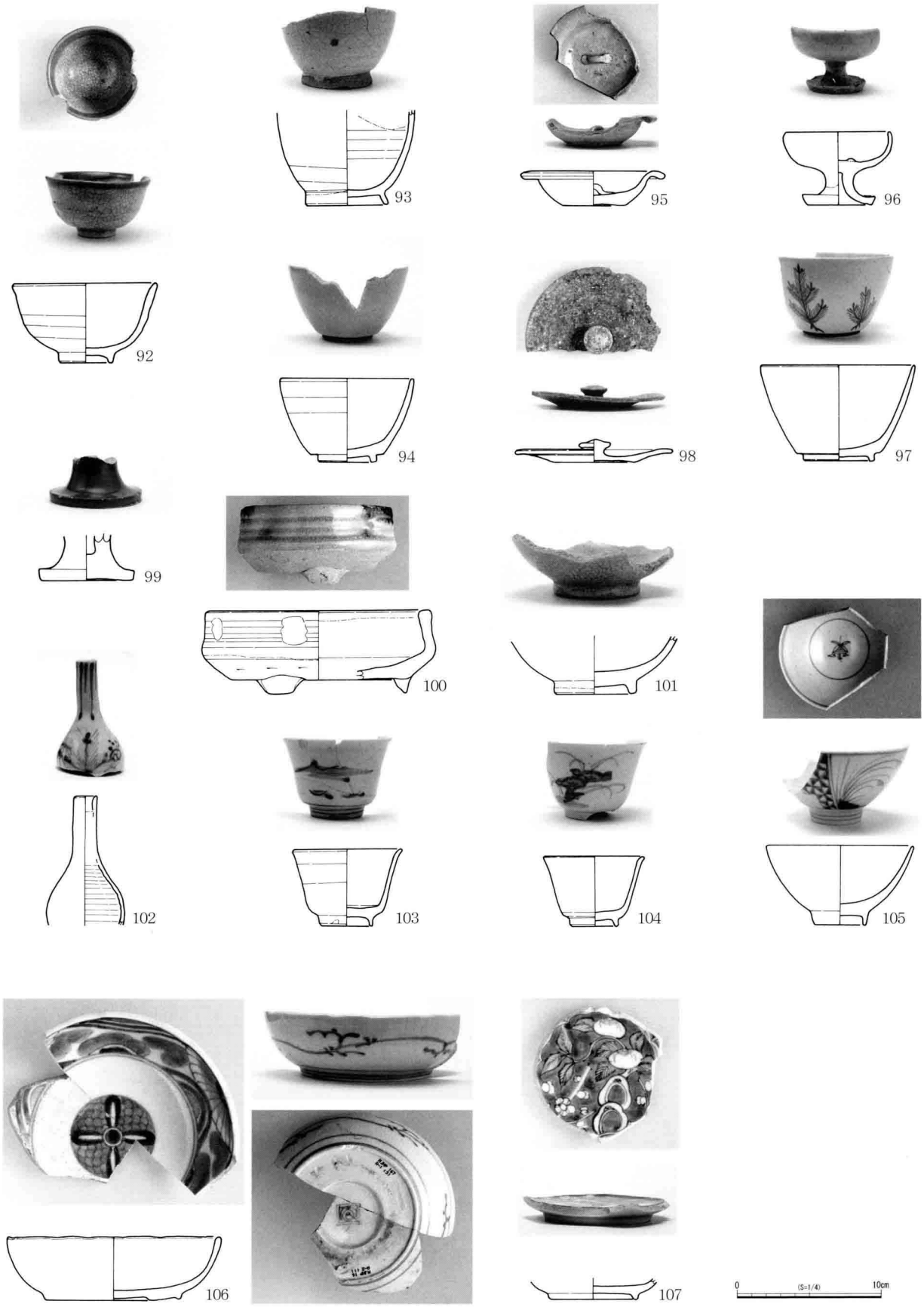


図33　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ１区③－１号遺構検出面）

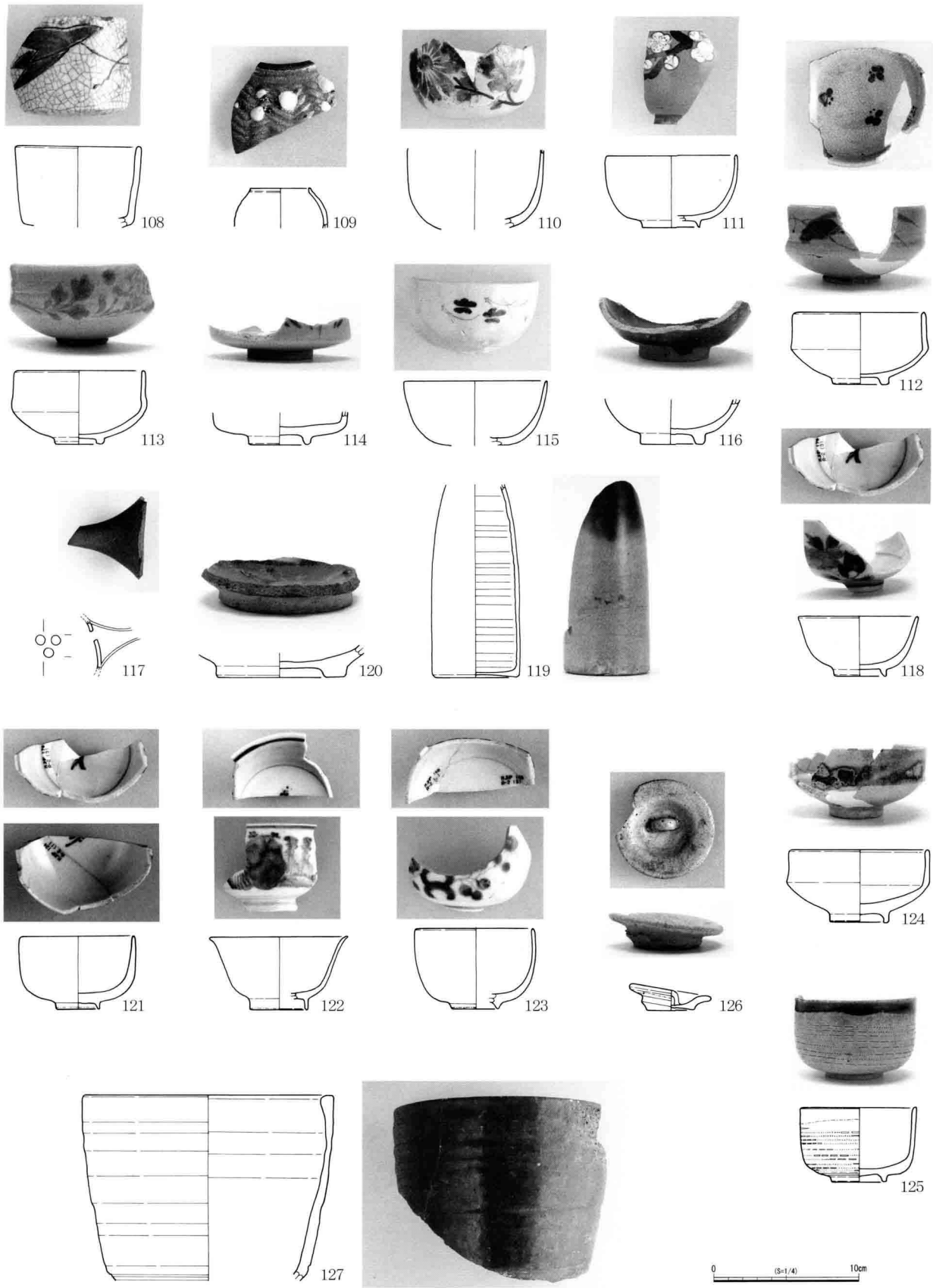


図34　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ１区③－１・２号遺構・検出面）

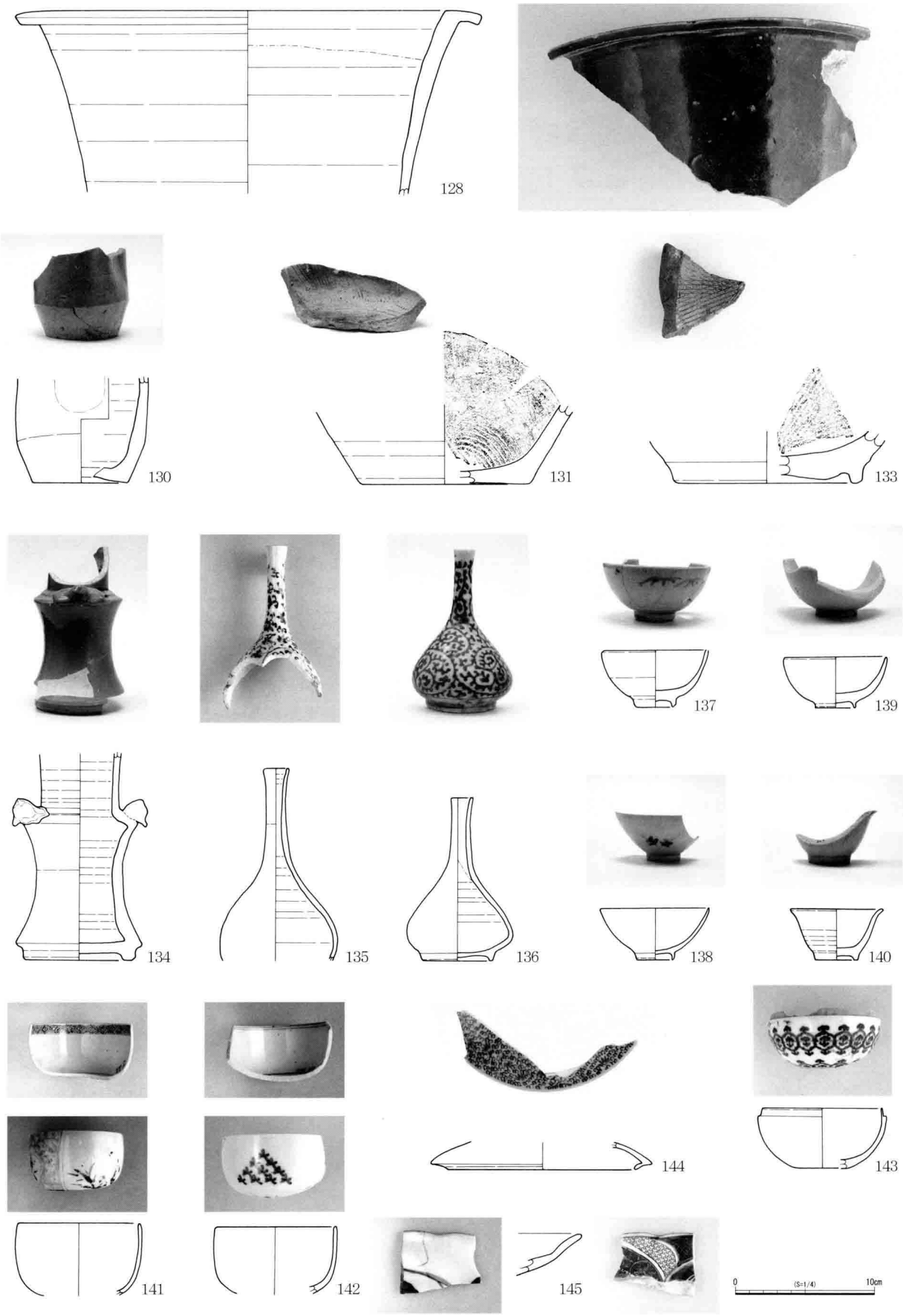


図35　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区③－検出面）

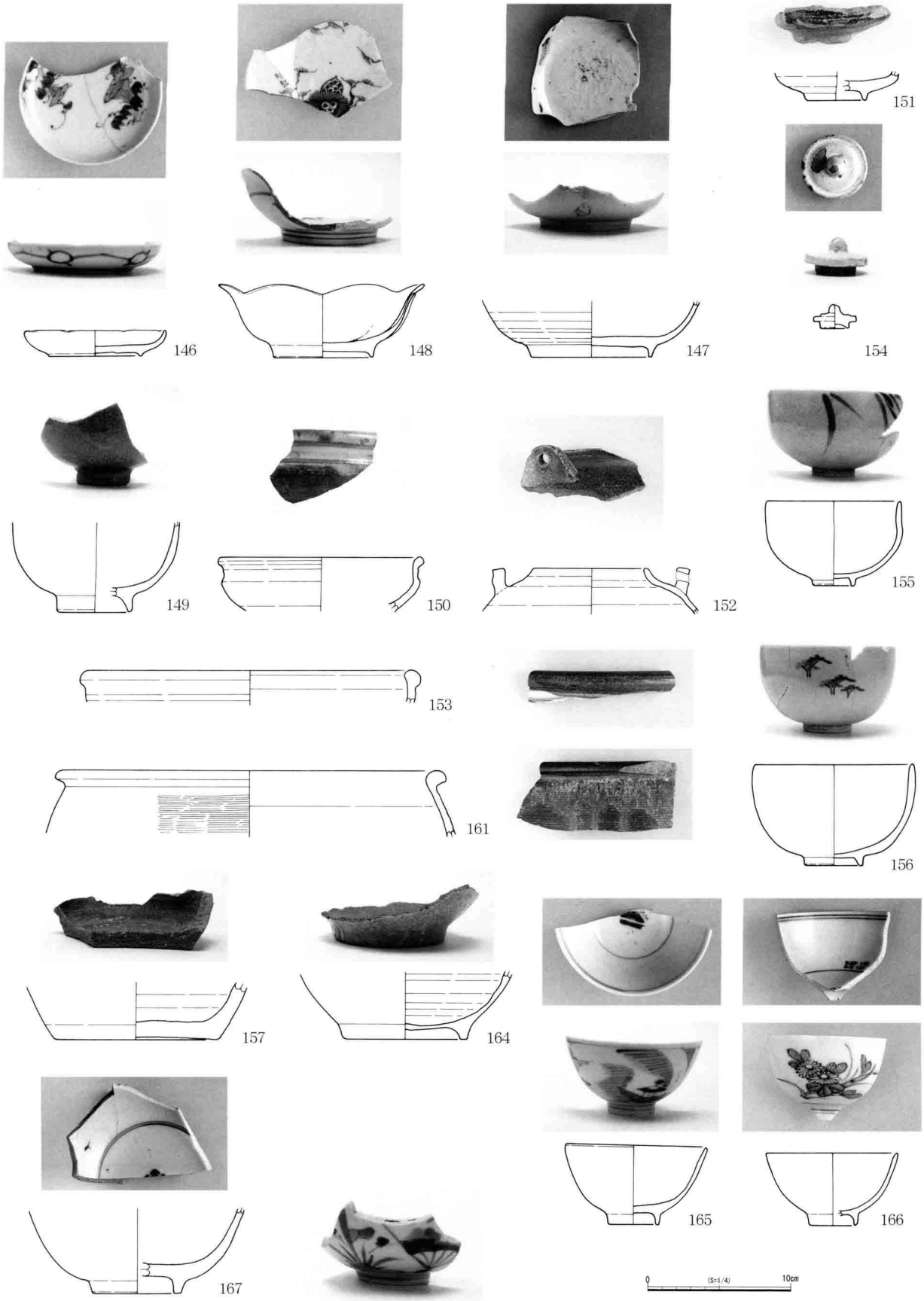


図36　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区③－検出面）

図37　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区③－検出面）

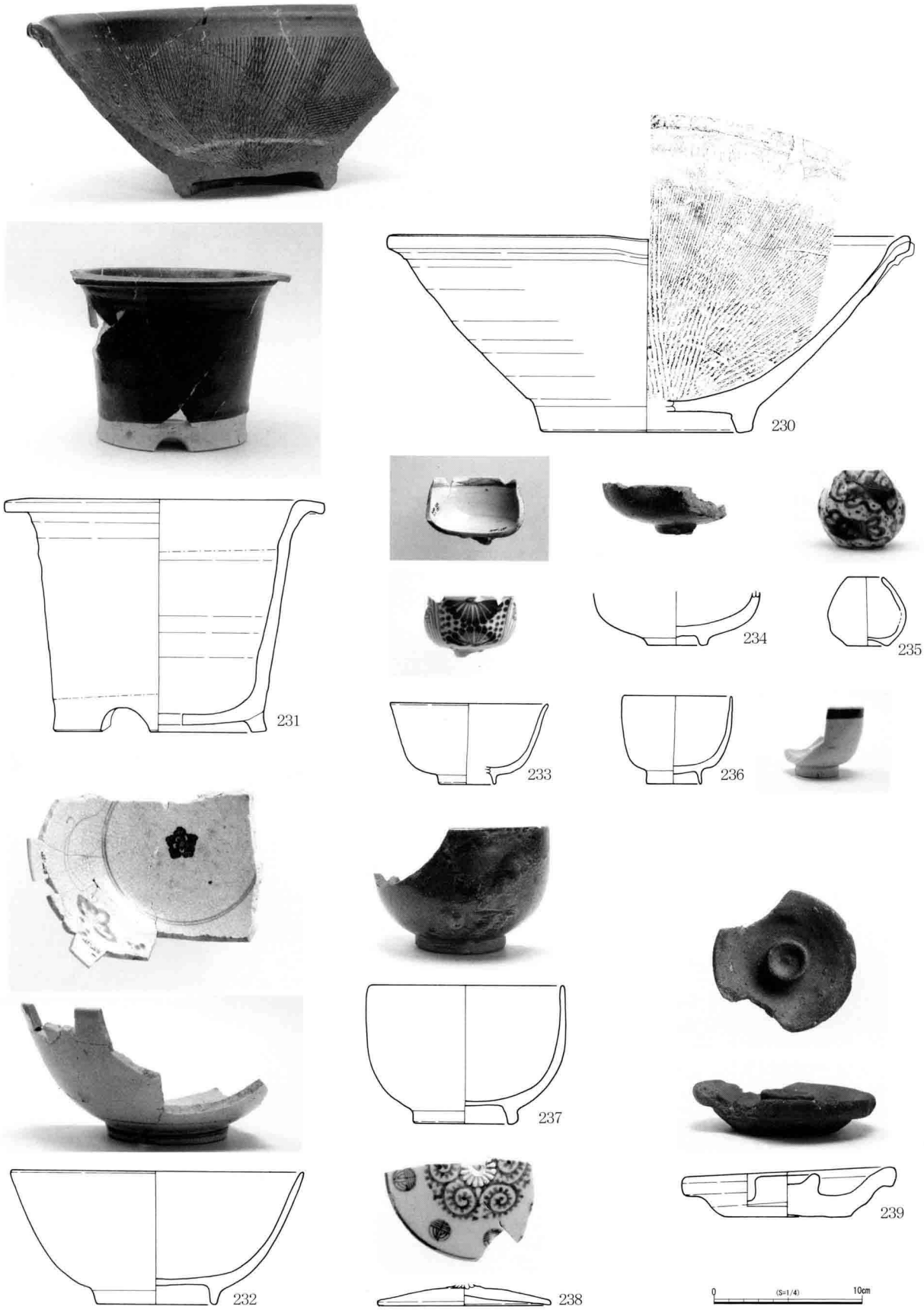


図38　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ２区検出面）

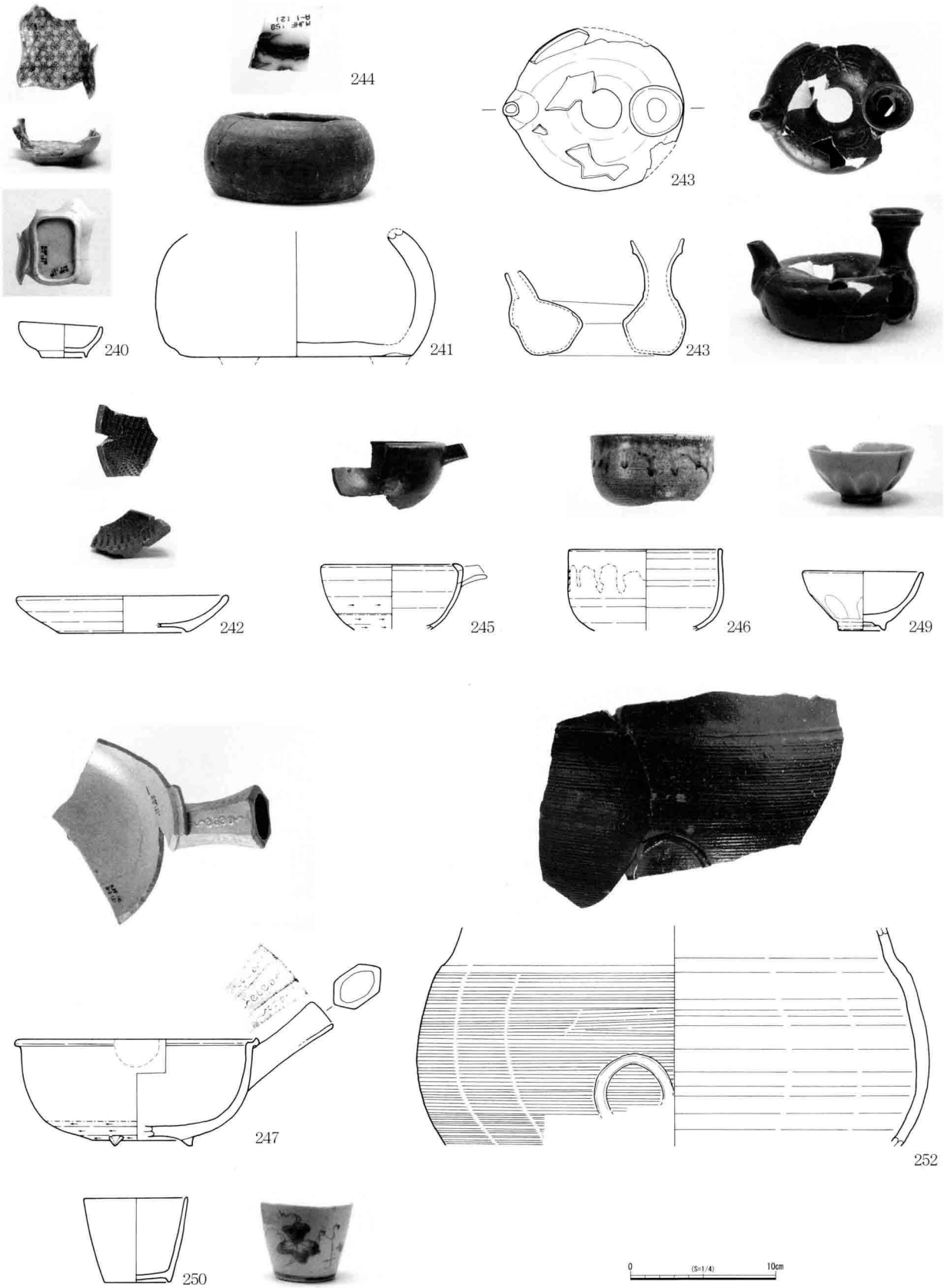


図39　第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ａ１区）

図40　第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器（Ａ１・２区②）

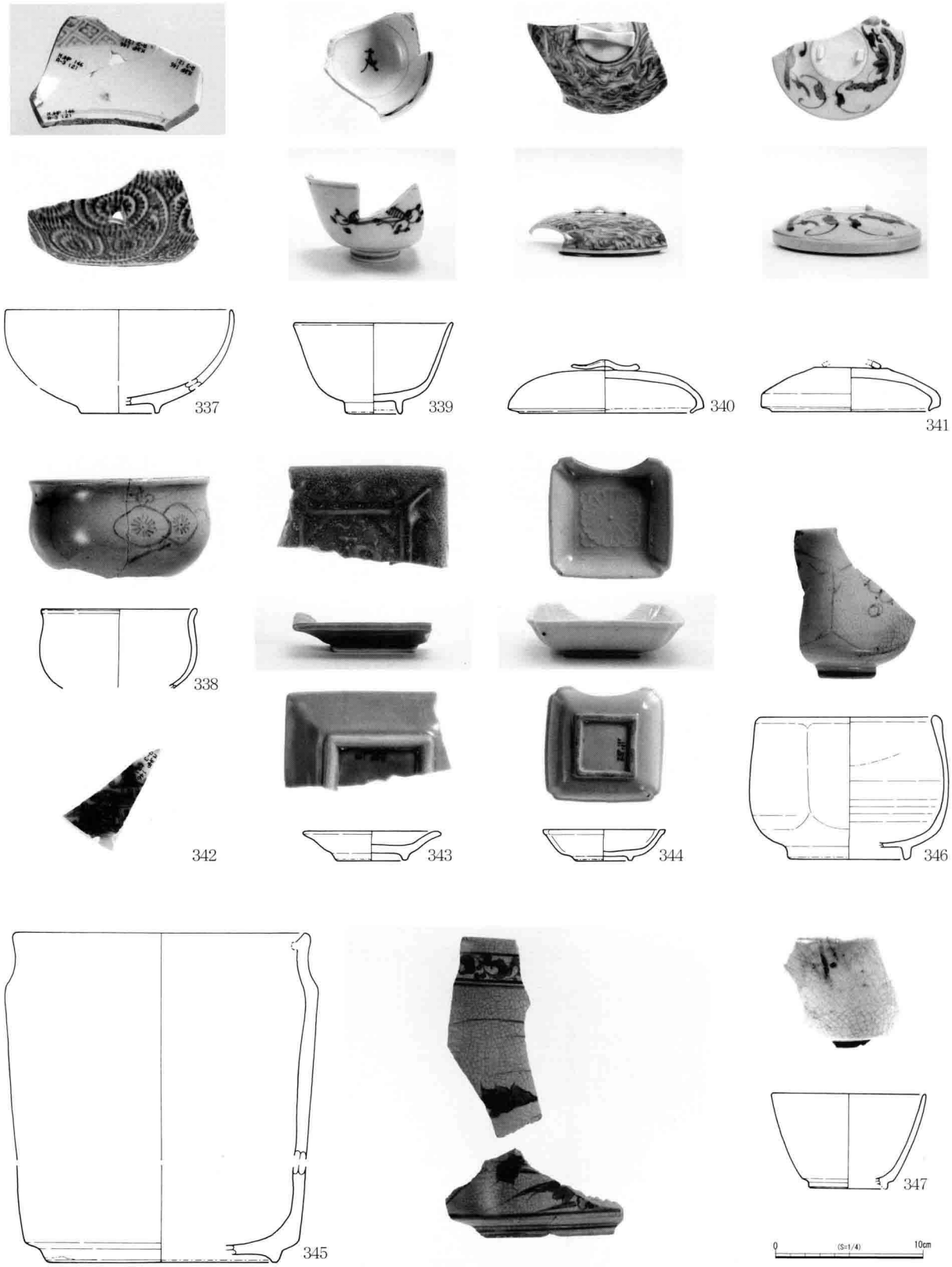


図41　第Ⅱ遺構検出面出土土器（Ａ２・３区②）

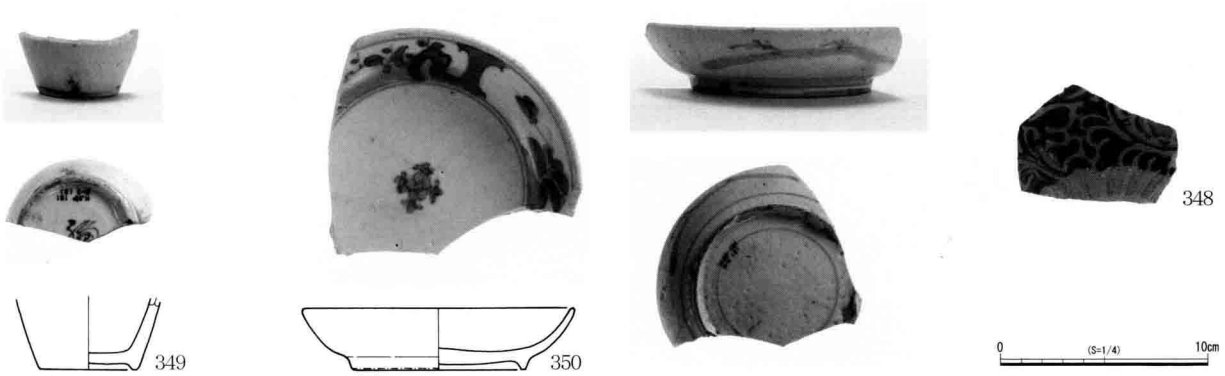


図42　第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器（A３区②）

写真40　A３区①－１出土陶磁器

写真41　A２区①－２出土陶磁器

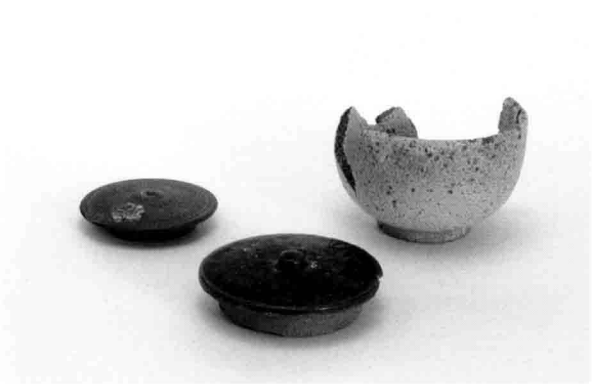


写真42　A２区①－４出土陶磁器

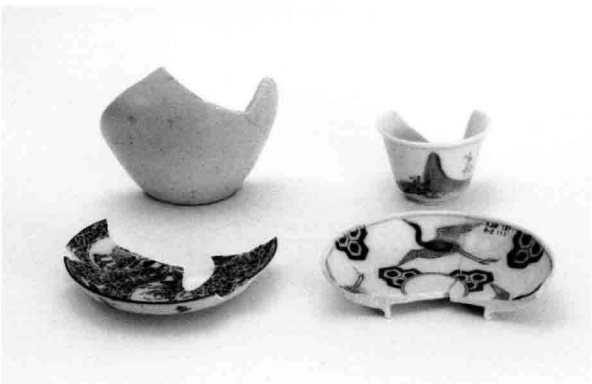


写真43　A２区①－５出土陶磁器

写真44　A２区①－７出土陶磁器（１）

写真45　A２区①－７出土陶磁器（２）

写真46　A 2 区①検出面出土陶磁器

写真47　A 1 区①－1 出土陶磁器

写真48　A 3 区①－3 出土陶磁器

写真49　A 3 区①－1 出土陶磁器(1)

写真50　A 3 区①－1 出土陶磁器(2)

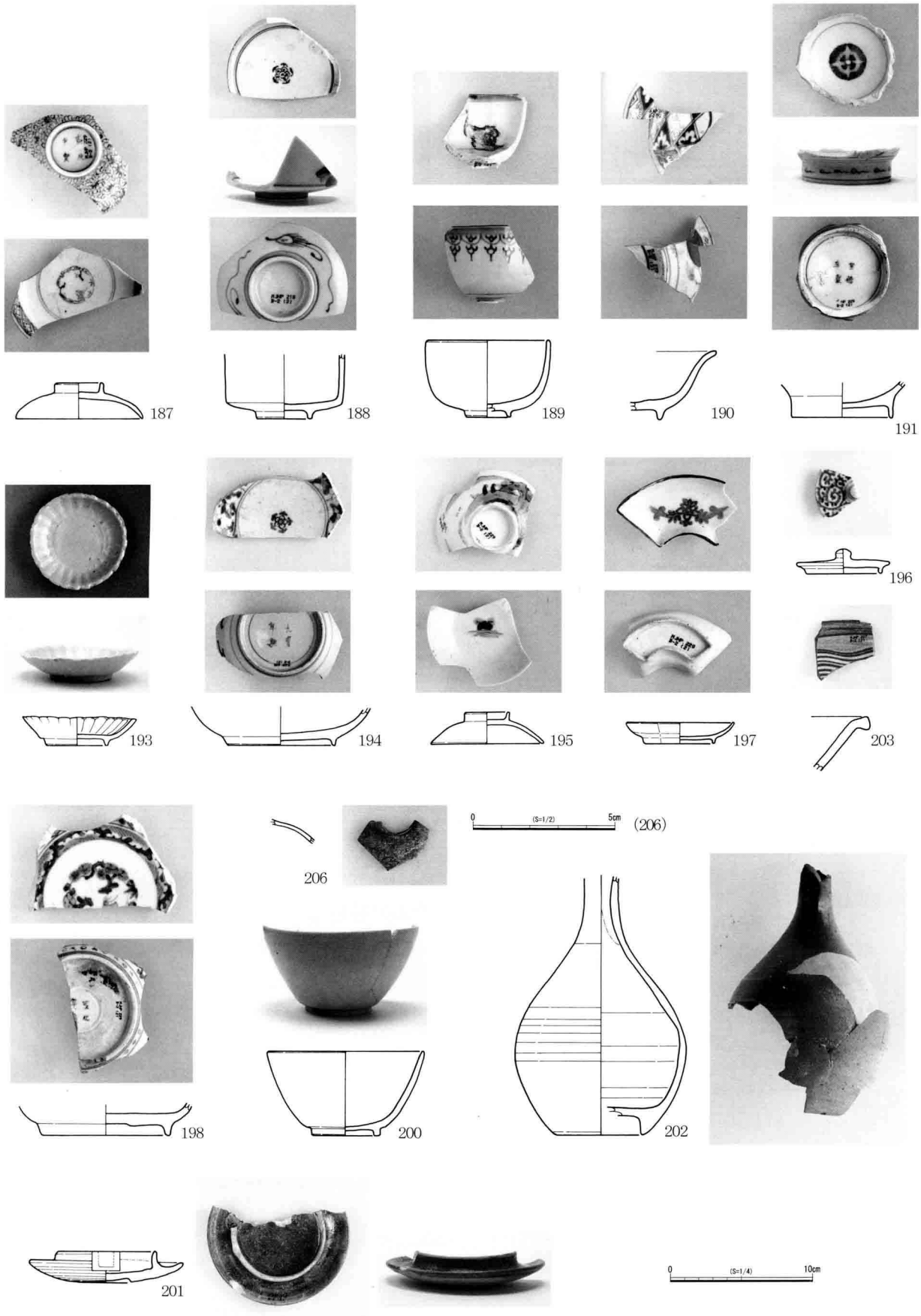


図43　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ｂ２区）

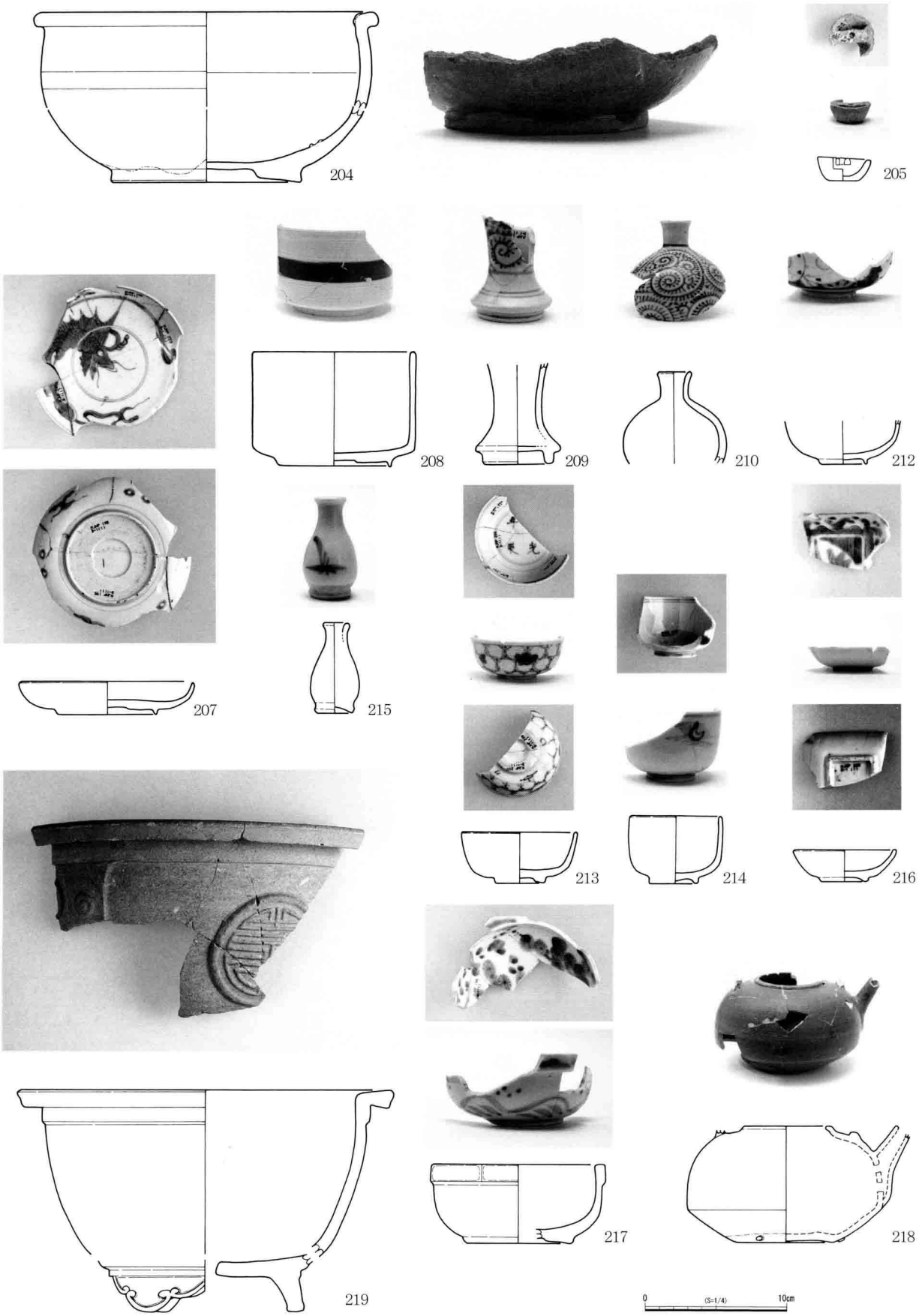


図44　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ｂ１区・Ｂ２区）

図45　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ｂ１区③－２下層検出面）

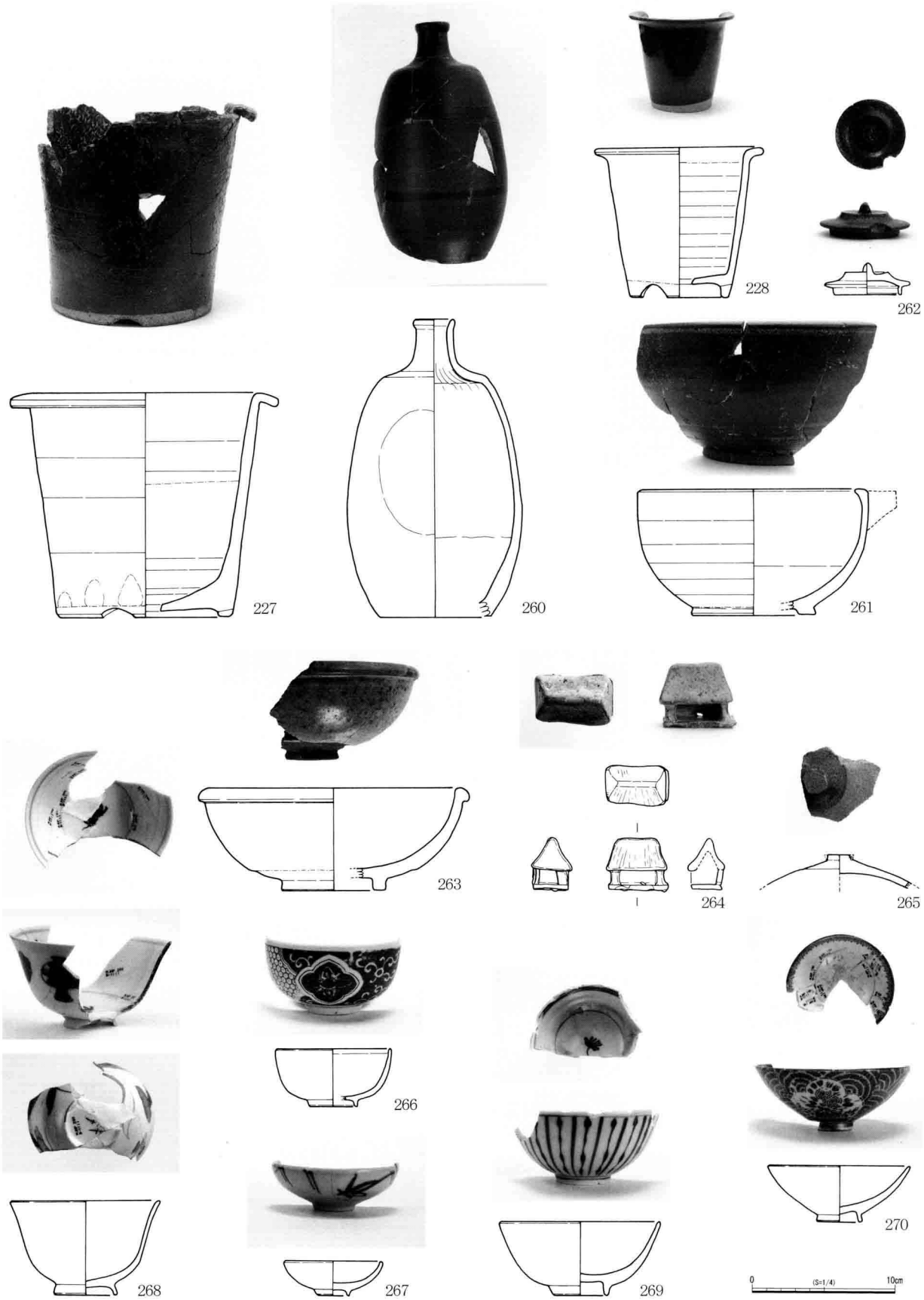


図46　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ｂ１区）

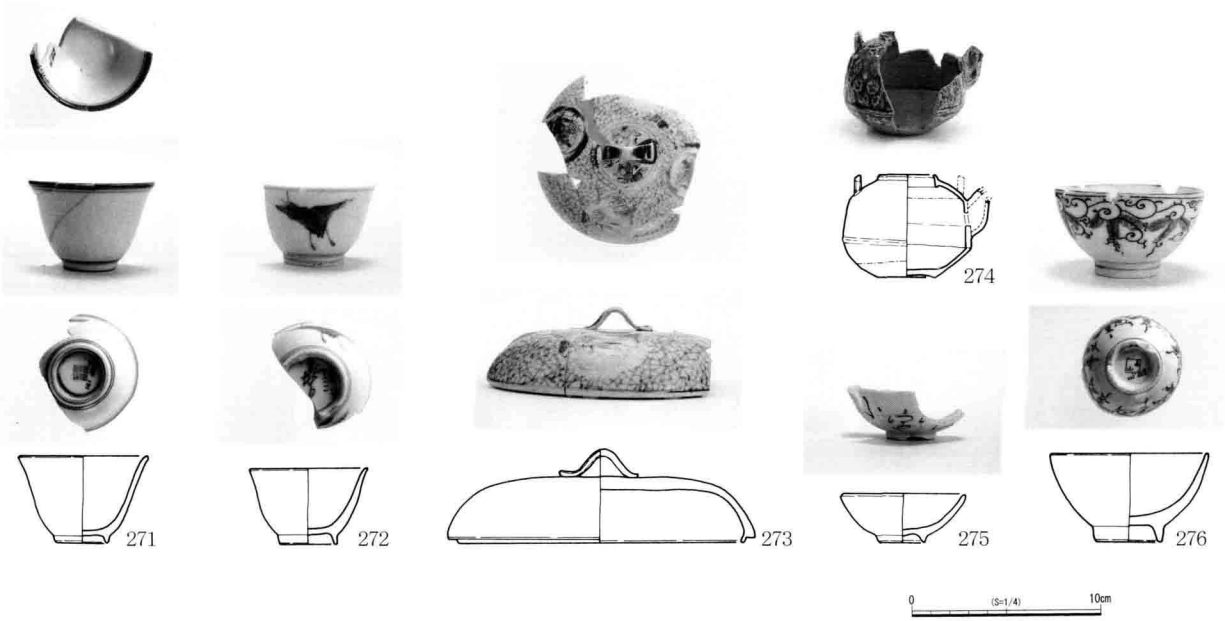


図47　第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器（Ｂ１区）

写真51　Ａ区・Ｂ１区第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面出土陶磁器

表5　土器・陶磁器観察表（1）

実測番号	出土地点					類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量					残存率		調整・文様・その他				所見		
	区	面	遺構番号	性格	遺物番号							a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	径	全体	外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代
1	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	陶器	小碗	半球形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	8.8	3.6	6.4	－	82.2	6/12	60%	高台付近まで施釉	－	－	内面アーチ状削り	－	京・信楽系	1780～1860
2	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小碗	呉器形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.7	－	－	83.3	－/12	40%	鶴・波	四方襷	波	－	肥前磁器写し 王地山焼?	関西系	1810～1860
3	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小杯	端反形?	白	ロクロ	錆釉・透明釉	－	3.8	－	－	21.3	3/12	30%	錆釉	透明釉	透明釉	透明釉	口縁部欠損	肥前系	1690～1780
4	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	大瓶	鶴首形?	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	－	－	－	103.3	1/12	?	蛸唐草文	透明釉	－	－	胴部のみ残存 焼継ぎ直し	肥前系	1780～1860
5	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小鉢	－	白	ロクロ 蛇の目高台	呉須・透明釉	－	7.8	－	－	30.0	3/12	10%	柳文	－	花文	蛇の目凹形高台	底部のみ残存 焼継ぎ直し	肥前系	1800～1860
6	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	中碗	広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	6.0	－	－	22.9	3/12	10%	草文	－	二重圏線内花文	圏線内「太明年製」	口縁部欠損	肥前系	1780～1820
7	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.4	－	－	－	19.8	3/12	20%	撫子文	四方襷	圏線	－	高台欠損	肥前系	1780～1860
8	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小碗	浅半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.6	－	－	－	17.0	3/12	20%	草花文(南天?)	－	－	－	高台欠損	肥前系	1740～1780
9	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	碗	端反形?	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.2	－	－	15.0	3/12	15%	草花文?	－	花文	－	高台欠損	肥前系	1800～1860
10	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	小碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	7.8	2.2	3.8	－	15.4	2/12	30%	蓮弁文	－	－	－	－	瀬戸美濃系	1800～1860
11	A-2	3	2号遺構	土坑	P-182	磁器	大瓶	広口形	白灰	ロクロ	青磁釉	8.2	－	－	－	24.1	2/12	?	青磁釉	口縁のみに釉掛け	－	－	口縁部のみ残存	肥前系	1650～1780
12	A-2	3	3号遺構	土坑	P-185	磁器	小皿	端反形	白ガラス質	ロクロ型打ち	透明釉	10.0	4.8	1.8	－	45.4	9/12	70%	－	－	蹄印刻	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
13	A-2	3	3号遺構	土坑	P-185	磁器	中碗	丸形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.6	－	－	77.3	－/12	15%	渦巻文(流水文?)	－	－	二重角渦文	口縁部欠損	肥前系	1690～1780
14	A-2	3	3号遺構	土坑	P-185	磁器	小皿	深皿形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	－	8.0	－	－	54.8	4/12	30%	唐草文?	二重圏線外唐草・槌文	コンニャク印五弁花文	圏線内崩れ「太明年製」	口縁部欠損	肥前系	1650～1740
15	A-2	3	3号遺構	土坑	P-185	磁器	蓋物蓋	平形	白	ロクロ 貼付け	呉須・透明釉・上絵(赤,緑,黒,金)	9.2	10.2	－	－	32.0	4/12	30%	花唐草文・意匠に花・短冊	－	持ち手金彩	－	№16の蓋	肥前系	1690～1780
16	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	蓋物鉢	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉・上絵(赤,緑,黒,金)	10.0	－	－	－	12.1	2/12	?	花唐草文・意匠に花・短冊	口縁のみ無釉	－	－	№15の鉢・破片2片・被熱	肥前系	1690～1780
17	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	陶器	水注蓋	平形	灰黄	ロクロ	灰釉・上絵(緑,黒,金)	5.4	6.6	－	－	5.6	3/12	20%	葉文	－	－	施釉	№18の蓋・つまみ欠損	京・信楽系	1700～1860
18	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	陶器	水注	四方形	灰黄	ロクロ たたら貼付	灰釉・上絵(緑,黒,金)	7.0	－	－	－	38.9	3/12	20%	花文・葉文	施釉	－	－	№17の身・注口・取っ手欠損	京・信楽系	1700～1860
19	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	蓋物蓋	丸形 玉縁形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.0	10.0	－	－	4.3	3/12	10%	蛸唐草文(輪郭線描き)	鉢接地部以外釉掛け	－	－	№20の蓋・上部持ち手欠損	肥前系	1700～1860
20	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	蓋物鉢	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.0	－	－	－	12.8	3/12	10%	蛸唐草文(輪郭線描き)	口縁のみ無釉	－	－	№19の身・胴下部～高台欠	肥前系	1690～1780
21	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.0	－	－	－	27.4	7/12	40%	笹文	－	－	－	高台欠損・全面に被熱	肥前系	1690～1780
22	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	猪口	桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.2	6.0	－	－	20.2	3/12	30%	若草文	－	－	圏線内二重角	口縁部・底部破片2片	肥前系	1690～1740
23	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	蓋	平形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.4	9.8	2.5	－	30.4	2/12	40%	花唐草文	鉢接地部以外釉掛け	つまみ上に呉須塗り	施釉	－	肥前系	1690～1780
24	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	磁器	小杯	桶形	白	ロクロ	透明釉	5.4	3.6	3.1	－	8.1	4/12	30%	－	－	－	－	－	肥前系?	1690～1780
25	A-2	3	4号遺構	土坑	P-187	陶器	灰吹?	筒形	灰茶	ロクロ	灰釉	－	5.6	－	－	74.1	4/12	30%	灰釉	灰釉・轆轤目顕著	－	灰釉	口縁部欠損・櫛徳利底部?	京・信楽系	1800～1860
26	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-183	陶器	片口鉢	口縁切込注口形	灰黄	ロクロ貼付け	鉄釉(柿色)	15.6	－	－	－	177.8	7/12	50%	胴部下半まで施釉	釉掛け・口縁内反	釉掛け	－	高台欠損・破片2点	瀬戸美濃系	1780～1840
27	A-2	3	1号遺構-B	溝状遺構	P-174	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.2	3.2	5.8	－	117.7	10/12	90%	暦手文	－	丸十字花文	－	－	肥前系	1780～1840
28	A-2	3	1号遺構-B	溝状遺構	P-174	陶器	小碗	杉形	黄白	ロクロ削高台	透明釉	10.6	4.4	6.5	－	32.1	3/12	30%	高台付近まで施釉	－	－	－	－	京・信楽系	1740～1800
29	A-2	3	1号遺構-C	溝状遺構	P-172	磁器	小鉢	端反形?	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	3.6	－	－	59.8	12/12	40%	素描き線・点花文	－	－	－	口縁部欠損	瀬戸美濃系	1800～1860
30	A-2	3	1号遺構-C	溝状遺構	P-199	陶器	小碗	半球形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉・上絵変色?	9.2	3.0	5.6	－	83.5	12/12	80%	上絵変色・退色の為不明	上絵変色・退色の為不明	－	－	－	京・信楽系	1780～1860
31	A-2	3	1号遺構-C	溝状遺構	P-172	軟陶	小碗	碁笥底半球形	橙灰	ロクロ	低火度釉(金含有鉛系釉?)	－	5.6	－	－	17.9	3/12	25%	貫入状線刻・金粉散らし?	貫入状線刻・赤茶～暗茶	－	高台全面施釉	口縁部欠損	楽焼系	1800～
32	A-2	3	1号遺構-D	溝状遺構	P-176	陶器	小瓶	－	灰黄	ロクロ付け高台	灰釉	－	4.6	－	－	93.5	12/12	50%	釉掛け	無施釉	無施釉	無施釉	首～胴部上半欠損	瀬戸美濃系	1780～1860
33	A-2	3	1号遺構-D	溝状遺構	P-176	磁器	猪口	桶形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.6	－	－	64.7	12/12	70%	草花文	－	－	－	口縁部欠損	肥前系	1690～1780
34	A-2	3	1号遺構-D	溝状遺構	P-176	陶器	中碗	杉形	灰茶	ロクロ削高台	鉄絵・灰釉	10.8	4.8	6.4	－	78.7	12/12	60%	若杉文	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1740～1800
35	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	陶器	蓋	凹形	薄茶	ロクロ貼付け	鉄釉(黒茶)	7.0	2.8	2.0	－	31	12/12	80%	鉄釉	無施釉	耳皿状つまみ	回転削り	汁次蓋?	瀬戸美濃系	1800～1860
36	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180/188	陶器	小鉢	姥口形	灰	ロクロ	鉄絵・灰釉	6.8	－	－	－	7.9	4/12	20%	ハの字連続文	釉掛け	－	－	胴部下半～底部欠損	京・信楽系	1800～
37	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	陶器	小碗	半球形	灰黄	ロクロ	透明釉・上絵(茶,緑)	－	9.1	－	－	22.6	2/12	20%	松原文	－	－	－	高台欠損	京・信楽系	1780～1860
38	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	磁器	小碗蓋	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	7.4	－	1.8	2.9	20.6	12/12	50%	菊花・唐草	四方襷	圏線内五弁花文	－	－	肥前系	1740～1780
39	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180/199	陶器	土瓶	丸形	黄褐	ロクロ	白泥・透明釉	5.6	－	－	－	27.8	4/12	30%	白泥地に釉掛け	上部のみ白泥・釉掛け	－	－	注口部・持ち手欠損	関西系	1800～
40	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	磁器	小皿	輪花形	白	ロクロ型打ち	呉須・鉄絵・透明釉	10.8	6.4	2.5	－	30.6	4/12	40%	唐草文(輪郭線描き)	口唇に鉄彩	蕪文	圏線	－	肥前系	1690～1780
41	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	7.4	3.2	5.3	－	18.2	3/12	30%	草文	－	－	－	－	肥前系	1690～1780
42	A-2	3	1号遺構-A	溝状遺構	P-180	陶器	鳥餌鉢	半筒形	灰茶	ロクロ削高台	鉄絵・灰釉	－	4.2	－	－	43.6	4/12	40%	灰釉	胴部に鉄絵横線	－	無施釉	口縁部・取っ手欠損	京・信楽系	1780～1860
43	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P173/179/176	土器	焙烙	平底	暗茶・白粒子	積み上げ・ナデ	－	33.2	29.0	4.8	－	303.6	3/12	20%	煤付着	ヨコナデ	－	－	耳欠損?	在地系	17c～18c
44	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-173	磁器	小杯	丸形	白	ロクロ	透明釉	6.6	2.6	2.5	－	23.5	6/12	55%	煤付着	－	－	－	－	肥前系	1690～1780
45	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-179	陶器	擂鉢	玉縁口縁	赤褐	ロクロ	鉄釉	23.2	－	－	－	55.7	－/12	?	口縁のみに釉掛け	上部無文帯・擂り目	－	－	胴部下半～底部欠損	肥前系	1650～1690
46	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-179	陶器	中碗	腰折形	灰茶	ロクロ	鉄釉・灰釉	10.2	－	－	－	15.1	2/12	20%	上部轆轤段付き	鉄釉地に灰釉流し	－	－	高台欠損	瀬戸美濃系	1780～1840
47	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-173	陶器	小杯	半球形	灰黄	ロクロ削高台	鉄絵・呉須・灰釉	5.4	2.0	3.5	－	11.1	10/12	40%	松絵	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1780～1860
48	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-173	陶器	小碗	浅半球形	黄土	ロクロ削高台	灰釉・上絵(黒,金)	8.6	3.2	5.0	－	19.4	12/12	30%	松絵	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1780～1860
49	A-2	3	1号遺構-E	溝状遺構	P-179	陶器	擂鉢	高台付き	灰黄	ロクロ削高台	鉄釉	－	12.6	－	－	198.6	5/12	20%	鉄釉	放射擂り目	放射擂り目 重複	施釉	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1820～1860
50	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	陶器	秉燭	台付たんころ形	橙灰	ロクロ糸切り	鉄釉	5.6	3.7	4.1	－	68.7	12/12	100%	口縁に釉掛け	施釉・口唇内反	芯立て	回転糸切り・中央に孔	－	瀬戸美濃系	1820～1840
51	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	陶器	小碗	端反形	灰白	ロクロ	灰釉・瑠璃釉	9.4	3.6	5.6	－	116.6	6/12	80%	口縁のみに瑠璃釉	口縁のみに瑠璃釉	－	畳付残し釉掛け	－	瀬戸美濃系	1800～1860
52	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	陶器	小碗	腰張形	灰	ロクロ ローラー刻印	鉄釉(濃・淡)	8.0	－	－	－	48.4	4/12	40%	胴下部に斜列点刻印	鉄釉(濃)	鉄釉(濃)	－	高台欠損・鎧茶碗	瀬戸美濃系	1780～1840
53	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	陶器	擂鉢	実測対象外								282.6							№.57と同一型式	肥前系	
54	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	磁器	中碗	半球形	白	ロクロ	"呉須・透明釉・上絵(赤,黒,金)"	8.8	－	－	－	11.7	4/12	15%	松皮菱・雪持笹・梅	四方襷	－	－	胴部下半～底部欠損	肥前系	1750～1860
55	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	磁器	小瓶	鶴首形	白	ロクロ	呉須・透明釉	1.6	－	－	－	21.9	12/12	30%	若草文	口縁のみに釉掛け	－	－	胴部～底部欠損	肥前系	1780～1860
56	A-2	3	1号遺構-F	溝状遺構	P-188	磁器	小碗	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.4	－	－	79.4	9/12	40%	丸文	－	－	畳付幅広	口縁部欠損	肥前系	1800～1860
57	A-3	3		炭溜ピット	P-239	陶器	擂鉢	無高台	赤褐	ロクロ糸切り	－	－	10.2	－	－	753.1	12/12	30%	－	放射擂り目重複	渦巻状放射擂り目	回転糸切り	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1650～1690
58	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	陶器	小杯	－	灰白	ロクロ削高台	長石釉	－	3.4	－	－	17.7	12/12	30%	高台付近まで施釉	－	－	－	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1600～1670
59	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	磁器	中碗	呉器形	白	ロクロ	青磁釉	－	4.6	－	－	74.4	6/12	30%	青磁釉	－	青磁釉	畳付に砂付着	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1630～1650
60	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	陶器	中碗	丸形	灰	ロクロ削高台	白泥・灰釉	－	5.4	－	－	39.2	3/12	?	白イッチン樹木絵	釉掛け	釉掛け	無施釉	口縁部欠損	関西系	1800～1860

表6　土器・陶磁器観察表（2）

実測通番	出土地点					類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量					残存率		調整・文様・その他				所見		
	区	面	遺構番号	性格	遺物番号							a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	径	全体	外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代
61	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	磁器	皿?	－	白灰	ロクロ型打ち	青磁釉(オリーブ色)	－	－	－	－	25.5	0/12	?	青磁釉	花文・亀甲繋ぎ陽刻	－	－	全体形状不明 三田焼系か	関西系	1800～1940
62	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	陶器	中皿	－	灰茶	ロクロ削高台	灰釉	－	8.0	－	－	85.4	5/12	20%	灰釉・露胎に照り	－	灰釉・胎土目積み痕	糸切り後高台内削り出し	底部のみ残存 古唐津皿	肥前系	1590～1610
63	A-3	3	1号遺構	石列	P-178	陶器	秉燭	台付たんころ形	灰茶	ロクロ糸切り	鉄釉(緑味)	4.8	4.0	3.8	－	43.9	12/12	80%	碗部まで施釉	施釉　口唇内反	芯立て(上面円環)	回転糸切り・中央に孔	－	瀬戸美濃系	1740～1780
64	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	磁器	小皿	蛇の目畳付高台	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	6.4	－	－	32.0	2/12	15%	－	－	圏線内に文様	蛇の目畳付高台内施釉	口縁部欠損	肥前系	1630～1650
65	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	磁器	小杯	桶形	白	ロクロ	透明釉	5.6	3.6	3.4	－	11.0	4/12	25%	－	－	－	－	全面に被熱	肥前系	1690～1780
66	A-3	3	1号遺構	石列	P-189	磁器	小碗	実測対象外			呉須・透明釉					16.4				－			No. 189と同一型式	肥前系	
67	A-1	3	検出面		P-169	陶器	片口鉢	実測対象外			鉄釉					106.1							No. 26と同一型式	瀬戸美濃系	
68	A-1	3	検出面		P-169	陶器	擂鉢	口縁外折二段	灰黄	ロクロ	鉄釉	33.0	－	－	－	254.7	3/12	20%	口縁帯2段・櫛幟目強い	放射擂り目重複　下部摩滅	－	－	底部欠損	瀬戸美濃系	1780～1820
69	A-1	3	検出面		P-169	陶器	中瓶	肩張形	灰茶	ロクロ	鉄釉(錆)	2.9	－	－	－	57.4	12/12	20%	釉掛け・指跡あり	片身掛け	－	－	口縁部～肩部残存	瀬戸美濃系	1780～1860
70	A-1	3	検出面		P-169	陶器	中瓶	瓢形	灰黄	ロクロ	鉄釉(錆)	2.0	－	－	－	47.3	4/12	20%	釉掛け	口縁のみに釉掛け	－	－	口縁部～胴上半残存・2片	瀬戸美濃系	1780～1860
71	A-1	3	検出面		P-169	陶器	鉢	無高台	灰黄	ロクロ	灰釉	－	11.6	－	－	115.0	3/12	?	胴部下半まで釉掛け	釉掛け	釉掛け	削り	底部被熱?	京・信楽系	1780～1860
72	A-1	3	検出面		P-169	陶器	中碗	丸形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	－	5.6	－	－	103.6	12/12	30%	釉掛け	釉掛け	釉掛け	畳付残し釉掛け	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1650～1690
73	A-1	3	検出面		P-169	半磁器	芯入	筒形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	4.8	－	－	－	19.5	3/12	20%	樹木文?口縁欠け	口縁のみに釉掛け	－	－	底部欠損・灰吹に転用?	波佐見系	1650～1740
74	A-1	3	検出面		P-169	陶器	中碗	塩笥形	黄白	ロクロ	鉄絵・茶泥・透明釉	10.4	－	－	－	41.3	3/12	20%	茶泥面分掛け・樹木文	透明釉(虹彩)	－	－	高台欠損・京焼系(粟田焼?)	京・信楽系	1740～1800
75	A-1	3	検出面		P-169	磁器	小杯	浅半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	5.1	1.6	2.8	－	9.1	5/12	40%	若杉文	－	－	－	－	肥前系	1740～1780
76	A-1	3	検出面		P-169	磁器	中碗	丸形玉縁形	白	ロクロ	呉須・透明釉	14.6	－	－	－	72.7	4/12	30%	樹花文	草花文	－	－	高台欠損	肥前系	1780～1860
77	A-1	3	検出面		P-169	磁器	火入	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.8	－	－	－	22.8	3/12	15%	瑤珞繋ぎ文	四方襷　文様より下露胎	－	－	胴部下半～底部欠損	肥前系	1780～1860
78	A-1	3	検出面		P-169	半磁器	中碗	丸形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	－	5.0	－	－	72.8	6/12	20%	波文	－	－	畳付残し釉掛け	口縁部欠損	波佐見系	1680～1740
79	A-1	3	検出面		P-169	磁器	中瓶	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.7	3.6	5.6	－	144.7	12/12	70%	蛇行唐草・花(彫り有)	半四方襷文	壽字文	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
80	A-1	3	検出面		P-169	磁器	鬢油壺	丸形	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	2.2	－	－	－	39.8	8/12	40%	梅樹・雪持笹文	口縁のみに釉掛け	－	－	胴部下半～底部欠損	波佐見系	1750～1810
81	A-1	3	検出面		P-169	磁器	小皿	－	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	8.2	－	－	92.1	7/12	50%	横線	二重圏線外蛸唐草文	五弁花文	圏線内二重角福	口縁部欠損	肥前系	1690～1740
82	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	陶器	極小皿	杉形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.4	－	*2.0	－	9.4	3/12	10%	折れ松葉?	帯線	圏線内に山水文	－	高台欠損	瀬戸美濃系	1800～1860
83	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.0	－	*4.2	－	18.8	2/12	20%	瑤珞繋ぎ文	瑤珞繋ぎ文	－	－	高台欠損	肥前系	1750～1810
84	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	磁器	合子　蓋	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	4.9	4.9	1.2	－	18.1	7/12	70%	雷文・丸	身接地部以外釉掛け	瑤珞繋ぎ円環文	－	－	肥前系	1780～1860
85	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	磁器	中碗	半球形	濁し白	ロクロ	透明釉・上絵(赤)	－	4.7	*3.1	－	56.7	9/12	40%	横線	－	梅樹文	－	口縁部欠損・柾右衛門手	肥前系	1690～1780
86	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	磁器	段重	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.4	－	*3.5	－	29.1	5/12	30%	七宝繋ぎ・花唐草文	口縁のみ無釉	－	－	底部欠損	肥前系	1780～1860
87	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	陶器	小碗	半球形	灰茶	ロクロ削高台	灰釉・上絵(緑)	9.9	3.4	5.1	－	61.0	12/12	40%	草花	－	－	－	－	京・信楽系	1780～1860
88	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	磁器	火入	筒形	灰白	ロクロ　蛇の目高台	青磁釉	9.4	7.2	7.1	－	149.4	6/12	45%	青磁釉	口縁のみに釉掛け	露胎	蛇の目凹形高台	－	肥前系	1780～1860
89	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.8	3.6	5.2	－	56.6	4/12	40%	菊花文	列点入り帯線	二重圏線内文様	－	－	肥前系	1780～1860
90	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	陶器	小鉢	姥口形	暗灰	ロクロ	土灰釉(青く窯変)	8.0	－	*2.9	－	7.9	3/12	15%	釉薬点状露胎　不安定	釉薬点状露胎　不安定	－	－	胴部下半～底部欠損	松代系	1810～1860
91	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	陶器	中瓶	瓢形	灰黄	ロクロ削高台	鉄釉(柿色)灰釉肩に流し	－	9.2	*10.4	－	82.2	3/12	30%	鉄釉(柿色)灰釉肩に流し	露胎	露胎	べた底高台	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1780～1860
92	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184/184/198	陶器	小碗	端反形	灰黄	ロクロ	灰釉・瑠璃釉	10.0	3.7	5.5	－	129.3	12/12	95%	口縁のみに瑠璃釉	口縁のみに瑠璃釉	内面茶渋?付着	－	－	瀬戸美濃系	1800～1860
93	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	陶器	小鉢?	－	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	－	5.7	*6.4	－	114.1	12/12	?	高台付近まで施釉	一部露胎	粉殻圧痕・高台溶着痕あり	－	口縁部欠損	瀬戸美濃系	1780～1860
94	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184/169	陶器	小碗	杉形	灰黄	ロクロ削高台	鉄絵・灰釉	9.2	3.9	5.7	－	78.8	12/12	55%	若杉文	－	－	露胎	－	京・信楽系	1740～1780
95	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	陶器	蓋	皿形	灰黄	ロクロ貼付け　糸切り	灰釉	10.0	4.4	2.3	3.1	59.8	12/12	65%	口縁に釉掛け	全面施釉	熨状取っ手貼り付け	回転糸切り	－	瀬戸美濃系	1780～1860
96	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-198	陶器	仏飯器	台底孔形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	7.2	4.4	5.0	－	68.5	12/12	70%	台部半分まで施釉	施釉	砂溶着痕	回転状調整	－	瀬戸美濃系	1680～1780
97	A-1	3	2号遺構	性格不明	P-181	陶器	中碗	杉形	橙灰	ロクロ削高台	鉄絵・灰釉	10.7	4.9	6.5	－	135.5	12/12	70%	若杉文(丁寧な描写)	－	－	露胎	－	京・信楽系	1740～1800
98	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	陶器	蓋	凹気味平形	黄褐・長石粒	ロクロ	灰釉・自然釉	10.8	5.5	1.5	2.2	48.1	8/12	65%	釉薬玉垂れ・表面赤化	灰釉・自然釉・砂付着	円盤状取っ手	削り	水指の蓋?	信楽系	17c
99	A-1	3	検出面	重機	P-167	陶器	仏花器	尊形	灰黄	ロクロ糸切り	鉄釉・灰釉	－	6.4	－	－	87.7	12/12	20%	鉄釉(柿色)	灰釉	灰釉	回転糸切	台部より上欠損	瀬戸美濃系	1780～1800
100	A-1	3	検出面	重機	P-167	陶器	花盆	浅鉢形足付き	白灰	ロクロ貼付け	灰釉・鉄釉	15.4	12.2	5.7	－	147.1	3/12	25%	三本巻・側面押圧・一部鉄釉	口縁のみに釉掛け	露胎	台状脚貼り付け	－	京・信楽系	1780～1860
101	A-1	3	検出面	重機	P-167	陶器	中碗	丸形	灰黄	ロクロ	灰釉	－	5.7	－	－	130.6	12/12	30%	高台付近まで施釉	－	灰釉	畳付残し釉掛け	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1680～1770
102	A-1	3	検出面	重機	P-167	磁器	小瓶	鶴首形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	1.6	－	－	－	46.1	12/12	60%	松竹梅文・立線	口縁のみに釉掛け	－	－	底部欠損	瀬戸美濃系	1800～1860
103	A-1	3	検出面	重機	P-167	磁器	小碗	端反形	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	7.6	3.6	5.2	－	41.6	7/12	60%	山水文	－	－	－	－	肥前系	1690～1780
104	A-1	3	検出面		P-169	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	6.9	3.3	5.2	－	45.7	7/12	70%	コンニャク印草花文	－	－	－	－	肥前系	1690～1740
105	A-1	3	検出面	重機	P-167	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.2	3.6	5.4	－	87.0	12/12	50%	ススキ・三角市松・虫	二本線	圏線内に虫文	－	－	肥前系	1780～1840
106	A-1	3	検出面	重機	P-167	磁器	小皿	丸深皿形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	14.6	9.4	4.4	－	188.1	8/12	50%	唐草文	半菊花・松波文	丸十字花文(鱗文地)	蛇の目畳付高台内二重角福	－	肥前系	1740～1800
107	A-1	3	検出面	重機	P-167	磁器	小皿	－	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	6.0	－	－	60.3	12/12	40%	－	－	太胡石に柿?梅花文	－	口縁部欠損	肥前系	1780～1860
108	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	半筒形	灰黄	ロクロ	"長石釉・上絵(緑,黒)"	*8.8	－	－	－	35.9	3/12	25%	蓮葉文	－	－	－	高台欠損	京焼系	1800～1860
109	A-2	3	検出面		P-171	陶器	小壺	丸形	灰	型押し	白泥・鉄泥・透明釉	*4.2	－	－	－	3.8	3/12	25%	綾杉陽刻地に白・銀イッチン	指擦り付け痕	－	－	胴部下半～底部欠損	関西系	1800～1860
110	A-2	3	検出面		P-171	陶器	小碗	半球形	灰白	ロクロ	"灰釉・上絵(黒,緑・黄・茶)"	－	－	－	－	47.3	5/12	30%	菊花文	－	－	－	口縁・高台欠損	京・信楽系	1780～1860
111	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	半球形	赤褐	ロクロ削高台	白泥・鉄絵・透明釉	*9.1	*4.0	5.0	－	11.4	2/12	25%	鉄絵・白泥で梅花文	釉掛け	釉掛け	畳付残し釉掛け	薄手・肥前陶土?	京焼系	1780～1860
112	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	腰折形	灰茶	ロクロ削高台	"鉄絵・灰釉・上絵(茶,緑)"	9.1	3.9	5.0	－	56.9	12/12	50%	鉄絵・上絵付で竹文	－	上絵で松葉文三つ	無施釉	－	京・信楽系	1740～1800
113	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	腰折形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉・上絵(緑・黄茶?)	9.0	3.4	5.1	－	64.3	8/12	50%	菊花文	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1740～1800
114	A-2	3	検出面		P-171	陶器	小碗	筒形	灰黄	ロクロ削高台	白泥・透明釉・上絵(緑・赤)	－	4.2	－	－	92.1	12/12	35%	白泥地に釉掛け・上絵	－	白泥地に釉掛け	無施釉・化粧土一部露出	口縁部～胴上半欠損	京焼系	1700～1800
115	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	半球形	灰白	ロクロ	灰釉・鉄絵	*9.8	－	－	－	43.5	4/12	35%	折れ松葉・松葉文	－	－	－	高台欠損	京・信楽系	1780～1860
116	A-2	3	検出面		P-168	陶器	中碗	丸形	赤灰・粗い粒子	ロクロ削高台	鉄釉(飴・緑味)	－	4.4	－	－	76.1	12/12	50%	高台付近まで施釉・玉垂れ	－	虹彩	無施釉	口縁部欠損 古唐津等し?	不明	1800～1860
117	A-2	3	検出面		P-170	焼締	急須	－	暗紫茶	ロクロ貼付け	(内面鉄釉)	－	－	－	－	13	2/12	15%	無施釉・指圧調整痕あり	内面鉄釉　水出口孔3	－	－	注口以外大量　中国宜興窯写し	常滑系	1800～
118	A-2	3	検出面		P-170	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	*8.2	*3.5	4.1	－	26.5	5/12	35%	牡丹文	二本線	二重圏線内文様	－	－	関西系	1800～1860
119	A-2	3	検出面		P-171/169	陶器	燭徳利	筒形	灰・白粒子	ロクロ	白泥・透明釉・胴緑釉	－	6.0	－	－	72.5	12/12	40%	白泥地に釉掛け・上部胴緑釉掛け	鉄泥	一部灰釉	無施釉・化粧土一部露出	口縁部欠損	松代系	1810～1860
120	A-2	3	検出面		P-168	陶器	捏鉢	－	灰・白粒子	ロクロ	白泥・鉄釉(飴・緑味)	－	9.0	－	－	176.7	12/12	20%	白泥地に釉掛け	－	重ね積み目跡3	全面に化粧土掛かる	口縁部～胴部欠損	松代系	1810～1860

表7　土器・陶磁器観察表（3）

実測番号	出土地点 区	面	遺構番号	性格	遺物番号	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量 a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	残存率 径	全体	調整・文様・その他 外面	内面	見込	高台内	所見 特記事項	推定産地	推定年代
121	A-2	3	検出面		P-171	磁器	小碗	半球形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	8.0	3.0	5.1	－	51.0	5/12	40%	丸文散らし	－	壽字文	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
122	A-2	3	検出面		P-168	磁器	小碗	端反形	白・黒粒	ロクロ	呉須・透明釉	9.6	4.0	5.1	－	19.8	4/12	30%	山水文	帯線	圏線内に文様	－	－	瀬戸美濃系	1800～1860
123	A-2	3	検出面		P-168	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.2	3.2	5.6	－	33.4	3/12	25%	太胡石に花文	二本線	圏線	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
124	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	腰折形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉・銅緑釉	9.7	4.0	5.0	－	100	12/12	70%	灰釉に一部銅緑釉施釉	釉掛け	釉掛け	骨付残し釉掛け	－	瀬戸美濃系	1740～1800
125	A-2	3	検出面		P-170	陶器	小碗	腰張形	灰	ロクロ ローラー刻印	鉄釉(濃・淡)	8.0	3.8	5.1	－	93.8	12/12	70%	胴下部に横列点刻印	鉄釉(濃)	鉄釉(濃)	骨付以外鉄釉(淡)	－	瀬戸美濃系	1780～1840
126	A-2	3	検出面		P-168	陶器	蓋	皿形	灰	ロクロ貼付け	灰釉	5.7	3.3	1.4	－	28.0	12/12	90%	粗い削り痕	施釉	楕状取っ手貼り付け	回転糸切	－	瀬戸美濃系	1680～1780
127	A-2	3	検出面		P-170	陶器	銭甕	半胴形	灰黄	ロクロ	鉄釉	17.4	－	－	－	329.1	5/12	30%	胴部下半まで釉掛け	釉掛け	－	－	底部欠損・二次被熱	瀬戸美濃系	1740～1780
128	A-2	3	検出面		P-168	陶器	植木鉢	折縁形	灰黄	ロクロ	鉄釉	33.2	－	－	－	498.9	3/12	20%	釉掛け	口縁のみに釉掛け	－	－	胴部下半～底部欠損	瀬戸美濃系	1800～
129	A-2	3	検出面		P-170	陶器	植木鉢	実測対象外								115.1							No.231と同一型式	瀬戸美濃系	
130	A-2	3	検出面		P-168/165	陶器	中瓶	べこかん形	灰茶	ロクロ	灰釉	－	6.8	－	－	325.7	12/12	30%	底部付近まで施釉 三方固	施釉	叩打・削り穿孔	底部穿孔	口縁部～胴上半欠損	信楽系	1780～1860
131	A-2	3	検出面		P-168	陶器	擂鉢	平底	灰茶	ロクロ糸切り	薄い鉄彩	－	12.0	－	－	233.3	4/12	20%	一部鉄彩残存	放射擂り目下部摩滅	回転刷毛目・擂り目	回転糸切	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1680～1780
132	A-2	3	検出面		P-171	陶器	擂鉢	実測対象外								1233	12/12	40%					No.230と同一型式	肥前系	1750～1860
133	A-2	3	検出面		P-170	陶器	捏鉢	平底周囲高台付形	赤褐	ロクロ貼付け	鉄釉	－	13.6	*3.7	－	101.7	2/12	10%	底周囲に高台貼り付け	－	放射擂り目・重複	全面に施釉	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1690～1750
134	A-2	3	検出面		P-168/167/219	磁器	仏花器	鼓胴形盤口?	灰白	ロクロ貼付け	青磁釉	－	7.6	*14.7	－	377.8	12/12	50%	薬椿文貼付け	無施釉	無施釉	骨付残し釉掛け	口縁部欠損	波佐見系	1750～1860
135	A-2	3	検出面		P-171	磁器	小瓶	下蕪形	白	ロクロ	呉須・透明釉	1.8	－	*13.7	－	66.8	12/12	40%	花唐草文	口縁のみに釉掛け	－	－	－	肥前系	1690～1780
136	A-2	3	検出面		P-170	磁器	小瓶	下蕪形	白	ロクロ	呉須・透明釉	1.6	5.2	11.6	－	72.0	6/12	55%	蛸唐草文	口縁～肩部のみに釉掛け	－	－	－	肥前系	1580～1610
137	A-2	3	検出面		P-170/131	磁器	小杯	丸形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	7.6	2.7	4.1	－	61.5	12/12	70%	笹文	－	－	露胎部赤化	－	波佐見系	1680～1780
138	A-2	3	検出面		P-168	磁器	小杯	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	7.8	2.6	3.7	－	19.2	12/12	35%	松葉文	－	－	－	－	肥前系	1690～1780
139	A-2	3	検出面		P-168	磁器	小杯	丸形	灰白	ロクロ	透明釉	7.4	2.9	3.7	－	51.1	12/12	50%	釉掛け	釉掛け	重ね積み跡?円形に付着	－	－	波佐見系	1680～1780
140	A-2	3	検出面		P-170	磁器	小杯	端反形	灰白	ロクロ	透明釉	6.6	3.0	3.7	－	22.1	8/12	30%	釉掛け	釉掛け	－	骨付残し釉掛け	－	波佐見系	1680～1740
141	A-2	3	検出面		P-171	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉・上絵(赤,緑,黒,金)	8.6	－	*5.2	－	38.0	7/12	40%	窓絵に梅・唐花・花菱	四方襷	二重圏線	－	高台欠損	肥前系	1750～1810
142	A-2	3	検出面		P-171	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.6	－	*4.8	－	36.3	5/12	35%	若葉文三角並び	二本線	二重圏線	－	高台欠損	肥前系	1750～1810
143	A-2	3	検出面		P-168	磁器	合子　碗	丸形無高台	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.6	3.6	4.3	9.2	47.8	6/12	50%	凸口縁無釉蓮弦繋ぎ文	施釉	－	円状に無釉	－	肥前系	1780～1860
144	A-2	3	検出面		P-168/102	磁器	蓋	浅鉢形足付き	白	ロクロ	呉須・透明釉	13.4	15.8	*1.95	－	28.8	4/12	30%	微塵唐草文	碗接地部無釉	－	－	上部欠損	肥前系	1780～1860
145	A-2	3	検出面		P-170	磁器	大皿	輪花形	白	ロクロ型打ち	呉須・透明釉・上絵(赤,黒,金)	－	－	*3.0	－	35.7	1/12	?	唐草文?	唐花文・格子文・唐子文	－	－	口縁以外欠損	肥前系	1690～1780
146	A-2	3	検出面		P-168	磁器	極小皿	丸形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	9.8	6.4	1.8	－	67.0	7/12	65%	丸文山線繋ぎ	－	朝顔文	蛇の目凹形高台	－	肥前系	1780～1860
147	A-2	3	検出面		P-168	磁器	中鉢	－	白	ロクロ型打ち	透明釉	－	8.5	*4.0	－	183.4	12/12	40%	釉掛け	花びら隅刻	菊花隅刻	－	口縁部欠損	肥前系	1690～1780
148	A-2	3	検出面		P-170	磁器	小鉢	輪花形	白	ロクロ型打ち	呉須・透明釉	14.4	7.0	5.2	－	90.0	12/12	40%	唐草文?	－	松・松ぼっくり	－	－	肥前系	1690～1780
149	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中碗	呉器形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	－	5.2	－	－	62.6	4/12	30%	釉掛け(部分的にうのふ)	釉掛け	釉掛け	骨付残し釉掛け	口縁部欠損	肥前系	1650～1690
150	A-3	3	検出面		P-177	陶器	小鉢	腰折玉縁形	暗紫茶	ロクロ	白泥・透明釉・胴緑釉	14.0	－	－	－	18.5	2/12	15%	口縁に化粧土・釉掛け	口縁に化粧土・釉掛け	－	－	底部欠損	肥前系	1690～1780
151	A-3	3	検出面		P-177	陶器	小碗	筒形	赤褐	ロクロ削高台	鉄釉	－	4.0	－	－	25	3/12	15%	高台付近まで施釉	－	釉掛け	表面風化	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1610～1650
152	A-3	3	検出面		P-177	陶器	土瓶	算盤形	赤褐	ロクロ貼付け	鉄釉・灰釉	8.0	－	－	－	27.9	2/12	15%	鉄釉	灰釉	－	－	胴部下半～底部・注口欠損	肥前系	1750～1860
153	A-3	3	検出面		P-175	陶器	鉢	玉縁口縁	橙灰	ロクロ	白泥・透明釉	23.0	－	－	－	34	2/12	10%	胴部に刷毛目	口唇無釉	－	－	胴部～底部欠損	肥前系	1650～1740
154	A-3	3	検出面		P-177	陶器	蓋	平形　宝珠つまみ	褐色	手づくね成形	白泥・透明釉	1.8	3.0	1.7	－	9.2	12/12	100%	化粧土上に釉掛け	無施釉	宝珠つまみ	環状凸形	茶入の蓋か	京焼系	18ｃ～19ｃ
155	A-3	3	検出面		P-177	陶器	小碗	半球形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉・上絵(緑・茶)	9.2	2.8	5.9	－	72.1	6/12	50%	柳葉文	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1780～1860
156	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中碗	半球形	灰黄	ロクロ削高台	呉須・鉄絵・透明釉	11.0	4.0	7.1	－	204.3	12/12	70%	松文	－	－	無施釉	－	京・信楽系	1780～1860
157	A-3	3	検出面		P-177	陶器	大瓶	－	赤褐・粗い粒子	板起こし・ロクロ	鉄釉・うのふ釉	－	11.6	－	－	205.3	5/12	?	全面に施釉	鉄泥	自然釉落ち	砂・貝目跡	底部のみ残存	越前系	18ｃ～19ｃ
158	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中瓶	実測対象外								29.5								在地系?
159	A-3	3	検出面		P-177	陶器	擂鉢	実測対象外								101.2							No.220と同一型式	松代系	1810～
160	A-3	3	検出面		P-175	陶器	擂鉢	実測対象外								181.6							No.220と同一型式	松代系	1810～
161	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中甕	口縁外反形	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉・灰釉	26.2	－	－	－	67.4	1/12	?	口縁下横櫛描文・灰釉掛け	鉄釉(濃)	－	－	口縁以外欠損	松代系 天王山窯	1810～1820
162	A-3	3	検出面		P-177	陶器	鉢	実測対象外								105.3								松代系	1810～1820
163	A-3	3	検出面		P-177	陶器	鉢	実測対象外								166.0								松代系	1810～1820
164	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中瓶	－	暗茶・白粒子	ロクロ	白釉・銅緑釉	－	8.4	－	－	246.6	12/12	10%	頸部に銅緑釉流し	無施釉	無施釉	骨付残し釉掛け・指跡有	底部残存・上部破片5点	松代系　寺尾名雲窯	1810～1820
165	A-3	3	検出面		P-175	磁器	中碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10	3.5	5.5	－	58.2	8/12	50%	山水・赤壁之賦文	二本線	圏線内に岩波文	－	－	肥前系	1800～1860
166	A-3	3	検出面		P-175	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.2	3.2	5.1	－	24.0	3/12	25%	線書き菊花文	二本線	圏線内に文様	－	－	肥前系	1780～1860
167	A-3	3	検出面		P-177	磁器	大碗	丸形	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	－	6.2	*6.0	－	142.2	6/12	20%	草花・扇文	－	二重圏線内コンニャク印玉手花文	圏線内記銘	口縁部欠損	波佐見系	1680～1860
168	A-3	3	検出面		P-177	磁器	小碗	丸形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	8.2	－	*3.6	－	20.1	4/12	25%	柳文	－	－	－	高台欠損	肥前系	1690～1740
169	A-3	3	検出面		P-177	磁器	小杯	端反形	白	ロクロ	透明釉	6.8	2.7	3.7	－	31.3	12/12	50%	釉掛け	釉掛け	釉掛け	骨付に砂付着	－	肥前系	1690～1740
170	A-3	3	検出面		P-177	磁器	大皿	高台高丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	15.4	*3.0	－	83.1	3/12	20%	蛸唐草文(外形線描き)	－	八つ手葉文	圏線	口縁部欠損	肥前系	1650～1690
171	A-3	3	検出面		P-175	磁器	小皿	高台小丸形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	14.4	8.7	3.9	－	212.4	9/12	65%	唐草文	圏線外・雲輪・草文	丸内草花文	蛇の目骨付高台内二重角巣	蛇の目部に砂付着	肥前系	1780～1860
172	A-3	3	検出面		P-177	磁器	段重	筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	13.2	9.4	5.4	－	72.0	3/12	30%	菱窓絵に福寿山水梅	口唇無釉	－	重ね部無釉	焼継ぎ痕あり	肥前系	1800～1860
173	A-3	3	検出面		P-175	磁器	蓋物	胴締形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.2	－	*5.5	－	25.0	2/12	20%	縦縞列点・丸文	口唇無釉	－	－	高台欠損	肥前系	1780～1860
174	B-1	1			P-200	磁器	鉢	実測対象外								47.7								肥前系	
175	A-3	3	検出面		P-175	磁器	猪口	桶形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	7.2	5.4	6.8	－	27.5	3/12	25%	太胡石に竹文	四方襷	二重圏線	蛇の目凹形高台?	－	肥前系	1780～1820
176	A-3	3	検出面		P-175	磁器	猪口	輪花桶形	白	ロクロ型打ち	透明釉	－	5.0	*3.85	－	19.0	4/12	20%	縦縞印刻	縦縞印刻	－	－	口縁部欠損	肥前系	1650～1690
177	A-3	3	検出面		P-175	磁器	火入	丸底形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	－	6.4	*4.8	－	79.7	6/12	25%	梅樹文	無施釉	無施釉	蛇の目凹形高台	口縁以外欠損	肥前系	1780～1860
178	A-3	3	検出面		P-177	磁器	火入	筒形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉・青磁釉	10.2	8.2	7.3	－	48.5	2/12	20%	上青磁釉・下呉須絵(鳳凰雲草)	口縁のみに釉掛け	無施釉・砂付着	蛇の目凹形高台(幅広)	－	肥前系	1800～1860
179	A-3	3	検出面		P-175	磁器	小碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	8.6	3.4	4.8	－	33.4	3/12	30%	山水文	帯線	二重圏線	骨付凹状・砂付着	－	瀬戸美濃系	1800～1860
180	A-3	3	検出面		P-177	半磁器	小碗	半球形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	8.0	－	*4.1	－	9.4	2/12	10%	竹文	帯線	－	－	高台欠損	瀬戸美濃系	1780～1820

表8　土器・陶磁器観察表（4）

実測通番	出土地点					類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量					残存率		調整・文様・その他				所見		
	区	面	遺構番号	性格	遺物番号							a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	径	全体	外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代
181	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中瓶	-	灰茶	ロクロ	灰釉	-	8.4	*3.9	-	42.5	2/12	?	灰釉に一部自然釉?	無施釉	叩打・削り穿孔	回転削り穿孔	底部残存・破損後転用か	京・信楽系	1800～1860
182	A-3	3	検出面		P-177	陶器	鉢	実測対象外								107.9							No. 71と同一型式	京・信楽系	
183	A-3	3	検出面		P-177	陶器	中碗	腰張形	灰黄	ロクロ	灰釉	-	5.0	*4.6	-	104.9	12/12	30%	釉掛け	釉掛け	釉掛け	畳付残し釉掛け	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1680～1770
184	A-3	3	検出面		P-177	陶器	大瓶	実測対象外								132.5							No. 157と同一型式		
185	A-3	3	検出面		P-175/185	陶器	中碗	半球形	灰黄	ロクロ削高台	鉄釉(柿色)灰釉流し	10.5	3.8	6.2	-	182.6	12/12	95%	全面に施釉・口縁付近に灰釉掛け	釉掛け	釉掛け	畳付残し釉掛け	-	瀬戸美濃系	1740～1800
186	A-3	3	検出面		P-177	陶器	碗	-	白	ロクロ 蛇の目畳付高台	鉄釉	-	5.1	*2.35	-	81.5	12/12	25%	高台付近まで施釉	-	釉掛け	蛇の目畳付高台内施釉	口縁部～胴上半欠損	瀬戸美濃系	1610～1670
187	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	磁器	中碗蓋	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.0	3.4	2.5	-	27.7	12/12	35%	微塵唐草文	四方襷	二重圏線内蘭状松竹梅文	圏線内「成化年製」	-	肥前系	1820～1860
188	B-2	3	検出面		P-218	磁器	小碗	半筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	-	3.9	*4.5	-	53.7	12/12	30%	松文	-	二重圏線内五弁花文	高台外に雨龍	口縁部欠損	肥前系	1750～1810
189	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.8	3.2	5.4	-	35.1	2/12	25%	瑤珞繋ぎ文	帯線	二重圏線内文様	-	-	肥前系	1780～1860
190	B-2	3	4号遺構	土坑	P-233	磁器	小鉢	輪花形	白	ロクロ型打ち	呉須・透明釉・上絵(赤,緑,黒,金)	-	-	4.9	-	58.3	3/12	30%	青玉・瑤珞文	金襴手(花菱・唐花)	-	圏線	土坑外破片含み六片	肥前系	1690～1780
191	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	磁器	中碗	広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	-	7.1	*2.5	-	91.6	9/12	20%	高台に玉波文	-	圏線内に十字花文	圏線内「宣徳年製」	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1780～1820
192	B-2	3	検出面		P-218	磁器	中碗	実測対象外								95.2	12/12	20%	高台に玉波文	-	圏線内に卍字花文	圏線内「大明年製」	No. 191と同一型式	肥前系	1780～1820
193	B-2	3	検出面		P-218	磁器	極小皿	菊花形輪花	白	型押し貼付け	透明釉	8.1	4.4	1.9	-	39.5	12/12	100%	-	菊花形刻印	環状刻印	-	-	肥前系	1680～1740
194	B-2	3	検出面		P-228	磁器	小皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	-	7.7	*2.7	-	85.1	8/12	40%	唐草文	二重圏線外唐花文	コンニャク印五弁花文	圏線内「大明年製」	口縁部欠損	肥前系	1690～1780
195	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	磁器	小碗蓋	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	8.0	3.2	2.2	-	21.1	6/12	50%	山水人物文	-	岩波文	-	-	肥前系	1800～1860
196	B-2	3	検出面		P-230	磁器	蓋	平形	白	ロクロ	呉須・透明釉	5.2	6.6	1.7	1.1	10.0	2/12	25%	蛸唐草文	身接地部に砂付着	円形つまみ	施釉	-	肥前系	1780～1860
197	B-2	3	検出面		P-220	磁器	極小皿	扇形	白	型押し貼付け	呉須・鉄彩・透明釉	7.5	4.9	1.5	2.6	12.3	12/12	80%	口唇に鉄彩	-	コンニャク印唐花文	扇形貼り付け高台	-	肥前系	1690～1780
198	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	磁器	小皿	高台付深皿形	白	ロクロ 蛇の目高台	呉須・透明釉	-	9.0	*2.1	-	96.1	6/12	25%	蛸唐草文	環状波状文	環状松竹梅文	蛇の目回形高台内成化年製	口縁部欠損	肥前系	1740～1860
199	B-2	3	検出面		P-227	陶器	灯明受皿	実測対象外								31.5							No. 201と同一型式	不明	
200	B-2	3	検出面		P-227	陶器	中碗	杉形	灰黄	ロクロ削高台	灰釉	11.0	4.7	6.0	-	96.4	11/12	60%	高台付近まで施釉	釉掛け	釉掛け	無施釉・中央に濃巻きさ	二次被熱受ける	京・信楽系	1740～1800
201	B-2	3	検出面		P-218	陶器	灯明受皿	油溝切立碁笥底	灰黄	ロクロ削高台	黄釉・うのふ釉	7.2	3.5	2.2	-	86.9	7/12	60%	口縁・皿外部無釉	釉掛け・部分的にうのふ釉	釉掛け・部分的にうのふ釉	無施釉・中央に碁笥底	-	瀬戸美濃系	1800～1860
202	B-2	3	検出面		P-220	陶器	中瓶	玉壺春形	灰	ロクロ削高台	白泥・鉄釉・灰釉	-	6.8	*18.2	-	222.2	6/12	45%	首に鉄釉・胴部刷毛目灰釉	口縁のみに鉄釉	無施釉	高台内に施釉	口縁部欠損・二次被熱	肥前系	1690～1780
203	B-2	3	検出面		P-227	陶器	鉢	折縁形	赤褐	ロクロ削高台	白泥・灰釉	-	-	*3.8	-	24.6	1/12	?	胴部下半まで釉掛け	櫛刷毛目	-	-	口縁部のみ	肥前系	1650～1690
204	B-2	3	1号遺構	溝状遺構	P-229	陶器	捏鉢	玉縁口縁	暗灰・白粒子	ロクロ 蛇の目高台	白泥・灰釉・銅緑釉	24.2	13.4	12.0	-	398.5	6/12	20%	口縁のみに銅緑釉掛け	口縁内部に溶着痕	重ね積み目跡	全面に化粧土掛かる	口縁・底部破片2点	松代系 荒神町窯系	1820～1860
205	B-2	3	検出面		P-220	軟陶	香立	碗形	肌色	手づくね成形	鉛釉	3.8	2.3	1.6	-	12.6	9/12	75%	指成形跡	施釉	直線状香立に孔	無施釉	-	京焼系	1800～
206	B-2	3	検出面		P-227	ガラス	ガラス瓶	-	淡緑青色	吹き型?	金彩痕?	-	-	*0.8	-	2.6	4/12	?	蓮華文・花文残し銀化	銀化薄い	-	-	-	江戸系	1800～1860
207	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223/200/195	磁器	小皿	浅丸形	白	ロクロ 蛇の目高台	呉須・透明釉	12.3	6.9	2.3	-	116.3	12/12	60%	波・泡文	波文	圏線・鯉文	蛇の目回形高台	焼継ぎ痕あり	肥前系	1800～1860
208	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-191/197	磁器	中鉢	半筒形	白	ロクロ 蛇の目高台	鉄彩・透明釉	11.5	7.9	8.1	-	230.3	12/12	50%	中央に鉄彩横線	釉掛け	釉掛け	蛇の目回形高台	-	肥前系	1800～
209	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	小瓶	梅瓶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	-	-	4.6	-	95.1	12/12	50%	蛸唐草文	無施釉	無施釉	畳付残し釉掛け	口縁部～胴上半欠損	肥前系	1780～1860
210	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	小瓶	梅瓶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	2.3	-	-	7.2	55.8	12/12	40%	蛸唐草文	口縁のみに釉掛け	-	-	胴部～底部欠損	肥前系	1780～1860
211	B-1	3	検出面	2号遺構下層		磁器	中碗蓋	実測対象外								17.0			-				No. 187と同一型式	肥前系	
212	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	透明釉・上絵(赤,黄)	-	3.3	-	-	25.6	8/12	30%	鼓文・松皮菱窓絵	-	-	-	口縁部欠損	肥前系	1780～1860
213	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-200/223	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ 蛇の目畳付高台	呉須・透明釉	8.1	3.5	3.6	-	50.3	7/12	60%	花文・亀甲繋ぎ文	二本線	二重圏線内「大明年製」	蛇の目畳付高台内施釉	同一個体2点	瀬戸美濃系	1840～1870
214	B-1	3	2号遺構	石組溝	P-197	磁器	小碗	筒丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	6.6	3.5	3.6	-	50.6	12/12	50%	三日月文	二本線	-	-	-	瀬戸美濃系	1840～1870
215	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-226	磁器	小瓶	高台付き外反口縁	白	ロクロ削高台	呉須・透明釉	1.8	2.4	6.3	-	40.8	12/12	100%	梅鉢文・草文	無施釉	-	無施釉	-	瀬戸美濃系	1800～1860
216	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	極小皿	四方隅切形	白	型押し貼付け	呉須・鉄彩・透明釉	7.2	3.2	2.3	-	32.0	4/12	30%	口唇に鉄彩	泡波文印刻に呉須掛け	山水文印刻に呉須掛け	-	-	瀬戸美濃系	1870～1890
217	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	小鉢	丸形 口縁八角	白	ロクロ型打ち	呉須・透明釉	12.3	7.4	5.5	-	138.4	4/12	40%	泡波文・雲文	口唇に雲文	松竹梅文	蛇の目回形高台(赤化)	破片2点	関西系	1840～
218	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	土瓶	算盤形	灰黄	ロクロ貼付け	錆釉	6.3	6.8	8.3	-	334.8	12/12	85%	鍋上半に横櫛目	釉掛け	釉掛け	無施釉・三足粒・鉉刻印	底部煤付着のため刻銘不明	瀬戸美濃系	1780～1860
219	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	焼締	植木鉢	三足折縁形	橙灰	型成形 輪轆調整	－	26.4	13.5	15.7	-	550.2	3/12	25%	壽丸陽刻・区画文	-	重ね積み目跡	如意雲形足	破片2点	京・信楽系	1800～
220	B-1	3	2号遺構	石組溝	P-197	陶器	擂鉢	高台付き	暗茶・白粒子	ロクロ削高台	鉄釉	-	19.4	-	-	1824	8/12	50%	釉掛け	放射擂り目 団子状砂目跡	放射擂り目	団子状砂目跡	口縁部欠損	松代系	1810～1860
221	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-191/200/223	磁器	植木鉢	玉縁口縁	暗灰・白粒子	ロクロ	灰泥・銅緑釉	23.2	14.5	13.8	-	502.1	5/12	30%	灰泥地に銅緑釉	鉄釉製品溶着痕	中央に孔・鉄釉製品溶着痕	全面に化粧土掛かる	-	松代系 荒神町窯系	1820～1860
222	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	鉢	高台付き	赤褐	ロクロ削高台	白泥・銅緑釉	-	8.6	-	-	93.5	4/12	10%	白泥に胴部下半まで銅緑釉	-	白泥	白泥	口縁部～胴上半欠損	松代系 荒神町窯系	1820～1860
223	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	磁器	小鉢	玉縁口縁	暗灰・白粒子	ロクロ削高台	白釉・銅緑釉	15.4	7.8	7.3	-	126.7	3/12	25%	白釉・口縁部に銅緑釉	白釉・口縁部に銅緑釉	点状目跡あり	無施釉	片口鉢の可能性あり	松代系 荒神町窯系	1820～1860
224	B-1	3	1号遺構	石組池状遺構(裏込)	P-222	陶器	土鍋	落とし蓋形	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	18.6	8.0	8.1	-	146.4	4/12	30%	胴部中央まで釉掛け	釉掛け	釉掛け	-	取っ手部欠損	松代系	1810～1860
225	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	片口鉢	玉縁口縁下注口	暗灰・白粒子	ロクロ貼付け	鉄釉	18.0	-	-	19.5	42.4	2/12	10%	鉄釉	鉄釉	-	-	胴部～底部欠損	松代系	1810～1930
226	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	土器	涼炉	筒形三足	赤茶・金雲母	ロクロ貼付け	－	21.0	18.8	-	-	743.4	8/12	50%	口縁蓮花印花胴部縦縞文	ヨコナデ	内筒接合痕	三足貼り付け	破片12片	在地系?	1800～
227	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	植木鉢	折縁形	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉	18.4	12.2	15.4	-	1120	12/12	80%	底部付近まで施釉	胴半ばまで施釉	無施釉碗状底・中央孔	無施釉・三カ所周縁削り	-	松代系	1810～1860
228	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	植木鉢	折縁形	灰	ロクロ	銅緑鉄釉・白釉	11.6	6.8	10.3	-	280.5	12/12	70%	口縁付近に白釉流し	口縁のみに釉掛け	無施釉・中央に孔	一カ所周縁削り	-	京・信楽系	1800～
229	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184/167/97	陶器	中甕	半胴形	暗灰	ロクロ	鉄釉・海鼠釉	18.0	-	*19.0	-	628.1	5/12	40%	胴部地に印刷蓮弁唐草文	鉄釉	-	-	胴部～底部欠損	東北系?	18ｃ～19ｃ
230	A-1	3	検出面		P-169	陶器	擂鉢	高台付き外反口縁	赤褐	ロクロ	鉄釉	35.6	14.4	13.3	-	1021	5/12	50%	鉄釉 片口有り	放射擂り目	放射擂り目・環状櫛み目跡	施釉	-	肥前系	1750～1860
231	A-1	3	1号遺構	性格不明	P-184	陶器	植木鉢	折縁形	灰黄	ロクロ	鉄釉	21.9	14.5	15.7	-	1540	12	95%	胴部下半まで釉掛け	口縁のみに釉掛け	無施釉・中央に孔	無施釉・三カ所周縁削り	-	瀬戸美濃系	1840～1870
232	A-1	2		3トレンチ	P-184	磁器	大碗	丸形	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	19.8	8.0	9.1	-	301.7	10	30%	胴部下半に横線	葡萄文	圏線内に五弁花文	-	五弁花文・コンニャク印・手跡?	肥前系	1690～1740
233	A-1	2	15号遺構	溝状遺構	P-120	磁器	中碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.6	3.8	5.6	-	53.3	4/12	30%	半菊花・壽字文	線彫り帯文	圏線	-	-	瀬戸美濃系	1840～1870
234	A-1	2	15号遺構	溝状遺構	P-120	軟陶	中碗	腰張形	赤茶・白粒子	ロクロ手づくね付け高台	黒楽釉	-	3.8	-	-	65.4	3/12	20%	総釉掛け	総釉掛け	総釉掛け	総釉掛け・釘彫・渦巻	口縁部～胴上半欠損	薬焼系	18ｃ～19ｃ
235	A-1	2	2号遺構	方形土坑	P-121	磁器	小壺	捻阿子陀形	白ガラス質	型・胴継成形	呉須・透明釉	2.4	2.8	4.7	-	44.6	12/12	75%	宝尽文	胴部中央に胴継痕	釉掛け	無施施釉・焼継ぎ痕あり 茶入か	焼継ぎ痕あり	瀬戸美濃系	1840～
236	A-1	2	2号遺構	方形土坑	P-121	磁器	小碗	筒丸形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	7.2	3.6	6.1	-	63.7	12/12	50%	線彫り雷文繋ぎ帯文	釉掛け	釉掛け	畳付残し釉掛け	焼継ぎ痕あり	瀬戸美濃系	1840～1870
237	A-1	2	2号遺構	方形土坑	P-121	陶器	中碗	腰張形	暗灰・白粒子	ロクロ削高台	白泥・土灰釉	13.0	6.6	9.4	-	265.7	9/12	40%	砂地に化粧土掛かる 対花文まで施釉	白化粧掛け・施釉	白化粧掛け・施釉 目跡	全面に化粧土掛け	-	松代系 荒神町窯系	1820～1860
238	A-1	2	27号遺構	土坑	P-134	磁器	蓋	平形	白	ロクロ貼付け	呉須・透明釉	11.6	-	-	-	53.0	3/12	40%	蛸唐草文・丸壽文	周辺のみ無施釉	菊花形取っ手台座貼り付け	施釉	取っ手部欠損・水指蓋?	肥前系	1740～1780
239	A-1	2	11号遺構	撹乱	P-113	土器	火消壺蓋	落とし蓋形	暗茶・小石含	型押しナデ	表面瓦質	14.5	8.4	3.4	4.4	332.5	8/12	70%	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ取っ手成形	擦痕	-	在地系	1800～
240	A-1	2	28号遺構	土坑	P-135	磁器	極小皿	分銅形	白	型押し貼付け	呉須・透明釉	5.5	3.2	2.3	-	34.4	5/12	60%	-	型紙摺り亀甲繋ぎ文	型紙摺り亀甲繋ぎ文	畳付残し釉掛け	-	肥前系	1690～1740

表9　土器・陶磁器観察表（5）

実測通番	出土地点					類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量					残存率		調整・文様・その他				所見		
	区	面	遺構番号	性格	遺物番号							a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	径	全体	外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代
241	A-1	2	28号遺構	土坑	P-135	土器	火消壺	浅丸形三足?	暗茶・白粒子	積み上げ・磨き	－	－	16.0	－	－	1099	12/12	95%	ヨコミガキ口唇摩滅	上部に煤付着	回転ナデ	三カ所に櫛目・接合痕	脚部欠損か	在地系	1800～
242	A-1	2	29号遺構	土坑	P-137	陶器	おろし皿	碁笥底形	赤茶	ロクロ櫛目刻み	鉄釉	14.3	8.8	2.6	－	25.5	2/12	20%	口縁付近に鉄釉	櫛目連続押圧	櫛目連続押圧	回転削り	－	肥前系	1780～1860
243	A-1	2	35号遺構	土坑	P-158/147	陶器	火用かん	首・注口付き環状形	橙	型押し胴継成形	飴釉・うのふ釉	12.1	2.8	8.0	－	143.9	9/12	80%	底部付近まで施釉 胴継ぎ痕	鉄泥　胴結土細継ぎ	盤口形首・注ぎ口貼り付け	無施釉・煤付着	注口部欠損	上田東馬焼	1850～1870
244	A-1	2	35号遺構	土坑	P-158	陶器	皿	折縁形	黄白	ロクロ	錫白釉・コバルト	－	－	－	－	4.7	?	?	錫白釉　細かな貫入	銅版転写　山水楼閣	－	－	車輪を連結するような環状形	イギリス製	18ｃ後半～19ｃ前半
245	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117/182	陶器	片口鉢	内折口縁下注口	暗灰・白粒子	ロクロ貼付け	鉄釉	9.8	－	－	11.5	52.6	6/12	50%	胴部下半まで釉掛け	釉掛け	－	－	高台欠損・薄手	松代系	1810～1860
246	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	陶器	中碗	半球端反形	灰・白粒子	ロクロ	銅緑釉・土灰釉	10.6	－	－	－	45.3	5/12	40%	土灰釉地に口縁部のみ銅緑釉流し	土灰釉地に口縁部のみ銅緑釉流し	土灰釉	－	高台欠損・薄手	松代系　荒神町窯系	1820～1860
247	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	陶器	行平鍋	六角把手足付き	灰	ロクロ貼付け	灰釉	16.8	7.6	7.4	22.0	134.4	3/12	20%	胴部下半まで釉掛け	口唇蓋填め部無釉	釉掛け	足貼り付け・煤付着	注口部欠損	京・信楽系	1800～
248	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	磁器	中碗	広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	11.4	6.4	5.4	－	62.8	5/12	30%	草原・雲文	二本線	二重圏線内汁花文	圏線内「大明年製」	焼継ぎ痕・底部に焼継ぎ銘	肥前系	1780～1820
249	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	磁器	小碗	面取丸形	白ガラス質	ロクロ削高台	クロム青磁釉	8.3	3.3	4.1	－	87.6	12/12	90%	丸彫り面取	－	－	無施釉	－	瀬戸美濃系	1870～1910
250	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	磁器	猪口	桶形	白灰	ロクロ	呉須・透明釉	7.1	4.5	5.9	－	81.9	12/12	70%	朝顔文・井桁文	－	－	畳付残し・釉掛け	－	肥前系	1690～1780
251	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-165	磁器	変形皿	四角高台	白	型押し貼付け	呉須・透明釉	－	－	－	－	99.7	3/12	40%	唐草文	型紙摺り・紅葉文	型紙摺り・紅葉文	二重角渦福	皿両端部欠損	肥前系	1680～1700
252	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-165	陶器	中甕	胴張形	灰	ロクロ貼付け	鉄釉(黒茶)	－	－	－	－	425.1	3/12	15%	胴部無文帯・胴部横線・口唇部土縁付帯	釉掛け	－	－	口縁部・底部欠損	北陸系	18ｃ～19ｃ
253	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-165	磁器	蓋	腰折形	白	ロクロ	呉須・透明釉	14.2	15.2	－	－	105.1	5/12	40%	欄干文・蝶文	釉掛け	釉掛け	－	漆継ぎ直し痕	肥前系	1780～1860
254	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-165	磁器	中碗蓋	広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.4	5.3	2.7	－	45.2	8/12	50%	草原・雲文	二本線	二重圏線内汁花文	圏線内「大明年製」	№248の蓋	肥前系	1780～1820
255	A-2	2	3号遺構	石組池状遺構	P-131	磁器	中碗	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	10.6	3.7	4.0	－	83.4	5/12	60%	型紙摺り　青海波・唐花文	口唇にコバルト彩	－	圏線	－	瀬戸美濃系	1880～1910
256	A-2	2	3号遺構	石組池状遺構	P-131	磁器	小瓶	鶴首形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	1.5	－	－	－	47.6	6/12	60%	松竹梅文	口縁のみに釉掛け	－	－	底部欠損	瀬戸美濃系	1870～1890
257	A-2	2	3号遺構	石組池状遺構	P-131	土製品	土製人形	－	灰茶	型成形	－	－	3.0	－	－	3.6	－/12	?	人形の足部と土台残存	－	－	片足に細孔	頭部～脚部欠損	不明	18ｃ～19ｃ
258	A-2	2	3号遺構	石組池状遺構	P-131	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	3.5	－	－	37.0	7/12	20%	雲龍文	－	雲龍文(頭部)	四角内に記銘	口縁部欠損	肥前系	1760～1790
259	A-2	2	検出面		P-083	磁器	仏花瓶	盤口・両耳形	白	ロクロ貼付け	呉須・透明釉	7.7	－	－	－	162.1	12/12	30%	芭蕉文?	口縁のみに釉掛け	－	－	胴部下半～底部欠損	波佐見系	1780～1860
260	B-1	3	検出面		P-191	陶器	中瓶	べこかん形	灰	ロクロ	錆釉	2.8	*7.8	*20.5	－	395.1	12/12	60%	全体に錆釉　胴部へこみ	表面より薄い錆釉	－	－	－	瀬戸美濃系	1820～1840
261	B-1	3	検出面		P-200	陶器	片口鉢	内折口縁	暗灰・白粒子	ロクロ削高台	鉄釉	*16.0	*8.6	8.6	－	149.5	4/12	30%	高台付近まで施釉	釉掛け	釉掛け	無施釉	注口部欠損	松代系	1810～1930
262	B-1	3	検出面		P-191	陶器	薬味入れ蓋	弧状台形	暗茶・白粒子	ロクロ貼付け	鉄釉	6.1	4.6	2.2	－	31.3	12/12	100%	上部に鬼面・鬼面を挟む	無施釉	粘土塊状つまみ	－	－	松代系	1810～1930
263	B-1	3	検出面		P-191	陶器	鉢	玉縁口縁	暗茶・白粒子	ロクロ削高台	白釉・銅緑釉	*17.5	*7.1	7.1	－	135.0	3/12	25%	白釉地に銅緑釉(黒斑多)	白釉地に銅緑釉(黒斑多)	白釉	無施釉	－	松代系　代官町窯系	1840～1930
264	B-1	3	検出面		P-191	陶製品	家屋形ミニチュア	蔦葺き形家屋	暗灰・白粒子	貼り付け成形	白泥・灰釉・銅緑釉	4.0	2.2	3.6	－	28.2	－/12	90%	白泥に釉掛け	白泥に釉掛け	－	石座・台座に足4本接合?	－	松代系　代官町窯系	1840～1930
265	B-1	3	検出面		P-200	陶器	行平鍋蓋	浅山形	赤茶・白粒子	ロクロ糸切り	鉄釉	－	－	*2.0	2.0	31.0	－/12	20%	環状に鉄彩	釉掛け	釉掛け	取っ手上に糸切り痕	口縁部欠損	松代系	1810～1930
266	B-1	3	検出面		P-200	磁器	蓋物	丸形	白	ロクロ	"透明釉・上絵(赤?黄,黒,)"	*3.8	*3.2	4.0	－	31.1	6/12	45%	花文・唐草文	口唇無釉	－	－	色絵全体に黒化・変色?	肥前系	1780～1860
267	B-1	3	検出面		P-191	磁器	紅皿	浅平球形	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	*6.7	2.1	2.4	－	29.3	12/12	60%	紅葉文	－	－	畳付に砂付着	－	肥前系	1690～1780
268	B-1	3	検出面		P-200	磁器	中碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.3	*4.2	*6.5	－	66.0	6/12	50%	小槌・大根	二本線	圏線内に宝珠文	焼き継ぎ銘あり	焼継ぎ痕あり	肥前系	1820～1860
269	B-1	3	検出面		P-195	磁器	中碗	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	11.1	3.6	5.1	－	93.8	4/12	40%	縦縞文	半四方襷文	圏線内に花文	－	－	瀬戸美濃系	1870～1890
270	B-1	3	検出面		P-195	磁器	中碗	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	*9.9	3.0	3.9	－	72.2	6/12	60%	摺絵輪花・唐花文	摺絵　瑤珞繋ぎ文	－	－	－	瀬戸美濃系	1880～1910
271	B-1	3	検出面		P-200	磁器	小杯	端反形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	*7.0	2.7	4.6	－	32.1	12/12	50%	口縁に帯文	口縁に帯文	－	圏線内記銘	－	瀬戸美濃系	1870～1890
272	B-1	3	検出面		P-191	磁器	小杯	端反形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	*6.2	*2.9	4.0	－	27.2	6/12	50%	鶴文	－	－	圏線内草書体記銘	－	関西系	1870～1910
273	B-1	3	1号遺構	石組池状遺構	P-192	磁器	蓋物鉢蓋	丸形	白	ロクロ貼付け	"呉須・透明釉・上絵(赤,黒,金)"	16.3	*15.0	4.9	－	192.7	5/12	70%	氷列文地に鶴丸文色絵	釉掛け	橋状取っ手・花文	－	－	肥前系	1780～1860
274	B-1	3	1号遺構	石組池状遺構(裏込)	P-222	軟陶	ミニチュア土瓶	丸形	赤茶	型押し貼付け	鉛飴釉	*2.8	3.1	5.4	6.7	47.5	12/12	60%	桜花文印刻	口縁付近に釉掛け	無施釉	墨書「コ寸」	煎茶用実用ミニチュア品?	京焼系	1800～
275	B-1	3	検出面		P-200	磁器	紅皿	浅平球形	白	ロクロ	呉須・透明釉・上絵(赤)	*6.5	2.4	2.6	－	17.7	4/12	40%	口縁に帯文・下部に上絵版名文字	－	－	畳付に砂付着	上絵は後世の絵付けか	肥前系	1690～1780
276	B-1	3	検出面		P-200	磁器	小碗	丸形	白ガラス質	石膏型	コバルト・透明釉・鉄彩	8.3	3.4	4.7	－	105.9	12/12	95%	銅版印刷唐草・松文繋ぎ	口唇に鉄彩	－	角内「直山」	－	瀬戸美濃系	1910～1930
277	A-1	2	検出面	側溝Tr	P-084	陶器	火鉢	円筒形三足	灰黄	ロクロ貼付け・印花	銅緑釉	22.6	21.6	17.9		1047	6/12	35%	蓮弁文・雷文帯花・寄文部に穴開	胴部中央まで施釉	穿孔痕(一部寂付着)	半王形3足	穿孔から釘打ち台座固定か	瀬戸美濃系	1800～1860
278	A-2	2	3号遺構	石組池状遺構	P-131	陶器	火鉢	有段円筒形	赤茶・白粒子	ロクロ貼付け	白泥・灰釉・銅緑釉	26.6	21.6	24.1		2705	5/12	40%	獅子擬付き　白化粧上に鉄彩付分け	白化粧上・口縁上部のみ施釉付	底部に目跡・穿孔痕あり	白泥	穿孔から釘打ち台座固定か	松代系　代官町窯系	1840～1930
279	A-2	2	1号遺構	上層建築基礎	P-117	陶器	通い徳利	肩張形	灰黄	ロクロ	コバルト・透明釉	－	9.6	22.3		823.9	11/12	70%	「鎧部・松代・能登屋・三〇〇」	釉掛け	釉掛け	無施釉	首部欠損	瀬戸美濃系	1870～
280	A-3	2	検出面		P-091	陶器	中瓶	鶴首形	暗灰	ロクロ	鉄釉(黒～茶)	－	10.2	24.5		1092	12/12	90%	鉄釉(茶～黒に変化)	首まで施釉	－	畳付残し釉掛け	首部欠損	在地系	1850～1910
281	A-3	2	検出面		P-091	陶器	土瓶	丸形	橙灰	ロクロ貼付け	鉄釉・白釉	11.8	9.5	12.5		688.6	12/12	95%	底部付近まで施釉　胴に白釉流し	無施釉	釉垂れ	上げ底・煤付着	－	在地系	1850～1910
282	B-1	3	検出面	2号遺構下層	P-223	陶器	捏鉢	玉縁口縁	暗茶・白粒子	ロクロ	白泥・土灰釉	*27.6	7.2	13.1		679.3	3/12	40%	白化粧・底部付近まで施釉	釉掛け	目跡あり	白泥	－	松代系　荒神町窯系	1820～1860
283	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-064/020	陶器	片口鉢	玉縁口縁下注口	暗灰・白粒子	ロクロ貼付け	白釉・銅緑釉	8.0	1.3	7.6		500.8	12/12	80%	白釉地に銅緑釉	白釉地に銅緑釉	－	無施釉	全体に被熱	松代系　代官町窯系	1840～1930
284	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-071	磁器	中鉢	折縁形	白	ロクロ　蛇の目畳付高台	コバルト・透明釉	9.7	4.9	6.6		298.5	6/12	50%	銅版印判　桜・鳳凰	銅版印刷　松葉唐草・花	銅版印刷・蓮弁・花文	蛇の目回形高台	－	瀬戸美濃系	1890～1920
285	A-3	1	3号遺構	石組溝状遺構	P-136	磁器	小碗	筒形	白	ロクロ	コバルト・透明釉	5.3	3.5	5.8		81.7	12/12	100%	摺絵輪花・唐花文	瑤珞繋ぎ文	－	－	－	瀬戸美濃系	1880～1910
286	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-055	陶器	秉燭	台付たんころ形	赤茶・白粒子	ロクロ糸切り	鉄釉	6.6	4.2	5.5	2.3	117	12/12	100%	底部付近まで施釉	釉掛け	芯立て貼り付け	糸切り痕・穿孔	－	松代系	1810～1930
287	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-055	焼締	茶こぼし蓋	皿形	赤茶	ロクロ削り	－	10.6	5.2	2.5		81.6	8/12	80%	－	表面磨き	圏線巡り込み中央とり抜く茶こぼし穴	－	煎茶道具	常滑系	1870～
288	A-2	1	2号遺構	石組池(大)	P-130	陶器	植木鉢?	筒形	橙灰	ロクロ削り	飴釉・うのふ釉	10.6	－	*6.8		95.5	6/12	40%	底部付近まで施釉　3～4本部の釉垂れ	口縁付近に釉掛け	－	－	底部欠損	在地系	1870～
289	A-2	1	2号遺構	石組池(大)	P-106/170	磁器	小鉢	輪花形	白	ロクロ型打ち	"呉須・透明釉・上絵(赤,黒,金)"	－	7.7	*3.6		162.2	9/12	50%	青玉・瑤珞文	唐花・菱繋ぎ文	輪宝花文	圏線内「富貴長春」	口縁部欠損	肥前系	1740～1780
290	A-2	1	2号遺構	石組池(大)	P-033	磁器	片口鉢	半球形口縁変形	白	ロクロ	透明釉・上絵(赤,黄,白)	－	3.7	4.2		59.9	9/12	60%	花文・草文	口唇赤彩	－	赤絵で「九谷」銘	－	九谷系	1970～
291	A-2	1	2号遺構	石組池(大)	P-130	陶器	土瓶蓋	平形	灰黄	ロクロ貼付け	鉄絵・透明釉	8.5	6.3	2.8	1.6	64.4	9/12	90%	源氏香文・吹き絵	無施釉	円形つまみ	－	－	瀬戸美濃系	1960～1910
292	A-2	1	4号遺構	撹乱	P-040	陶器	土瓶蓋	平形	暗茶	ロクロ貼付け	鉄彩・銅緑釉	6.5	4.3	*1.4	－	27.2	12/12	85%	飛び跳・福字貼付・銅緑釉	無施釉	つまみ欠損	－	－	不明	1860～
293	A-2	1	4号遺構	撹乱	P-040	陶器	土瓶蓋	平形	暗茶・白粒子	ロクロ貼付け	鉄釉	7.8	5.7	2.4	1.1	63.1	12/12	95%	上面に施釉	無施釉	輪花状つまみ	－	－	松代系	1810～1930
294	A-2	1	4号遺構	撹乱	P-040	陶器	小碗	半球形	暗茶・白粒子	ロクロ削高台	白泥・土灰釉	8.4	4.2	5.8		109.2	7/12	55%	白化粧・底部付近まで施釉	釉掛け	釉掛け	白泥	焼きがやや甘い	松代系　代官町窯系	1840～1930
295	A-2	1	5号遺構	石組池(小)	P-124	磁器	中瓶	玉壺春形	白灰	ロクロ削高台	透明釉	－	5.6	－	10.6	168.5	6/12	30%	釉掛け	無施釉	無施釉	畳付残し釉掛け	首部欠損	肥前系	1650～1690
296	A-2	1	5号遺構	石組池(小)	P-34/107	磁器	小皿	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	11.0	5.2	2.7		67.7	7/12	60%	横線	鶴文・亀甲繋ぎ文	二重圏線	圏線	－	瀬戸美濃系	1870～1930
297	A-2	1	5号遺構	石組池(小)	P-106/107/124	磁器	小皿	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	10.8	6.0	1.8		47.8	8/12	60%	文字文	型紙摺り・水列文に内輪	型紙摺り・水列文に内輪	圏線	－	瀬戸美濃系	1880～1910
298	A-2	1	5号遺構	石組池(小)	P-124	磁器	小杯	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	6.6	3.0	4.6		56.8	12/12	80%	鹿・山文	－	－	畳付残し釉掛け	－	瀬戸美濃系	1870～1890
299	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-048	磁器	おろし金	板形　金属品做	白灰	型成形	透明釉	－	－	－	0.5	97.5	4/12	30%	上面に施釉	－	櫛連続押圧・紐掛け穴付き	布目痕	－	瀬戸美濃系	1930～1940
300	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-047	磁器	酒杯	端反形高高台	白	型成形・ガラス境の込み	"コバルト・透明釉・上絵(黒,赤,青,緑,水彩)"	5.6	2.3	3.4		28.0	12/12	60%	流水文	水金帯・花文	ガラス玉埋め込み	刻印「専光特許四一三一」	文字逆読み	瀬戸美濃系	1930～1940

表10　土器・陶磁器観察表（6）

実測通番	出土地点					類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	法量					残存率		調整・文様・その他				所見		
	区	面	遺構番号	性格	遺物番号							a 口径	b 底径	c 器高	d 他	(g) 重量	径	全体	外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代
301	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-048	磁器	酒杯	端反形	白	型成形	コバルト・透明釉・上絵(赤)	5.7	2.1	3.1		33.0	12/12	100%	銅版印判「山水文」	－	赤絵「製旅長士 碧方 鬼無里柱」	－	文字逆読み	瀬戸美濃系	1920～1930
302	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-048	磁器	小碗	端反形	白	型成形　蛇の目高台	コバルト・透明釉	8.3	3.7	4.4		86.4	12/12	65%	銅版印判「牛乗人物・人物	－	－	印刻「春嘉」	－	瀬戸美濃系	1890～1920
303	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-063	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.4	3.7	5.2		95.6	12/12	60%	線描き花・唐草文	雷文繋ぎ	圏線内に蕉葉丸文「永業年期」	－	－	肥前系	1820～1860
304	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-062	陶器	中碗	半筒形	黄白	ロクロ削高台	白泥・鉄絵・灰釉	10.2	5.3	7.0		113.4	7/12	45%	化粧土上に鉄絵草書文字	化粧土上に釉薬掛け	化粧土上に釉薬掛け	蕉紋・高台外に化粧土露出	－	京焼系	1780～1860
305	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-63/56	磁器	小碗	筒丸形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	7.0	3.3	5.7		74.2	12/12	60%	梅樹・「菊山青一杯」	－	－	畳付に白粉付着	－	関西系	1850～
306	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-056	磁器	ポマード瓶	筒形	黄白	型成形	コバルト・透明釉	4.8	6.1	3.7		80.1	12/12	100%	銅版印刷「MOKUMA 西風印」	－	－	底周囲部に露胎	「近代のガラス びんから 新聞紙 ガラス 1」	不明	1890～
307	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-056	磁器	小碗	筒丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	6.6	3.0	4.7		33.6	6/12	50%	漢詩・山水文	二本線	－	－	漆継ぎ直し痕	瀬戸美濃系	1840～1870
308	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-056	土器	箸置	舟形	白	型成形	－	6.4	2.2	－		14.0	12/12	100%	横に削り成形	ナデ調整	中央に間部穿孔あり	中央に孔	白色かわらけ製品	不明	1860～
309	A-2	1	7号遺構	石組溝	P-056	磁器	小碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	9.4	3.6	4.8		53.1	6/12	50%	縦縞文（麦藁手）	縦縞文（麦藁手）	縦縞文（麦藁手）	－	漆継ぎ直し痕	瀬戸美濃系	1840～1870
310	A-2	1	検出面		P-009	磁器	中碗	丸形	白	型成形	透明釉・クロム彩	－	5.4	－		98.8	10/12	30%	－	－	－	統制番号「岐1065」	現　美濃窯業(株)製品	瀬戸美濃系	1941～1945
311	A-2	1	検出面		P-009	磁器	仏花瓶	尊形耳付	白	ロクロ	透明釉・コバルト・瑠璃釉	7.9	5.5	13.3		237.2	12/12	95%	絵瑠璃釉・耳部面付き	口縁のみに透明釉	無施釉	透明釉	－	瀬戸美濃系	1870～
312	A-2	1	検出面		P-009	焼締	急須	扁平形	紫茶	ロクロ貼付け	－	6.8	6.0	4.8		115.2	12/12	80%	注口・把手間に別貼「八嶋園」	網状茶葉濃し付き	－	上了底・黄煤付着	－	万古系	1910～
313	A-1	1	1号遺構	方形石組遺構	P-032	磁器	小碗	筒丸形	白ガラス質	型成形	"透明釉・上絵(赤,黄,黒,金)"	7.2	3.0	5.4		95.8	12/12	95%	鶴・松・扇	口唇赤彩	－	赤絵押印「九谷」銘	文字逆読み	九谷系	1910～1930
314	A-1	1	1号遺構	方形石組遺構	P-032	磁器	ティーカップ	浅碗形	白ガラス質	型成形	透明釉・銀彩	9.5	3.9	4.4		76.1	10/12	80%	口唇に銀彩	－	－	赤絵押印「SK CHINA」	アール・デコ流行以降	瀬戸美濃系?	1920～
315	A-1	1	1号遺構	方形石組遺構	P-032	磁器	碗	－	白ガラス質	型成形	透明釉・金彩	－	4.1	－		42.2	12/12	25%	高台付け根に金彩	－	－	高台内に陰陽印あり	肥前系（有田）	1910～
316	A-1	1	1号遺構	方形石組遺構	P-032	磁器	ティーポット	急須形(持ち手横)	白ガラス質	型成形貼り付け	クロム・黒彩・透明釉・金彩	9.2	6.1	10.1		206.4	12/12	80%	葡萄葉文吹き墨	口唇金彩	－	金ロゴマーク「MADE TO CHINA」	和洋折衷様式	瀬戸美濃系?	1910～1930
317	A-3	1	3号遺構	石組溝状遺構	P-065	磁器	小碗	丸形	白ガラス質	型成形	コバルト・クロム・透明釉	*9.0	3.3	4.4		53.5	7/12	35%	銅版印判・桐・風凰文	銅版印判・瑤珞繋ぎ文	クロム圏線内銅版麟文	クロム圏線	－	瀬戸美濃系	1920～1930
318	A-3	1	3号遺構	石組溝状遺構	P-136	磁器	小碗	筒形	白ガラス質	型成形	透明釉・上絵(青,赤)	*6.0	2.6	5.7		27.3	7/12	35%	山水楼閣(上絵摩滅)	－	－	赤絵押印「九谷」銘	文字逆読み	九谷系	1910～1930
319	A-3	1	3号遺構	石組溝状遺構	P-072	陶器	甕	高台付き	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉	－	13.0	－		360.6	－/12	?	鉄釉(表面剥落多い)	釉掛け・自然釉降灰	－	畳付に砂付着	底部の外残存	松代系	1810～1930
320	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-064	陶器	土瓶	丸形	橙灰	ロクロ貼付け	白泥・鉄絵・透明釉・銅緑釉	10.2	－	*11.5		201.3	8/12	40%	山水文	口縁のみに釉掛け	－	－	底部・注口部欠損	益子系	1890～1930
321	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-064	陶器	火鉢蓋	平形	灰黄	ロクロ貼付け・印花	銅緑釉・鉄泥	10.9	14.4	*5.0	3.7	610.5	5/12	50%	瑤珞文印花・雲文貼り付け	鉄泥擦り付け	突起(摘み部)欠損	中央に孔	－	瀬戸美濃系	1800～1860
322	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-055	磁器	小碗	半球形	白ガラス質	型成形	コバルト・透明釉	－	2.9	－		32.8	12/12	30%	吹き絵・富士雲文	－	－	統制番号「岐864」	口縁部欠損 土岐市製品	瀬戸美濃系	1941～1945
323	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-055	磁器	中碗	丸形	白ガラス質	型成形	コバルト・クロム・透明釉	5.7	4.2	5.0		145.1	4/12	20%	手書き「(六文)銭」	－	銅版・真田家旗印・六文銭	扇文に「TRADE MARK」	破片6点・同種小皿もあり	瀬戸美濃系	1920～1930
324	A-3	1	2号遺構	溝状遺構	P-060	磁器	段重	四角形・四方台付	白	型成形貼り付け	呉須・透明釉	6.1	6.0	2.9		79.1	12/12	100%	四方欅・窓絵宝珠文	口唇無釉	釉掛け	四方に「く」の字台座	全体に被熱	肥前系	1780～1860
325	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-064	磁器	中碗	深丸形	白	型成形	コバルト・透明釉	*11.0	3.8	6.2		103.5	12/12	50%	スタンプ印刷「井桁・蓮弁文	－	－	－	－	瀬戸美濃系	1930～1940
326	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構	P-071	磁器	蓋物	筒形	白ガラス質	ロクロ	透明釉・上絵(赤・青・緑)	*3.2	－	－		12.8	4/12	15%	日本地図・蔦に「長東(国旗?)」	口唇無釉・赤彩	－	－	地図に薄く千島列島有り・樺太半島無し	瀬戸美濃系	1905～1910
327	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構(裏込土)	P-133	磁器	燭徳利	円形首形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	2.8	5.6	17.7		107.7	8/12	50%	山水楼閣文	口縁のみに透明釉	無施釉	無施釉	－	瀬戸美濃系	1870～1890
328	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構(裏込土)	P-133	磁器	中碗	丸形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・透明釉	10.0	3.3	4.7		153.2	12/12	95%	摺絵鳥獣草・青海波文・唐花文	摺絵印判・瑤珞繋ぎ文	摺絵印判・瑤珞繋ぎ文	－	－	瀬戸美濃系	1880～1910
329	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構(裏込土)	P-133	磁器	小鉢	塩筒形	白ガラス質	ロクロ削高台	クロム青磁釉・上絵(白・赤・緑・黒)	10.5	7.3	5.2		324.9	12/12	95%	梅樹イッチン文	釉掛け	釉掛け	無施釉・打刷り風鈴巻き	－	瀬戸美濃系	1870～1910
330	A-3	1	1号遺構	石組溝状遺構(裏込土)	P-133	磁器	小瓶	方形瓶形	白ガラス質	型成形接着	青磁釉	4.4	4.1	14.5	4.9	165.5	8/12	70%	青磁釉	口縁～首に釉掛け	対角線状に接合痕・穿孔	底周囲部に露胎	焼継ぎ痕あり	三田焼(関西系)	1800～1940
331	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	透明釉・鉄彩	6.9	3.2	4.8	－	50.5	11/12	85%	透明釉・口唇鉄彩	－	－	－	－	肥前系	1780～1860
332	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	コバルト・透明釉	6.7	3.4	4.1	－	62.4	12/12	100%	草花文	二本線	－	圏線内記銘	－	瀬戸美濃系	1870～1910
333	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	6.7	2.9	4.3	－	57.1	12/12	100%	鶴文・雲文	1本線	－	角記銘	－	瀬戸美濃系	1840～1870
334	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-157	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	6.8	3.1	5.1	－	69.4	12/12	100%	牡丹文・水玉	－	－	－	－	瀬戸美濃系	1800～1860
335	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-157	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	6.6	2.9	4.7	－	69.1	12/12	100%	蝙蝠文?	－	－	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
336	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-157	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	コバルト・透明釉	6.7	2.9	4.6	－	40.2	12/12	100%	格子内文様・丸文内人物	－	－	「旭京堂?製」	同一定形劍休2点出土	関西系	1870～1910
337	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	中碗	浅半球形	白	ロクロ	コバルト・透明釉	15.0	5.2	*6.9	－	86.6	6/12	25%	蛸唐草文・蓮弁文	四方欅	二重圏線内蕨状松竹梅文	－	破片二点・焼継ぎ痕あり	瀬戸美濃系	1780～1860
338	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-166	陶器	中碗	半球端反形	灰	ロクロ	透明釉・鉄絵	10.4	－	－	－	54.3	5/12	30%	梅樹文	－	－	－	高台欠損・薄手	京・信楽系	1800～1860
339	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	中碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10.6	3.8	6.1	－	102.1	3/12	40%	宝珠文	葉繋ぎ帯文	圏線内に折れ松葉文	－	－	瀬戸美濃系	1840～1870
340	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	蓋	丸形	白	ロクロ貼付け	呉須・透明釉	11.6	13.0	3.6	－	81.5	3/12	40%	刷毛目波状文	焼き継ぎ銘あり	橋状取っ手	－	焼継ぎ痕あり	肥前系	1780～1860
341	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	蓋	台形形	白	ロクロ貼付け	呉須・透明釉	10.6	12.0	－	－	113.9	7/12	60%	蝙蝠文	釉掛け	橋状取っ手（欠損）	－	－	肥前系	1780～1860
342	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	半磁器	皿	折縁形	黄白	ロクロ	錫白釉・コバルト	－	－	－	－	9.5	?	?	錫白釉・細かな貫入	銅版転写・山水楼閣	－	－	銅版転写「ウィンブルドン テニス 選手」	イギリス製	18ｃ後半～19ｃ前半
343	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	磁器	極小皿	四方形	白灰	型押し貼付け	青磁釉	9.2	4.8	2.0	－	45.2	5/12	40%	青磁釉	花文陽刻に青磁釉	鹿文陽刻に青磁釉	畳付残し青磁釉	－	三田焼(関西系)	1800～1940
344	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-157	磁器	極小皿	四方隅切形	白	型押し貼付け	透明釉	8.2	3.9	2.1	－	62	10/12	80%	透明釉	紗綾文・青海波陽刻	菊花陽刻	畳付残し釉掛け	－	瀬戸美濃系	1870～1890
345	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	陶器	水指	筒形　口縁高台窄み	灰黄	ロクロ	呉須・白釉	*19.8	15.6	－	－	360.9	3/12	10%	口縁に唐草帯文・胴部牡丹文	口縁に蕉葉部あり	釉掛け	釉薬刷毛塗・梅華皮状	肥前系陶器染付(鍋焼)　破片5点	肥前系	1650～1690
346	A-3	2	15号遺構	池状遺構	P-146	陶器	火入	筒丸形 胴六角	灰茶	ロクロ 菱形	白泥・鉄絵・透明釉	12.0	8.4	9.5	－	60.8	2/12	20%	六角形繋ぎ・胴部押圧変形	胴部上半に化粧土・釉掛け	無施釉	化粧土掛け	－	関西系	1800～
347	A-3	2	4号Tr	トレンチ	P-151	陶器	碗	杉形	灰茶	ロクロ	灰釉	10.4	5.2	6.4	－	24.6	2/12	20%	高台付近まで施釉	釉掛け	釉掛け	削り部上り無施釉	被熱あり?	京・信楽系	1670～1740
348	A-3	2	4号Tr	トレンチ	P-151	陶器	小碗	半球形	橙灰	ロクロ削り	白泥・透明釉・瑠璃釉	－	－	－	－	19.4	3/12	10%	唐草文(露胎・瑠璃釉)	白泥に透明釉掛け(剥落)	－	高台外に蓮弁状削り	口縁・高台欠損	京焼系(楽田焼)	1670～1740
349	A-3	2	4号Tr	トレンチ	P-151	磁器	猪口	桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	－	4.8	－	－	38.1	5/12	30%	草花文	釉掛け	釉掛け	胴し福	口縁部欠損	肥前系	1690～1740
350	A-3	2	4号Tr	トレンチ	P-151	磁器	小皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	13.2	8.4	3.0	－	101.3	4/12	40%	山水文	圏線外太胡石・花文	四弁花文	圏線	－	肥前系	1680～1700

表11　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(1)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
1	A-1	3	性格不明遺構	1	169 184 198	土器	火消壺・焙烙	—	暗灰～茶褐色	ロクロ	無施釉・瓦質含む	402.7	底部中心	在地系？	17c～19c
2	A-1	3	性格不明遺構	1	169 184 198	陶器	擂鉢・鉢	高台付き(擂鉢)	赤褐	ロクロ	鉄釉・刷毛目鉢	754.3	高台付き擂鉢中心	肥前系	1750～1860
3	A-1	3	性格不明遺構	1	169 184 198	磁器	小碗・中碗・瓶・大皿破片	丸形・筒形・端反形・半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉（一部色絵あり）	435.8	染付碗中心	肥前系	1690～1860
4	A-1	3	性格不明遺構	1	184	陶器	小碗	杉形・若杉文様	黄白	ロクロ	鉄釉・灰釉	196.3	3個体分破片	京・信楽系	1740～1780
5	A-1	3	性格不明遺構	1	184 198	陶器	小碗多数	半球形中心	黄白～赤茶	ロクロ　たたら貼付	鉄絵・色絵・灰釉等	85.0	小碗破片多数・薄手	京・信楽系	1780～1860
6	A-1	3	性格不明遺構	1	184 198	陶器	碗	腰張形・半球形	灰黄～黄白	ロクロ	灰釉	132.8	碗底部破片中心	瀬戸美濃系	1680～1860
7	A-1	3	性格不明遺構	1	184 198	陶器	鉢・擂鉢・土鍋	折縁形・足付形	灰黄～黄白	ロクロ	灰釉・鉄釉	340.2	口縁部・胴部・底部破片	瀬戸美濃系	1780～1860
8	A-1	3	性格不明遺構	1	198	焼締	壺または甕	不明	灰・長石粒子多い	紐作り	表面鉄彩に緑色自然釉付着・内面無釉	21.1	胴部破片	信楽系	17c～18c
9	A-1	3	性格不明遺構	2	181	磁器	碗・鉢	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	72.1	高台部または口縁部破片	肥前系	1690～1860
10	A-1	3	性格不明遺構	2	181	陶器	小碗・中碗	半球形	灰白	ロクロ	鉄絵・上絵・透明釉	77.9	高台部または口縁部破片	京・信楽系	1780～1860
11	A-1	3	性格不明遺構	2	181	陶器	碗・摺鉢	不明	灰～暗灰	ロクロ	灰釉・鉄釉	27.0	口縁部のみ残存	瀬戸美濃系	1680～1780
12	A-1	3	性格不明遺構	2	181	土器	焙烙？	不明	暗茶	不明	無施釉	20.6	底部小破片	在地系？	17c～18c
13	A-1	3	検出面	検出面	169	磁器	小碗・中碗・蓋・大皿破片	丸形・端反形・半球形	白	ロクロ・蛇の目高台・ハリ積み他	呉須・透明釉・青磁製品1点	310.1	雪輪・菊・山水・鼓文他	肥前系	1690～1860
14	A-1	3	検出面	検出面	169	陶器	擂鉢・鉢・碗	—	赤褐・灰・黄白	ロクロ	鉄釉（擂鉢）・灰釉・呉須絵・刷毛目（碗）	305.7	擂り鉢破片が主	肥前系	1650～1860
15	A-1	3	検出面	検出面	169	陶器	小碗・中碗・瓶・土鍋・擂鉢	半球形・折縁形・鶴首形等	灰～黄白	ロクロ　貼付け	鉄釉（擂鉢・土鍋）・うのふ釉（瓶）・灰釉・呉須絵（碗・瓶）	313.9	土鍋が中心	瀬戸美濃系	1740～1860
16	A-1	3	検出面	検出面	169	磁器	碗・皿	端反形・平形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁	70.5	No.15の鉢　破片2片被熱	瀬戸美濃系	1800～1910
17	A-1	3	検出面	検出面	169	陶器	碗	杉形・半球形・端反形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・上絵（緑,黒,金）	92.1	底部中心	京・信楽系	1740～1860
18	A-1	3	検出面	検出面	169	土器	火消壺・焙烙	—	暗灰～茶褐色	ロクロ	無施釉・瓦質含む	357.1	底部中心	在地系？	17c～19c
19	A-1	3	検出面	重機検出面	167	磁器	碗・皿・仏飯器	丸形・深皿形	白	ロクロ	呉須・透明釉	176.5	蓮弁文・蔦文・蛸唐草文	肥前系	1690～1860
20	A-1	3	検出面	重機検出面	167	陶器	鉢・小碗	高台付き・端反形	灰黄	ロクロ	灰釉（鉢内面無釉）	133.9	口縁部・底部破片2片	瀬戸美濃系	1780～1860
21	A-1	3	検出面	重機検出面	167	磁器	鉢	不明	白	ロクロ	コバルト・透明釉	18.8	胴部破片	瀬戸美濃系	1870～1880
22	A-1	3	検出面	検出面	169	陶器	繰糸鍋	桶形	赤褐・白い粒子	型押し貼付け	鉄釉	592.0	底部のみ残存	松代系	1870～1880
23	A-1	3	検出面	重機検出面	167	陶器	擂鉢	高台付き	赤褐	ロクロ	鉄釉	2140.8	底部2個体分	肥前系	1750～1860
24	A-2	3	土坑	2	182	磁器	小碗・中碗・蓋物	丸形・半球形・筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉（焼き継ぎあり）・青磁釉	79.4	算木文・市松文・欄干文	肥前系	1780～1860
25	A-2	3	土坑	2	182	陶器	鉢	不明	赤褐	ロクロ	刷毛目・灰釉	16.0	胴部破片	肥前系	1650～1740
26	A-2	3	土坑	2	182	陶器	擂鉢・小壺碗	—	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉	37.7	小破片	瀬戸美濃系	1780～1860
27	A-2	3	土坑	2	182	磁器	碗？	—	白	ロクロ	青磁釉（釉層厚め）	7.0	小破片	関西系（三田焼か）	1800～1940
28	A-2	3	土坑	2	182	土器	火消壺・かわらけ	—	灰	ロクロ削高台	無施釉・瓦質含む	85.6	胴部・底部破片	在地系？	19c
29	A-2	3	土坑	3	185	磁器	碗・蓋・瓶	丸形・半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉・青磁製品1点	29.2	小破片	肥前系	1780～1860
30	A-2	3	土坑	3	185	陶器	擂鉢	—	赤褐	ロクロ	鉄釉	23.7	口縁部小破片	肥前系	1750～1860
31	A-2	3	土坑	3	185	磁器	小碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	透明釉	6.4	口縁・底部2破片	瀬戸美濃系	1800～1860
32	A-2	3	土坑	3	185	陶器	中碗	丸形	灰黄	ロクロ	灰釉	13.5	口縁部のみ残存	瀬戸美濃系	1680～1740
33	A-2	3	土坑	3	185	陶器	小碗	半球形	白灰	ロクロ　見込み目跡あり	灰釉・上絵（緑）	32.5	底部のみ残存	京・信楽系	1780～1860
34	A-2	3	土坑	3	185	土器	かわらけ	—	灰茶	—	無施釉・沈線素描？	5.7	小破片	在地系？	不明
35	A-2	3	土坑	4	187	磁器	小碗・小皿・猪口	丸形・桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	75.2	四方襷・草花文・横縞文	肥前系	1690～1860
36	A-2	3	土坑	4	187	磁器	瓶・火入	鶴首形	白	ロクロ	青磁釉	60.7	胴部下半～底部欠損	肥前系	1690～1860
37	A-2	3	土坑	4	187	土器	行火？	平底・穴開き	赤茶	ロクロ	無施釉	110.0	底部残存	在地系？	18c～19c
38	A-2	3	土坑	4	187	陶器	火入・碗？	筒形鎬入り（火入）	灰	ロクロ・鎬	鉄釉・灰釉	46.6	全面被熱（火入）	瀬戸美濃系	1780～1860
39	A-2	3	溝状遺構	1-A	183	陶器	碗	—	灰茶	ロクロ	灰釉	5.4	口縁部のみ残存	肥前系	1650～1690
40	A-2	3	溝状遺構	1-A	183	磁器	瓶	—	白	ロクロ	呉須・透明釉	4.8	胴部破片	肥前系	1690～1860

表12　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(2)

保管通番	出土地点				注記No.	種別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
41	A-2	3	溝状遺構	1-A	183	陶器	壺・擂徳利	—	灰	ロクロ	鉄絵・灰釉	20.3	胴部破片	京・信楽系	1780～1860
42	A-2	3	溝状遺構	1-A	183	土器	不明	平底	赤茶	磨き	無施釉	52.6	底部残存	在地系？	不明
43	A-2	3	溝状遺構	1-A	186	磁器	猪口	桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	13.8	鳥・草花	肥前系	1690～1780
44	A-2	3	溝状遺構	1-A	186	陶器	碗・鉢・行平？・火入	—	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	62.0	口縁部・胴部小破片	瀬戸美濃系	1780～1860
45	A-2	3	溝状遺構	1-A	186	陶器	碗	杉形・半球形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・上絵（緑）	29.8	口縁部・胴部・底部破片	京・信楽系	1740～1860
46	A-2	3	溝状遺構	1-A	186	土器	不明	—	赤茶	ロクロ	無施釉	10.0	小破片	在地系？	不明
47	A-2	3	溝状遺構	1-B	174	陶器	碗・火入	端反形（火入）	赤茶・灰茶	ロクロ	鉄釉・灰釉	64.9	口縁部のみ欠損（火入）	肥前系	1650～1740
48	A-2	3	溝状遺構	1-B	174	磁器	小碗	半筒形・端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	37.8	底部残存	肥前系	1690～1810
49	A-2	3	溝状遺構	1-B	174	陶器	碗・瓶・土鍋？・行平？	—	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉	77.9	口縁部・胴部・底部破片	瀬戸美濃系	1780～1860
50	A-2	3	溝状遺構	1-B	174	陶器	碗・瓶	—	灰	ロクロ	灰釉・上絵（緑，黒，青）	9.5	破片3点	京・信楽系	1820～1840
51	A-2	3	溝状遺構	1-B	174	土器	焙烙？	底	灰茶	—	無施釉	29.8	底部破片	在地系？	17c～19c
52	A-2	3	溝状遺構	1-C	172	磁器	中碗・皿・瓶	丸形（碗）	白	ロクロ　蛇の目高台（小皿）	呉須・透明釉	103.0	コンニャク印判・蛸唐草文・網文・白磁	肥前系	1690～1860
53	A-2	3	溝状遺構	1-C	172	陶器	碗・鉢・行平？・火入	半球形（碗）	赤茶～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉・呉須絵・ローラ刻印	137.8	鐵茶碗・呉須火入他	瀬戸美濃系	1680～1860
54	A-2	3	溝状遺構	1-C	172	磁器	碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	14.6	微塵唐草・白磁・破片2点	瀬戸美濃系	1840～1870
55	A-2	3	溝状遺構	1-C	172　199	陶器	碗	—	灰白	ロクロ	灰釉・上絵（緑，黄，茶？）・白釉	11.5	小破片	京・信楽系	1780～1860
56	A-2	3	溝状遺構	1-C	172	土器	かわらけ・焙烙	—	赤茶	ロクロ	無施釉・かわらけに穿孔あり	37.6	破片2点	在地系？	18c～19c
57	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	磁器	小碗・中碗・瓶・皿	丸形・端反形・鶴首形	白・灰	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉	66.0	雲竜碗・松竹梅瓶他	肥前系	1690～1860
58	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	陶器	小碗・鉢	—	黄白・赤茶	ロクロ	灰釉・鉄釉	15.2	破片3点	肥前系	1650～1740
59	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	陶器	鉢・小碗	折縁形（鉢）	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	73.9	口縁部破片2点	瀬戸美濃系	1780～1860
60	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	陶器	碗	杉形・半球形	灰	ロクロ削高台	灰釉・上絵（緑，黒）	20.8	小破片	京・信楽系	1740～1860
61	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	焼締	擂鉢・瓶	—	赤褐色　緻密硬質	ロクロ　底部糸切（擂鉢）	無施釉	78.7	破片2点	備前系	17c～18c
62	A-2	3	溝状遺構	1-D	176	土器	焙烙	内耳形	灰茶	積み上げ貼り付け	無施釉	185.2	破片数点	在地系？	17c～19c
63	A-2	3	溝状遺構	1-D	180	磁器	碗・皿・仏飯器・猪口・瓶	丸形・輪花形・鶴首形	白・灰	ロクロ糸切り	呉須・透明釉・青磁釉・色絵	185.1	蓮弁文・蔦文・蛸唐草文他	肥前系	1690～1860
64	A-2	3	溝状遺構	1-D	180	陶器	擂鉢・瓶	玉縁口縁（擂鉢）	赤茶・灰茶	ロクロ	鉄絵・灰釉	61.6	口縁部破片2点	肥前系	1650～1860
65	A-2	3	溝状遺構	1-D	180	陶器	碗・鉢・皿・行平？	半球形・折縁形・嬰口縁等	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	160.2	腰錆鉢・鐵茶碗・ヒダ皿他	瀬戸美濃系	1680～1860
66	A-2	3	溝状遺構	1-D	180	陶器	碗・瓶	半球形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・上絵（緑，黒）	15.9	破片3点	京・信楽系	1780～1860
67	A-2	3	溝状遺構	1-D	180	土器	焙烙	内耳形	赤茶～暗茶	積み上げ貼り付け	無施釉	203.3	破片多数	在地系？	17c～19c
68	A-2	3	溝状遺構	1-E	173	磁器	碗・変形皿・水滴	丸形・端反形	白・灰	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉・色絵	70.5	色絵水滴・摺絵変形皿・蔦文碗他	肥前系	1690～1860
69	A-2	3	溝状遺構	1-E	173	陶器	擂鉢	折り縁形	赤茶	ロクロ	鉄釉	142.3	口縁部のみ	肥前系	1750～1860
70	A-2	3	溝状遺構	1-E	173	陶器	碗・皿・小壺	半球形・端反形・腰張形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	76.1	鐵茶碗・腰張碗・端反碗　他	瀬戸美濃系	1680～1860
71	A-2	3	溝状遺構	1-E	173	陶器	碗・土瓶	端反形	灰	ロクロ貼り付け	鉄絵・灰釉	12.3	破片2点	京・信楽系	1780～1860
72	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	磁器	碗・皿・瓶	半球形・半筒形・鶴首形	白	ロクロ	呉須・透明釉（一部色絵あり）	89.2	蔦文碗・羽文瓶他	肥前系	1740～1860
73	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	陶器	擂鉢	端反形	赤茶	ロクロ	鉄釉	69.0	口縁部のみ残存	肥前系	1750～1860
74	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	陶器	碗・鉢	—	黄白	ロクロ	鉄釉・灰釉	28.8	破片3点	瀬戸美濃系	1780～1860
75	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	陶器	碗・小鉢	半球形・桶形	黄灰	ロクロ	鉄絵・呉須・灰釉	73.6	秋草文碗・織部調縦縞小向付他	京・信楽系	1780～1860
76	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	透明釉（呼継風貫入）	17.2	破片2点	関西系	1800～
77	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	焼締	急須	—	暗紫茶	ロクロ	無施釉	13.6	底部残存	常滑・万古系	1860～
78	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	土器	鉢	碁笥底形	灰	ロクロ	無施釉	53.8	口縁部欠損	在地系？	19c
79	A-2	3	溝状遺構	1-F	188	土器	焙烙他	—	赤茶～暗茶	ロクロ	無施釉（一部鉄彩？）	75.8	破片数点	在地系？	18c～19c
80	A-2	3	検出面	検出面	168 170	磁器	碗・皿・鉢・猪口	丸形・端反形・半球形・半筒形	白・灰	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉	593.6	算木文・花唐草文・梅樹文・蛸唐草文・五弁花文他	肥前系	1690～1860

表13　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(3)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
81	A-2	3	検出面	検出面	168 170	磁器	小碗	丸形・端反形	白	ロクロ	透明釉　漆継直しあり	187.3	小碗破片4～5個体分	肥前系	1690～1860
82	A-2	3	検出面	検出面	168 170 171	磁器	碗・鉢・碗蓋	半球形・半筒形・丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉・上絵（赤,緑,黒,金）	104.5	色絵のみ・染付色絵製品あり	肥前系	1780～1860
83	A-2	3	検出面	検出面	170	磁器	鉢	端反形	白	ロクロ	青磁釉	43.6	破片3点	肥前系	1780～1860
84	A-2	3	検出面	検出面	168 170 171	陶器	擂鉢・鉢	高台付き	赤茶	ロクロ	鉄釉・刷毛目鉢	726.1	擂り鉢破片が主	肥前系	1780～1860
85	A-2	3	検出面	検出面	168 170 171	陶器	碗・鉢・蓋・擂鉢・土鍋	丸形・端反形・半球形・半筒形・折縁形	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉（擂鉢・土鍋・腰錆碗）・灰釉・銅緑釉（碗）	748.9	破片多数	肥前系	1680～1860
86	A-2	3	検出面	検出面	170 171	磁器	碗・蓋	端反形・丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	41.3	破片3点	瀬戸美濃系	1840～1870
87	A-2	3	検出面	検出面	168 170 171	陶器	碗・鉢・土瓶	杉形・半球形・端反形	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・灰釉・上絵（茶,緑）	318.6	碗破片中心	京・信楽系	1740～1860
88	A-2	3	検出面	検出面	170	陶器	繰糸鍋	平底	赤褐・白い粒子	ロクロ・貼り付け	鉄釉	146.7	底部破片	松代系	1860～1910
89	A-2	3	検出面	検出面	170 171	焼締	瓶	べこかん形	暗茶・緻密硬質	ロクロ　押圧	無施釉	87.6	破片2点	備前系	1780～1860
90	A-2	3	検出面	検出面	171	陶器	鉢	－	暗灰	ロクロ	鉄釉（黒）	12.8	破片2点	北陸系	1780～1860
91	A-2	3	検出面	検出面	170	土器	焙烙・かわらけ・甕	－	赤茶～暗茶	ロクロ	無施釉	485.8	破片数点	在地系？	17c～19c
92	A-3	3	石列	1	189	磁器	碗	端反形・丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉・色絵	35.1	染付碗破片中心	肥前系	1780～1860
93	A-3	3	石列	1	189	陶器	碗	－	灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	3.6	小破片2点	瀬戸美濃系	1780～1860
94	A-3	3	石列	1	189	陶器	鉢	－	暗灰・白粒子	ロクロ	白釉	28.2	破片1点	松代系	1810～1860
95	A-3	3	石列	1	189	土器	焙烙・甕	－	赤茶～暗茶	ロクロ	無施釉	205.9	破片2点	在地系？	17c～19c
96	A-3	3	石列	1	178	磁器	碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	14.9	破片3点	肥前系	1690～1780
97	A-3	3	石列	1	178	陶器	中碗	呉器形	灰黄	ロクロ	灰釉	53.8	破片3点（肥前系京焼風陶器）	肥前系	1650～1690
98	A-3	3	石列	1	178	陶器	碗・鉢	－	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉	114.1	破片3点	瀬戸美濃系	1780～1860
99	A-3	3	石列	1	178	土器	焙烙	－	赤茶～暗茶	－	無施釉	7.3	底破片1点	在地系？	17c～19c
100	A-3	3	土坑	3	238	磁器	碗	半筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	11.8	破片2点	肥前系	1750～1810
101	A-3	3	土坑	3	239	陶器	擂鉢	無高台	暗紫茶	ロクロ糸切り	無施釉	336.7	底部破片	肥前系	1690～1740
102	A-3	3	土坑	3	238	陶器	碗	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・上絵（赤,緑,茶）	15.2	破片3点	京・信楽系	1780～1860
103	A-3	3	土坑	4	240	磁器	碗・小猪口	半筒形・桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉・白磁・色絵	45.8	破片数点	肥前系	1690～1780
104	A-3	3	土坑	4	240	陶器	瓶・擂鉢・皿	－	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉	68.4	破片3点	肥前系	1690～1740
105	A-3	3	検出面	検出面	177	磁器	碗・鉢・蓋・皿・段重・瓶	丸形・広東形・浅半球形・端反形・筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉・色絵　漆継直しあり	613.0	蛸唐草文・雲龍文・横縞文・蝶文・牡丹文他	肥前系	1780～1840
106	A-3	3	検出面	検出面	177	陶器	擂鉢・碗	高台付き	赤茶～暗茶	ロクロ	鉄釉・灰釉・刷毛目	374.8	擂り鉢破片が主	肥前系	1650～1860
107	A-3	3	検出面	検出面	177	磁器	碗・皿・鉢・碍子	丸形・筒丸形	白ガラス質・薄緑	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・色絵	296.7	破片多数	瀬戸美濃系	1860～1910
108	A-3	3	検出面	検出面	177	陶器	擂鉢・鉢・碗・瓶・土鍋	－	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・灰釉	672.6	破片多数	瀬戸美濃系	1680～1860
109	A-3	3	検出面	検出面	177	陶器	小碗	半球形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・上絵（緑,黄,茶？）	75.5	半球碗破片	京・信楽系	1780～1860
110	A-3	3	検出面	検出面	177	土器	かわらけ	－	灰白	ロクロ	無施釉　口縁に煤付着	5.8	破片1点　灯明皿か	在地系？	18c～19c
111	A-2	3	検出面	重機検出面	175	磁器	碗・皿・瓶	丸形・輪花形・鶴首形	白・灰	ロクロ　蛇の目高台	呉須・透明釉・青磁釉・色絵　漆継直しあり	353.7	破片多数　初期伊万里皿混ざる	肥前系	1630～1860
112	A-2	3	検出面	重機検出面	175	磁器	薄手酒杯・鉢	半球形	白	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・色絵	105.5	破片3点	瀬戸美濃系	1800～1910
113	A-2	3	検出面	重機検出面	175	陶器	植木鉢	折縁形	赤褐・白い粒子	ロクロ	鉄釉	657.8	破片多数	松代系	1810～1860
114	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	磁器	碗・鉢・蓋・皿・段重・瓶・水滴	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形	白	ロクロ　押圧	呉須・透明釉・白磁・色絵	416.4	碗破片中心	肥前系	1740～1860
115	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	陶器	擂鉢・碗	－	赤茶・灰茶	ロクロ	鉄絵・灰釉	197.2	破片2点	肥前系	1650～1860
116	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	磁器	碗・小鉢・小皿	端反形・広東形・桶形	白ガラス質・白	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉	258.6	碗破片中心	瀬戸美濃系	1800～1870
117	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	陶器	碗・徳利・皿・鉢	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	440.0	鉢破片中心	瀬戸美濃系	1780～1860
118	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	磁器	水注（土瓶）	－	白	ロクロ	呉須・透明釉	12.5	破片3点	関西系	1800～1860
119	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	陶器	擂鉢・鉢・植木鉢	－	暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	894.2	擂り鉢破片が主	松代系	1810～1860
120	B-1	3	石組溝（上層遺構）下層	2	223	土器	火消壺	－	灰	ロクロ	瓦質	113.0	破片1点	在地系？	19c

表14　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(4)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
121	B-1	3	石組溝（上層遺構）（裏込）	2	197	磁器	碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	64.0	破片数点	肥前系	1780～1860
122	B-1	3	石組溝（上層遺構）（裏込）	2	197	磁器	碗・蓋・皿	丸形・広東形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	50.3	破片数点	瀬戸美濃系	1800～1860
123	B-1	3	石組溝（上層遺構）（裏込）	2	197	陶器	鉢	—	灰黄	ロクロ	鉄釉・銅緑釉	55.9	破片2点	瀬戸美濃系	1780～1860
124	B-1	3	石組溝（上層遺構）（裏込）	2	197	焼締	急須	—	暗紫茶・橙灰	ロクロ貼付け	藻掛け釉	17.5	破片数点	常滑・万古系	1820～
125	B-1	3	石組溝（上層遺構）（裏込）	2	197	陶器	植木鉢	折縁形	赤褐・白い粒子	ロクロ	鉄釉・銅緑釉	394.0	破片3点	松代系	1810～1860
126	B-1	3	石組池	1	200他	磁器	碗・鉢・蓋・皿・段重・瓶・碍子	丸形・端反形・半球形・半筒形・折縁形	白・灰	ロクロ・型打ち	呉須・透明釉・青磁釉 漆継直しあり	838.0	くらわんか・・環状松竹梅文・微塵唐草文・蛸唐草文・壽字文他	肥前系	1690～1860
127	B-1	3	石組池	1	200他	陶器	擂鉢・鉢・碗	折り縁形（擂鉢）	赤茶・灰茶	ロクロ	鉄釉（擂鉢）・灰釉・刷毛目（鉢・碗）	399.1	擂り鉢破片が主	肥前系	1690～1860
128	B-1	3	石組池	1	200他	磁器	碗・鉢・蓋・皿・燭徳利・瓶	丸形・端反形・半球形・筒形・折縁形	白ガラス質・白	ロクロ	呉須・コバルト・クロム・透明釉	969.2	小碗破片多数・摺絵・銅版・多色摺り皿あり	瀬戸美濃系	1800～1910
129	B-1	3	石組池	1	200他	陶器	碗・徳利・合子	腰張形・半球形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	266.3	碗破片中心	瀬戸美濃系	1680～1860
130	B-1	3	石組池	1	200他	陶器	植木鉢・鉢・繰糸鍋	折縁形（植木鉢）・玉縁形（鉢）	暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	904.4	鉢破片中心	松代系	1810～1930
131	B-1	3	石組池	1	200他	磁器	段重・急須	方形	白	型成形	呉須・透明釉	55.4	破片3点	関西系	1800～
132	B-1	3	石組池	1	222	磁器	変形小皿	楕円形	白	型成形・ハリ跡あり	黄釉	56.0	見込み龍文・中国風意匠	関西系	1860～
133	B-1	3	石組池	1	194他	陶器	碗・鉢・蓋	端反形・丸形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉・緑釉・鉄絵・色絵	112.0	鉢破片中心	京・信楽系	1740～1860
134	B-1	3	石組池	1	192	焼締	急須	茶壺形	暗紫茶	ロクロ貼付け	無施釉	14.5	破片2点	常滑・万古系	1860～
135	B-1	3	石組池	1	192	焼締	極小皿	平底	赤褐	ロクロ	口唇のみ釉薬	7.5	破片1点	備前系	1860～1910
136	B-1	3	石組池	1	192他	土器	植木鉢・風炉・その他	—	赤茶～暗茶	ロクロ	無施釉	231.6	破片数点	在地系？	19c
137	B-1	3	石組池（底面）	1	196	磁器	碗・皿・鉢・散蓮華	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	51.8	破片数点	肥前系	1690～1860
138	B-1	3	石組池（底面）	1	196	磁器	碗・小皿	丸形・端反形	白ガラス質	ロクロ	コバルト・クロム・透明釉	58.9	破片数点	瀬戸美濃系	1870～1910
139	B-1	3	石組池（底面）	1	196	陶器	擂鉢	玉縁口縁	暗紫茶	ロクロ	口唇のみ釉薬	15.8	破片1点	肥前系	1650～1690
140	B-1	3	石組池（底面）	1	196	陶器	小鉢	筒形	灰茶	ロクロ	鉄釉	5.7	破片1点	瀬戸美濃系	1780～1860
141	B-1	3	石組池（裏込）	1	222	磁器	碗・皿・瓶	—	白	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉	43.2	小破片	肥前系	1690～1860
142	B-1	3	石組池（裏込）	1	222	磁器	小皿・燭徳利	丸形	白	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉	35.2	破片数点	瀬戸美濃系	1860～1880
143	B-1	3	石組池（裏込）	1	222	陶器	擂鉢・鉢	高台付き	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	228.1	擂り鉢破片が主	松代系	1810～1860
144	B-1	3	検出面	検出面	191他	磁器	碗・鉢・蓋・皿・段重・瓶	丸形・広東形・半球形・浅半球形・端反形・筒形・半筒形・輪花形・瓶子形・鶴首形	白	ロクロ・ロクロ型打・蛇の目高台	呉須・透明釉・青磁釉・瑠璃釉・色絵	1749.8	花唐草・蛸唐草・微塵唐草・四方襷・幔幕・五弁花・梅・松・雲竜・七宝・孫悟・山水・草花・鯉・雷文・牡丹他	肥前系	1780～1860（1片だけ1880以降の摺り絵破片あり）
145	B-1	3	検出面	検出面	191他	陶器	擂鉢・碗・瓶	折り縁形（擂鉢）・鶴首・腰張形	赤茶～暗茶	ロクロ	鉄釉（擂鉢）・灰釉・刷毛目（瓶・碗）	303.9	肥前系京焼風碗底部に「木下弥」銘	肥前系	1650～1860
146	B-1	3	検出面	検出面	191他	磁器	碗・鉢・蓋・皿・燭徳利・瓶	丸形・広東形・半球形・浅半球形・端反形・筒形・半筒形・輪花形・瓶子形・鶴首形	白	ロクロ　蛇の目高台	呉須・コバルト・クロム・透明釉・クロム青磁・色絵	1413.5	手描染付（宝珠・壽・草花・丸・源氏香）・摺絵染付（微塵唐草・青海波・蓮弁）銅版染付・スタンプ染付あり	瀬戸美濃系	1800～1930
147	B-1	13	検出面	検出面	191他	陶器	碗・鉢・碗・瓶・土鍋	折縁形・玉縁形（鉢）取っ手付き（土瓶・土鍋）・瓢形（瓶）	灰～灰黄	ロクロ・貼り付け	灰釉・鉄釉・緑釉	1305.0	鉢・土鍋破片が主	瀬戸美濃系	1780～1860
148	B-1	3	検出面	検出面	191他	陶器	擂鉢	高台付き・折縁形	赤褐・白い粒子	ロクロ	鉄釉（失透）	1229.1	大きさ大小あり	松代系	1810～1930
149	B-1	3	検出面	検出面	191他	陶器	植木鉢・鉢・蓋	折縁形（植木鉢）・玉縁形（鉢）	赤褐・白い粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	1465.6	鉢・植木鉢破片中心	松代系	1810～1930
150	B-1	3	検出面	検出面	191他	陶器	火鉢	丸形	灰黄	ロクロ	藍釉	2590.3	口縁部欠損・残存1/4くらいか。見込露胎	信楽系	1860～
151	B-1	3	検出面	検出面	191他	陶器	碗・瓶・蓋物	杉形・半球形・筒形	灰～灰黄	ロクロ削高台	呉須・鉄絵・白泥・透明釉	258.0	碗破片中心	京・信楽系	1740～1860
152	B-1	3	検出面	検出面	191他	磁器	碗・蓋物・蓋・皿・段重・急須	筒丸形・端反形・半球形・方形	白	ロクロ・貼り付け	呉須・透明釉・鮫肌釉	196.8	碗破片中心	関西系	1800～1910
153	B-1	3	検出面	検出面	191他	焼締	急須	茶こし付き	暗紫茶・橙灰	ロクロ貼付け	藻掛け釉（常滑）	104.9	万古系紫泥急須中心	常滑・万古系	1820～1930
154	B-1	3	検出面	検出面	191他	土器	火消壺・鉢・焙烙	—	灰茶～暗茶	ロクロ	無施釉　火消壺瓦質	945.9	—	在地系？	18c～19c
155	B-2	3	溝状遺構	1	229	磁器	碗・皿・鉢	半球形・玉縁形	白	ロクロ	呉須・透明釉・色絵	33.4	窓絵に松・四方襷・山水	肥前系	1780～1860
156	B-2	3	溝状遺構	1	229	陶器	擂鉢	—	赤茶	—	鉄釉	14.3	小破片1点	肥前系	1750～1860
157	B-2	3	溝状遺構	1	229	磁器	碗・瓶・急須	丸形・端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉	179.2	碗破片中心　統制番号スタンプ染付碗あり「岐381」	瀬戸美濃系	1870～1940
158	B-2	3	溝状遺構	1	229	陶器	中瓶・急須	—	灰～灰黄	ロクロ	鉄釉・白泥・呉須・透明釉	50.4	破片3点	瀬戸美濃系	1780～1910

表15　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(5)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
159	B-2	3	溝状遺構	1	229	陶器	便器	朝顔形	赤褐・白い粒子	板おこし	白泥・灰釉・銅緑釉	1074.1	男性用小便器の一部	松代系	1860～1930
160	B-2	3	溝状遺構	1	229	陶器	碗	—	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉・灰釉	28.6	破片2点	松代系	19c
161	B-2	3	溝状遺構	1	229	土器	火鉢	口縁内湾形	赤褐	ロクロ	無施釉　口縁・内面に煤付着	65.5	破片1点	在地系？	1810～1820
162	B-2	3	検出面	検出面	227他	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・皿・段重・瓶・紅皿	丸形・広東形・半球形・浅半球形・端反形・筒形・半筒形・輪花形・瓶子形・鶴首形	白・灰	ロクロ・ロクロ型打・蛇の目高台	呉須・透明釉・青磁釉・瑠璃釉・色絵	953.7	蛸唐草文・雲龍文・鼓文・環状松竹梅文・牡丹文・コンニャク印判・他	肥前系	1690～1860
163	B-2	3	検出面	検出面	227他	陶器	擂鉢	平底	赤褐	ロクロ糸切り	鉄釉	479.9	全面施釉・口唇のみ施釉あり	肥前系	1650～1860
164	B-2	3	検出面	検出面	227他	陶器	擂鉢	平形	灰～灰黄	ロクロ削高台	呉須・透明釉・刷毛目	63.5	破片4点	肥前系	1650～1740
165	B-2	3	検出面	検出面	227他	磁器	碗	丸形・端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉	43.2	破片3点	瀬戸美濃系	1800～1930
166	B-2	3	検出面	検出面	227他	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・瓶・土鍋・土瓶	丸形・端反形・半球形・筒形・折縁形	灰～灰黄	ロクロ・貼り付け	鉄釉・灰釉・刷毛目・呉須絵	397.7	破片多数	瀬戸美濃系	1680～1860
167	B-2	3	検出面	検出面	227他	磁器	碗・蓋	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	42.7	破片2点	関西系	1800～
168	B-2	3	検出面	検出面	227他	陶器	碗・鉢・皿	杉形・半球形・	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・呉須・透明釉・色絵	143.2	碗破片中心	京・信楽系	1740～1860
169	B-2	3	検出面	検出面	227他	陶器	瓶	—	赤茶・緻密硬質	ロクロ	鉄釉	85.9	破片4点	備前系	1780～1860
170	B-2	3	検出面	検出面	227他	土器	焙烙・甕・涼炉	—	赤茶～暗茶	ロクロ・型打ち	無施釉	213.0	破片数点	在地系？	18c～19c
171	A-1	2	方形土坑	2	121 129	磁器	碗・大皿・蓋・猪口	丸形形・浅半球形・端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	243.3	氷裂文（大皿・志田窯系）・線書き羽文・草花文・白磁	肥前系	1690～1860
172	A-1	2	方形土坑	2	121	磁器	小碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	瑠璃釉・透明釉	41.5	焼継ぎ痕あり	肥前系	1800～1860
173	A-1	2	方形土坑	2	121 129	陶器	碗瓶・瓶	丸形	灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	73.4	小碗被熱・鐙茶碗破片他	瀬戸美濃系	1680～1860
174	A-1	2	方形土坑	2	121	陶器	鉢・燭徳利	玉縁口縁	赤褐・白い粒子	ロクロ	銅緑釉・土灰釉	38.5	破片2点	松代系	1810～1930
175	A-1	2	方形土坑	2	129	土器	かわらけ	—	橙灰	ロクロ	無施釉	20.3	破片2点	在地系？	18c～19c
176	A-1	2	方形土坑	2	121 129	陶器	大瓶	—	赤茶・緻密硬質	ロクロ	鉄釉	211.1	破片3点	備前系	1780～1860
177	A-1	2	土坑	28	135	磁器	碗・鉢・小皿・蓋	丸形・端反形・半球形・膨張形・玉縁形	白	ロクロ・ロクロ型打	呉須・透明釉	282.8	碗破片中心	肥前系	1780～1860
178	A-1	2	土坑	28	135	陶器	鉢	—	赤褐	ロクロ	刷毛目・灰釉	120.0	破片2点	肥前系	1690～1780
179	A-1	2	土坑	28	135	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・瓶・土鍋・土瓶	丸形形・浅半球形・端反形・折縁形	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・灰釉・鉄釉・銅緑釉・呉須・透明釉	667.9	破片多数	瀬戸美濃系	1780～1860
180	A-1	2	土坑	28	135	磁器	小皿	—	白灰	ロクロ	青磁釉	17.4	破片1点	関西系	1800～1860
181	A-1	2	土坑	28	135	陶器	碗	杉形・半球形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・色絵	99.2	碗破片中心	京・信楽系	1740～1860
182	A-1	2	土坑	28	135	土器	不明	筒形	赤茶	ロクロ	無施釉	29.5	破片1点	在地系？	18c～19c
183	A-1	2	性格不明遺構	16	120	磁器	碗・鉢・蓋・皿・段銚子・瓶	丸形・端反形・半球形・膨張形・輪花形	白・灰	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉	569.5	蛸唐草文・壽文・鼓文・環状松竹梅文・牡丹文・雷文・白磁・青磁他	肥前系	1780～1860
184	A-1	2	性格不明遺構	16	120	陶器	擂鉢	—	赤茶	ロクロ	鉄釉	18.2	破片1点	肥前系	1750～1860
185	A-1	2	性格不明遺構	16	120	磁器	碗・皿	端反形・隅切四方形	白ガラス質	ロクロ・型打ち	呉須・コバルト・透明釉	109.8	破片数点	瀬戸美濃系	1800～1890
186	A-1	2	性格不明遺構	16	120	陶器	碗・皿・瓶	丸形・天目形他	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・灰釉・鉄釉・呉須・透明釉	381.3	瓶破片（鉄釉・灰釉）多数	瀬戸美濃系	1680～1860
187	A-1	2	性格不明遺構	16	120	磁器	碗・皿・盆・水指・急須・鉢・段重	丸形・端反形・方形・筒形	白	ロクロ・型打ち	呉須・コバルト・透明釉	556.6	型物多い、草花・湯巻・竹・源氏香他	関西系	1800～
188	A-1	2	性格不明遺構	16	120	陶器	擂鉢・鉢・植木鉢・繰糸鍋	玉縁口縁・折縁形	暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	365.3	破片多数	松代系	1810～1930
189	A-1	2	性格不明遺構	16	120	土器	不明	—	赤茶	板おこし	無施釉	110.9	破片2点	在地系？	18c～19c
190	A-1	2	溝状遺構	15	122	磁器	碗・皿	輪花捻子形	白	ロクロ型打ち	呉須・透明釉	88.7	輪花捻子皿破片中心	肥前系	1780～1860
191	A-1	2	溝状遺構	15	122	磁器	碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	29.2	山水文・破片3点	瀬戸美濃系	1840～1870
192	A-1	2	溝状遺構	15	122	陶器	碗・瓶・蓋物	—	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・透明釉・上絵	37.2	縞文蓋（銚子蓋か）中心	瀬戸美濃系	1780～1860
193	A-1	2	土坑	29	137	磁器	碗	半筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	4.7	瑤珞文　破片1点	肥前系	1740～1810
194	A-1	2	土坑	29	137	陶器	土瓶	—	黄褐色	ロクロ	白泥・鉄絵・透明釉	21.2	底部破片	益子系	1860～1920
195	A-1	2	土坑	29	137	磁器	鉢・土瓶	—	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	102.3	底部破片	瀬戸美濃系	1780～1860
196	A-1	2	土坑	31	143	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	25.9	蓮弁・蛸唐草・環状松竹梅　底部破片	肥前系	1800～1860
197	A-1	2	土坑	32	142	磁器	碗・皿	丸形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	22.0	碗破片中心	肥前系	1690～1780

表16　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(6)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
198	A-1	2	土坑	32	142	陶器	擂鉢	玉縁口縁	暗灰	ロクロ	鉄釉（口唇のみ）	23.6	破片1点	肥前系	1650～1690
199	A-1	2	土坑	33	144	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉	20.8	破片2点	肥前系	1800～1860
200	A-1	2	土坑	33	144	陶器	土鍋・擂鉢	鉄釉	灰黄	ロクロ	鉄釉	56.7	破片2点	瀬戸美濃系	1780～1860
201	A-1	2	土坑	33	144	陶器	植木鉢	－	赤茶・白粒子	ロクロ	白泥・銅緑釉	61.2	破片1点	松代系	1810～1930
202	A-1	2	土坑	35	158	磁器	碗・皿・段重	筒形・丸形	白	ロクロ	呉須・鉄彩・透明釉	91.6	破片4点	肥前系	1690～1860
203	A-1	2	土坑	35	158	磁器	湾・皿・瓶	鶴首形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・クロム・透明釉	24.0	破片4点	瀬戸美濃系	1800～1910
204	A-1	2	土坑	35	158	陶器	碗	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	12.7	破片2点	瀬戸美濃系	1780～1860
205	A-1	2	土坑	35	158	陶器	鉢？	筒形	灰	ロクロ	灰釉・色絵	34.9	破片3点	京・信楽系	1780～1860
206	A-1	2	土坑	35	158	焼締	急須	－	暗紫茶	ロクロ	無施釉	36.1	破片1点	常滑・万古系	1860～
207	A-1	2	土坑	36	164	磁器	碗・皿・猪口・鉢	丸形・方形・筒形・桶形	白	ロクロ	呉須・透明釉	64.3	破片数点	肥前系	1650～1860
208	A-1	2	土坑	36	164	陶器	鉢	－	赤茶	ロクロ	鉄釉	17.5	破片1点	肥前系	1780～1860
209	A-1	2	土坑	36	164	陶器	碗・皿・鉢	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	97.6	破片数点	瀬戸美濃系	1680～1860
210	A-1	2	土坑	36	164	磁器	鉢	方形	白	型成形	呉須・透明釉	26.4	胴部	関西系	1800～
211	A-1	2	土坑	36	164	陶器	碗	杉形	白灰	ロクロ	灰釉	13.2	破片1点	京・信楽系	1740～1780
212	A-1	2	土坑	36	164	焼締	土瓶	－	赤茶	ロクロ	藁掛け釉？	39.9	底部破片	常滑・万古系	1820～1910
213	A-1	2	土坑	36	164	陶器	擂鉢・鉢・片口鉢	－	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉	453.2	擂鉢中心に破片数点	松代系	1810～1930
214	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・皿・段重・瓶・仏花瓶・紅皿	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形・輪花形	白	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉・色絵　焼継直しあり	1521.6	玉弁花・桜・四方樽・松竹梅・蛸唐草・波・横縞・柳・蘭・瑤珞・太明年製他	肥前系	1740～1860
215	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	陶器	擂鉢・鉢	高台付き　外反口縁	赤褐	ロクロ	鉄釉	236.0	擂鉢破片が主	肥前系	1750～1860
216	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	磁器	碗	半球形・広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	119.7	碗破片中心	瀬戸美濃系	1800～1860
217	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・灰吹・瓶・土鍋・土瓶・鳥餌鉢・火入	折縁形・玉縁形（鉢）取っ手付き（土瓶・土鍋）	灰～灰黄	ロクロ・貼り付け	灰釉・鉄釉・銅緑釉・呉須	852.9	鉢破片中心	瀬戸美濃系	1680～1860
218	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	陶器	土瓶・土鍋・碗・水滴	杉形・半球形・扁平形	灰～灰黄	ロクロ・型打ち	灰釉・銅緑釉・色絵	296.0	土瓶・土鍋破片中心	京・信楽系	1740～1860
219	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165 117	磁器	碗・蓋物	丸形・筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	49.2	破片3点	関西系	1800～
220	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165	陶器	擂鉢・植木鉢	玉縁口縁	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉・銅緑釉	207.2	破片3点	松代系	1810～1860
221	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165	土器	急須	龍状注口	赤茶	型成形	表面に赤漆塗り	5.1	破片1点	不明	18c～19c
222	A-2	2	建築基礎（堀方）	1	163 165	土器	火消壺・かわらけ・焙烙	－	赤褐～暗灰	ロクロ	火消壺表面瓦質	357.7	火消壺破片中心	在地系？	18c～19c
223	A-2	2	石組池	3	131	磁器	碗・皿・猪口・瓶・紅猪口	丸形・端反形・半筒形・桶形・鶴首形	白	ロクロ・型成形	呉須・透明釉・青磁釉色絵・漆継直しあり	145.1	雲龍・横縞・松竹梅・葵・	肥前系	1780～1860
224	A-2	2	石組池	3	131	陶器	擂鉢・鉢	－	赤茶～暗茶	ロクロ	鉄釉・灰釉	88.0	破片3点	肥前系	1750～1860
225	A-2	2	石組池	3	131	磁器	碗・皿・薄手酒杯	丸形・端反形・	白ガラス質	ロクロ・型成形	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵	138.9	摺絵印判碗・上絵酒杯・コバルト皿他	瀬戸美濃系	1840～1910
226	A-2	2	石組池	3	131	陶器	碗・甕	半球形・胴締形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉・上絵	85.8	鉛茶碗・志野風上絵碗など	瀬戸美濃系	1780～1910
227	A-2	2	石組池	3	131	陶器	碗	杉形・半球形	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄絵・透明釉・上絵	122.7	碗破片中心	京・信楽系	1740～1860
228	A-2	2	石組池	3	131	磁器	碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	36.5	破片2点	関西系	1800～
229	A-2	2	石組池	3	131	磁器	擂鉢・鉢・繰糸鍋	玉縁口縁片口付き	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	178.9	擂鉢破片が主	松代系	1810～1930
230	A-2	2	石組池	3	131	土器	焙烙・かわらけ	－	赤褐・白灰	ロクロ	無施釉	60.3	破片3点	在地系？	18c～19c
231	A-2	2	石組池（覆土）	3	160	磁器	碗・鉢・小皿・蓋	丸形・輪花形	白	ロクロ	呉須・透明釉	126.4	白磁輪花鉢中心	肥前系	1780～1860
232	A-2	2	石組池（覆土）	3	160	磁器	碗・皿	丸形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・クロム・透明釉	156.9	クロム青磁染付碗中心	瀬戸美濃系	1840～1910
233	A-2	2	石組池（覆土）	3	160	陶器	碗・大皿・蓋・猪口	－	灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	5.1	破片3点	瀬戸美濃系	1780～1860
234	A-2	2	石組池（覆土）	3	160	陶器	植木鉢・鉢	玉縁口縁	赤茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉	76.0	破片2点	松代系	1810～1930
235	A-2	2	石組池（覆土）	3	160	土器	不明	－	赤茶	ロクロ	無施釉	43.3	破片1点	在地系	18c～19c
236	A-2	2	石組池（裏込）	3	161	磁器	碗・瓶・蓋	丸形・鶴首形・仏花瓶形	白・灰	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉	134.6	花唐草・蛸唐草・四方樽・梅・松	肥前系	1740～1860
237	A-2	2	石組池（裏込）	3	161	陶器	擂鉢	高台付き　外反口縁	赤褐	ロクロ	鉄釉	289.2	破片2点	肥前系	1750～1860

表17　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(7)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
238	A-2	2	石組池(裏込)	3	161	磁器	碗・皿・瓶・酒杯	丸形・端反形・筒形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明・色絵	85.6	碗破片中心	瀬戸美濃系	1800～1910
239	A-2	2	石組池(裏込)	3	161	陶器	碗・瓶	半球形	灰～灰黄	ロクロ	白泥・鉄絵・透明釉・上絵・鉄釉	30.8	碗破片中心	京・信楽系	1780～1860
240	A-2	2	石組池(裏込)	3	161	陶器	繰糸鍋	－	暗茶・白粒子	ロクロ貼付け	土灰釉	209.9	底部破片	松代系	1860～1930
241	A-2	2	検出面	検出面	83 93	磁器	碗・皿・鉢	丸形・端反形・広東形・俵形	白	ロクロ	呉須・透明釉　焼継直しあり	448.8	白磁鉢・龍・雷文・環状松竹梅・山水・波他	肥前系	1690～1860
242	A-2	2	検出面	検出面	93	陶器	碗	胴締形	暗灰	ロクロ	土灰釉	29.3	破片1点	肥前系	1600～1650
243	A-2	2	検出面	検出面	83 93	磁器	碗・小皿・蓋・薄手酒杯	丸形・端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵	511.1	コバルト染付製品多数	瀬戸美濃系	1800～1910
244	A-2	2	検出面	検出面	83 93	陶器	通い徳利・擂鉢・蓋	通い徳利形	灰～灰黄	ロクロ	鉄絵・透明釉	528.3	通い徳利中心。屋号	瀬戸美濃系	1780～1910
245	A-2	2	検出面	検出面	83 93	陶器	土瓶・穿心管急須・花生	－	灰～灰黄	ロクロ貼付け	白泥・灰釉・透明釉・銅緑釉	201.1	土瓶破片中心	京・信楽系	1780～1910
246	A-2	2	検出面	検出面	93	磁器	小碗	碁笥底形	白	ロクロ	呉須・透明釉	21.3	破片1点。鳥に草木	関西系	1800～
247	A-2	2	検出面	検出面	93	陶器	鉢	高台付き	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	292.4	破片2点	松代系	1810～1930
248	A-2	2	検出面	検出面	93	土器	火消壺	－	暗灰	ロクロ	火消壺表面瓦質	79.8	破片2点	在地系？	19c
249	A-3	2	土坑	3	128	磁器	蓋物	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	18.9	破片4点	肥前系	1780～1860
250	A-3	2	土坑	3	128	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	鉄彩・銅緑釉	6.3	口唇鉄彩　破片１点	瀬戸美濃系	1840～1870
251	A-3	2	土坑	3	128	陶器	皿	饗皿形	黄白	ロクロ型打ち	灰釉	3.5	破片1点	瀬戸美濃系	1780～1860
252	A-3	2	土坑	4	126	磁器	碗・皿	端反形・隅切四方形	白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉	32.4	破片2点　印刻・銅版	瀬戸美濃系	1870～1910
253	A-3	2	土坑	4	126	磁器	碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	26.3	破片1点	肥前系	1780～1860
254	A-3	2	土坑	4	126	陶器	擂鉢	－	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	26.1	破片1点	松代系	1810～1930
255	A-3	2	土坑	5	125	磁器	中碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	15.9	破片1点	肥前系	1690～1780
256	A-3	2	土坑	5	125	陶器	植木鉢？	折縁形	赤茶・白粒子	ロクロ	白泥・灰釉・銅緑釉	13.2	破片1点	松代系	1810～1930
257	A-3	2	土坑	5	125	陶器	植木鉢	折縁形・陽刻	灰黄	ロクロ　型貼付け	銅緑釉・鉄泥	896.6	雲形文陽刻貼り付け	瀬戸美濃系	1800～1860
258	A-3	2	石列	6	127	磁器	不明	羽状形	白	型成形	呉須・透明釉	2.4	羽状陽刻に呉須掛け	肥前系	1690～1780
259	A-3	2	石列	6	127	陶器	擂鉢	－	赤褐	ロクロ	鉄釉	17.3	破片1点	肥前系	1750～1860
260	A-3	2	石列	6	127	磁器	極小皿	隅切四方形	白	型成形	呉須・透明釉	25.0	破片1点	瀬戸美濃系	1870～1890
261	A-3	2	石列	6	127	陶器	瓶	玉縁口縁	黄白	ロクロ	灰釉	5.1	口縁部破片1点	瀬戸美濃系	1680～1780
262	A-3	2	埋桶－1	10	140	磁器	碗	端反形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	22.9	口縁部破片1点	瀬戸美濃系	1800～1860
263	A-3	2	埋桶－1	10	140	陶器	鉢	玉縁口縁	暗茶・白粒子	ロクロ削高台	白釉・銅緑釉	37.3	口縁部破片1点	松代系	1810～1930
264	A-3	2	土坑	12	139	磁器	碗	－	白	ロクロ	呉須・透明釉	9.7	底部破片	肥前系	1690～1780
265	A-3	2	土坑	12	139	磁器	蓋	丸形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	3.3	破片1点	瀬戸美濃系	1800～1860
266	A-3	2	土坑	12	139	陶器	碗	筒形	灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	49.2	碗底部中心	瀬戸美濃系	1680～1860
267	A-3	2	板組遺構	15	146 157 166	磁器	碗・蓋物・蓋・皿・段重・瓶・仏花瓶・紅皿	丸形・端反形・鶴首形・方形・筒形	白・灰	ロクロ	呉須・透明釉・青磁釉	682.2	瓶・段重・碗破片多い	肥前系	1690～1860
268	A-3	2	板組遺構	15	166	陶器	擂鉢	玉縁口縁・片口	赤茶	叩き・ロクロ	鉄釉	298.2	表面に格子状叩き目 瓶跡あり	肥前系	1750～1860
269	A-3	2	板組遺構	15	146 157 166	磁器	碗・蓋・皿・瓶	端反形・筒丸形・鶴首形	白ガラス質	ロクロ	呉須・透明釉	116.9	蓋・碗破片が中心	瀬戸美濃系	1840～1870
270	A-3	2	板組遺構	15	146 157	陶器	碗・汁次・瓶	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	84.6	碗破片中心	瀬戸美濃系	1680～1860
271	A-3	2	板組遺構	15	146	磁器	水注（土瓶）	－	白ガラス質	ロクロ・貼り付け	呉須・透明釉	22.5	破片2点	関西系	1800～
272	A-3	2	板組遺構	15	157	陶器	火入・甕	－	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉・銅緑釉	81.6	破片2点	松代系	1810～1930
273	A-3	2	板組遺構	15	157	焼締	急須	－	暗茶	ロクロ	無施釉	4.7	破片1点	常滑・万古系	1800～
274	A-3	2	板組遺構	15	146	土器	不明	－	灰黄	－	無施釉	35.4	破片1点	在地系？	不明
275	A-3	2	4号トレンチ	－	151	磁器	碗	丸形・筒形	白	ロクロ	呉須・透明釉	66.0	碗破片中心	肥前系	1690～1780
276	A-3	2	4号トレンチ	－	151	陶器	碗・瓶	丸形	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉	36.7	破片2点	瀬戸美濃系	1680～1860
277	A-1	1	方形石組遺構	1	32 49	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・皿・段重・瓶・仏花瓶・ティーカップ	筒丸形・筒形・丸形・平形・西洋風皿・変形形他	白・白ガラス質・灰黄	ロクロ・型成形	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵手描・摺絵・銅版・シルクプリント	5192.7	江戸時代製品から戦後製品まであり。「改築祈念　伊藤事」・「松代町伊勢町」「馬の国」産・戦前番号製品・運輸番号など・戦中・戦後製品多数あり。	肥前（有田）・瀬戸美濃・九谷の銘あり	1690～1950

表18　土器・陶磁器観察表（実測対象外）(8)

保管通番	出土地点				注記No.	類別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等の特徴	重量（g）	所見		
	区	面	遺物名	遺物番号									特記事項・文様	推定産地	推定年代
278	A-1	1	方形石組遺構	1	32 49	陶器	碗・甕・鉢・植木鉢・摺鉢・蓋・皿	丸形・玉斑口縁・端反形・筒形他	赤茶・白粒子・灰～灰黄	ロクロ貼付け	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥	2156.7	江戸時代製品から戦後製品まであり。	瀬戸美濃系・肥前系・松代系・益子系	1680～
279	A-1	1	方形石組遺構	1	35 38 他	土器	植木鉢？他	－	橙灰	ロクロ	無施釉	65.6	破片3点	在地系？	19c～20c
280	A-1	1	方形石組遺構	1	31 32	焼締	急須	－	暗紫茶	ロクロ	無施釉	18.5	破片3点	常滑・万古系	1870～
281	A-2	1	石組池(大)	2	42 53 106 他	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・皿・段重・瓶・広花瓶・燭徳利	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形・輪花形	白・白ガラス質	ロクロ貼付け	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵・手描・摺絵・銅版	2471.5	江戸時代肥前系製品と明治時代瀬戸美濃系製品多いが、大正・昭和初期製品も少数見られる。統制番号製品なし。大正～昭和初期までの遺構か	肥前系（有田）・瀬戸美濃系	1690～1930
282	A-2	1	石組池(大)	2	42 53 106 他	陶器	碗・甕・鉢・火鉢・植木鉢・摺鉢・蓋・皿・燭徳利・便器・行平鍋・土鍋・蒸糸鍋	半球形・筒形・杉形・鹿口形・玉縁口縁・折縁形	灰・灰黄・赤茶・白粒子	ロクロ	白泥・土灰釉	3934.4	江戸後期～幕末京・信楽碗多い。明治以降の松代焼大型品・江戸中期～幕末の瀬戸美濃・肥前製品など	肥前系・瀬戸美濃系・京・信楽系・松代系他	1680～1860
283	A-2	1	石組池(大)	2	130	土器	火入・甕	－	灰～橙灰	ロクロ	火消壺表面瓦質	673.7	破片数点	在地系？	18c～19c
284	A-2	1	石組池(大)	2	106 130	焼締	急須・甕	－	灰白長石粒子・暗紫茶	ロクロ	無施釉	186.8	破片2点　急須に「小嶋園」	常滑・万古系・信楽系	19c～20c
285	A-2	1	石組溝	3	34 40	磁器	碗・皿・瓶・酒杯	丸形・端反形・半球形・	白・白ガラス質・灰	ロクロ・蛇の目釉剥ぎ	呉須・コバルト・クロム・透明釉・青磁釉・	181.3	江戸後期肥前系製品・明治時代～昭和初期瀬戸美濃系製品が中心	肥前系（有田）・瀬戸美濃系	1690～1930
286	A-2	1	石組溝	3	34 40	陶器	碗・皿・土瓶	－	灰～灰黄	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉・呉須	50.3	江戸中期摺絵皿が中心。破片3点	瀬戸美濃系・京・信楽系	1680～
287	A-2	1	石組溝	3	34	焼締	急須	－	暗紫茶	ロクロ貼付け	無施釉	19.6	急須胴部・取っ手部	常滑・万古系	1870～
288	A-2	1	石組池(小)	5	124	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・猪口・皿・瓶・紅皿	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形・輪花形	白・白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・青磁釉・色絵	664.9	江戸後期肥前系製品・明治時代瀬戸美濃系製品が中心	肥前系・瀬戸美濃系	1780～1910
289	A-2	1	石組池(小)	5	124	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・灰吹・瓶・土鍋・土瓶・甕・火入・植木鉢	半球形・玉縁口縁・折縁形	灰・灰黄・赤茶・暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥・色絵	1091.0	江戸時代後期～明治時代瀬戸美濃・京・信楽製品・松代焼雑器類	瀬戸美濃系・京・信楽系・松代系・在地系	1780～1910
290	A-2	1	石組池(小)	5	124	陶器	甕または土管？	－	暗茶・白粒子	ロクロ？	鉄釉	1576.1	厚手破片十数点	松代系	1810～1930
291	A-2	1	石組池(小)	5	107 111	磁器	碗・皿・酒杯	端反形	白・白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明・色絵	34.3	薄手酒杯破片多い	肥前系・瀬戸美濃系	1780～1910
292	A-2	1	石組池(小)	5	107 111	陶器	碗・甕・鉢・植木鉢・摺鉢・蓋・皿	－	灰・灰黄・赤茶・暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・鉄絵	524.7	松代系雑器中心・No.290の甕又は土管破片もあり	瀬戸美濃系・松代系・在地系	1780～1930
293	A-2	1	石組池(小)	5	107 111	焼締	急須	－	暗紫茶・橙灰	ロクロ	無施釉	10.0	破片2点	常滑・万古系	1870～
294	A-2	1	石組溝	6	44 45	磁器	小碗・蓋	端反形	白・白ガラス質	ロクロ	呉須・コバルト・透明釉・鉄絵・色絵	44.8	明治期瘡茶碗が主・肥前系小破片もあり	肥前系・瀬戸美濃系	1780～1910
295	A-2	1	石組溝	6	45	陶器	鉢？	－	暗灰・白粒子	ロクロ	鉄釉	52.6	破片1点	松代系	1810～1930
296	A-2	1	石組溝	7	16 56 63 74 他	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・火入・皿・段重・瓶・薄手酒杯・水滴	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形・輪花形・腰張形	白・白ガラス質・灰	ロクロ	呉須・コバルト・クロム・透明釉・青磁釉・色絵	1644.9	江戸後期肥前系製品・明治時代～昭和初期瀬戸美濃系製品が中心。1点江戸前期波佐見系半磁胎磁あり。	肥前系・瀬戸美濃系・関西系	1690～1920
297	A-2	1	石組溝	7	16 56 63 74 他	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・灰吹・瓶・土鍋・土瓶・甕・火入・植木鉢	半球形・筒形・杉形・鹿口形・玉縁口縁・折縁形	灰・灰黄・赤茶・暗茶・白粒子	ロクロ	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥・色絵	832.1	江戸後期瀬戸美濃系製品・明治時代～昭和初期松代焼系製品が中心	肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・松代系・関西系・在地系？	1880～1910
298	A-2	1	石組溝	7	16・56 63・74他	土器	火消壺蓋・かわらけ	－	橙灰・灰黒	ロクロ	火消壺蓋　表面瓦質	502.4	火消壺破片中心	在地系？	18c～19c
299	A-2	1	石組溝	7	16 56 63 74 他	焼締	急須・瓶・甕	－	暗紫茶・赤茶・硬質・灰	ロクロ・叩き	無施釉	169.3	常滑瓶破片・万古紫泥急須破片中心。平安～中世須恵質甕小片含む。	常滑・万古系・珠洲？（甕）	12～16c　19c～20c
300	A-3	1	石組溝	1	55 59 64 70 71	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・火入・皿・段重・瓶・薄手酒杯・水滴・急須・碍子	旗反形・筒丸形・筒形・丸形・平形・西洋風皿・変形形他	白・白ガラス質・着色胎土	ロクロ・型成形	呉須・コバルト・クロム・透明釉・クロム青磁・色絵　手描・摺絵・銅版・スタンプ印判・シルクプリント	8734.1	江戸後期肥前系製品・明治時代～昭和初期瀬戸美濃系製品が中心。戦後製品も含まれる。	肥前（有田）・瀬戸美濃・九谷系・欧米系	1780～1950
301	A-3	1	石組溝	1	55 59 64 70 71	陶器	碗・甕・鉢・火鉢・植木鉢・摺鉢・蓋・皿・燭徳利・土瓶・行平鍋・土鍋・蒸糸鍋	半球形・筒形・杉形・鹿口形・玉縁口縁・折縁形	白	ロクロ・型成形・貼り付け	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥・色絵・色釉	9279.1	江戸後期～昭和初期肥前系・瀬戸美濃系・信楽系・松代系製品が中心	肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・松代系・関西系・在地系？	1920～1930
302	A-3	1	石組溝	1	55・59 64・70 71	土器	植木鉢・鉢・涼炉・甕	筒形・口縁端反形	灰・灰黄・赤茶・暗茶	ロクロ・貼り付け・積み上げ・鎬	無施釉・一部瓦質	1772.5	明治以降の製品が主か	在地系？	19c～20c
303	A-3	1	石組溝	1	55・59 64・70 71	焼締	急須・瓶・植木鉢　土瓶？	－	暗紫茶・橙灰・赤茶	ロクロ・型成形・貼り付け	無施釉・一部金彩・色絵・藻掻け釉あり	320.6	急須が中心	常滑・万古系	1820～
304	A-3	1	石組溝(裏込)	1	133	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・火入・皿・段重・瓶・薄手酒杯・水滴	丸形・端反形・半球形・半筒形・鶴首形・輪花形	黄白	ロクロ・型成形	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵・手描・摺絵・銅版	2653.0	江戸後期肥前系製品、明治時代瀬戸美濃系製品が中心。大正期に比定される多色刷製品がなく、明治時代中期～後期からの遺構と推定される。	肥前系・瀬戸美濃系・関西系	1780～1910
305	A-3	1	石組溝(裏込)	1	133	陶器	碗・甕・鉢・涼炉・植木鉢・摺鉢・蓋・皿・燭徳利・行平鍋・土鍋	半球形・筒形・杉形・鹿口形・玉縁口縁・折縁形	灰・灰黄・赤茶・暗茶・白粒子	ロクロ・貼り付け	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥	1607.3	江戸中期肥前系製品・江戸後期～明治時代肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・松代製品が中心	肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・松代系	1690～1910
306	A-3	1	石組溝(裏込)	1	133	焼締	急須	算盤玉形　茶こし穴多・平板	暗紫茶	ロクロ・貼り付け	無施釉	73.1	万古焼紫泥急須	常滑・万古系	1870～
307	A-3	1	石組溝(裏込)	1	133	土器	不明	－	橙灰・灰黒	ロクロ	無施釉	35.3	破片2点	在地系？	18c～19c
308	A-3	1	溝状遺構	2	43 60 69	磁器	碗・鉢・蓋物・蓋・火入・皿・瓶・猪口・水滴	丸形・端反形・半球形・鶴首形・輪花形・桶形	白・白ガラス質・着色胎土	ロクロ・型成形	呉須・コバルト・透明釉・クロム青磁・色絵	566.8	下層に江戸後期肥前系磁器中心。上層江戸後期～明治前期肥前系・瀬戸美濃製品。明治前期までの遺構か。	肥前系・瀬戸美濃系	1690～1880
309	A-3	1	溝状遺構	2	43 60 69	陶器	碗・鉢・小皿・蓋・蒸糸鍋・擂鉢・瓶・土鍋・土瓶・灯明受皿	旗反形・筒形・丸形・平形	灰・灰黄・赤茶・暗茶・白粒子	ロクロ・型成形	灰釉・鉄釉・銅緑釉・白泥・呉須絵・鉄絵・刷毛目	544.2	江戸中期肥前系製品・江戸後期～明治時代肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系が中心	肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・松代系	1690～1860
310	A-3	1	溝状遺構	2	43 60 69	土器	鉢・涼炉・甕？	端反形	赤茶～暗茶	ロクロ	無施釉	525.5	甕あるいは土師質瓦破片中心	在地系？	19c

（２） 金属製品 （図48～50、表19、写真52・53）

金属製品は銭貨も含め、総数200点余りが出土した。この内銭貨については全点を写真で掲載、銭貨以外は44点を掲載した。選択にあたってはできる限り多くの種類の遺物を提示するよう努めた。出土した金属製品は材質別では鉄・銅（銅合金含む）・金に分けられる。また、用途別に分けると以下の通りに分類することが可能である。

日用品……厨房具（下ろし金・包丁・匙・杓子・柄杓・火箸）、喫煙（煙管）、火具（五徳）、照明具（ランプ）、発火具（火打金）、文具（鋏）、装身具（簪）、その他（ピンセット・鈴・ベルト金具・銅製容器蓋・口金具・銅鋺）

建築……工具（鎌・鑢・鑿・鉈・ナイフ・鉄釘）

建具（飾金具・把手・引手・掛け金具）

遊・玩具……玩具（牛形銅製品）

武器・武具……武器（槍先）

刀装具（刀子・小柄）

以下に分類別に出土金属製品について概説する。

厨房具・火具

比較的多くの種類の遺物が出土したが、その多くは明治中期から昭和初期の遺構面（第Ⅰ遺構面）からの出土であり、中には現代遺物と考えられるものも含まれていたこともあり、匙、火箸のみを掲載した。また、厨房具ではないが調理などに関連する遺物として五徳の一部とみられる鋳鉄製品も出土した。

喫煙

煙管の雁首と吸口が出土している。煙管に関しては遺構面に関わらず、出土遺物全点を掲載した。煙管については編年案が示され、その変遷過程が明らかとなっている。[6]これによると本調査地出土の煙管は6段階に分けられた編年のうちⅣ段階以降に編年される資料しか認められないことが大きな特徴として挙げられる。すなわち1750年代を溯る時期の煙管はみられないということであり、この点は今回の調査で確認できた最古段階の遺構が18世紀後半であることと矛盾しない。また、時期的にみて最も資料数が多い段階はⅤ段階（1800年代から1900年代）の煙管である。

今回の調査では装飾の施された煙管も出土している。図48－5の煙管雁首には首部に松と鳥の意匠が線刻されており、図48－7の煙管雁首は幾何学文様が点刻された上にリボン状の銀箔が螺旋状に首部に貼り付けられており、様々な意匠が存在していたことが出土資料からもうかがえる。

煙管の火皿部分を平らに潰した雁首銭とされる遺物も1点出土している。銭貨に混ぜて偽銭として使用されたとも、緡縄の固定に使用されたとも言われている。この点からは銭貨として掲載されるべきであろうが、考古学的にはこうした用途が追認されていないことから金属製品として掲載した。

発火具

火打金とみられる鉄製品が出土した。銹化が進み、本来の形状を保ってはいないものの鋌状の形態から火打金と判断した。長方形の木製台座に打ち付けて使用した、カスガイ形と呼ばれる形態の火打金とみられる。

---

[6] 江戸遺跡研究会編　2001　『図説　江戸考古学研究辞典』　柏書房

装身具

簪が出土している。90度折曲がっているが、本来の全長は13cm程であったとみられる。頭部は耳掻きになっており、髪にさす部分は二股となっている。こうした形態は簪が現れた当初の形態であるとされる。簪の登場は享保年間（17ｃ初）とされていることから、本資料と遺構出土陶磁器の示す年代（18世紀後半）とはかなりの開きがある。埋土中への撹乱または使用期間を長く考える必要がある。

その他

用途別分類が困難な遺物をその他として分類した。掲載遺物にはピンセット、鈴、銅鉢、帯金状金製品などがある。ピンセットは全長18.5cmで銅製、先端部片側のみに5㎜間隔で目盛りが刻まれている。現代遺物とみられる。鈴は大きく歪んだ状態で出土しており、全体の1／2が残存していた。本来の法量を復元することは困難であった。

銅鉢は幕末～明治中期の遺構面（第Ⅱ遺構面）の木組土坑（Ａ3区②－15）から出土した。完形であり、銹化もほとんど認められず遺存状態は極めて良好であった。口径8.3cm、高台径3.5cm、器高6.7cmを測る。銅製で、体部と胴部は別造りでそれぞれを蝋付けし、全面に鍍金を施している。器壁は口縁部が肥厚し、口縁端部の厚さは2㎜である。この部分が最大厚であり、底部に向かうにしたがって薄くなっていく。高台は高さ2.8cmを測る。下部が最も器壁が厚く、上部はやや薄い。体部外面には彫金による文様が刻まれている。主な意匠は鶴、亀、松、などであり、いわゆる吉祥文様である。主文様以外の空間にはφ1㎜の円文が施される。この銅鉢については用途が不明である。宗教に関わるものとも思われるが確証はない。使用にともなう摩滅や破損も認められず、出土状況や出土以降から一定期間の使用後不要となって廃棄されたものとは考えにくい。遺構の性格とともに注目すべき遺物である。

工具

多様な工具が出土しているが、そのいずれも明治中期～昭和初期の遺構面（第Ⅰ遺構面）または明治以降の遺構からの出土であり、図化は行わなかった。鉄釘は71点ほどが出土したが、遺存度、形態から5点を選択し、掲載した。今回の調査で出土した鉄釘は頭巻き釘がほとんどで、切釘などが一部みられるものの、瓦釘や合釘、皆折釘など特定の用途に用いられる形態の釘は認められない。

建具

建築・調度などに関連する遺物としては襖の引手（図48－24）を始め、金具、把手類が出土しているが、本来の用途、形態については復元、推定が困難なものも多い。同様の理由から不明製品として分類された遺物の中にも建具に分類されるべきものが含まれている可能性がある。

遊・玩具

牛形の銅製品がある。全長8.7cm、高さ6.5cmを測り、左角を欠く。鋳造品であり、精巧に作られている。幕末～明治中期の遺構面（第Ⅱ遺構面）からの出土であり、金属製の人形については他の近世遺跡において類例がみられないことから明治以降の所産であると推測される。

武器・武具

刀子、小柄、槍先が出土した。刀子は残存長8.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmで銹化が進んでおり、詳細な観察はできなかったものの、茎の部分と推定される。関部や茎尻、目釘穴等は本資料では認められなかった。小柄は残存長9.6cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmを測り、柄部分のみが残存する。内側には刀身が残存しているが銹化が著しい。側面には富士山を中心に三日月、鳥の群れ、船（？）が線刻されている。銅地のままで、表面加工は施されていない。

槍先は幕末～明治中期の遺構面（第Ⅱ遺構面）の板組土坑（Ａ３区②－15）から出土した。表面を覆っている錆は薄く、銹化が進行しておらず、刃が僅かに欠けているものの遺存状態は極めて良好であった。全体長45.2cm、刃部長18.1cm、茎部長27.1cmであり、刃部幅は2.4cm、厚さは最大で1.0cmである。茎部幅は最大で1.1cm、厚さは0.6cmを測る。また目釘穴の径は0.6cmであった。刃部は断面三角形状を呈し、表面は中央に鎬が通り、裏面は平坦であるが刃先がやや表面に向けて反り上がる。刃部裏面中央には長さ7.2cm、幅0.4cmの溝が設けられており、内側には赤色の漆膜が残存していた。他の部位には漆膜が認められないことから鞘等の漆膜が付着したものではなく、この部分については赤漆が塗布されていたものとみられる。関部は刃部と異なり、断面六角形状で、幅1.8cm、厚さ1.6cmを測る。刃部から緩やかに関部に向かって絞り込まれ、再び広がる形で柄に着装される。茎はその長さが刃部の1.5倍と長大であり、茎尻に向かって幅、厚さ共に減じていく。茎部中央やや茎尻寄りには目釘穴が設けられる。茎尻は隅丸形である。また、茎部表面には銘らしき文字が刻印されている様子が看取できるが、判読は困難であった。

槍先が出土した板組土坑からは柄や石突などのほかの部分は出土していない。本遺構の埋土の状況および壁面の板組が完存していることから木質部分が完全に腐朽した可能性は極めて低いことなどを勘案すると遺構への廃棄ないし埋没時、槍先は柄に着装され鞘に収められた武器としての槍の状態であったのではなく、槍先のみが廃棄ないし埋没したものと考えられる。ともかく、共伴遺物である銅鋺や複数の完形品の煎茶碗などと共に特異な状況で出土したことは注目しなくてはならない。

（３） 銭貨 （表20、写真54）

今回の調査では51点の銭貨が出土した。江戸期の銭貨が45点、明治以降の近・現代銭貨が６点を数える。絶対的な資料数としては少ないものの出土銭貨の傾向を見ると、江戸時代の銭貨では寛永通宝がそのほとんどを占め、渡来銭の私鋳銭と模鋳銭が僅かに含まれる程度である。寛永通宝には新寛永と古寛永の２種が存在することが広く知られているが、本調査地では古寛永通宝が２点、新寛永通宝が33点確認されており、新寛永通宝が卓越する。江戸後期の遺構面である第Ⅲ遺構面について見てみても古寛永通宝１点、新寛永通宝18点と同様の傾向が看取できる。古寛永通宝の鋳造は1656年（明暦２）まで、新寛永通宝の鋳造は1668年（寛文８）以降とされる。

今回の調査地では共伴した陶磁器から18世紀中葉以前の遺構は確認されていないことから古寛永通宝の出土数が相対的に少ないのは妥当であると言える。また新寛永通宝は1739年（元文４）以降鉄銭が、1768年（明和５）以降は四文銭が鋳造されるようになる。第Ⅲ遺構面の溝状遺構（Ａ２区③－１）、土坑（Ａ２区③－４）からはこれら新寛永通宝鉄銭、四文銭が出土しており、いずれの遺構も共伴した陶磁器の年代から18世紀後半以降とされていることから矛盾しないと言える。

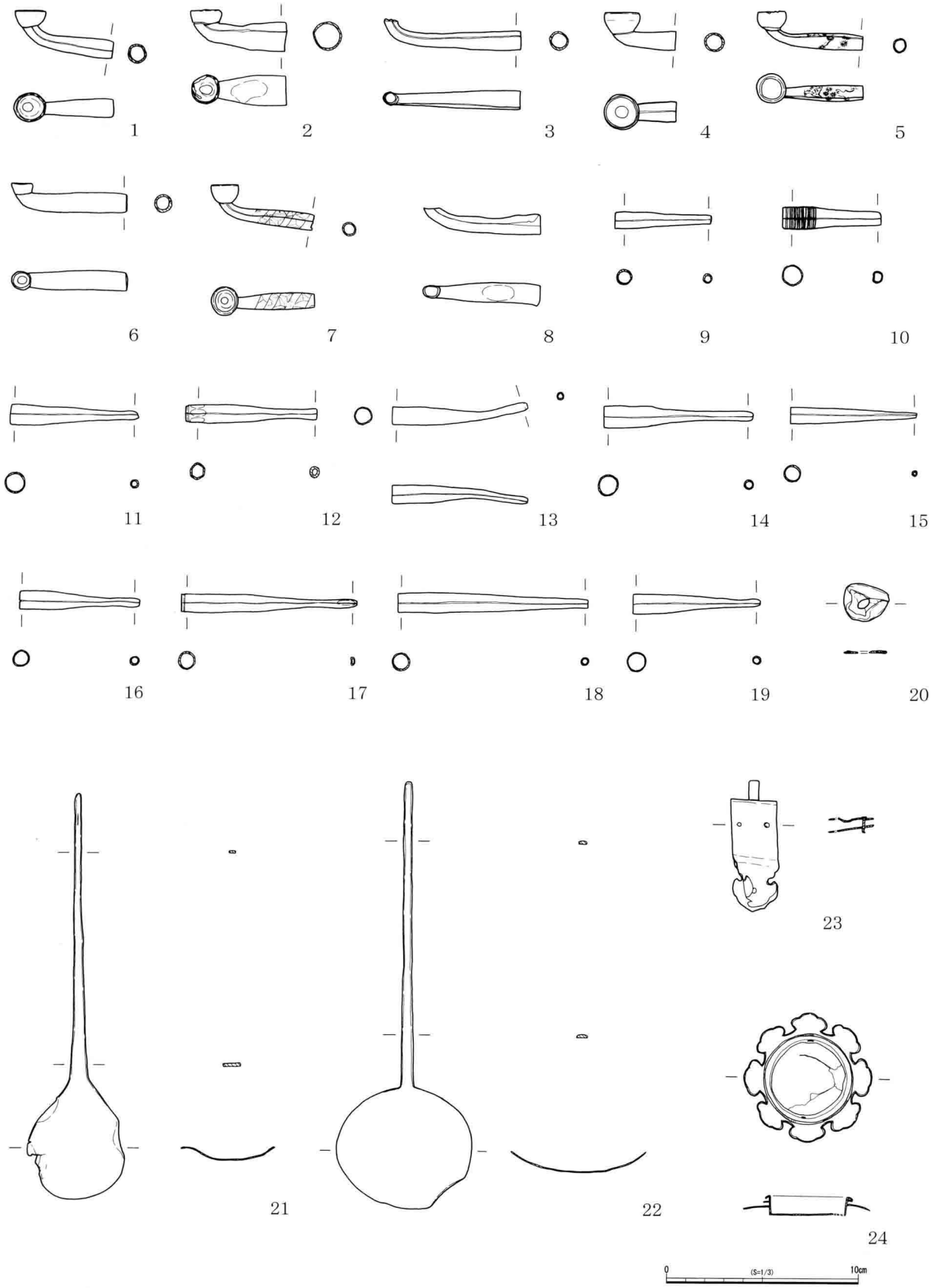


図48　金属製品(1)

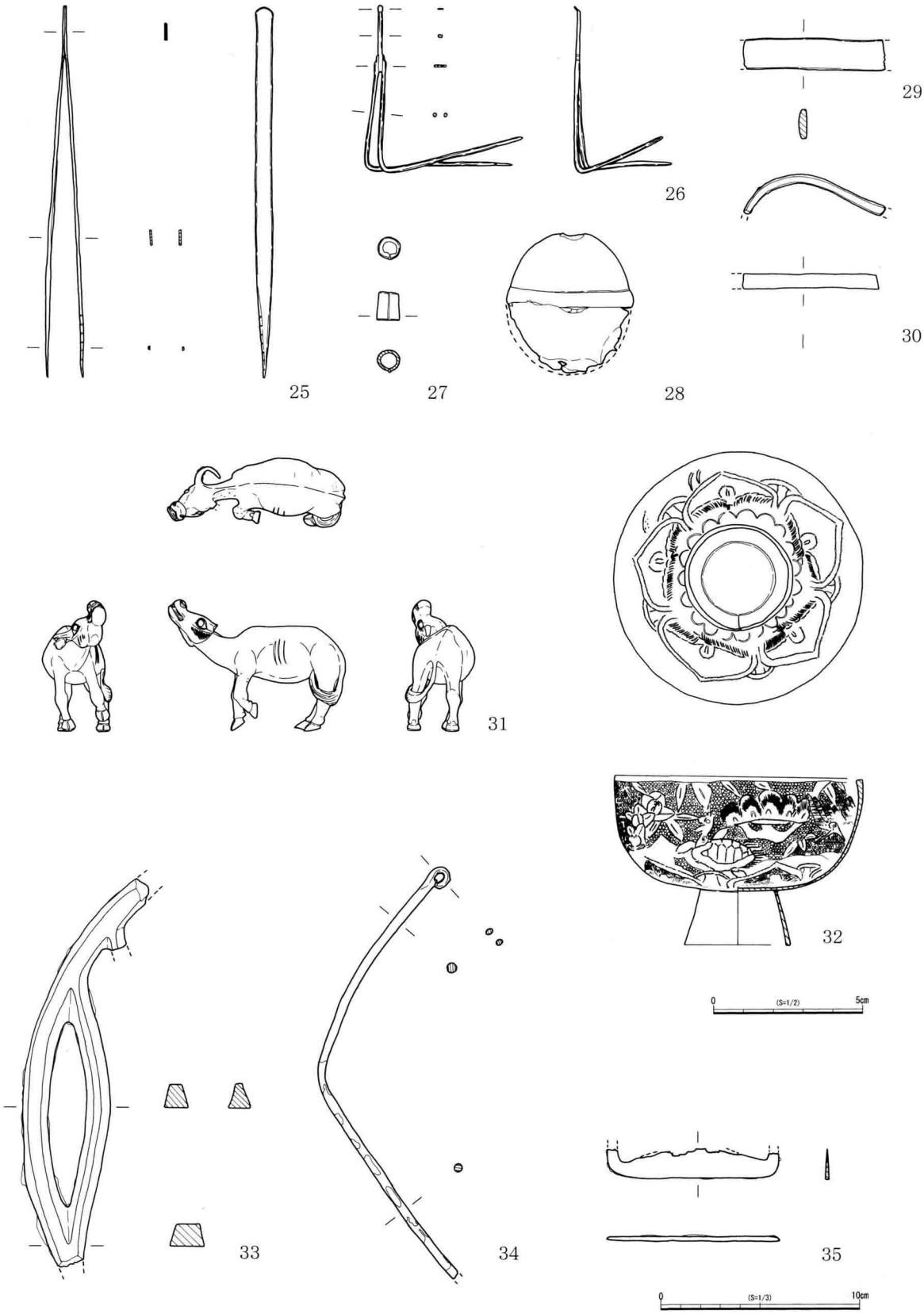


図49　金属製品(2)

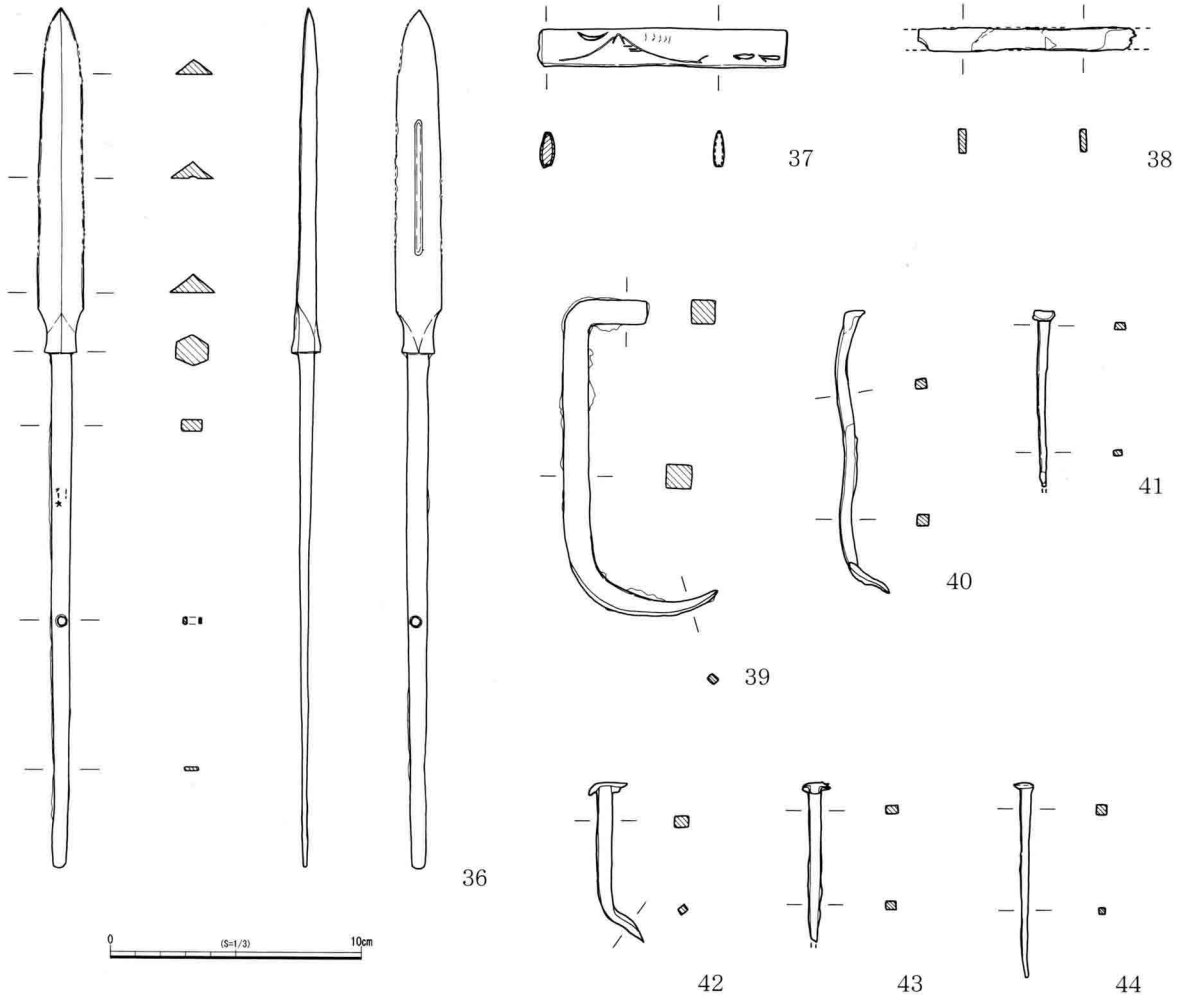


図50　金属製品(3)

表19　金属製品観察表

遺物番号	調査区	調査面	遺構名	種別	名称	材質	法量(cm) a	b	c	d	重量(g)	備考	金属遺物取上番号
1	A-2	1	4Tr(トレンチ)	喫煙	煙管雁首	銅合金	5.2	1.1	0.9	2.4	11.0		M-049
2	A-2	2	側溝Tr	喫煙	煙管雁首	銅	5.0	1.4	1.5	2.1	10.7	鍍金　首部敲打痕	M-058
3	A-3	2	4Tr(トレンチ)	喫煙	煙管雁首	銅合金	7.1	－	1.0	1.6	9.0	銅合金製　鍍金　一部金残存	M-097
4	A-2	3	検出面	喫煙	煙管雁首	銅	3.6	1.8	1.0	1.9	7.0		M-115
5	A-2	3	4(土坑)	喫煙	煙管雁首	銅	5.5	2.0	1.4	0.7	7.5	線刻（松に鳥?）	M-133
6	B-1	3	検出面	喫煙	煙管雁首	銅合金	6.1	1.0	1.0	1.6	15.6	鍍金	M-139
7	B-2	2	10(埋桶)	喫煙	煙管雁首	銅	5.3	1.3	0.8	2.3	6.8	文様点刻・らせん状に鍍銀・19の吸口とセット関係か	M-158
8	B-2	3	検出面	喫煙	煙管雁首	銅	6.1	－	1.0	－	5.8	鍍金　歪み大きい	M-173
9	A-2	1	拡張	喫煙	煙管吸口	銅	5.0	0.5	0.8	－	4.6	内部に羅宇残存	M-017
10	A-3	1	検出面	喫煙	煙管吸口	銅	5.1	*0.6	1.0	－	6.2	首部に刻目	M-036
11	A-2	2	検出面	喫煙	煙管吸口	銅	6.7	0.4	1.1	－	4.9		M-055
12	A-3	1	1(石組溝)	喫煙	煙管吸口	銅合金	6.8	0.5	0.8	－	8.4	首部断面六角形	M-056
13	A-2	2	2Tr(トレンチ)	喫煙	煙管吸口	銅合金	7.0	0.3	0.9	－	4.4		M-098
14	A-1	3	検出面	喫煙	煙管吸口	銅合金	7.7	0.2	1.1	－	6.8	鍍金	M-103
15	A-2	2	3(石組池)	喫煙	煙管吸口	銅合金	6.5	0.2	0.9	－	5.4		M-107
16	B-2	3	検出面	喫煙	煙管吸口	銅	7.3	0.3	0.9	－	4.4	鍍金	M-167
17	B-2	2	3Tr(トレンチ)	喫煙	煙管吸口	銅合金	9.1	0.2	0.9	－	8.6	鍍金　首部刻線	M-156
18	B-2	3	検出面	喫煙	煙管吸口	銅合金	9.9	0.5	1.0	－	14.7	鍍金	M-166
19	B-2	2	10(埋桶)	喫煙	煙管吸口	銅合金	6.6	0.3	1.0	－	5.3	7の雁首とセット関係か	M-164
20	A-2	3	検出面	喫煙	雁首銭	銅合金	2.3	2.0	0.02	－	2.4		M-114
21	A-3	1	側溝Tr	厨房具	杓子	銅	22.0	*5.1	0.02	－	14.8	鍍金	M-011
22	A-3	2	検出面	厨房具	杓子	銅	22.0	6.9	0.6	－	21.9	鍍金	M-092
23	A-1	3	1(性格不明遺構)	その他	不明銅製品	銅	6.8	2.5	0.7	－	16.0	建築・家具関連金具か	M-138
24	A-2	3	4(土坑)	建具	引手	銅	6.6	1.0	4.1	－	18.0		M-134
25	A-1	2	9(撹乱)	その他	ピンセット	銅合金	18.5	0.9	0.1	－	25.6	鍍金　片側先端に目盛	M-065
26	A-1	3	1(性格不明遺構)	装身具	簪	銅合金	8.3	0.6	0.2	－	7.6	頭部耳掻き	M-137
27	A-3	3	検出面	その他	不明銅製品	銅	1.5	1.1	0.2	－	3.3	筒形　一端を折り返す	M-124
28	B-1	3	2(上層石組溝)	その他	鈴	銅合金	*7.0	*6.3	－	－	45.4	1/2欠	M-179
29	A-2	3	1(溝状遺構)	建具	把手	銅合金	*7.2	1.5	0.4	－	37.1		M-128
30	B-1	3	2(上層石組溝)	その他	不明金製品	金?	*6.9	0.7	0.01	－	0.6	帯金状	M-178
31	A-2	2	2(溝状遺構)	遊・玩具	牛形銅製品	銅合金	8.7	3.4	6.5	－	247.2	鋳造品　一部欠　近代遺物か	M-072
32	A-3	2	15(板組遺構)	その他	鋺	銅	8.3	3.5	6.7	－	97.6	鍍金 亀・鶴・松などの吉祥文様あり	M-091
33	A-1	2	34(撹乱)	火具	不明鉄製品	鉄	19.4	5.2	1.3	－	224.8	鉄製鋳造　五徳の一部か	M-090
34	A-3	2	15(板組遺構)	厨房具	火箸	鉄	20.5	0.5	－	－	23.6		M-094
35	A-2	3	1(石列)	発火具	火打金	鉄	8.7	1.5	0.2	－	10.3		M-125
36	A-3	2	15(板組遺構)	武器・武具	槍先	鉄	45.2	－	－	－	237.2	その他の法量については本文参照	M-096
37	A-3	2	検出面	武器・武具	小柄	銅合金	9.6	1.0	0.6	－	27.1	刀身鉄製　文様あり（月・富士・鳥）	M-062
38	A-2	1	7(石組溝)	武器・武具	不明鉄製品	鉄	8.5	0.9	0.3	－	7.5	刀子の一部か	M-023
39	B-2	2	検出面	建具	金具	鉄	12.5	1.0	1.0	－	100.5	掛け金具か	M-151
40	A-3	2	15(板組遺構)	工具	釘	鉄	11.1	0.8	0.4	－	12.9	朱塗り	M-095
41	A-2	3	1(溝状遺構)	工具	釘	鉄	7.0	0.8	0.4	－	3.3	頭巻釘	M-120
42	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	6.3	1.5	0.6	－	9.8	頭巻釘	M-182
43	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	7.7	0.8	0.5	－	5.1	頭巻釘	M-182
44	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	6.3	1.1	0.5	－	3.7	頭巻釘	M-182

凡例
・法量（a～d）
通常：a：全体長　b：最大幅　c：最大厚or最大高
煙管雁首：a：全長　b：高さ　c：火皿径　d：首部径　　煙管吸口：a：全長　b：首部径　c：口付部径
・＊は残存値
・遺物番号：実測図版中の各遺物番号を示す。
・調査面：遺構確認面

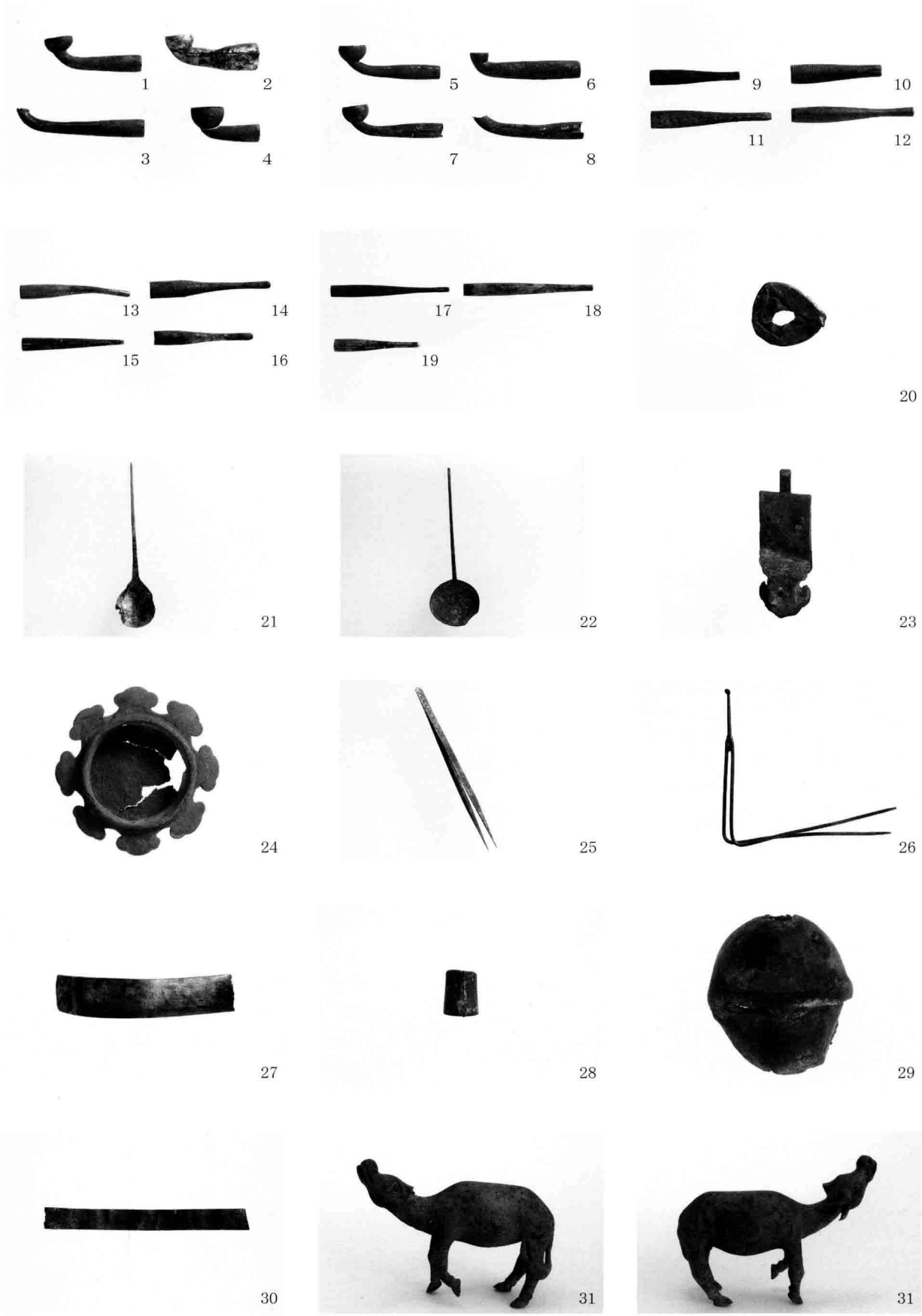
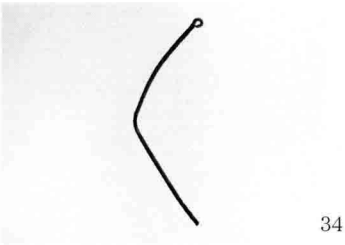

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
31

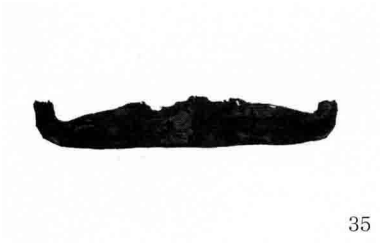
写真52　金属製品(1)

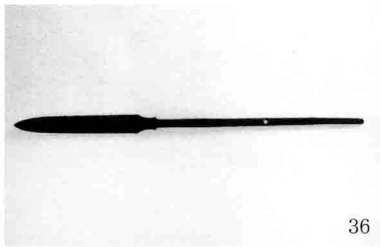
32

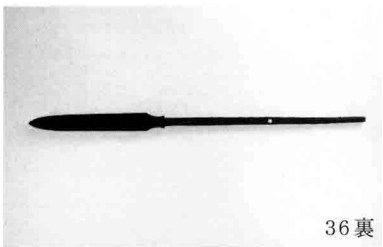
32底

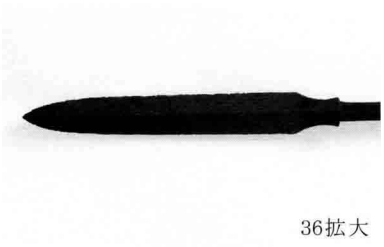
33


34


35


36

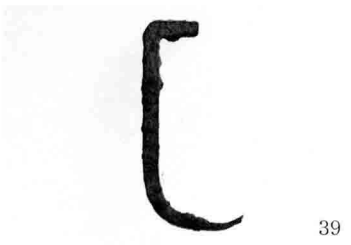

36裏


36拡大

36裏面拡大

37

38


39

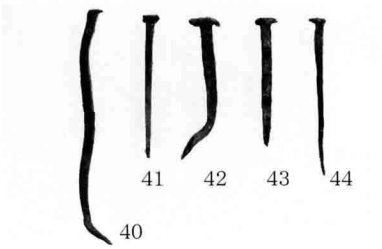
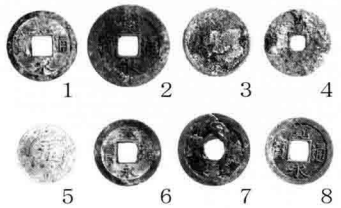


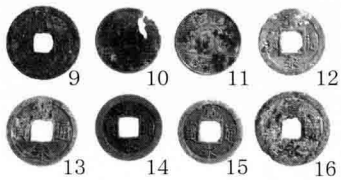
写真53　金属製品(2)

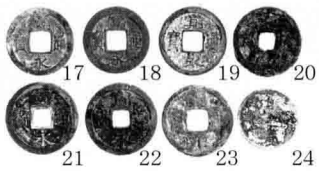
表20　銭貨観察表

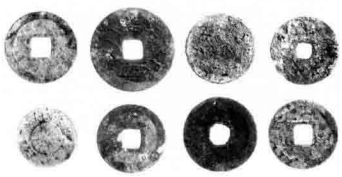
遺物番号	調査区	調査面	遺構名	名称	分類	材質	法量(cm) a	法量(cm) b	重量(g)	備考	初鋳年	金属遺物取上番号
1	A-3	1	側溝Ｔｒ	新寛永通宝	亀戸大字	銅	24.0	0.8	2.30		1737(元文2)	M-004
2	A-2	1	2(石組池)	新寛永通宝		銅	28.0	1.0	4.45			M-018
3	A-2	1	検出面	不明銭貨	―	不明	23.0	1.2	3.24	近代銭貨		M-020
4	A-2	1	4(撹乱)	不明銭貨	―	不明	22.0	0.9	2.08	近世銭貨		M-021
5	A-2	1	7(石組溝)	菊5銭白銅貨	―	銅・ニッケル	20.6	1.5	4.41		1894(明治27)	M-022
6	A-3	1	1(石組溝)	新寛永通宝		銅	23.0	0.8	2.89			M-025
7	A-3	1	1(石組溝)	私鋳銭？	―	銅	25.0	1.0	3.28	天禧通宝(北宋銭)の私鋳銭・模鋳銭か・金箔付着		M-037
8	A-3	1	1(石組溝)	新寛永通宝？		銅	23.2	0.8	2.61	背面金張り・後世のものか		M-038
9	A-3	1	1(石組溝)	新寛永通宝	平永	鉄	23.7	0.9	2.82		1767(明和4)	M-043
10	A-3	1	検出面	半銭銅貨	―	銅	22.0	0.9	2.27	銹化著しい	1883(明治16)	M-044
11	A-3	1	側溝Ｔｒ	稲100円銀貨	―	銀・銅	22.0	1.5	4.79		1966(昭和41)	M-046
12	A-3	2	検出面	新寛永通宝		銅	22.5	0.8	2.19			M-057
13	A-2	2	側溝Ｔｒ	新寛永通宝		銅	23.8	0.8	2.12			M-059
14	A-3	2	検出面	新寛永通宝	細字背元	銅	22.5	0.8	2.02		1741(寛保元)	M-060
15	A-3	2	検出面	新寛永通宝		銅	21.8	0.8	1.94			M-061
16	A-3	2	検出面	寛永通宝		鉄	25.0	1.5	3.26	銹化著しい		M-070
17	A-2	1	2(石組池)	新寛永通宝		銅	23.5	0.9	2.18			M-075
18	A-1	2	検出面	新寛永通宝		銅	22.5	0.8	1.65			M-077
19	A-1	2	23(土坑)	新寛永通宝		銅	22.8	0.8	1.99			M-081
20	A-1	2	23(土坑)	新寛永通宝		銅	23.0	1.0	3.03	銹化著しい・金箔付着		M-081
21	A-1	2	23(土坑)	新寛永通宝		銅	24.0	0.9	2.66			M-081
22	A-3	2	検出面	古寛永通宝	吉田銭	銅	24.2	1.3	3.71		1637(寛永14)	M-082
23	A-3	2	検出面	私鋳銭？	―	銅	24.0	0.9	2.61	開元通宝の私鋳銭・模鋳銭か		M-093
24	A-2	2	3(石組池)	菊5銭白銅貨	―	銅・ニッケル	20.6	1.8	4.47		1889(明治22)	M-110
25	A-1	3	検出面	新寛永通宝		銅	23.0	0.9	2.95			M-112
26	A-1	3	検出面	古寛永通宝？		銅	23.0	1.0	2.99	表面摩滅		M-113
27	A-2	3	1-E(溝状遺構)	新寛永通宝	繊字	銅	23.2	0.8	1.89	湯回り不良	1740頃(元文期)	M-118
28	A-2	3	1-E(溝状遺構)	新寛永通宝		鉄	23.0	1.0	1.98	銹化著しい		M-119
29	A-3	3	検出面	新寛永通宝		銅	24.0	1.0	2.90			M-123
30	A-1	3	2(性格不明遺構)	新寛永通宝		銅	－	0.8	1.40	1/2欠		M-126
31	A-2	3	4(土坑)	新寛永通宝	背11波	銅	28.0	1.1	4.60	四文銭		M-131
32	A-2	3	4(土坑)	新寛永通宝		銅	28.0	1.1	2.61			M-131
33	A-2	3	4(土坑)	新寛永通宝	京都七條銭	銅	22.2	0.9	2.01		1726(享保11)	M-131
34	A-2	3	4(土坑)	新寛永通宝	四文銭	銅	28.2	1.2	4.87			M-132
35	A-2	3	1-D(溝状遺構)	新寛永通宝		銅	23.2	1.0	2.95			M-136
36	B-1	3	検出面	新寛永通宝		銅	22.0	0.8	1.00			M-148
37	B-2	2	検出面	10銭アルミ青銅貨	―	アルミ・青銅	22.0	1.6	1.67		1938(昭和13)	M-152
38	B-2	2	検出面	竜10銭銀貨	―	銀・銅	17.0	1.1	3.79		1891(明治24)	M-153
39	B-1	3	検出面	新寛永通宝		銅	23.0	0.8	2.62			M-154
40	B-2	3	検出面	新寛永通宝		鉄	23.5	0.9	2.71			M-170
41	B-2	3	検出面	新寛永通宝		銅	24.2	0.9	1.66			M-171
42	B-1	3	1(石組池)	新寛永通宝		銅	21.8	0.6	3.09			M-176
43	B-1	3	2(上層石組溝除去後検出)	新寛永通宝		銅	23.0	0.6	1.78			M-177
44	B-2	3	検出面	寛永通宝		銅	24.0	1.1	1.89	錆のため詳細不明		M-184
45	B-2	3	検出面	寛永通宝？		銅	23.0	1.0	3.06	錆のため詳細不明		M-185
46	B-2	3	検出面	寛永通宝？		銅	23.0	1.3	2.51	錆のため詳細不明		M-185
47	B-2	3	検出面	寛永通宝？		銅	25.0	1.1	2.87	錆のため詳細不明		M-185
48	B-2	3	検出面	新寛永通宝		銅	23.0	0.9	2.76			M-185
49	B-2	3	検出面	新寛永通宝		銅	22.8	0.9	2.74			M-185
50	A-3	1	1(石列)	寛永通宝		銅	23.5	0.8	2.37			M-188
51	A-2	1	検出面	新寛永通宝		銅	22.5	0.9	2.23			M-050

凡例
・法量：　a：直径　b：最大厚
・法量：　a：直径　b：最大厚
・貨幣の分類および初鋳年は『日本貨幣カタログ』2005　日本貨幣商協同組合　に拠った
・調査面：遺構確認面
・写真図版：写真掲載図版番号



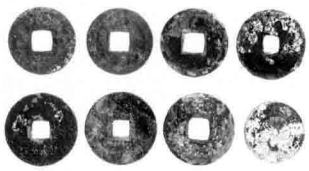




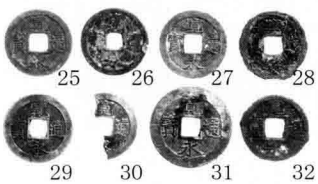


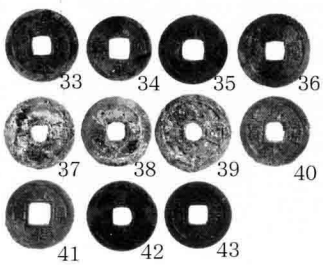
1～8裏面

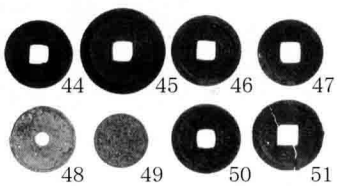
9～16裏面



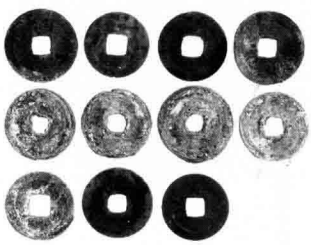
17～24裏面



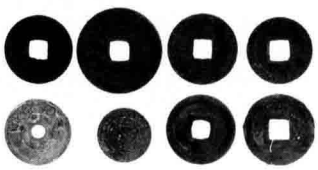




25～32裏面



33～43裏面



44～51裏面

写真54　銭貨

（4） 木製品 （図51～55、表21、写真55～57）

木製品は110点余りが出土し、このうち34点を掲載した。掲載遺物に関しては2点を除き、保存処理を実施している。出土木製品を用途別に分類すると以下の通りになる。

日用品……食膳具（漆器椀・漆器椀蓋・漆塗膳・箸）、厨房具（杓子・柄杓）
　　容器（漆器蓋・結桶）
　　履物（下駄）
その他……不明木製品

以上の分類に基づいて各木製品の概略を述べる。

食膳具

漆塗木製品が数多く出土した。そのほとんどは漆器椀である。漆器椀は椀、蓋合わせて10点を掲載した。漆器椀については江戸遺跡出土資料から江戸遺跡における編年案が示されている。あくまでも江戸遺跡における編年であり、編年をそのまま援用することには問題があるが、型式分類の面から本遺跡出土資料を見てみると、平椀・腰丸椀・一文字腰椀など、多くの器種が出土しており、バリエーションに富んでいることが分かる。また、漆塗膜構造調査の成果からはいずれの漆器椀も渋下地で、赤色漆はほとんどがベンガラを顔料として用いていることが分かった。また、上塗りの回数も1ないし2回と少ない。渋下地の使用および赤色漆に用いられたでベンガラの使用は近世漆器椀では一般的であり、今回出土した漆器椀については一般に広く流通していた椀であると考えられる。このほか、本調査地からは漆塗膳が出土した。全体の2分の1を欠くものの、比較的残存状態は良好であった。脚部の形態から本資料は蝶足膳と呼ばれる形態の膳である可能性が高い。この蝶足膳は最も格式が高い膳として用いられたとされ、これを裏付けるように本資料に用いられた下地は漆下地であり、赤色漆にはベンガラに加えて朱が用いられていることが確認されている。また、上塗りの回数も多く、膳の角部などには布着せ補強が確認できた。以上の点から本資料は一般に高級品とされる漆塗りの技法が数多く用いられており、格式の高い場で用いられた高級品である可能性が高い。

厨房具

杓子、柄杓が出土した。杓子（図52－15）は一つの木材から削り出して全体が製作されており、金属製の杓子と形態的に類似している。柄杓は曲物であり、直径8㎝、高さ6.6㎝を測る。底板と柄の部分は出土していない。なお、柄を接続するための大きさの異なる方形の孔が側面を貫通する形で2つ認められる。

容器

容器類としては漆器蓋を2点掲載した。それぞれ直径12．8㎝と21．4ｃｍを測る。

履物（下駄）

下駄は第Ⅲ遺構面出土遺物を中心に15点を掲載した。江戸遺跡出土の下駄の型式分類によれば今回出土した下駄は連歯下駄、露卯下駄、陰卯下駄に分けられ、さらに緒孔の位置、台の形態などから細分される。注目されるのは法量が極端に小さい資料が出土していることである。連歯下駄、露卯下駄ともに全長が14～18㎝前後の資料が出土している。女性用もしくは子供用の可能性が考えられる。